

347
40



始



1327
あ



アーキメメントセッター

(編庭家)

大正
5. 9. 19
購求

榊



友

家大諸筆執及閱校

(順ハロイ)

法	理	特許	辯論	辯論	辯論	藥學	元大	大慶	ベド	メド	都新	工	フク
學	學	學	學	學	學	學	海軍	學	學	學	新聞	學	ク
士	士	士	士	士	士	士	大佐	教授	教授	教授	記者	士	ク
鶴	中	添	高	大	太	戸	西	長	林	池	泉		
澤	井	田	橋	村	田	川	山	谷	田	田			
總	之	增	幸	幸	次	秋	忍	春	春				
明	進	男	郎	次	郎	骨	治	基	潮	稔	哲		
文	女	東	師	廣	早	文	陸	醫	學	女	農		
學	女	京	師	京	稻	學	軍	學	子	子	學		
博	學	京	女	女	田	學	大	博	音	音	士		
士	士	長	校	校	子	學	佐	士	山	山	山		
佐	神	秋	栗	後	小	藤	山	山	山	山	山		
々	原	穗	根	閑	林	田	下	口	口	口	口		
醒	益	竹	竹	菊	行	田	熊	秀	秀	秀	秀		
雪	彌	實	齊	野	昌	篤	次	高	高	高	高		

題字

宮内大臣男爵波多野敬直閣下

波多野の主題



自序

社會が常に動的なる以上、人間に絶えず生氣ある限り、複雑と煩忙とは到底避くべからず。此の複雑煩忙の裡に起る事相物象の疑問に會しては、何人も悠々緩慢なる餘裕を有せず。必ずや即刻即決、立ちに明確なる解決を與へざる可からざるなり。是れ蓋し當面活社會に處する自然の數のみ。吾人は如上の疑問に對する明解確答の寶庫を闢くべき靈活なる鍵を提供すべく、曩に「アーギュメント、セッター」の編纂を企劃せり。爾來發奮努力、今や完成を告ぐ。其内容の浩漭なるに拘らず、比較的短時日に脱稿せるを

以て、往々不備の點あるを免れず。顧みて自ら慊焉たるを感ぜざるを得ず、开は他日訂正再刊の期あるべきを信ず。茲に之を公にするに際して聊か一言を叙す。

大正五年八月

毎日通信社樓上にて

北川由之助識

凡例

一、本書は専ら家庭の實用利便を趣旨とし編纂したるを以て社會編、家庭編の二種に區別したりと雖も、兩編とも總て家庭的にして、編纂上の便宜より假りに其の一を社會編と命じられたれども、要するに家庭的社會編にして政治、經濟の如き又最も家庭に密接の關係あるものか、然らざれば單に一般常識を涵養するの程度に於て之が説明を加へたり。

一、本書内容は社會編に於ては政治、經濟、法律、軍事、農事、工業、商業、社會、交通、地理、歴史、博物、理化、天文、生理、文學、美術、宗教、教育、内外の地名、人名書籍解題等の外、別に卷末に皇室、歴代内閣、帝國議會、諸統計、現代々表的人物、物故せる名士、重要法規、主なる新聞通信雜誌、鐵道系統表、過去三年の日記等を採録し、家庭編には音樂、演劇、歌謠、衛生、醫療、藥品、家事、育兒、衣服、服裝、裁縫、料理、飲食、住居、器具、日用品、職業、手工、技藝、遊戯、娛樂、風俗、行事、動物、植物等を登載し、之れ又特に禮法、和洋料理法、年中行事、事物起源、三世相、性相と骨相運命學等を卷末に載録し置きたり。

一、項目の排列はすべていろは順によれり。音韻の順序に關しては次の事項に注意せられたし。

(一)すべて發音的假名遣ひを以て項目を立てたり。即ちミヅ(水)アオイ(蒼)ホーリツ(法律)の如し。

- (二)濁音は清音の次に、半濁音は濁音の次に掲げたり。
 - (三)撥音のンはムの次にせり。
 - (四)促音及拗音を示すツ、ユ等はすべてツ、ユの假名の下に出せり。
- 一、外國の地名、人名の發音は、主として明治三十五年十一月十五日の官報附録によつて發表したる讀方に従ひたり。

- 一、社會編、家庭編の各卷末に記載せる特別事項の排列順序は左の如し。
- 「社會編」【イ】皇室【ロ】歴代内閣【ハ】帝國議會【ニ】諸統計【ホ】現代々表的人物【ヘ】物故せる名士
- 【ト】重要法規【チ】主なる新聞通信雜誌【リ】鐵道統計表【又】過去三年
- 「家庭編」【イ】禮法【ロ】和洋料理法【ハ】年中行事【ニ】事物起源【ホ】三世雜書【ヘ】性相と骨相運命學

大正五年八月

編纂者誌

イの部

イ【開】▲水草の條にあり。

イロハガルト ▲伊呂波骨牌 ▲頭に

いろは四十八字の代り、京を用ふの各音のつく假説をなしたる骨牌にして、輪札と字札と各々四十八枚づゝあり。假説とはいぬも歩けば棒にあたるゝらんより置説はなより圓子などの類にして、字札を讀みあげて輪札を取る遊びなり。

イハラ 【薔薇】▲ハラの條にあり。

イボ 【疣】▲皮膚の表皮、真皮の間に發生する一種の隆起物にして、大豆位迄に至るものなり、全く無益の贅物なり、多く小兒時代に發生し、消失するもあれど、其ままた永存するもあり、其表面は凹凸なるあり又は平滑なるありて同じからず。▲種類▲軟性疣 ▲表皮の角質層、變化せず、其質軟かきものを云ふ。▲硬性疣 ▲角質層更に増長して、質一段硬くなりたるものなり。▲傳染軟性疣 ▲豌豆位にて膿に似

たる光澤あり、頂上に小さき孔あり、手足顔面などに生ず、傳染するものとす。▲黒子、一種、疣にて黒色を呈す。▲治療法▲大抵の疣は小刀にて切除し、油類を塗り附けおくと可し、又硝酸をつけ腐蝕せしめ、電氣にて燒取るなど可し。

イトオリ 【糸織】▲糸織とは絹織の

意味にして、種類甚だ多く、普通の糸織、諸糸織、綾織、節織、玉糸織、綾織、綾斗織、綾織、綾織等あり。▲綾織は米澤に於て早く製織したるより土地によりては單に米澤と稱す。現今は八王子、桐生、足利、京、都等に於ても盛んに製織す。重に着尺用、絹物なり。布面平滑にして手觸り軟かなる平織組織なり。之を製織するに、第一寸間七〇乃至八〇羽あるを普通とし、經絲は三本乃至六本の片織りにて、大抵百十デニール前後の太さの絲を用ひ、第一羽二本通しとし、綾織四枚を用ひ、綾一羽二乃至百四十デニールの弱き撚あり。綾は百二十乃至百四十デニールの弱き撚あり。用ふ、綾、共に精練染色して、任意の調子には布澤若又は手粉糊を施し、任意の調子に整強して製織す。織り上げたる後、露

吹き等によりて濕氣を附與し、萬力の類を以て壓搾して仕上げとし、押返すものなり。一反二丈九尺乃至三丈物にして、一反を二匹とす。布巾普通九寸六分位にして、一反百乃至二百寸を普通とす。然れども近來、絲に増量せるものあり、比較的目的方重きものあり、増量は多く染色に於て行ふものにして、硝酸鐵液中に三〇分乃至一時間浸漬して、後出倍子の濃厚なる煎汁中に入るとより、現今米澤にては組合の規定として品位を分類して三等とす。▲一等品は少しも増量せざる絲を用ひたるものにて却て減量すの減量あるもの。▲二等品は生返しと稱し、絲の減量寸の増量を施せるもの。▲三等品は任意に増量したるものにて五〇%位の増量あり。▲精練織は重に練にしてタンニンと鐵を用ひ、▲精練織は之も練織と同じく節なき絲にて平織組織に製織したる平滑なるものなり。異なる處は絲を四本乃至六本撚織となせるあり。精練染色して、編割を成せることと練織と異なることなし。▲綾織は之は練織と異なるは只精練織に成せるのみ

【イ】の部

一

【イ】の部

樂八端の如き是なり(一樂を見よ) ▲節絲
織及玉絲織 之は經絲に緯織と全く同
一の絲を用ふるか又は玉絲と稱し連接前
は織製したる絲を二乃至四本の諸端を用ひ緯
絲には玉絲二乃至四本片燃絲を用ひたるも
のにて箴は十五乃至十八算にて緯織と同様に
織製したる平織物なり一反三丈物百三十
寸位あり専ら着尺物なり ▲壁絲織
此も普通の絲織と細絲は同一にして緯絲には
壁絲と普通の緯絲とを隔番又は二枚毎に織込
みたるものにして箴は十六算位を普通とす
▲鬘斗絲織 鬘斗絲織と稱するは鬘を織製す
る際、初め鬘の上皮を採りたる鬘斗より引出
して絲となしたるものにて緯絲として織製し
たるものなり ▲絨絲織 絨絲は元來
眞綿より絲を引出したるものにして絨絲織
は即ち此の絲を以て織成したるものなり
我國古來各養蠶地に於て行はれ其有名
なるは南部絨、長井絨、釘拔絨、奉書
絨、井波絨、上田絨、結城絨、大島絨、
白絨、越後絨等あり

イチハツ 【薔尾】 ▲草花 條を見よ。
イチヨイ 【公孫樹】 ▲銀杏を見よ。

イチラクオリ 【市樂】

▲平織以外の
種なる組織 地合して作りたる絹着尺織
物。和泉の土屋一樂と稱する人の織り創り
たるものとも云ひ、或は土屋一樂の藤細工の
組方此の織物の地合に似たるが故に、轉用し
てかく稱すとの説もあり。其の起原年代
詳ならず。經絲及緯絲の太さ及密度
は、絲織と同一なり。従つて一反の目方も相
似たるものなり。故に又一樂絲織とも稱
せらる。地合は一定せざるも前述の如く
なれど、普通専ら用ひらるるものは、圖の如
きものか若くはこれより導きたるものなり
これらの絹織を絹緋と相應せしめて、美麗若
くは雅致なる絹着尺織物を作らしむ。一
樂織に御召絲を用いたるものあり。これをい
ちらくお召し」と稱し、壁緯を織りたるもの
を「かべいちらく」と稱す。山形、縣米澤
桐生、京都の西陣、八王子等、其の著各
の産地とす。直安ものに絹緋を作りたるもの
もありめんいちらくと稱し名古屋を産地と
す。

イチノタニフタバケンキ 【一谷嫩
軍記】 ▲戯曲の名。一ノ谷に於ける源平の

イチゴ

【食用に供せらるるもの
に木黄(覆盆子)懸鈎の二種あり(覆盆
子)は和種漢種の二つありて、中に懸鈎
熊莓、袋莓等の別あり。亞灌木にし
て高さ六七尺、葉は五生し楓樹の葉形をな
す。莖は堅く褐色にて刺なく、五六月の頃葉
の間に花を開く。白色五瓣にして、梅花
より僅かに小なり。實の大き五分程にて七月
に熟す。色黄に味美なり「懸鈎子」は山
野に多く自生するものにて、イチゴと稱
するは、其草莓に對して木莓と名づくるの
外實の色熟すれば、黄色を呈するなり。兩
の意を兼れてかく命名せるものにて、カナ
チゴ、蔓木莓、ホボロイチゴ、五月莓、
にが莓、黄金莓、等の方言あり。高さ三五
尺、叢生す。莖に刺多くして衣服に懸る故
に、懸鈎子と名づく。葉は互生し、形細く
して本に兩尖あり。周圍に鋸齒あり。蔓
を出して繁茂するものなり。夏新枝の端に

花を結ぶ。一葉數十莖、枝を分つこと野薔薇
の如し。花は白く小なり。實は熟すれば紅
紫色となる。我が國にては伊勢及び越前に産
し「ドクトル、モレル」果は極めて、大き
く楕圓形、肉は軟かにして、種子少き故、
心地尤も可く、甘味多く香氣甚だ高し。
我が國にて汎く培養さるる豊産の晩生種
にて、促進栽培に可なり。「レーデー」
トムソン、果は稍々大く、色は紅にして光
澤あり、形は卵形にて肉の緊りよく、風味
佳なり。「ウイモラン」性頗る強壯、果
は圓形にして、大き中位、肉柔軟、甘味に
して、香氣の高く早生の豊産種なり。ゼネ
ラルサンジー、果形長楕圓、大きは中等に
て肉柔軟、酸味は多けれど、葉は小さくして、
早生種なり。果は極めて大、頭部は尖りて、
色は青色、肉は脆軟なるが、自然に熟りて、
多甘多漿なり。一種、爽快なる香氣を持つ。
「シャープレス」果の大なるも、豊産なるとは
本種の特色にして、米國にても、汎く愛
養せらる。果形不整にして、鶏冠の如き扁
平の圓錐狀なり。色は暗赤、風味佳しく、
收量多し。「ウイクトリヤ」果は圓形にして

【イ】の部

極めて大く、色は赤く、肉は脆軟にして、内部
白く、多甘多漿にして、香氣に富む。品質優
等なる豊産の晩生種なり。ツブと稱して
罐詰にして盛夏の候の飲料に供す。又之を
醗酵せしめて葡萄酒を醸造するを得、又は
菓子、ジャム等も製す。和蘭陀莓は種類多
あれど、就中、重なるものは、野生莓、ブ
ーシニア莓、チリ莓、四季莓、鳳梨形莓、
雜種莓等にして其の肉、現今尤も有望
なる品種を有するは四季莓、及雜種莓の
二なりとす、今我が邦にて多く行はる、品
種を示せば「マルゲリット」果頗る大く、甘味
多漿にして香氣高く、性強壯なる豊産の早
生種なり。「サージョセフ、バックストン」近
時の舶來種なり、而して花托肉質となりて、
無數の種子を表面に露出す。即ち其蛋食
する部分に、種子を支ふる肉質部なり。果は
春季成熟する故最も貴ぶる。味甘
美にして微酸と芳香とを有し、普通生食す
るには先づ其生果のまゝ、水中に浸して、土
砂を洗ひ落し、次ぎに其毒を去り、盆に盛り
砂糖をふりかけて生食す。其の仙貯藏法と
しては、生果一貫目に對して四五百匁の砂

糖を加へて煮詰めてシヤム、或はゼリーを製
し、或は其汁に砂糖を加へて少しく煮沸し
所謂莓のシラ漢土にては浙江の名産なり。
「蓬莓」は山野路傍に生す。葉は深緑色
にして軟あり。莖と共に毛多くして刺あり。
三月枝の稍々白色の花を開き、四月に至れ
ば、實熟す。形蛇莓とも稱せらる。味
甘からず。「蔓莓」今日市中に多く賣かる。
ものにして、其の種類多し。「和蘭陀莓」洋
名を「ストロベリー」と云ひ、本邦の山野に自
生する蛇莓の類にして、蓄薇科に屬する宿
根多年生の植物なり。葉は根出葉にして
三葉片より成る覆葉なり。花は白色の五瓣よ
り成り、中央に雌蕊の塊、群あり栽培法は現
今三種の方法あり。種子、走技根、分根なり
種子よりするは、果實の實分成熟したるを
能く乾燥せしめ、果肉と分離せしむる爲め、
水中にて漬し、洗滌すれば、種子は悉く水
底に沈下し果肉は浮上るなり。種子は直に播
下するよりも、型春まで貯藏して時を良くし
とす。種子を下す時は、粟め種子と種子との
密着を防ぐため、細砂を混じり播せる筈
地に又は小箇中に播下す。土壌は輕軟なるを

要す。殊に被土は二分位より多くなすべからず。大抵四週乃至六週間位にて發芽するを以て、小箱に播下したるものは四五葉發したる時を見計ひて、露地に移植すべし。直に露地に下種したる時は、翌春まで其の儘に置くをよし。尤も、冬時防寒の方法を講じ又時々除草を怠るべからず。殊に注意すべきは初年に發する走根根は、悉く摘去する可とす。走根根より蕃殖する法は、現産地たる米國には現時行はるものにて、母幹は分裁するにあり。本邦にては主として、此法により。走根を生せざるものに行ふものにて、春季に母幹を取り、一の根冠を附して分採し、若し老根にて甚長なる時は下端を摘載し、葉の殆ど置る迄に土を以て深く被ふなり。肥料は充分分解せる古き厩肥を最適とす。毎の果實は、其味甘味中に酸味を含み、夏日生食すれば一種の清涼劑となり。此他に砂糖漬となし、シヤムを製し、或は酒を醸し、又は合利別シローを製するに用ふる等、需用極めて多きものなり。以上の外食用となす能はざるものに、蓬莓と屬を同する「蛇莓」と稱

するものあり。多年生の落葉草にして赤山野に自生す。其葉は細くして赤色を帯び、三個の小葉より成れる複葉にして、鋸齒縁の初春の頃、二層に排列する葉を有する黄色の花を開き、果實は、聚合して肥大なる花托に著生し、美麗なる赤色を呈するものなり。イチジク 【無花果】 ▲無花果は、實永年中に始めて舶來せる繭繭科の果樹にして我國にては七八月頃果實成熟すれども、地中海沿岸の地に産するものは一年中六七十分成熟したるものは、糖分に富める液を多量に含み、風味頗るよし。ことに思者の嗜好品として賞用せらるものなり。イタリヤにては、これを乾して、商品となす白柿に類し。また一種の風味あり、無花果の名あるにより、俗人は、花なくして實を結ぶものと信すれど然らず。試に小形なる未熟の果實を探り、割りて内部を検するに、あまたの雌花雄花一面ならびて、まさに花盛りなるを見るべし。花とはいへ、葉も辨もなく、たゞ雌蕊のみなれば、かくと知らざるものは、これを花とは思はざるなり。すなはち最

初果實の如く見ゆるは、囊状の花托の頂上なる縁に苞あり。のちに、花托と雌蕊とが合一して、果實となるなり。在來の種類はあまり良種にあらずしが、近年西洋より舶來せる種類には、良種多く、中にもアルセー種、ホワイトアトアック種、セレスター種等は、ことに著名なり。氣候は温暖を好み、寒冷を忌み、土質は、多少濕潤にして、石灰質の存する地を好む。これを蕃殖するには、挿木法、或は條法にて、定地に移植するにあり。勿論種子蕃殖も、往々自然に行はるれど、不良の實に變性する虞あるのみならず、結果に至るまでに長き年月を要するが故に、人類蕃殖法としては、行はるることなし。挿木法を行ふには、當年發生したる新梢に、舊枝を附し、秋季に、砂中に挿し、一二年の後、夏季に移すべし。條法は夏季に行ひ、翌年の春に至り、母株より截斷すべし。イヌ 【犬】 ▲犬屬の動物、即ち狼、狐、狸等は皆夜行獸にして性野惡なれども、犬は古來人に畜養せられたるを以て其性質

を變じ温良忠實にして主人を思ふ情殊に深く、故に猫屬と共に食肉類に屬すれど其形貌習性に固有の點あれば、動物學者は別に犬屬の一科を立てたり。其頭は小さくして圓からず、鼻は頗る長大にして著しく前方は突出で感官中最もよく發達せるものなり。これ其の鼻の長大にして顔面全長の殆んど三分の二を占め、隨て鼻腔表面廣きのみならず鼻頭の外面にも粘膜炎あるが故なり。口は深く後方に裂くるを以て廣く口を開くことを得、隨て齒數甚だ夥多にして合計四十二枚あり、而して上顎最後の小白齒と下顎第一の大臼齒とは他の齒よりも大きく、相互に啮合ふやうになれり。四肢は細くして、前肢に五趾後に四趾を具ふ、四肢の筋肉は最もよく發達して長時間の疾走に堪へ、又跳躍、游泳にも適す、その歩行は趾先のみを地に着け、踵を地上に觸ることなし、故に趾行類の名あり、猫屬に屬もまた趾行類なり。多くの肉食類中にて大ほど感情に隨ひ聲の調子を變化するものはなし、或は吠え、或は唸り、或は哭聲を發し叫びを擧げ、或はグーグーの聲を發す。

廣く全世界に産し、苟くも人の住する處にして犬のこれに伴はざるはなし。其懷孕日數は六十三日にして、一回に四子乃至八子を産む、子は十日又は十二日間は盲目なり、通例二年にして成熟す。種類甚だ多し、尾の長きもの、短きもの、毛の深きもの、淺きもの等ありて、大小智愚も又一律ならず、これ氣候、食物、馴養等の如何によりて、變化を來たせるものなり。肉は食ふに堪へず毛皮は、佳ならず。唯々其の皮膚のみ大體を張るに用ひらる。世人これを飼ふは、其性しきを以て吠へ、銃獵を助け、又愛玩に勝るを以てなり。(獵犬)和洋種を問はず、訓練せば皆獵犬となすことを得れども良種は洋種に多し、(ポインター犬)は、兎等を獵るに最良種とせらる。ものに前者は陸地獵、後者は水地獵に適す。其他スピニール犬、リッリーバ犬、グレイハウンド犬等、皆各々獨特の能あり。(エスキモ犬)は北米に接み、容貌甚だ狼に似、大體にして強く、雪上に極な速き、人を乗せ、荷物運び、中には熊殺などに伴はれて助力をなすものあり、我が邦にては千島に産す。こ

の他アルプス山の人家に養はる。犬は雪の中凍餓の人を助け、又歐洲大陸に居るものには牧羊を監督し、或は信書などの送届をなして、大に人の勞を省くものなり。(土佐の闘犬) 土佐にては偉大なる猛犬を養ひこれを以て相闘はしむる習俗あり。この犬は近時東京大阪等に出して角力をなすしめ、衆人の興を博せり。又犬が狂水病と稱する一種の病氣に罹るときは、往々に人に咬みつき、而して其の咬みつかれたる人は、必ず其の病毒に感染し、時としては生命に關する大患を惹起すことあり。故に、狂犬は速に撲殺せざるべからず。▲犬の胃腸加答兒は、最も多く發する病にして、其原因は、不正なる飼ひ方、不消化物、刺戟物、腐敗物、食の過ぎなど、此病氣を誘發す。本病は、胃のみ侵さるる場合少なく大抵は腸管も共に侵さるるものなり。▲症候、多くは嘔吐し、洗滌して食慾不振となり、大に飲を食り、瘴氣を避けて冷處に派し、胃部を壓すれば痛みあるもの、如く、胃のみ侵されたるものは腸結するも、腸加答兒に在りては下痢す。其類往々

血液及泡沫を含み悪臭甚しく大は頻りに努責するものなり。▲成療法は暫時絶食せしめ、新鮮なる生肉少しづつを給し、水は多く與へざるを可とす。食慾なきものに稀鹽酸五グラム、苦味丁酸二十グラム水三百グラムを混和し一日三回十五グラム宛を與へ又葡萄酒などもよし。嘔吐あるものに屢々米片を與ふべく、下痢症には阿片丁酸十グラム、亞拉思亞鹽酸十五グラム、香水三百グラムの三品を混じ一日五グラム宛與ふべし。又便秘するものには甘汞半グラム、白砂糖半グラムを混和し六包に分ち一日三回一包宛を與ふべく又蓖麻子油十グラムを一回に飲ましむれば下痢の効あり。尙ほ阿片末〇二瓦、次硝酸着鉛二〇瓦、白砂糖適宜之を五包となし一日二回一包づつ分け與ふれば止下劑として効あり。尙ほ下痢あるものに對しては腹部を必ず温包するを要す。▲膿瘻瘻斯には二種あり筋肉レウマチス及關節レウマチス之なり。犬に多きは筋肉レウマチスなりとす。▲原因中主なるものは寒冒にして、常に運動を欠き飽食せしめ肥満し過ぐる犬は此の病に罹り易し。

▲症狀 病犬は叫鳴し歩行の際或は體を指にて壓すれば疼痛を訴へ叫鳴す。▲治療法は體を安静ならしめ消化し易き食物を與へ、患部には樟腦、イヒチオール軟膏、沃度丁酸とカンブラ丁酸等分のもの以上三種の中一を藥種屋より求め一日數回塗布すべし。全身症にして熱あるものには撒里矢爾酸那那爾五〇、苦味丁酸六〇、水一五〇、瓦を混じ一日三回宛二分分とす。又ザロール〇五瓦を十包となし一日三回一包宛を與ふべし。▲便秘症には消化し易き食物(粥、牛乳等)の如きを與へ、適宜の運動を命じ腹部を摩擦し、肛門より指を挿入して排糞を試み、又肛門よりグリッソン挿入(藥店に在り)を入れ排糞を促し、内服薬として、蓖麻子油一〇〇瓦若しくは甘汞〇〇五乃至一〇に適宜の白糖を混じて與ふべし。▲濕疹は汚垢、膿、蛋等の如き皮膚の直接刺激に因つて起るものなり。▲病 初期は赤色斑を生じ次に暗赤色となり、其中央に小結節を生じ其斑點は次第に増大し、終に水泡を生じ破潰して相連合し濕潤するものなり、又時と

しては、膿瘻に變ずることあり。▲濕疹の治療法は先づ原因を除去すべし。初期若しくは輕症なるものには、其部の毛を剪み亞鉛華一〇〇瓦に澱粉四〇〇瓦の合劑若しくは次硝酸着鉛五〇瓦に澱粉一五〇瓦の合劑を散布すべく、又其の劇しきものに對しては、局處を能く清淨(ガーゼ、脱脂綿の如きものにて)せる後クレオリン一に亞鉛華一〇の割合なる軟膏を塗布し、慢性にして頑固なるものには、參見用ふべし。▲十二指腸虫は多く犬の小腸に寄生す、犬は漸次營養不良に陥り、疼痛ありて往々嘔吐、腹痛の發作を見ることあり、病犬多くは出血を混じたる下痢を發し、口角より粘稠の唾液を漏し且つ濃度の涙を流すものなり。▲治療法は滋養分を與へ、驅虫法としては、先づ絶食を命じ若し病犬強壯なれば甘汞又は蓖麻子油(量は便秘症の條を見よ)の如き下劑を與へ、驅虫藥として知母兒〇五乃至二〇瓦又は薄荷華〇一乃至〇二瓦を與ふる若しくは、結馬越幾斯二〇瓦を認養に入れて之を與へ五六時間後蓖麻子油二〇〇瓦を頓服せしむべし。▲蛔蟲は主と

して小腸を侵して食慾減少し又腹痛を來すことあり、或は嘔吐、下痢、血便を漏し、或は膽汁の排泄管まで侵入し肝臟炎を起すことあり。▲治療法は薄荷華〇一瓦を起すことあり。▲驅虫の寄生せる犬は、宛與ふれば効あり。▲條虫の寄生せる犬は、大に衰弱し被毛は粗剛となり往々痛痛を起す事あるなど他の寄生蟲病狀と異なることなし。間々其の糞便中に蟲體又は片節を發見する事あり。▲治療法は滋養分を與へ、驅虫藥としてクロホルム四〇瓦、蓖麻子油三〇〇瓦を二回に與へ、又加麻刺及綿馬越幾斯等と與ふれば良し。▲疥癬 犬の頭部、胸壁下部、腹部、四肢等に寄生するものを穿腫疥癬と云ひ、皮膚の實質内を侵すものなり。他一はシンピオテスと云ひ耳翼の内部に寄生し、皮膚の表面に存在して汚垢及上皮等を侵すものなり。▲症狀は初め局處に水泡を發し膿疱となり、若し痒覺の爲め摩擦して破壊し、脱毛して痂皮を現はし速かに蔓延す。又シンピオテスは、耳翼の内面を潮紅腫脹せしめ、滲出汁を見る。此の水泡又は膿疱若しくは痂皮の

少しを取り黒板の上に擴げ日光に晒すときは、旬日してある疥癬を發見すべし。▲預防法として、患畜を隔離し、大舎及び凡ての器具を熱湯にて消毒し健康犬との接觸を嚴禁するにあり。▲治療法は先づ患部の毛を剪みグリッソンの塗りにて痂皮を緩解せしめ、一二時間の後微温湯にて洗滌し刷毛を以て痂皮を去り、日光に晒して蟲を旬日出ださしめ之に驅虫藥を施すべし。驅虫藥としては、百發抜兒撒談のアルコール溶液、イヒチオール軟膏又はイヒチオール溶液、グレイオリン二十に水百位の割合のもの等を塗布すべく、又シンピオテスの侵せる耳には前同様に宜しきも、外聽道は藥を用ゐたる後能く乾燥せしむるを要す。尙ほ硫黃華一〇〇苛性加里五〇、豚脂五〇を以て軟膏を作リ塗布するも効あり。▲毛 瘻は毛 瘻或は皮膚腺を侵し甚だ治し難き皮膚病なり、多く頭部に唇を侵し胸部及腹部にも寄生す。▲症狀は其の初期に於て前者疥癬と異なり、即ち粟粒位の結節を生じ、痂皮となり膿疱と變じ、脱毛して皮膚の潮紅甚だしく、膿疱破壊すれば痂皮を形

成し漸次連合して擴大す。▲治療法は寄生部深きを以て丁寧に藥品を擦り込まざれば効力薄し、患部狭小なる時は之に烙鐵を施すを以て良法とす。塗擦薬はペルーバルサムの酒精溶液或は白降汞一〇に單軟膏一〇〇瓦を和し軟膏として塗布すべし。▲創傷の療法は創面を石炭酸二に對し水百の割合なる溶液又はクレオリン三に對し水百の割合なるものを以て清淨に殺菌し、防腐的乾燥療法を施すべし、即ち創面の清潔なる以上は消毒液の如き水を多く含むる藥を用ゐるに、亞鉛華澱粉若しくは亞鉛華軟膏等を用ふるを良しとす。▲蚤 及驅除するに、亞鉛華澱粉加里各一六〇、瓦水約八合、粗製醋五合の合劑を用ふれば効あり。▲犬の健否鑑識法、健康なる犬は、鼻端常に濕潤し、顔貌快活にして被毛光澤を帯び、舉動活潑にして事物に注意深きものなり。之に反して、鼻端乾燥し且つ熱ある時は、疾病の徴にして、鼻漏あるもの

は、呼吸器病あるを示し、涎を流す時は、凡そ口唇、咽頭などに病あるか、又は狂犬病の疑ひあり。尚ほ脈搏は、一分間に七十乃至百二十(視の内側に手を静かに置けば容易に数ふるを得べし)体温は、三十七度五分乃至三十九度(肛門より静かに検温器を入れ五分間計るべし)呼吸は、一分間に十五乃至二十を算するを常とすべし。犬の疾病を未發に防ぎ、健康を保たしめ、其の能力を増進せしむるには、常に右の健康状態に注意すべきは勿論にして、尚ほ之が飼養管理法に充分注意せざるべからず。先づ第一に▲犬舎は空氣の流通宜しき場所を選び、夏は涼しくして冬暖かき様にするべし、時々清潔法を行ひ敷藁毛布の如きものは、毎日日光に曝し乾燥せざるべからず、濕氣は、健康を害すること甚だしきものにして、健康維持の如きは、此の注意を欠きたるに因るもの多し。又▲運動は、動物の血行を旺盛にし、諸臓器の機能を充分にし、精神を爽快ならしむるものなり。若し終日運動を禁ずる時は、犬は單に不快を感ずるのみならず、之が原因となりて諸種の疾病を

發するものなり。元來運動は、犬にとりて只一の快樂なれば、宜しく適當の運動(犬の種類等に依り多少の差異ありと雖も一般に庭園の邊遊位にては不充分なり毎日二三時間位の野外の奔走必要なり)を爲さしむること肝要なり。又▲梳拭(くしけづ)は人間に於ける空氣浴、冷水浴、冷水擦などと同じく、常に汚垢を除去するのみならず、適宜に皮膚を刺戟して其機能を完全にし、血行を旺盛ならしめ、全身の機能に良感作を興ふるものなり。一日一回必ず之を行ふべし、其方法は至て簡單なり。即ち、犬を清潔なる場所に連れ立し、毛櫛を以て其毛並の方向に全身を摩擦し、尾毛又は長毛を有するものには、先づ木櫛を用ひ然る後に右方を爲すべし、尚ほ眼の縁、唇の圍りなどは、濕したる手拭にて丁寧に拭き與ふべし。又▲洗濯(洗ふこと)は溢りに行はざるを良しとす、往々感冒など起さしむる虞あり、殊に幼犬は種々の疾病を惹起するの體れあり、然れども長毛種は、皮膚不潔になり易きものなれば、天候溫暖なる日を選び、時々之を行ふも妨なかるべし。

先づ犬を舎外に牽き出し、不安の念を起さしめざる様充分注意しつゝ、微温湯と石鹼とを以て能く洗濯し、後微温湯のみにて充分石鹼汁を洗ひ流し、最後に冷水を注ぎ二三回身振ひせし後、乾きたる手拭の如きものにて充分摩擦し、能く乾燥せしめて舎外に放ち運動を命ずべし、爰に尤も注意すべきは、濕り氣を残さぬ様充分に拭き去ることなり、若し然らざる時は、却て健康を害するものなり。又飼養法中尤も注意を要するは、▲食物及食物の給與法なり、此等の食物は必ず煮て與ふるを良しとす、魚肉、獸肉には種々なる寄生蟲多きのみならず、生肉を多く與ふれば、犬は自然に其性質野生に戻り、柔順なる性を欠くに至るものなり、故に愛玩用のものなどには特に注意すること肝要なり。又食物を與ふる回数は一、二日に一回にて足れりと云ふ人あれども一時に多量を與ふる時は、犬の衛生上宜しからざるは論無く、若し其量少なきに失する時は、種々の弊害を來すを以て、朝夕二回を適當とす。朝は消化し易き牛乳に小麥

粉を混じたるが如きものを與へ、夕は飯に肉類を混ぜるものを給し、その量は餘り制限せざるを可しとすべし。殊に番犬をして空腹ならしむる時は、僅かの食塊を以て、宜しく買収するなどの虞あり。尚ほ幼犬には、骨格の發育に必要な魚類、獸類の骨を與ふる事を忘るべからず。且つ飲料水は、絶えず新鮮なるものを供給すべし。又犬には間食の惡習慣を作らしめざる様注意すべし。犬の見知らぬ人を類み其の最も好む食物の中に密に辛き物などを入れ與ふる等、賊の買収を防ぐ一方法ならん。▲犬の蕃殖に適する年齢は、牝共生後十五ヶ月乃至十八ヶ月以降なるべし、而して牝犬は終生蕃殖に用ふることを得れども、牝犬は生後八ヶ年位にして大抵蕃殖力を失ふるものなり。▲犬の發情期は、春秋二回なるも、春季に於て一回交尾せしむるを良しとす、六日乃至十日間位發情し居るものなれども、此期に於て最も牝犬の接近を渴望するは、五日目より七日目位迄なるを以て、適當なる牡犬を選び交せしめ、其の前後は決して牡犬を接近せしむべからず、凡そ牝犬は、配

合せし牝犬の形貌を感受し、之を長く其子孫に傳ふるものなれば、最初に於ける牡犬の選擇は、甚だ重要ななるべし。▲犬の妊娠期間は九週間に於て、五週間目位より乳房著しく膨脹するものなれば、其の健全を計らんが爲め、滋養食を與へ、自由運動をなさしむべし。應々分娩期近づかば成る可く消化し易き滋養食を少しづつ與へ、餘り肥満せしめざる様注意すべし。若し此期に於て脂肪を多からしむる時は、分娩に際し生兒を害するのみならず、乳質に異常を生ずるの虞れあるものなり。▲犬の出産は大抵容易なるものにして、難産などは甚だ稀なり、第一兒を産みたる後十五分より三十分を経て第二の兒を産み、其数は普通三乃至十二迄なるべし。其後の注意は母犬を安靜ならしめ、大兒には溢りに手を觸るべからず、母犬より思はざる危害を招くことあるべし。▲幼犬の育成上母乳不足なる時は、牛乳に少量の砂糖を混じ與ふべし、然れども幼犬は、少なるとも生後二週間母乳を與へざれば、育成困難なるものなり、成るべく四週乃至六週間哺育せしむるを良しとす、離乳後は毎日四五回

- イワカガミ 【岩鏡】 ▲岩梅科に屬する常綠多年生草木にして高山植物の一種なり、其の高さ三四寸、葉は饅頭の心臓形にして厚く、長柄を具へ、邊緣に鋸齒あり、六七月頃長き花莖を抽き、淡紅色の稀に白色の花數個を著く、培養法は岩梅に同じ、若し切抜にせずして採集したるとのならば、岩松の根を細かに切碎し、これに合める土と共に交へて植るべし、岩梅よりは永く生命を保つを得れども、普通には花は三年限りとす、實はよく發生す、岩松の切株に時附れば、葉形引締りて風情深し
- イヌガヤ 【粗榧】 ▲榧の條を見よ
- イヌタデ 【馬蔘】 ▲蔘の條に詳し
- イヌアナ 【山毛櫛】 ▲アノキの條を見よ
- イルカ 【海豚】 ▲鯨の條にあり

花を見ることは望むべからざれど十分に觀賞に値す、霜後の紅葉は最も冬季の觀賞に適す。

イワウメ 【岩梅】 ▲高山植物の一種にして、岩海科に属する常緑多年草木なり、莖は黒褐色を呈し、葉は倒卵形にして長さ一分餘、狭りて生ず、七月頃三寸許り花梗を抽出、頂に梅花に似たる白色五瓣の花を著く、白山、立山、日光、御嶽、駒ヶ嶽等に産す、培養は、高山植物中困難なるもの、一にして、低地にて其の清礎なる花容を賞せんとすれば、夏の末が秋の初めに來り、日光の直射を避け、淺き素焼の鉢に底の方に赤土のゴロタ(善く乾したる後)、ふるひにて細き部分を篩ひ去りたる。

イワシ 【鰯】 ▲此の魚は、生長の度に隨ひ多少其名を異にし、俗に中羽、大羽等の稱あり、地方によりて種々の名を命ず、又ヨウシの轉訛にて、至つて脆なるものなればかく名づくといふ、種類多く、小きものは長さ一二寸より大なるは尺に至るものあり、體の背部は褐色、腹部は銀色を帯びて光澤あり、我が邦にては、西は沖繩地方より、

東北は北海道に至るまで多少の産あり、日本海に入るものは太平洋より津輕海峡を経たるものなり、性群遊を好み、深海の上層にあり、産期即ち五六月頃となれば近海に來り、卵は分離浮性にして、大なる脂球に來り、一尾にて三萬乃至三萬五千顆を放産す、卵は四五日を経て孵化し、稚魚は長ずれば直ちに外海に入る、魚獲は一般に網を用ひ、魚の種類に應じて差別あり、その價の廉なきより、貴賤の別なく、普く日用の食膳に供せられ、生煮、焼、揚げ、言ふ俵たす、鹽漬、乾物等普く用ひらる、又漁獲多き時は干鰯、搾粕等に製して肥料とす、田作とはこの干鰯のことなり、又油蠟に製し、歐米に輸出せらる。

イカ 【烏賊】 ▲頭足類にして形狀章魚に似たり、頭部を下方にし、口の周圍にある圓柱形の十脚にて海底を歩行す、脚には疣の如き吸盤ありて他物に吸着す、其外に二本の觸手のあるもあり、頭部に兩眼あり、口は腹質の唇にて包まる、章魚の如く上下に頭あり、外套膜は厚くして體の後部を被ひ、腹面に附ける噴水管は腹中の水

を噴出す、胴腔内の羽狀の鰓は其の呼吸器なり、外套膜を防禦するに、體内の墨汁より出づる墨汁を吐きて踪跡を晦ます、此墨汁にて顔料セピアを製す、又皮膚に色素細胞と云ふが有りて、其中には暗赤、青、黄等の色素を含み、この細胞を隨意に伸縮して自在に色素を浮沈せしむ、雌雄異體にして、左側の第四脚を雌の外套腔内に挿入す、五六月の交、内海、近海の淺瀬に來り、木材を深に放卵す、かふいかの卵は楕圓狀にして先端に突起あり、綠色の皮を帯び、六七個連續す、其形葡萄の實に似たり、普通長さ一二尺なれども、中には八九間に及ぶものあり、西南海には真鳥賊多く、東北、西北の海には柔魚多し、▲柔魚 圓錐狀をなし、頭部太く後端は尖鋭なり、體色若白にして淡紫褐色の小點あり、體の長さ六七寸位あり、東北海及び西北海に多く、西南海には少なし、北海道、佐渡、陸中、伊豆、最も名あり、六十尺以上の深水に棲息し、暖潮を撰んで群遊す、其中先導者ありて、全群皆之に従ふ、晝時水底に潜み、薄暮及び黎明の頃水面に跳躍す、八九月

頃産卵す、乾して鰯とす。▲かふいか 卵圓形にて、肉體は體の側面に附着す、後部は癒合す、水管に翼あり、内殻は平なり、鹽辛に製し、甲は藥料とす、粉末にして齒磨粉其他磨料に供す。▲やうりか、あふりか、長くして、唇膜には吸盤を具ふるもあり、肉體は體の側面及後端にあり、長き身幹に連する内殻を有す。

イカイヨイ 【胃潰瘍】 ▲胃病の條を見よ。
イカクチヨイ 【胃擴張】 ▲胃病の條を見よ。

イガゴエドーチユースゴロク 【伊賀越道中雙六】 ▲戯曲の名、寛永十一年十一月、備前岡山の城主松平宮内少輔忠雄の家士渡邊數馬、其近縁荒木又右衛門と共に、藤堂大學頭高次の領伊賀國上野の城外に於て同藩の土河合又五郎を討ちて、其弟源太夫の讐を報じた事實を近松半二の脚色したるもの、弟源太夫を父親負とし、數馬父の讐を報じたことに假作せり。

【イ】の部

イヨフシ 【伊豫節】 ▲俗曲の一種なるが起原は詳かならず、代表的とも見るべき唄を一つ挙げれば「あだな笑顔にさてる日や文のたより夕立や、つかい離れぬやなぎ」に概見よとて長夜の心關屋に今朝の雨ひとこえ木津川あさくとも任したか、らはしのお金時熊坂桐の雨組伊の國に

イタチ 【鼯】 ▲此の鼯は人家の近傍なる廢寺、小屋等に隠れ住み、夜間出遊して鼠等々を捕食するものにて、體長僅かに一尺餘の小鼠にして體細長く、四肢短く、尾長し、全身赤褐色にして口端のみ白し、田野と市街とを隔はす處に殖生す、其體の細長くして肩挽し易きと、短小にして有力なる四肢を有するものにより、小き隙間をも自由に入出し、又蛇の走るが如く、くすくすと樹木叢の間に通過し得、又家禽の類を掠む事あり、其家畜を掠むや睡眠中に窺ひ、不意に喉部に噛附きて血液を吸ひ盡し、禽類をして聲を揚ぐるに違

イタチゴッコ 【鹿こっこ】 ▲室内遊戯の一、二人互に手の甲を掴み順次に重ね行く戯にして興味なきものなり。

イタコフシ 【潮來節】 ▲俗曲の一種、徳川時代の中頃より常陸國潮來に行はれたるものなり、其音調抑揚に人をひきつ

るものを釣り置きて豫防すべし、鰓は他より妨害を受くる時は、直ちに立止りて、鼻の前肢の鰓を横たへ、敵の動作を視ひ見奇風あり、又敵に迫及せらる時は、例の最後尻といふものを放ち、之れを以て敵を苦しめ己を保護す、之の最後尻は、肛門の周圍にある皮膚の變化發達したるものより分泌する惡臭にして、其作用は恰も彼のへひりむしの他の肉食蟲に製はる、か、又は吾人が棒にて其の體の後部を叩く時、惡臭ある黄色の瓦斯を盛んに放つと同じ、敵しは美麗の毛皮を有するものありて、種々の用に供せらる、眼夷鰓は北海道に産す、體の大きは一様ならざれども、通常の鰓ほどなり、長毛は背面淡褐色にして淡紅色を帯び、腹部白し、故に白鰓の名あり。

けるところありて人の情緒をそとる。野郎の癖は免がれざるもこの小唄江戸及諸國の津々浦々にまで傳播し今日に存せり。就中潮來出島の唄人口に膾炙す其外二三種を次に示すべし。潮來出島の眞流の中でやめ咲くとしはしやしやぬしの歸りを河岸から見れば船に帆かけてかげもなしとおまへつりばりわしや池の鯉つられながら又かへる。

イレバ 【義齒】 ▲歯牙の抜け落ち若しくは缺損せるを、人工を以て補綴する術を講ずるなり、西洋にては古代より之の術行はれたるも、本邦には極めて新らしくして、安政慶應の頃、脇坂侯の齒醫、石野宗意、渡邊良哉等義齒を作れり、古しの黄楊、蠟石にて作れる入歯は、近來は跡をたんとす。

▲種類 ▲有床義齒 顎又は臺のある入歯にて、吸着して落ちぬ様工夫せるものなり、其中に、義齒床、陶齒の臺に鑲嵌を蒸和せるもの、實用に差支なけれど、更に金屬の輕便には如かず、▲金屬床、金床、銀床、アルミ床あり、價も亦不廉なり、▲無床義齒 床を用ひずして、義齒を施す方なり、▲義齒續齒、▲架工齒などの

別あり。歯牙は食物の入門なれば、第一開門を堅固にして、病魔を拒むは衛生の第一義と知る可し。

イレズミ 【入墨】 ▲入墨は大古の俗習にて、世界いづれの國も此の事ありしが如し、蓋し裡體時代にありては、猛歌又は他の種族に對して、己の身體の壯嚴を裝ふ必要ありしならん、我が國の文身は、コロボツクル種族の遺風なるべしといふ。徳川時代に入りては、之の技大いに進みて、俠客職人等との之を行ふ者多く、或は男女痴情の警として、相互の腕に入墨する者ありたりも之れ野蠻の行爲なれば、現今は漸やく廢れて僅かに南洋諸島、臺灣人、琉球人、蝦夷人の一部に之れ等の風存するに過ぎず其方法は皮膚を針にて突き、墨汁を擦入れて、不滅の繪畫又は文字を表はすものにて入墨に二義あり、一は裝飾若しくは或は目的を以て施すもの、之れを文身又は入墨といふ、一、刑罰にて、刑餘の人たる事を、永く世人に知らしむる處置なり、之れを刺といふ、刺は履伴天皇元年に阿曇連漢子の罪死刑に當るを免じて、墨刑を科せしこと日

本書記に見えたるを初めとす、されど其方法等詳かならず。徳川時代に至りて、刺を刑名中に加へたれど、其の法式は國々に依りて多少相違あり、多くは腕に横に一條乃至三條、縦に二條、若しくは十文字等ありき。江戸にては、幅三分程の縦二條を左腕に刺したるものにて、其の方法は先づ罪人の出牢前數日、腰細附、牢屋同心一人附添へ牢屋見廻り詰所前の砂利上に筵を敷きて座せしめ、椽側に薄縁を置きて細役人座す。之れにて入墨の宣告あり、非人手傳ひて左の腕を脱かせ、入墨したる後、三日間留置くなり。又蝦夷人の文身、男子は左手の親指と人さし指との間に施す、形は概れ、ハ形若しくは左肩のあたり、X形の印するを常とす、男子之れを施さば弓術に熟達すとの迷信より來れるなりといふ、又女子は口の周圍、手の甲、腕の間等、場所によりて、其の施せる形同一ならざれども、全道通じて行はるは、手の甲に山形、三角形、菱形、X形を施し、手腕に並行線、X形、入字形等を施せるものにして、専ら裝飾の意に出づ、臺灣番人の文身、種族

に依りて多少の差異あれども、之れを大別すれば、顔面にするものと然らざる者とのことなるが如し、顔に施せるものは、男女其式を異にす、即ち男子は多く顔に施し、女子は重に左右の兩耳邊より口端邊に、數條の曲線と、網巾紋狀の二列とを施す。それは男女共に一は裝飾的、一は成年の表號となせるなり。琉球人の文身、各島稍其の形狀を異にすれども、全く左右の兩手兩腕に施し、身體其他の部分には、一も施されたるを見ず、其の理由も又島によりて異なり、或は女子に刺墨を以て婚否の區別とするあり、或は單に其の妙齡に達したる表號とするあり、沖繩本島及び附近八九の島嶼は即ち後者に屬すといふ。次に大島土人の文身は、其の形甚だ複雑にして、女子未婚者と既婚者と甚だ相違あり、未婚者は其の形簡單なれども、其の婚するや更に細なる紋様を刺墨するなりといふ。

ど、一般に、此の製法に依れる器物を總て一閉張と稱す。一閉張の器物には、茶壺、燗草筒、印籠、琴瓜、入會席、盆鉢、小箱、文庫、机等頗る多く、上等なるものは、價値甚だ廉ならず。一閉張は、我が國、永年中、明人一閉なるもの、亂を避けて我國に歸化し、京都に住して之を製したるが初めに、その質の強靱なること、重量の極めて輕きことによりて、漸次一般に歡迎せらるるに至れるものなり。現今にては、名古屋を其主産地とし、東京、京都、大阪よりも僅かに産す。▲一閉張の製法は、先づ木材又は金屬にて器物の型を造り、之に美濃紙を水張にし、其上に、炭糊にて次第に紙を貼り重ね、乾燥したる後之を型より抜取り、尙二三日間乾かして、二三回滲汁を塗布し、其上に彩漆を施すなり、されど、机、文庫の如き大なるものに至りては、木他に、原形を作り、之に紙を貼り重ねたるにて、全部紙にはあらず。總て一閉張は、上等なるは日本紙のみを原料とし、凡そ三四十枚も貼重なるなれど、下等のものは下張に西洋紙を用ひ、上部の四五枚のみを日本紙

としたるにて、質の弱きを免れず。▲ボール木地 近來ボール木地と、漆器の木地にボール紙を代用すること發見せられてより、一閉張の領分は漸次之に蠶食せられつゝある傾あり。ボール木地は、正一閉張の一層進歩したるものといふべく、一閉張の如く大なる手数を要せず、外觀美に價格も廉なるのみならず、質仲々に堅牢にして、破損又は龜裂の虞なく、萬事に於て一般の漆器に優れるが如し、其産地は大阪を主とし、静岡、名古屋にも多少産す。▲ボール木地の製法は、六オンス位のボール紙を、滲糊にて五六枚乃至十枚を貼り重ね、紙の柔かなる頃之を木型(薄製にて凸凹兩型なる用ふ)に挟み、螺旋壓を用ひて二三分間壓搾して後、抜き出して一晝夜ばかりを陰乾にし、充分乾きたらば、鉋、小刀等にて其縁を切り、切口にまた滲糊を塗り乾かし、それより防水劑を施す。防水劑を施したる役は、總て普通漆器の製法と異なる所なく、順次下塗、中塗、上塗をなすなり。

インパネス ▲合羽の條を見よ。

インニク 【印肉】 ▲印を捺すに、用ふる

【イ】の部

ものなり。単に肉といふ。色は様々あれど、大抵は朱又は黒にて、朱なるを朱肉、黒なるを黒肉、又は墨肉と呼ぶ。維新前までは、公文書の印、書畫の落款等の外は朱肉を用ひず、一般は皆黒肉を用ひたるが、今は多く朱肉なり。また青、藍等の肉は、凶事の時に用ふる慣習なりしが、今は然る區別なきが如し。印肉の製法は、蓖麻子油を煮て温かくし、晒艾を適宜に入れて、無混ぜながら、朱又は墨粉を入るなり。色變りの肉も、製法は略異ならず。之れに少量の白蠟を入る時は、捺印の際油の滲むことなし。尙上等の印肉は、艾の代りにパンヤを用ふ。また朱は、通常光明朱を用ふれども、今はセルマン朱を用ふること多し。墨粉は、墨の原料たる油煙の外、小さき墨片を蓖麻子油に浸し置き、之を煮て用ふるもよし。

インリヨースイ 【飲料水】 ▲ノミミズの條を見よ。

れも白色なるものと、帯色のものとあり。我が國北海道に産するもの、如きは、白色粒にして大なるものなり。且つ北海道に於ては「ウツラ」「サラサ」等と名づくる種々の色彩をなしたるがあり、「栽培」菜豆は性最も霜を恐るゝものにして、これに遭ふるときは、直ちに凋傷するものなれば、降霜の虞なきに至りて、これが種を蒔くべし。稍濕氣なる沃土なれば、最も能く好適し。いづれの處にも栽培せられざることなし。土壌は充分に深耕し、四月下旬頃より六月中旬頃に至るまでの間に、十日間ばかりことに播種すべし。さて此の種子を蒔くには、蔓生種と矮法種とによりて各々異なり。發芽本葉三四枚の發生したる頃に、一圓の中耕をなし、これと同時に、畦上の兩邊に竹のごときものを立て、これを畦上の中へはれ蔓生種に要するところのものなり。爾後開花の候を待ち、再び中耕をなすべし。採取の期節は、播種の期節によりて、多少の遅速ありと雖も、四月頃に播種したるものは七月中旬頃より漸次軟かなる莢を採

取し得べし。若し此の期早きに失せば未熟なるを以て、味佳美ならず。晩きに過ぐるときは莢のみ、食用に供しがたき患あり。
インフルエンザ 【流行性感冒】 ▲數年間若しくは數十年間、全く跡を絶たざるもの候忽として見ゆる、一種急性の傳染病なり、本邦にては明治廿四五年の流行以來、時々流行を見る。原因 インフルエンザバチルスと稱する亞鈴形の細菌にして、患者の喀痰中常見する所なり、此の細菌の吸入は即ち傳染を來す原因なり。▲經過 微候を分ちて、全身及び局部の二となり通常惡寒、發熱、全身倦怠、頭痛、脊痛、腹痛を引起し、同時に筋肉及び四肢關節の痛を感ず、甚しきに至れば、熱の上ると共に精神萎靡となり、言語を發す、又呼吸器を犯され、爲に聲嘎れ、鼻加答兒、咳嗽を起すことあり。消化器も惡心、嘔吐、下痢腹痛を伴ふ、病の長短は、熱の持續したるに、輕きは全く發熱せずして、夕刻に僅に上昇する位なり、熱は三十八度半より三十九度半に至るを常とし、四十度以上の上ることありて、心臟の脈搏を増し、心臟病

者及び老人は心臓衰弱により驚ることあり、輕きは三四日、重きも七日乃至十日にて全癒す、再發の憂なきに注意を要す。併發病としては、肺炎、助膜炎、中耳炎、眼病、急性腎臟炎、癆瘵、神經痛、心臓症等にて、肺炎は特に注意す可しとす。▲治療法 未だ特效藥なし、對症法として、熱、頭痛、腰痛に解熱劑、又は鎮痛劑を與ふ可し。

インコ 【鸚鵡】 ▲鸚鵡の條を見よ。

イノシシ 【猪】 ▲本州四國、州に産したる琉球にも産す、されど琉球のものは、内地産のより脚長く尾細くして小さく、毛を數生せず、臺灣に産するものは内地の産と稍々種類を異にす。この他支那朝鮮フィリピン、ボルネオ、ジャワ等より印度に産し、又亞非利加及び歐羅巴にも産す。牛鹿と同じく偶蹄類にして、各肢に四趾あれど、趾の地に附かずされど牛鹿の如く單に植物質のみを食ふにはあらず、動物質をも併せて食ふが故に齒の構造に於て、大に牛鹿と趣を異にし、口中も上顎の大齒は逆向して口外に顯はれ、下顎の大齒は順向して口内に顯はれ、頗る鋭し、その胃囊は極めて簡單にして反

芻することなし。故に猪の類を不反芻類とも名づく、全身黒褐色の粗毛を生じ、怒る時は忽ちこれを豎立す、頭部は直ちに體に接し、殆んど頸部なきが如し。故に、急に方向を變へる事能はず、常に一直線に突進す、前後に思慮なき武士を猪武者といふは即ちこれに基づくたるものなり。四肢は細く短かく、尾は稍々太くして毛を數生す、大なる者は體量數十貫に至るもなり、山中に住みて蛇類、蚯蚓、木の根、木の皮等を食物を蒐事あり、又深山には往々猪道と稱し猪の常に往來する道幅僅かに人の兩脚を揃へて通行し得る程の道あり、獵師は之の通路を知りて、殊め其衝に當る岩角等に待受けて之れを射撃す。猪狩は昔武士の競ひて催したるものなりといふ、肉は脂肪に富み、頗る美味なれど、蛇類を食するが故に、肉に強き刺激性あり、寒き時は殺してより一週間、経たるものに非ざれば中毒の虞ありと、毛は刷毛を作るに宜しく、毛皮は靴拭と爲すを得べし。また、膽は熊膽に似たるを以て熊膽を偽造する事ありと傳ひらる

附言、東京にて猪肉を山鯨といふは鯨の肉色に似たる處より此稱あり。
イケバナ 【挿花】 ▲花卉草木を按配交又して器に盛り、水を注ぎて樂しみ、且つ室内の裝飾に供するは、元佛事に花を折りて手向くるに始まりたる可し。其節々の櫻や菊を瓶に挿みたることはありたれど、今日の挿花は足利時代に其端を發せるは、明なり、將軍義政の時京都六角堂の頂、妙寺僧、專慈、立花の枝に通じ、天文六年花傳抄と云ふ書を述す。後中興の稱安に專好、亦よく其技に達し、法式を立て、茲に六角堂池坊の祖を創む、爾來茶道と相並んで、盛大に趣くと共に、諸流相競ふて起り、就中、古流、石州流、遠州流、青山流、宏道流、池坊流など最も名あり。▲方式 流派によりて種々の工夫あれど要するに、▲三才、即ち天地人に分つて、高きを天、低きを地、其中間に位するを人となす、三枝以て數十枝に及ぶも、皆之の天地人の副たるものにして、三以上奇數にて増し行くものとす。又三才の別名を▲眞行草と稱し、天を眞に、地を草に、人を行に配

【イ】の部

花器端正にして立つが如きを真と云ひ、行くが如きを偽と云ひ、又花器を真行草に分ては、形意並然とし、て規矩に合ふものを、真となし、曲折變形の趣向を興へたるを、行とす、釣瓶、釣瓶等の變格を草と云ふ。▲心相載と云ふも、また三才の別稱なり、▲本手留、流、本手は天に、留は地に、流は人に當る、留を根と云ふ、眞の前後に一枝を添へたるを前添、後添と云ひ、流に一枝を添へて、肩といふ。留に一枝を添へて、肩と云ふ。又この四つの添枝を日月星辰と呼ぶ、大體二角形をなし、九本より百數十本に至るも、之の三角形の中に入る可きものとす、この形を鱗と云ふなり、正式の花は立鱗、三角の一邊の水面に平行せるを横鱗と名づく、挿方の鱗を示せば、眞を立て、次に前添、後添、次に肩、肩、流根とす、枝数多くとも、眞に始まり、根に終る可きものとす。又花の用方は、天に開花地に著、人に半開を定めとす、▲勝手本勝手、逆勝手と云ふがあり、花器に向つて左方に活くるを本勝手と云ひ、右方に活くるを逆勝手又は非勝手と云ふ。▲花器

春は竹、中口、唐銅器、細口、百度等を用ひ、夏は唐銅器、薄口、盤銅器、秋は土の中口、薄口、冬は細口、百度、盤銅器等なり。▲種類、竹筒、孟宗竹の根幹にて作る、一重切、二重切、車僧、百度切、尺八切、橋柱等の別あり、▲平花、瓶、水盤、(すなはち)馬籠、廣口、等、▲釣瓶、宗仙、袋籠、頭巾籠、等、▲釣瓶、形、香、燈、等、▲懸花、瓶、角籠、玄翁等、其他釣瓶、鐵、竹、丸壺、餌下筒、旅枕等、限りなし、次は臺花瓶を据ふる臺なり、これに大小板、扇形、井戸綱の丸數などあり、大板は長二尺、二寸五分、幅一尺、小板は長一尺、二寸五分、幅八寸、薄板は長さ一尺、三寸五分、幅一尺五分、幅九寸五分、九寸又は一尺とす。六角板は徑九寸七分、圓板は徑一尺二寸、一尺、九寸三分、九寸とす、扇形は外縁長さ一尺、五寸五分、内縁長さ五寸五分、幅六寸五分と定む、花臺の長さは一尺七寸より一尺三寸、幅一尺一寸五分より八寸六分まで、足の高さは七寸より二寸迄を普通とす、又足の高さは八寸以上は香臺形と云ふ、▲花留、挿す可きも

のを花器に据へ附ける器にて、主として、馬籠、水盤、船などに用ふ、次の如し、▲往來の船に用ひ、停泊船には用ゐず、▲くつわ、響を組み、或は重れ、其の隙に花を挿し留む、組方にも水鳥、龜、蛙、花車、片、竹、海老、御幸、などの組方あり、又草物、葉物の活方は先づ其姿を調べ、葉を附けて一組めにし、挿す可し、一本づつ、入る可し、蟹に押てもよし、頭の重きもの、長けなかけは適せず、▲蟹、陸地の蟹と心得ふ可し、二正は並ぶより、上下に趣向をなす可し、▲兔、木賊、芙蓉、萩などに用ひてよし、水草には適せず、▲鯉、水草にのみ用ふ、其の挿花用具には、▲鉄、鐵製又は眞鍮製なり、▲鏝、齒の細きものなり、▲霧吹、眞鍮製小唧筒にて、霧吹用に用ふ、▲位置花は横物掛物に掛花を用ひ、一行動物位置花を用ふるを法とす、又掛物横物ならば正面に、一行動物なら、脇に寄す、前後は床の正中とし、時には前後四六の加減にしてよし、▲配木製法、配木として花器中に留木を入れて、其又にて枝の動搖を止め、配木製

など殊に注意す可し、此の目的にて細き竹を枝の柳とするもよし、製法は、▲ばりばり小枝を花瓶の直徑に合せて切りて、竹む、種のは強くしてよし、琴柱くばり又は、松葉くばり等三種あり、一本の木を割りて又は配木にしてよし、花器塗物なら紙を挿みて配木を附く、環つかね様に、かくて器に用ふるには、花器耳附なら左右にし、模様、袖かきなら前に向く、それに配木を用ふるに隔附、向附、横附とあり、花の姿に應じて都合よきものを用ふ、▲枝の燻め方、小枝は片手に、太きは両手を用ふ、▲材料、花物、梅、桔梗など、▲葉物、葉蘭など、▲樹物、松、柳、黄楊など、▲實物、栢、檜、批把など、四季の花屬草木類限りなし、▲水揚方、▲梅、桃、杏の類、枝の切口を火にて焼く、桃は陽起石の粉を少し入る、▲海棠、根を焼く、薄荷の汁を瓶に入る、▲梨子、林檎、切口は焼かすして、大根の搾り汁を瓶に入る、▲藤、瓶に酒少し入る、▲木蕨、木蘭、玉蘭、枝を十分焼く、少し割りて石脚油を入れる、▲山吹、金絲梅、未央、柳、金雀花、莖の根を髓にて打ちつぶし、

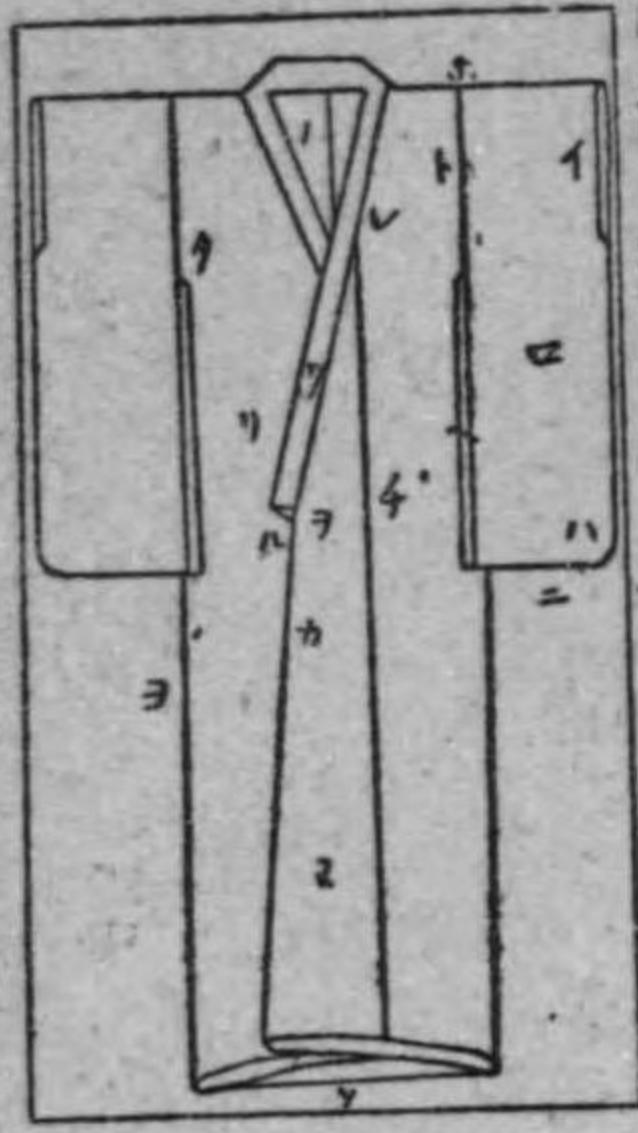
瓶に土段、粉を少し入る、▲芍薬、萩、湯の中に活く、▲合歡、百日紅、棗花、根を焼かす、瓶に鐘乳石の粉一匁入る、根木を破りて、細辛を挿んでよし、▲朝顔、水葵、日蔭に生じたるは微温湯中に生く、▲蓮、水、鐵砲にて孔より水をつきてよし、朝早く切る可し、▲夏菊、根をたき、熱湯に漬けて生く、▲木槿、熱湯中にて生く、▲桔梗、紫苑、烟草の脂を切口に塗りてよし、▲竹、太きは節を貫きて上酒を中に充て、用ふ、麗の苦汁を沸したるもよし、▲芙蓉、菊、花器に沸湯を入れ、花を挿して瓶口を塞ぎ、冷水に移す、▲花、花枝は水に漬けて、必要の時出す可し、水は雨水を最上とし、河水、井水と之に次ぐ、花は早朝切り取りたるは生氣強し、日中切りたるは萎み易し、花は切り取りて細口の花瓶に入れ、固く口を塞ぎおけば、数日間開きます、花の蕾は赤網にて巻附ければ、閉かす、▲挿花の八條、▲古今、今、季節の違ふものを混すること、▲遠近、後、山野、山前に見するなど、▲三木、木物、三種生けること、▲四草、五色など挿すとす、草木のみ四種生くること、▲助考、木をなび

け、其枝に草をもたせて生くること、▲投木、木の根を草にかくすこと、▲箱、草木を挿すとき、草の根と、木と根と入れ違ふこと、▲十文字、眞を横に載ること、之れなり、▲四季の生花、▲春、梅、福壽草、金盞花、山躑躅、辛夷、小櫻、垂糸櫻、櫻、李、連翹、櫻桃、小櫻桃、玉蘭花、桃、梅、棠、榴子、梨、薔薇、山吹、草山吹、柳、牡丹、蘭、紫、華、華、榴、鈴、桂、燕子花、石楠花、美人蕉、粉團、菊、馬蘭、白頭翁、櫻草、庭櫻、紫荊樹、銀根、仙、草牡丹、夏一花、菖蒲、鐵線、花、石竹、虎耳草、紅、藍花、白、花、芍、小、藤、杜鵑、佛、桑、花、下、毛、卵、菜、小、蓮、花、佛、桑、花、鼓、子、花、紫、陽、花、梔、子、剪、春、羅、菖、草、夏、菊、栢、菊、蜀、葵、錦、葵、合、歡、花、蓮、風、葉、鳳、仙、花、紫、微、花、百、合、秋、海、棠、清、宵、花、牽、牛、花、萍、蓬、草、慈、姑、花、玉、簪、花、一、秋、一、枯、梗、檜、紫、苑、雞、頭、花、睡、蓮、白、粉、花、胡、枝、木、犀、菊、女、郎、花、秋、丹、尊、賓、木、芙蓉、冬、水、仙、批、把、寒、菊、南、天、梅、千、日、紅、茶、梅、花、梅、も、とき、種、々、あり。

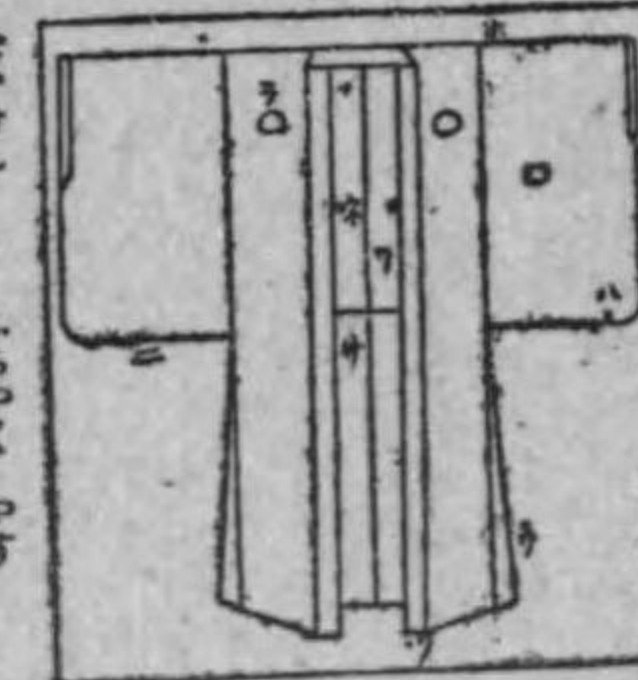
【1】の部

イフク 衣服 ▲身に纏ふものにして、寒暑を凌ぐ第一の目的とすれど、装飾の意味もあり、また禮を失はざらん意味も存す ▲種類 衣服には和服と洋服とあり。和服にはまた着物と帯と袴とあり。普通には着物のみを衣服といふ。衣服には種類甚だ多く、襦袢、単衣、袷、縮緬、羽織、袴、浴衣、帷子、小袖、單物、本重、單物、半重などの外、袴、シヤツ、ズボン、腹掛け、股引、脚絆、足袋などの中に含む。

▲衣服の原料 衣服の原料は國と時代とに依りて異なるれども、大體植物性原料と動物性原料との二なり。植物性原料には麻と木綿とあり、動物性原料には絹と毛皮と毛織とあり。今、之等のものの優劣を比較



するに、先づ毛織物は、絲の間の空隙多し、多量の空氣を含むが故に皮膚に密着せず、随つて體温の發散を防ぐを以て、最も冬季の衣服を作るに善し。濯ぐに不便な濡れに耐へることも、皮膚を刺戟すること、塵埃、黴菌などの附着し易きことなどの缺點あり。次に絹物は、保温力に乏しきこと、通氣性に富まざることに於ては毛織物に劣れども、軽く滑らかにして肌觸りのよきこと、塵埃、黴菌などの附着し難きこと、於ては毛織物と絹物の中間にあり。その皮膚を刺戟することなく、黴菌などの附着し難く、且つ洗濯の便多きことより考ふるるときは、木綿物は最も實用に適するものなることを知るべし。麻は毛織物と反對に體温を吸収し、之を外に發散せしむる性あり、夏季の衣服に適す。▲衣服地 衣服地は種類甚だ



も広く用ひらる。綾類には平御召、市樂、風通、縞斜子、諸綾、縞綾、縞本八丈、縞八丈、秋田八丈などあり。平御召はまた九重織、高貴織ともいひ、男子の衣服として高尚なり。市樂、風通、縞斜子もまた上品にして、広く男女間に用ひらる。諸綾、縞綾は最も男子の平常用羽織に賞せられ、縞八丈は本八丈より稍々劣れども、秋田八丈などに共に多く下着又は書生羽織として、用ひらる。節太織類には節太織、上田織、柄尾織(越後織)、米澤織、銚子織、秩父織などあり。袖類には結城織、琉球織、大島織、米澤織、袖あり、是等は、品質前數者に劣れども、丈夫にして且つ價格廉なるを以て、最も廣く男女間に用ひらる。尤も大島織及び琉球織は價格も餘り廉ならず、一種の雅味あるを以て、多く中流以上用ひらる。羅布及び上布には透綾、明石織、縞縮緬、縮緬、縮上布などあり、絹の如く夏物に廣く用ひらる。此外に木綿類あり、木綿織の條を見よ。尙帯及び袴のことに就きては、各々其條を見よ。縞縮緬、木綿物等に拘はらず、衣

服地の選擇には大に注意せざるべからず、徒らに流行を逐ふて、未だ着用の壽命あるに拘はらず早く廢れ去る如きも善からず、價格の廉なるもののみ惑ふて、地質染色などの劣等なるに氣附かざるも惡し。今衛生及び實用の點より見て衣服地を選擇せんには、凡そ左記六個條の要件を考ふべし。(一)纖維の間に多量の空氣を含むものなること、(二)纖維の間に水分を含み、且つ容易に之を放散するものなること、(三)一定の彈力有し、永く之を失はざるものなること、(四)染色は無害にして、且つ永く褪色せざるものなること、(五)地質丈夫にして、久しく使用に堪ふるものなること、(六)價格の餘り高からざること。▲衣服各部の名稱 圖に就きて衣服各部の名稱を示すべし。(イ)袖口、(ロ)袖、(ハ)袂、(ニ)袖幅、(ホ)袖口、(ヘ)袖口まで、(ヘ)八つ口、(ト)袖附、(チ)前袖、(チ)を上前、(リ)下前といふ、(ニ)狂、(ル)襟先、(ヲ)合襟、(ワ)襟、(カ)襟下、(ヨ)脇、(タ)だき、(帽をいふ)、(レ)劍、(ン)裾、(ツ)前下り、(ネ)紐附、(ナ)胸、(ラ)紋、(ハ)身八つ口、(ウ)襷、(キ)胸

はぎ、(ノ)背縫。なほ友の友布残りて、其襟に被せたるを女襟といひ、襟の後の下を襟肩といひ、之より裾までを身頃といひ、背筋より脇までを後袖といふ。また襟の如きには、馬乗とて胸の最下部を二寸縫殘したる所あり、被布の襟の如く眞直に垂れたるをば襷襟といふ。此の外袴、シヤツ等は其條を見るべし。▲着衣上の注意 衣服は寒暑を凌ぐ第一の目的とすれど、餘り厚着をなし、また汗を流するは惡し。厚着は怠惰の癖を作り、起臥屈伸に不自由にして、從つて發汗の爲めに皮膚の組織を毀め、其抵抗力を弱らす。薄着は風邪を惹起すことあり、また身體の營養質を消耗すること多し。衣服は成るべく緩く着て、身體を緊束するを避くべし、身體を緊束すれば、起居動作に不自由なるのみならず、血液の循環を妨げ、皮膚の諸作用を阻み、空氣の流通を惡しきす。衣服地にシヤツ、股引、袴、縮緬等の如き肌に直接するもの、時々洗濯して、常に清潔なるを用ふべし、また屢々乾燥して着るべし。汚れたる衣服、濡りたる衣服は、皮膚の蒸發作用を停止せしめ、保温の力

を、間々病氣の原因をなす。▲保存と蟲干
干物、取扱ひ及び保存法の如何に依りて壽命に長短あり、衣服は殊に日常用ふるものなれば、最も之等に注意を拂はざるべからず。今其の保存上の心得を略述すべし。衣服は先づ、着用後は必ず風干に當て日に晒し、乾きたる後にあらざれば仕舞ふべからず。乾かすには、衣紋竹に掛けて、直接日光の當らざる所に於てするがよい。鐵釘などに掛くるは銷を附け、又は誤つて破る虞あり、直接日光に晒すは、色を褪め、汗臭あり、汗臭に依りて汚臭を生じたるものは、直に之を抜くべく、久しく放置する時は、抜ける汚臭も尙抜けるに至るべし。衣服を疊むには、成るべく二ツ折にするが宜しく、三ツ折、四ツ折などして、多くの折目をつくるは醜くし。衣服の縫ひ、又は鈕の脱れたるなどは、其時直ちに繕ひ置き、必要の時に狼狽せざる心掛あるべし。被は、之を濡して火熨斗を當て、又時々湯懸斗上げをなす必要あり。衣服乾燥の後、柔かき刷毛も、靜かに地に添ふて縦に拂ひ、塵埃を落すべし。殊に毛織物に於て

最も大切なり。衣服を仕舞ひ置く筈、行李、支那靴の如きは、時々風に當て、曝し濕氣を去り、塵埃を除き、鼠、蟲等の害に遇はざるやうにすべし。次に蟲干なり。蟲干は、土用干と秋干と寒干との三回を行ふべし。土用干は、梅雨後直ちに之を行ひ、梅雨中に受けたる濕氣を去り、微などの生へるを防ぐなり。秋干、寒干もまた、忽にすべからず。蟲干は、最も天晴朗にして、風の餘り烈しからざる日を選び、細引繩を張りて、衣服は皆裏返しにかけ、直接日光に當てざるがよし。蟲干の後、また刷毛にて一々丁寧に拂ひ、藏ひ置く時は、樟腦、ナフタリンなど入れて蟲害を防ぎ置くべし。

れど強く、主にミン織、穴かきりなどに適す、普通のものにも用ふ、甘番より六十番迄あり、絲レース、紡織糸にして、袋物のてがらなどに編むに用ひらる、▲絹糸、絹物を縫ふに用ひ、用方に従ひ、普通、絹糸、絹糸、つき糸などに區別す、▲麻糸、とほり、一名、麻と云ひ、二股に撚らぬなり、▲練糸は、夜具、蒲團類を縫るに用ふ、▲穴糸は、絹にて製し、編物に用ふ、▲麻糸、麻布、帷子類を縫ふに適し、其中にも、▲油こきと云ふは、細く紡みたる字を蠟油にこき、滑かにしたるもの、頗る強靱にして容易に縫目より縫るることなし、其外色々々に用ふ、▲編物、毛糸、スコッチ、毛糸、蛇腹糸が主なり、▲毛糸、スコッチ、毛糸にて製す、手袋、靴下、シャツ、ボン、下、肩掛、襟巻など編物に用ふ、▲綿糸、木綿にて作る、毛糸の代用とす、凡て毛糸類は古シヤツ、古靴下をほぐして染めかへしたるもあれば注意を要す、▲蛇腹糸、縫紋、縫取などに使用す、よく蛇腹形を縫ふよりこの名あり、手袋、錢入類を編むに用ふ、又蒲絲と云ふも刺繡に用ふ、▲織物

糸、俗に織絲と云ふにて、木綿織、瓦斯、紡績、雙合、小倉などの種類あり、經絲、緯絲にて別あり、經絲には節なくして強きをよしとし、緯絲には少しの節は差支へなし、絹、縮緬、羽二重など其違ひは原料にあるなり、麻織物も又原料によりて異なり、其他、麻織種々あり、麻を撚りて作る、二枚絲とは一枚の麻を撚ぐるに用ふ、大風には普通細絲と云ふ麻織を用ふ、又白紅の木綿糸を撚り合せる絲も用ふ、其他木綿糸を六七本列べて撚りてつけ合せ、平絲にしたるものは、商品を結び括るによし。

また片田舎に見る古風の石垣を疊みて、土の崩れぬ様にしたるはわるし、普通は地面より少しの間を桶側にし、其より下は堀りたるまゝになしおくものなり、途中より汚れ浸入し易きものなれば、雨溜、便所、塵屋などの附近は殊更注意を要す、▲井桁、は地面に接したる部分を漆喰に塗り固むるをよしとす、流し水、雨水の流入を防がざる可からず、▲井筒、井桁と同じ意味に用ふるものあり、桶側の上部を云ひ、化粧側とも云ふ、▲井戸蓋、井戸水を完全に保護せんには、蓋の準備を要す、▲井戸流し、井筒に接して地上に設け、井に近接せる處を最も高くし、漸次傾斜せしむ、其低き端に土管又は煉瓦木製の小溝を通じ、汚水の流行に便せしむ、▲車井戸、井桁の兩側より鳥居形の本を建て、上には井戸屋形を作り、其下に滑車を設け、鐵製と木製あり、棕櫚若しくは繩にて作りたる井戸繩を釣りに、釣瓶を垂下す、▲釣瓶、柄を附くるものは小さくして淺し、繩に下るは細長くして重し、二箇を要す、▲唧筒井戸、汲上ぐるは凡て唧筒による、蓋をするを以て、塵埃の入るを防ぎ、勢

力を省き、殊に深き井戸には最も適當す、(ポンプの項を見よ)▲掘鑿井戸、地下の岩石層を鑿形の鐵棒にて突き抜き、其間に鐵管を挿入し、數丈の下層より水を導きて地上に噴出せしむるものにして、俗に噴井戸と云ふものなり、水は清潔にして、雨水、汚水の流入することなく、安全なる井戸なり、▲噴井戸、掘鑿には費用を要すれども、其他は割合に少額の費用にて事済むなり、(泉の項を見よ)

【1】の部

ものなり。最近の建築法にして、堅牢耐火無比なり。「石造」は同じく西洋風の建築に用ひらる、即ち石にて築きたるもの、日本銀行の建築の如きこれなり。猶ほ日本風の建築にして、倉庫等に用ひらる。「塗家屋」日本建築の一にして耐火の効あるを以て、市街の商店等に多く用ひらる。「木造」日本固有の建築にして、今尚ほ日本の建築の大部分を占む。費用の低廉、採光、通風等は西洋家屋に優るも、永く保存せざると、耐火、防蟻の不完全なるは、到底西洋家屋に及ばず。▲和洋折衷 近年、建築法の發達と共に、我が國の家屋も著るしく西洋風に傾き、練瓦造、石造等の建築頗る増加せり。されど住家としては純粋に西洋風のものは甚だ少く、されば西洋建築を好む人は茲に和洋折衷の建築をなし、或は應接間、書齋、倉庫等を練瓦造とし、これに連続して日本風の客間、居間、寢間等を設くるものなどあり。▲注意 家は人間生活に最も大切なもの故、其の建築には大なる注意を要す。先づ空氣の流通、光線の射入を十分ならしむるため天井を高くし、窓を大きくし、床を高くし、

床下はなるべくセメント、又は合土にて固むる可とす。壁は厚きほど寒暑を凌ぐに由り、軒、庇は短き程採光に便なり。但、土地によりては降雨の際、雨の降り込む所は長きを要するは勿論なり。室はなるべく、他に關係なく使用せらるべきやう設くべし。例へば玄関より客間、應接間に行くには、他の室を通らざるが如きなり。その他玄関と取次人の居間、主婦の居間と茶の間等は近きがよく、臺所、茶の間、湯殿等又同じ。子供の居間は主婦の室に近きはよし。又應接間、客間の外は、押入、戸棚の多きはよしとす。家屋の廣狹は家族の人数によりて異なる、其の他土臺、用材は永く保存せしむるに注意を要す。尙其の保存上掃除は怠らざるに、年に一二回の大掃除には曇る日光にて消毒し、床下は能く深み、破損の箇所は直に修繕すべし。尙ほ民法上の家は、戸主の條に詳記す。

やくあな、などといふ、體は長紡垂形をなし、形せいに似たれども稍々圓くして口小なり、背長く胸及び背、尾の三鱗は中大窪あり、背鱗長く胸及び背、尾の三鱗は中大窪あり、背鱗は小さくして胸鱗の下腹部にあり、背部は蒼褐色にして腹部白く、體側に緑褐色の縦線あり、體長九寸に達す、五六ヶ月頃産卵の爲めに群居す之の時期に於て多く捕獲するにあり我が國の沿岸到處に産すれども、殊に九州に多し、淡白にして美味なり。

イサヨヒセイシン (十六衣清心) ▲戲曲の名。僧清心が遊女十六夜に通じ、情死を謀りて水に投じ、共に死せしむるに毒婦惡漢に墮落する事河竹新七の脚色したるものなり。題名を「小袖會我前色経」といふ。▲第二幕目なる情死の一場は、別に「梅柳中宵月」と題して、清元の淨瑠璃に演奏せらる。

え、胃腸を發す、一兩日絶食すれば癒ゆ。▲慢性胃加答兒 前者を反覆すれば起る。食物長く胃中に滯り、腐敗して惡臭の瓦斯を醸し、胃粘膜は變化を起し、遊離酸鹽は減少し、有機酸を生ずるが故、蟲醉を發し、瀉飲となる、胃洗滌を行ふ外、食養生、冷水擦擦など節制に注意すれば治す。▲胃潰瘍 粘膜の質を欠損するに、甚だしければ、全胃壁に孔を穿つことあり、原因は血行不充分的爲め、胃壁の防禦力弱く、胃液の鋭き作用にて自ら消化せらるゝによる、男女共二十歳より三十歳に多く、酒精の亂用、過熱、過冷の食物、不消化物、胃部の外傷などに因ること多し、症狀は食後一二時間を経て、發作的に痙攣狀を呈す、胃壁に孔の明きたるは回生の見込なきも、固形物を避け、牛乳其の他滋養物を取り、若し、痙攣、銀など與ふ可し。▲胃癌、四十歳以上、原因は遺傳、營養不良、胃病の癖あるものとす、病の繼續期は一年より一年半迄なれど、三年迄持續することもあり、今日にては局部切開の外手段なし、人工營養法により小康を保つに過ぎず、▲

胃腸 大食する人、茶食者には非常に多し、慢性胃加答兒と同様なり、療法も亦然りとす。

イモ (芋) ▲天南星科に屬する草本なり。莖は地下に塊根をなし根はその周圍に鬚根をなせり、其の種類甚だ多し。其の重なるものを舉ぐれば「里芋」一に青芋ともいふ。子芋を生ずること少し。京都の多田芋、東京の豊後芋、今福芋等に之に屬す。八ツ頭芋、赤莖、青莖の別あり、莖長大にして、莖の下部に膨大なる芋を産し子芋を生ずること少し、風味共に優等なり。「イモイキ芋」暗赤を呈する。莖は長大、裏ら莖葉を食用に供するものにして、子芋は八ツ頭芋よりも多し、通常夏秋の候に收穫す。又速成用として貴重せらる。▲「煮芋」葉は圓形にして深山に子芋を生ずれども、芋に煮味ある故久しく貯藏せし後にあらざれば食用に供し難し。一に綿芋とも云ふ。薯蕷及佛掌薯。我邦にては古くより栽せらる。出野に自生せるものを野山薯といひ、培養せるものを家山薯といふ。野山薯は水分少く粘り氣強く、トロ、と

して風味可なり。家山薯は水分多く質脆く、風味淡泊なり。薯芋一歐洲の原産にして、一時盛んに培養せられたり。性頑健、瘠薄の地にも能く繁茂生育す。栽培法一芋は、山の瘠土といへども、能くこれを軟かにするときは、培養せられざるにあらず。然れども此の作物は、稍陰地を好むものなるが故に、日光の透射の頗る激甚なる土地にありては、宜しからず。土質は肥沃なる壤土を以て、最も能く適當なりとす、これを培養するには、深く耕耘して細かに土塊を碎き、厩肥、腐熟せる糞若しくは草の類又は塵芥等を動き込ませる間に、其のまゝに放置し、四月下旬に至りて、再び能く耕耘し、此に二尺五六寸ばかりの畦を造り、二尺内外の間隔を以て種芋を植うべし、後數日を経るときは、發芽するものなれば、其の發育するに従ひて漸次これが中耕をなし、左右より培ひて其の根際を高くなし、時々液肥を施すときは、其の根は、漸く増大となり、多くの兒芋を生ずるに至るものなり、以後は發芽の發するものなれば、勉めてこれを摘み取り、根莖の發育を妨ぐべからず。斯くて十月中旬

より十一月下旬に至りて先づ茎を刈取り、
而して後根を掘取るべし。

イモリ 【蝶鱗】 ▲此の動物は湖沼池
等の水底に棲息するものにして、蛙と同じく
兩棲類に属す。鰓と脚とを以て呼吸するも
のなれば、水陸共棲む事を得るなり。其の
産地と期節とに依りて多少其形状及び色
澤を共にすれども、東京附近に産するは、背
部暗黒色にして皮膚は粗粒に、腹部は鮮紅
黄色若しくは橙黄色にして黒色の雲紋を
散布せり。四肢は短かく、尾は長くして歩行
するには四肢を用ひ、游泳するには尾を用ふ。
動作甚だ不活潑にして常に水底を徐行
し、塵々水面に浮出して呼吸を爲す。而
して水中に潜伏する時間は平均三十分位な
れども、時としては口頭を水上に提出し
て、数分間自由に呼吸を爲むが如き状
を爲す事あり。其舉動は頗る遅鈍なれど
も、知覚は鋭敏なるに似たり。試みに之れを
して物體に觸れしむるか、或は之れを飼養せ
る水盤を震盪する時は、假へ其震動は極め
て輕微なりとも、忽ち奔逸して他物の下に隠
れんとし、偶々産卵せんとする時などは、

忽ち中止して之れを警戒するを常とす。食
物は専ら蠅、昆虫類の幼蟲、及び細少な
る軟體動物なれども、死したる物は之れを
嗜好せず、而して飢うれば取て食品を選ば
ずして魚肉、飯粒にても食す。又飢極ま
れば往々同類相食むに至る若し多數の者を
一器中に放棄し、之れに餌食を投ずれば、常
に烈しく競争を始めるを見る。元來此の
動物の視覚は鈍くして、餌食を索するに専ら
觸覚と嗅覚とに依るもの、如し、故に前
述の如く競争に際すれば、嗅覺に靈感せ
逃の如く競争に際すれば、嗅覺に靈感せ
られて狼狽し、何物に限らず口邊に觸れて有
機物なるを感ずれば、直ちに口を開きて之れ
を啄食し、同類の手足頭尾の嫌ひなく互
に噛み合ひて七轉八倒する状は頗る奇觀
なるものなり(附言)俗説に此の蝶鱗を黒鱗と
して男女愛慕の妙費とし、又乳兒の保母に
腫む良薬といへり。前述の如くは佛敎よ
り出でたるものにして取るに足らず。又後説
は前述より更に出てたるものなれば世人妄
に惑はされぬ様注意すべしものなり。

イセオドリ 【鳥類】 ▲害蟲の條を見よ。
イモムシ 【鳥類】 ▲害蟲の條を見よ。
イセオドリ 【伊勢踊】 ▲踊の條を見よ。

もあり、琴三味線にて舞すもあり、尺八胡
弓等に合すもありて、江戸の人々一時これに
狂するばかりなりき。其章句の數、二見の
眞砂といふ書に八十八章を載せたり。今
その一例を示せば、今も傳はれる小歌の「伊
勢は津で待つ、津は伊勢でもつ、尾張名古屋
は城でもつ」等も、音頭にて歌ひしものなる
べし。

イセオンドコヒノネタバ 【伊勢音
頭懸袋】 ▲戯曲の名 寛政八年伊勢古
市の雄家油屋にて、醫師孫福齋宮が押妓お紺
の事より十人を殺傷せる事實を骨子として
脚色せるもの。近松徳三の作なり。

イセシマフシ 【伊勢島笛】 ▲京淨
瑠璃の一派。伊勢島宮内の語り出でしより此
名あり。

イス 【椅子】 ▲西洋家具の一、腰をかく
る蓋なり。形は種々あれども、多くは堅き木
にて作り、腰をかくる所あり、背に椅木を
設く。腰をかくる所及び凭りかゝる所は、
丸きあり、方形なるあり、また板なるあり、
藤なるあり、羅紗、天鵞絨、革など張れるあ

りて様々なり。其腰蓋の羅紗、革など張れ
るものは、中に鋼鐵製、螺旋形の彈簧を据え、
且つ綿、鉤屑、馬毛などを詰めて、坐り心
地を善からしめたり。椅子にはまた、兩側
に臂突を附けたるあり、脚を軸として座した
るまゝ、回轉し得るやうにしたるあり、脚底
に小車を附けて移動、向返り等に便したるも
のあり、腰蓋と兼用したるものもあり。▲種
類 (一)藤椅子といふは、全體を藤、蔓、其
他の木本科植物の莖にて編めるものにて
主に談話室などに備ふ。(二)竹椅子といふは、
脚及び框を太竹にて作り、其餘を細竹にて
組合せたるものにて、風雅なれども強からず。
(三)安樂椅子といふは、脚の下部に船底形
の底木をつけ、坐しながら容易に揺れ得るや
うにしたるものなり。(四)墨椅子といふは、
框を折疊むやうに作り、背部の凭らる所及
び腰をかくる所をスツクにて張れるものな
り。(五)腰掛といふは、背を凭せる所無きも
のなり。此外に長椅子、ベンチなどあり、共
に専ら休息用なり。▲今日専ら行は
る、椅子は、西洋より傳來せるものなれども、
我國にも亦固有の椅子あり。古くより、貴人

の間用ひられしあぐらと稱するもの夫
れ也。あぐらは胡床又は吳床と書き、今日の
腰臺に類したるものなり。又古昔天皇の用ひ
られしといふものも、椅子の字音にして、古
書に「南殿御椅子總地朱塗、金物金鏡金、
菊唐草毛彫、御墨雲、欄、行事官調
進」などとあるを見るも、一斑を知る。又紫
宸殿の椅子は黒漆にて作り、他に圓椅、方椅、
折疊椅、竹椅などもあり、圓椅は僧家多く
之を用ひ、竹椅は略式にて、民間の納涼
に多く之を用ひたることなども或書に見えた
り。



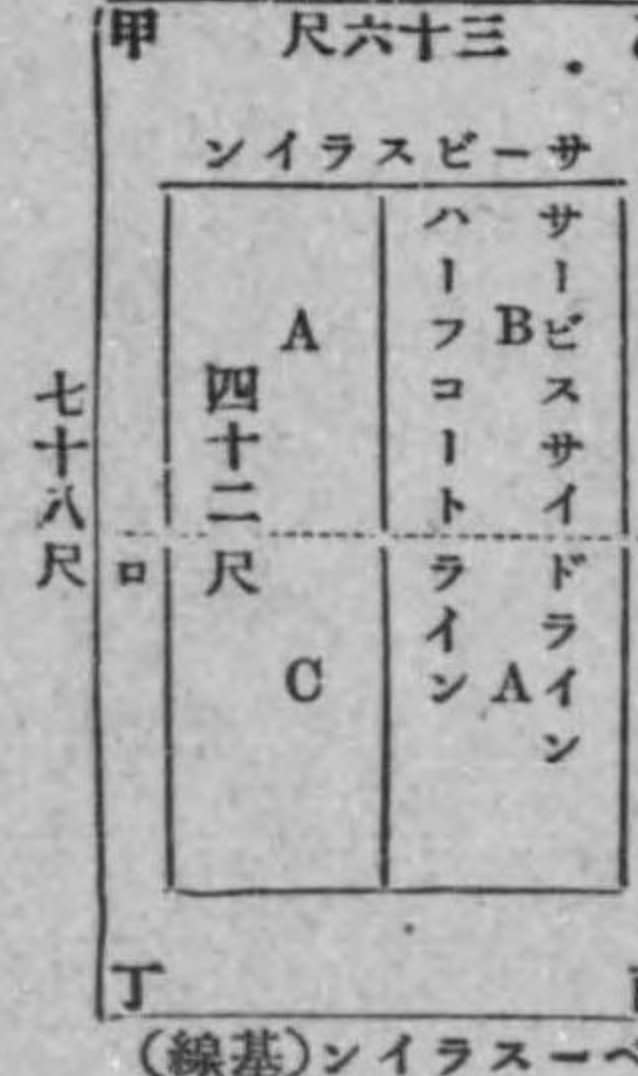
口の部

ローガン 【老眼】 ▲老年に至りて、眼珠の調節作用を減ずるによりて起るものなり。蓋し眼の調節作用とは、物体の遠近に依りて、眼珠中の光線屈折體（水晶體）の形を變じ、以て或る程度迄は、遠近を不問、其の物体を明に認めしむる作用をいふ。されば、此の作用の衰ふる時は、物体を明に認め得る範圍を著しく減する故に老眼は餘り接近したる物体又は少し遠き物体は、明視し能はざるに至る。而して、老眼は又其の光線屈折體の厚徑をも減するが故に、同時に屈折力を減じて、遠視眼の如く近點（鮮明に物体を認め得る内の最短距離、即ち眼より三寸六分許の所）通常よりも遠ざかり、隨つて、明視の距離（普通八寸許）も變ぜしむるなり。老人の書見するに方りて、壯年者よりも眼前進き所に置きては、即ちこの理によるものなり。 ▲老眼の手當老眼は、遠傳或は眼の過勞等に依り、甚しく早く起ることあり、即ち三十歳位より、已にこ

れに罹ることあり、或は又七十歳以上の老年に達しながら、なほ眼鏡を用ひざるが如く、其の時期は頗る不定なり。而して、器官の衰弱より起る老眼は、何等手當の方法なきを以て、たゞ明視の距離を普通の方法に近づかしむる様なすべし。即ち遠視眼に於けるが如く、凸眼鏡を用ふるものなり。

ローラースケート 氷滑の條を見よ

ローンテニス 【庭球】 ▲戶外遊戯の一種にして我が邦に於てはベースボールに次いで盛んなり。略してテニスとも云ふ。 ▲競技場學校の運動場の如きものならばそれに越したる事なけれど、それ程には及ばず。砂石のなき平坦なる地を選び、チョークなどに左圖の如く線を引く。



▲競技法 中央に一直線に強く張りたる網の高きは凡そ三尺位とし、これを境とし、東西兩組に分る。各組は二人づつとし、任意の方法により、づれより開始すべし。先づ東組より開始したりと假定せよ。甲は、其位置に於て、片足をベースラインに當て、他の片足を場外に置き、杓子状のラケット（棒製の棒に網張りたるもの）にて、左手にて軽く投げたる球（ゴム製の外圍を薄革にて覆ひたるもの、又は普通のゴム球）の下を打ち返さず、筋道なる丙に宛てAの中に打ち込むべし。丙は地に落ちてはれ上りたる時の球を受け返し、網を越えて敵場内に打ち入れ、かくして最初の時以外、は各々互に入亂れて交々に打ち、過つて受け損じたる組を一點の敗となす。而して他組の三點を得る前に四點を得るを以て勝と定め、一回の勝負を了るなり。 ▲採點法 唱へ方はピョンポンと同じなれば、その條を参照せられたし。 ▲用語 次に擧ぐべし。 『アムバイア』は和名にて審判官といひ、演技中に起る一切を裁列す『サーバー』は球を打ち出す人。 『ストライカー』アウトはサーバーより打ち出したる球

を受くる人。 『サービング』は『サーバー』の球を打ち出したる動作を指して、終にサービングしたりなどいふ。 『ネット』はサービングしたる時、球の網に觸れたるに宣告し、この場合は再び打直し。 『ライン』はサービングの場合に、球の筋道なる小區劃の線上に落ちたる時宣告し、更に打直しをなすを普通とす。 『フェア』はサービングして首尾よく定め敵場に入りたるものを『フォールト』は仕損じに喩へ、『セーフ』は落ちたる球の有効なりや否や疑はしき時審判官の有効なりと認めたる場合に宣告し、安全との意義なり。 『ノー・カウント』は不算入の義にて、遣り直しの必要を認めたる時、『ゲイム・オフ・セット』は一勝負決したる終局に下す宣告なり。 ▲競技規則 (一) 最初ラストライカーアウトの準備前に、サーバーより打出したるはノー・カウントなり。(二) サーバーの二球ともに仕損じたる時は敵に一點を得られたるものなり。但しライン・ボールと網に觸れて入りたる時はノー・カウントなり。(三) 球を受戻す際、ラケットを網の外に突出し、ラケット又は身體の一部を網に觸れた

る時一點の負なり。(四) 球は必ずラケットにて受授すべきものにて、身體又は衣服に觸れしめたる時も亦負なり。(五) 競技場外にある樹木、若くは傍觀人の身體に當りて入りたる球はフォールトと宣告せらる。

ローサイフシ 【弄齋節】 ▲小唄の一種にして、隆達節に次で起り、元和より寛永にかけて江戸に流行したり。二の唄、今日永に於ては、洞房語、總まくり、及び等の組唄を合するも僅に二十首に足らず。文はやりたし、我身は書けず、物を言へかし、白紙が「君が来ぬにて、枕な投げそ、投げそ、枕に科もなや」のたぐひにて愛語、擲すべきものあり。隆達節に比較すると、技巧に於て進みたるを見る。

ロクロサイク 【轆轤細工】 ▲パイプ、ペン軸、絲巻、コマ、盆、梳、筒、壺等に凡て轆轤にて造らるるものなり。之れまで我が國にて使用したる轆轤は多く木材の挽物なりしが年を追ふて鐵細工の範圍擴張せらるるに隨ひ、金物、陶器用の轆轤輸入せらるる、鐵、鋼、電氣、發明機、印刷器、銃、砲等の構造ある各部分は凡てこの旋盤にて仕上

げらるるに至り。使用する轆轤の構造は、直徑二尺内外、厚さ一寸七八分位なる棒製の圓盤あり、其の中央下端には圓筒形にして其の直徑五寸内外高さ一尺七八寸の棒製のものを固定せしめ、而して其の支點は圓筒形内圓盤の直下に投げられ、別に轆轤にして其の尖端を鏡とし、其の支點に過せしむると同時に、其の下端は圓筒の末端に觸れしむる様にし、其轆轤は之を深く土中に固定直立せしめ、後靜かに圓盤の周邊に近く四ヶ所に小なる開所を穿ちありて一尺餘の細長き木棒を以て其開所に其の一端をさし入れ、急に回轉運動を起さしめ充分なる速度を與へたる時は轆轤は尙其の力により回轉運動なすものなり。又物は、挽物の種類により、大小形状多様に、特殊の挽物を製すときは轆轤と稱するものあり。横に軸を設け革紐を絡み、紐を引けば軸廻り、軸の端に、器に造るべき材料を固定しあるにより、これも共に廻るなり。適當の刃を近づければ、其の材料は、圓く削られ、碗、盆、壺、コマ、機、脚等となる。又、轆轤臺として陶器などを圓きものに作るも

のあり。軸を廻轉せしむること前述の如し。即ち軸の上を盤ありて、この盤上に陶土を載せ、望むところの器の形により、それぞれ位置を手にて押へ居りなすれば、容易に、その形を得、テツクネの外、陶器はみなこれを用ひて製す。而して、銀細工に用ひらるる木材は、樟、ハルニシ、シキミ、楠、桐、櫻、松、唐木、栗、檜、桑、杉、杉、梅、イタヤカヘチ等なり。

ロクマクエン (肋膜炎) ▲種類肋膜炎は、これを乾性肋膜炎、滲出性肋膜炎、化膿性肋膜炎の三種に分る。▲肋膜炎(一)乾性肋膜炎は呼吸時に當りて、胸部疼痛を感じ、息に連れて摩擦するが如き音を發す。(二)滲出性肋膜炎は悪寒を以て始まる、中度の弛張熱を發す。呼吸困難となり、乾咳頻出して、胸部疼痛甚だし。又同時に食慾減退し、痰の胸は、量なる時は、心臓及び肝臓は共に壓迫せられてその位置を變するものなり。(三)膿性肋膜炎は本病中最も悪質なるものにて、まづ惡寒あり、發熱甚だ高き等、諸徴候總て劇烈を極む。▲原因感冒、外傷、肺炎、肺結核、心臓病等より、或は近傍諸臓器の炎症、又は肺膿瘍の波及等より透致し來りて、胸部内側を被ふ所の薄膜即ち肋膜炎に炎症を起すに依りて、肋膜炎は發後概して良好なれども、化膿

ロクド一セン (六道銭) ▲佛葬の時死者に添へて埋むる六文の錢。六道に赴く旅費といひ又三途川の渡賃ともいふ。今は事ら青銅錢に代へて紙錢を用ふ。支那に始まり昏寓錢といふ。昏晩に埋むる寓錢の意。ロクカツエ (六月會) ▲大師講ともいふ。天台宗開祖傳教大師の忌日に、行ふ法會にして、毎年六月四日比叡山延曆寺に

ロクア (六部) ▲佛語。六十六部の略もと行脚僧が六十六部の法華經を、日本十六個國の靈場に納むること、多くは諸國の國分寺或は一宮に納む。現當二世の利益を得んとするに出づ。後轉じて法華修行の爲め厨子を貢ひ、笠を被り鉦を打ち、諸國を巡行する者を稱するに至れり。

ハの部

ハ【葉】▲植物の葉は葉片葉柄托葉の三部より成る。葉片とは葉の扁たき部にして葉の大部分を占む。葉柄とは葉の取手を云ふ。又托葉とは葉柄の左右に附着せる小形の葉の如きものなり。以上三者を具ふるを完全葉と云ふ。中には葉柄を缺くもあり、托葉を缺くもあり、又は兩方共なきもあり。▲葉脈の面にある筋のことなり。模様によりりて色々の名あり、之を大別して網脈、平行脈の二とす。網脈とは網目形をしたるにて、これを又羽狀脈、掌狀脈の二種に分つ。羽狀脈は羽の形をしたるにて、柏の葉の如きものなり。又掌狀脈は掌の形にして楓の葉の如きものなり。平行脈は又百合の葉の如き直脈、棕櫚の葉の如き射出脈、芭蕉の葉の如き側脈に分つ。其他櫻の葉の如く一葉より成るを單葉と云ひ、藤の葉の如く二葉以上より成るを複葉と云ふ。如き數によりて分ける分け方もあり。▲葉の形、第一葉縁、第二葉先、第三葉脚、第四

葉形の諸部につき研究す可し。葉縁の一種にて少しも出入なき楠、竹の如きを全縁と云ふ。其出入りの淺きは鋸齒、深きを缺刻と云ふ。葉先は尖がれるあり、圓きあり、凹に入りもあり、葉脚は圓きあり、筒形あり、葉形には楕圓形、針形、披針形、線形、楔形、圓形、橢圓形、卵形、倒卵形、心臟形、腎臓形あり。又葉の發生にも、葉の各節より一葉を生ずる互生葉と云ひ、一節より二葉相對生する對生葉と云ひ、又三葉以上生ずる輪生葉と云ひ、發生葉葉以上生ずる輪生葉と云ひ、發生葉と云ふ。▲葉の變形。葉は又種々特別の役目を盡さんが爲め、種々に變態を呈す。仙人掌の葉の針、豌豆の葉の卷疊、百合根、水仙根、など其例なり。其捕蟲器とて葉狀に變形して蟲を捕ふるあり。▲構造。葉の内部は柔組織より成り、外面は一層の細胞にて被りて、其内に條色の色素を有する無數の小體に無數の氣孔あり。▲効用。葉は氣孔より炭酸瓦斯を吸收し、根より葉を通じて送り來る水、其他のものと化合して、日光の作用により、植物體の凡てを營養す、而して氣孔

より更に酸素を吐き出す、これ即ち植物の同化作用なり。又植物中の水分は、葉の氣孔を通じて水蒸氣となりて發散す、乃ち發散作用なり。又呼吸作用とて、葉は空中の酸素を吸收し、炭酸瓦斯を呼出す。パイ ▲上下二枚の皮を作り、種々の食料品を包み燒きたるものにして、食後のデザートに用ゆ。皮の製法は各國色々の差あり、米國に行はるる法は、ラードを針に移し、メリケン粉に十杯二百杯を交ぜ、よく捏れ合せて毛節に懸け濾したるものを再び針に入れ、水二合を匙にて攪拌はしつ、少許りづ加へ、軟かさの程を見て、俵板にメリケン粉を振り撒き、其上にて丸棒を以て一尺四方の大きに伸べ、バタ大匙に一杯程を盛り、手早くナイフで二つ切りとし、バタを塗り内側に重ねて縦に置直し再び一尺四方に廣げ、其を四つ切にして重ね合ひ、更に長さ一尺五寸、厚さ五分程に伸べ、縦に六分程の幅二本を切り、其の残りは又重ねて一分位の厚とし、長さ八寸、幅六寸、深さ一寸五分のパイ型を當て、周圍一寸ほどの大きさに切り、これを型の内部に敷き、前に切りたる分を型

の内部上方に沿って固くあて、その残部を再び一分ほどの厚に延し、パイ型の蓋とするなり、又パイ型に當てた上方を手にて型の形に造り、周囲をナイフにて切去り、其中に肉類なり野菜なりを入れ、前に展しおきたる蓋を、周囲に水をつけて被せ、パイ挟にて種々の飾りを作り、之をテンビ或はストロウの中に四十分間程焼くなり、焼く時間の長短はパイの種類によりて異なるなり、中々大を良とし、焦んとする時は其の上を新聞紙を載せて焼く可し、焼ける五分前に雞卵一箇の黄味を大匙一杯の清水を加へ、よく攪拌して糊子にてパイに塗る可し、中に入る材料に従つて種々の名あり、▲チキンパイ、大さからざる雞を取り、其肉を十五六片に切り、食鹽と胡椒とを撒り掛り別にソース鍋に大匙一杯のバターを入れて火に架け、解けたる頃を見計ひ、一箇の刻みたる玉葱と鶏肉とを投れ、程よく炒りて大匙一杯のメリケン粉を加へ、攪拌して三合程のソースを加へ、之に食鹽と胡椒を混して味加減を爲し、大さ中位の十二個の馬鈴薯の皮を剥ぎ、別に三本の胡蘿蔔の皮を剥きて五分

程の輪裁とし、微温湯の中に弱火にて一時間程煮て、軟になりたらば右の鳥肉と前記のパイの中に詰め込み、蓋加減程よく焼く上なるなり、▲牡蠣パイ、牡蠣の刺肉百個を籠に入れ、熱湯を注ぎ掛け十分水氣を切り、ソース鍋に大匙一杯のバターを入れて火に架け、解けるを待ち玉葱一箇を刻み込み、大匙二杯のメリケン粉と、二合の牛乳とを混し攪拌して煮えたらば鍋を下し、毛節にて裏漙にかいて復た前の鍋に入れて弱火に架け、泡立器にて掻き回し、泡立つを待ち、食鹽と胡椒とを混じ、味加減を見火より下して、冷却たる後パイの中に牡蠣を入れその上より右のどろどろの汁を詰め焼く上なるなり、▲ミンズパイ、牛豚肉各々百匁、三十匁のハムとを交ぜ合せ、細かに刻み、玉葱一箇と共に庖丁にて叩き混ぜ、少許の薄荷の葉を入れ、食鹽と胡椒を程合に混して味加減を試み、其中に雞卵一箇を割り込み、之を混ぜて十五六箇に分けて團子の大きめに丸め、フライ鍋にラードを入れて火に架け、解けたるを見計ひ、其中に投じ、煮上らば新聞紙を布きたる血の上に置き、別にソース鍋に大匙一杯のバター

入れて火に架け、前と同様に焼く可し、▲アップルパイ、皮と種子を去り、小さく薄く切りパイ皮の下部を皮にし、砂糖を其上に塗り被せ、ナットメツクを其上に蒔き上皮を捲て三十分間焼く可し、其他パンブキンパイ、薩摩芋パイ、カスタードパイ、テッキンポットパイ、蝦のパイ等材料の異なると共に種々の名目ありと知る可し、**パイドク**【微毒】▲俗に瘡と稱する花柳病の一にして、スピロヘーテ、バルリダを病原菌とす。重に不潔なる交接によつて傳染するものなれども、又遺傳によるものもあり、其他衣服、器具等の媒介に因り、又は第二期の患者と接吻などせし時、感染することもあり、若し一度此の患むべき病に感染するときは其の害毒、音に全身を侵すのみならず、嗣を其の配偶者に及ぼし、毒を其の子孫に遺傳して、汎く社會に害毒を流すに至るものなり、▲本病の最初の潜伏期は約三週間にして、第一期に入る、男子は陰莖の龜頭又は龜頭頸に、女子は大陰唇又は後連合の部に乾いたる粟粒大の發疹を生じ、次第に大きくなりて丘疹となり、忽ち

破潰爛して其後に薄き痂皮を生ず、又陰部に膿汁を分泌し、或は潰瘍の固き小豆大の硬結を生じ、其の色赤く、其の皮次第に剥けて少量の液を分泌し、後乾きたる痂皮を作り、時に潰瘍となり、深く侵入することあり、之を硬性下疳と稱す、一般に本病は其の患部に粘液様の液を分泌し、終には膿汁を洩らし、數日後、陰莖の傍なる鼠蹊部に硬結、疼痛なき腫物を發生するものなり、俗に之を横痃と稱するも、軟性下疳より來れるものとは全然別なり、(横痃の條を参照せよ)然して梅毒より來るものは殆んど化膿することなし、それより病毒次第に血液の中に入り、全身に病狀を表はすに至りて、これを第二期といふ、此の期には身體各所の淋病、二期といふ、此の期には皮膚の發疹を巴腺腫、眼には虹彩炎を起し、頭痛、咳嗽を生じ、眼には虹彩炎を起し、頭痛、咳嗽の發することあり、第二期は普通一二年間繼續し、其の間何所に組織の破潰を來さず、されどこの時期に於いては病毒の組織を害すること大にして、膿腫、又は梅毒腫と稱する腫物、或は潰瘍を形成し、身體各部に腫形を残す、例へば口、唇、鼻に組織の

破潰を來し、容貌を醜くし、咽喉又は喉頭害せられて音聲變調し、食物の嚥下困難となる、骨に發するものは、骨質殊に軟骨を破潰し、腐骨疽を起し、鼻落ち、關節の自由を失ふ等、枚舉に遑あらず、斯の如き破潰期を第三期といひ、最早到底救治すること能はざる時期なり、▲療法は先づ第一に醫師に由る可とす、遺傳性のものにありては、小兒の時代には可成的母乳を與へず、極めて滋養分ある食物を取り、殊に口内、陰部、及び肛門の周圍を清潔にし、すべて傳染せざるやう注意し、両親も亦適當に醫藥を受くべし、後天性のものにはなるべく、手落ちにならぬやう早く醫師の治療を受けるを要す、第一期にては速かに患部を腐蝕する可とし、此の期に生じたる潰瘍、面は、沃度防護を撤布し、水銀軟膏を用ひ、初期の硬結を吸收せしむべし、患者は安静を守り、滋養品を取らべし、第二期には全身膿腫瘰癧法として、専ら強力なる水銀療法をなすべし、これに塗抹法と注射法とあり、素人にては容易に行はれ得る最良法は水銀軟膏膏半匁乃至一匁を清潔なる皮膚、殊に毛

の少なき部分になるべく廣く、一回十五分乃至二十分間清潔なる掌にて熱心にすりこみたる後綿をあて綿帯し置き、翌日之を取去り、入浴して清潔にし、他の部に同様の塗抹を行ひ、全身に及ぶべし、注射療法は醫師にあらざれば行ひ難し、而して水銀劑の療法をなすときは、口内の清潔に注意し、刺戟ある食物を禁じ、喫煙を絶ち、鹽素酸加里を一合の水に一匁解き、含嗽すべし、其他住所、空氣、及び飲食の衛生にも注意を加へ、適當の運動を營み、精神を安め、滋養無刺戟性の食物を採るをよしとす、水銀に次ぎ有効なるは沃度劑にして、就中沃度加里を用ゆべし、沃度劑は殊に第三期に効あり、要するに梅毒の療法中水銀劑と沃度劑とは、特効薬と稱すべきなり、而して六百六號劑の注射は驅梅毒としては最も有力なるが如し、(花柳病の條参照) **バイオリン** ▲胡弓に類したる洋樂器にして、全體木にて作り、四絃なり、弓もまた木にて作り、緒は馬の尾を束れて、張る、其の音調雅且つ優美にして殆んど無限の音量を有し、殊に構造巧妙にして、携帶に便な

るものなれば、器樂中の帝王と稱せらるるものと
バイオリンと稱するものより出でたるものな
らんとす。バイオリンは、バイオリンと殆ん
ど同形にして、形更に大に、印度のラバナ
ストルンに、五十年前に已に用ひられ、今
も印度の賤僧中、これを弄して乞食するも
のありとぞ。バイオリンの本邦に入來りたる
は、さほど遠からんことにて、近年洋樂の
流行につれ、其流行頗る盛なり、四絃中、
最も太き第四絃は、銀線(銀をまきつけたる
もの)にして、最も低音を有し、これを(ト)
の絃と稱し、風琴(ハ)調の5に合せ、次に第
三絃にして、即ち(ニ)の絃と稱して、同じく
(ニ)の調に合せ、即ち(ハ)調の2に當る、も
し、風琴なき時は、徹枕より凡そ三寸の所
第四發音點を押へて、第二に移す、第二絃
は(イ)の絃と稱し、(イ)調子に合せ、(イ)の
(ハ)調の6に當り、最も細きものは最も高音
を有し、第一絃或は(ホ)の絃と稱し、(ホ)
調に合するものにて、(ハ)調の3に當るなり、
さて弾方は、左手にて棒の上部を支へ持ち
頭を稍々左の方に傾け、樂器の調尻を左
胸の上部、肩と腕との間に密接せしめて

支へ、右手に弓を持ち、直立して演奏する
なり、樂器は殆んど水平にし、器の頸(調
と絃部との間は左肩の中央と直角を保ち、
又奏者の臂は成るべく體に調れざる様
樂器の直下におくべし、頸は左手の指と
食指との間におき、食指は絃部に密接し
て、第一線上におき、中指は第二線上に、
無名指は第三線上に、小指は第四線上に、
おき、掌は決して頸部に觸れしむる可から
ず、また弓を持つには、右手の四指は第一の
關節まで、相密著せしめて、竿上におき
母指は弦留に接して、僅に曲ぐべし。また
掌は、決して弓に觸れしむ可からず、また
弓は徹枕の少し前において、樂器と直角をな
して奏す。手首は發音上頗る注意を要す
るものにて、最も柔かに、弓の運用と共に動
作自由自在ならざるべからず、臂は手首の動
作に連れて少しは上下すべし、強ひて高低
せしめず、或は餘りに動かすは悪し、又弓の
絃には、純粋なる、松脂を用意しおきて、
時々塗るべし。

ハイケツビヨ一【敗血病】▲症候
は、稍々輕きは、惡寒、發熱し、舌苔を生じ、
食慾減退となり、創傷部の炎症劇増
し、淋巴管炎又は淋巴腺炎等を生ずるも
のとす。而して重きは、高熱を發し、嗜眠昏
膜、炎症狀を來し、甚しく衰弱し、嗜眠昏
睡の狀態に陥りて、數日にして遂に死に
至る。▲原因は創傷又は炎腫より、血管
中に敗菌の浸入繁殖し、或は其の産出
する毒素の淋巴管等に吸入せられて、血液
を破壊腐敗せしむる病なり。炎症には、咽頭
加答兒、扁桃腺炎等より起ることあるもの
とす。▲若し創傷部及び炎腫等あらば速
かに其の治療を施すべし。既に發病せば、
大切開手術し、或は有力なる局所治療
を受くると共に、安静を守り、營養性流動
物を攝取すべし。治療其の宜敷を得ば、不慮
すれども、若し治療を誤らば衰弱の極、死
を見よ

ハイビヨ一【肺病】▲肺病の種類を
舉ぐれば甚だ多し、肺結核、肺炎、肺氣腫、
肺炎加答兒、肺デストマ、肺壞疽、急性肺

水腫、肺氣腫、肺萎縮、氣管支喘息
等なり。肺病に罹り易き者は、精神を過勞
する者、呼吸器を害する職業をなすもの、
例は石炭坑夫、毛織物職等、運動不足な
る者、酒色に耽溺する者、一度助膜炎に
罹りし者等は最も注意すべし。一々病氣に就
き大略を述べん。▲肺結核は肺病中最
も悪性のものにて、古來より結核に罹れるも
のほ、全快の見込なきものとせり。▲肺炎、
真性のものなれば、全快の見込十分有り。
▲肺氣腫 肺の氣胞の膨脹する病にして、
中年以上の人に多し。原因は多く、肺の使
用過度、慢性氣管支加答兒、咳嗽持久等より
起る事多く、此病に罹りたる時は、呼吸困
難となり、胸部異常に擴張し、他に病
なくば危険なけれども、全治する事甚だ難
し。療法としては先づ氣管支を治し、飲食
の攝生をなし、咳嗽を作るときは、胸部冷
水摩擦を施し、夏は森林中に居住し、新
鮮なる空氣を呼吸し、藥劑としては、吐根、
養容、越、鹽、酸、亞、刺、莫、兒、比、溼、等、を與へ、便秘
を兼るものには、肺那、大、黃、等、を投す。
手術としては、四肢に水腫を來したる時、

ピロカルピンの皮下注射を用せられ、又
實太利等の利尿劑を試用し、或は横膈
膜神經に感電氣を通ずるも一療法たり。
▲肺デストマ 之はジストマと稱する小蟲の、
肺内に寄生するより起る。此の病に罹る時は、
數月或は數年、毎朝血液を咯出す、色
多く汚濁赤色のものなり。時として、胸
痛を感ずると、他は總て健康狀態を失は
ず。療法としては、轉地し養生すれば大抵
全快す。▲肺壞疽 此病は肺腐敗して、
破片は咯痰と共に脱出するに至る。惡臭、
殆んど名狀すべからず。腐敗性氣管支炎、
格魯布性肺炎等より來り、衰弱したる者、
又は酒客に多し。此病發生したる時は、身
體急に衰弱し、チブスの如き狀を呈するも
のなり。療法は身體強壯なる者にありて
は、外科手術を施して、肺の患部を切除
する一法あれど、他はすべて對症療法に止
り、クレオソート、醋酸鉛等を内服せしめ、
又テレピン油、サリチル酸の吸入を行ふべし。
▲急性肺水腫 之は肺の水腫を起すも
のにて、心臟病、腎氣、水腫等の病より
來る。吸氣短縮して呼氣延長し、喘鳴

咳嗽を發して呼吸困難となり、泡沫咯痰あ
り。療法としては、カンフル、エーテルの如
き興奮劑の皮下注射又は内服、皮膚摩擦
法等を行ひ、胸部又は背部に、大なる發
汗劑若しくは芥子泥を貼り、氷水或は
醋水の灌腸を試みるべし。なほ咯痰劑と
して吐根を用ひ、力めて原因病を除きせざ
るべからず。全快は疑なし。肺氣腫、
格魯布性肺炎のことを云ふ。▲肺萎縮、
肺胞膨脹不全とも云ふ。先天性のもの
は、早産の初産兒の、呼吸力微弱なるもの
に多く起る。治療法なく成長なし難し。後
天性のものにありては、其原因一様ならず、
多くは氣管支閉塞、氣管支炎、肺腫脹、迫
り起る。▲氣管支喘息、之は多く、氣管
支筋、及び氣胞の痙攣、或は横膈膜の刺激
等より起る。多くは夜間突然呼吸困難を來し、
顔面蒼白となり、咳嗽持續し、冷汗を發す。
咯痰は黄色又は黄綠色にして、中に不正
八面形の結晶體及び無數の白血球を發
見す、此病を根本的に治するは甚だ難
けれど、生命には別條なきものなり。療法は、
温度の激變、又は刺激する飲物を避け、室内

は空気の流通をよくし、室外運動を行なふべし。又麻酔剤を與へ、アドレナリンの皮下注射も効あり。▲氣管支擴張症、之は氣管支の膨大する病なり原因は肺肋膜炎、老人痰咳、及び肺の諸病より來る。略痰多量にして、甘き惡臭を帯び無熱加答兒の初期の如し。療法としては、パルサム劑の内服及び吸入をなし、氣管支の一部分のみ囊状に擴張したるものは、外科手術を施すべし。肺病患者の注意、食物は成るべく脂肪分の多量のもの、軟かき魚鳥獸肉を交互に食し、牛乳、雞卵等の滋養品を用ふべし。煙草も一種の殺菌性のもなれば、口内の微菌を撲滅するに効あれど適宜に喫煙し得可なり。初期患者には、温泉浴、水浴、冷水擦等、有効なれど、末期に到りては有害なり。總て肺病患者の治療法として、は轉地して、深林又は海岸の如き新鮮なる空氣の地に居住し、十分滋養品を用ひ、心神安んずるは、住宅は空氣の流通を十分にす。適宜の運動をなし、自然療法を第一とす。

ハボーンキ 【羽箒】 ▲茶の湯の條を見るべし。ハボタン 【甘藍】 ▲其の葉に大小あり形に圓扁圓、尖圓あり、又縮葉あり、期に早晩ありて、其の種類頗る多く、西洋より我が國に傳來せしもの、みにても、數十種に上るされども之れを大別せば、球葉甘藍、子持甘藍、花椰菜、羽衣甘藍、及び球葉甘藍の五種なりとす。球葉甘藍は其の葉短く、球葉となして密生し、堅實にして、一葉一貫五百々に至るものあり、其の別種に縮葉のものあり。子持甘藍は、又羽衣甘藍ともいひ、多數の小球を密生し、堅實にして、

船に遇はざるは頗る柔軟なる新種に屬す。花椰菜は、矮生にして球葉大きく、直径一尺に達するものなり、容易に花蕾を結ぶ。採收期により、春夏秋冬の四類あり。羽衣甘藍は又綠葉甘藍ともいふ、矮生にして密集せる縮葉あり、深紫色を呈し、芳香を放つ。球葉甘藍は早性にして白色と紫色との二類あり、何種を問はず十字科に屬する栽培草木にて、莖圓く、高さ二三尺に達す。葉は厚く大にして通常紫綠色を帯び牡丹の花の如く相重なりて多数球形をなす。托葉は有せずして互生し、冬も凋れず。花は春夏の間に開き、淡黄色、繖状花序に排列す。果實は長角にして裂開す。鹽名かんらん、たまな、キヤベツなどいふ。甘藍は味頗る美にして品位上等なる蔬菜なるを以て、其用途甚だ廣く、嫩葉を取りて、或は之を肉類と共に煮て食し、或は酢合料の必要材料なり、之れを栽培するには、莖及び葉に光澤あり、且つ葉肉厚くして花形大なるものを避けて、別に移植し置き、春季に至り球を十字に切り、内部より花

種を出すに便ならしむるか、或は秋季球葉採取の際、球葉を切斷したるもの殘莖に發生したる球葉を挿木すべし、かくして、其の種子を翌年早春に苗床を作りて播き、五月中、畑地方に移植す、其の後も屢々移植を行ひて、生長力を抑壓し、傍ら多量の施肥をなせば、肥大にして善良なる球葉を得べし。甘藍を貯藏せんには、根と共に採取し球葉のみをなして他の葉を除き、一箇所に密植し莖又は葉にて上部を蔽ひて、降雨霜雪の害を防ぎ、一ヶ月に兩三回日光を受けしむべし、其性、寒地及び砂質の土壤を好むが故に、我が國にては、北海道を最も適地とす、故に東京附近などの、温地に在りては、屬々移植する必要あり。甘藍はもと佛國の中部及び北部等、歐洲、西岸の各地に生ぜし、一野生のものに過ぎざりしが、多年の栽培に依りて、次第に數多の品類を生じ、其の需用も又頗る廣く、西洋諸國にては家として之れを栽培せざるものなき程となれり、我が國に傳來せしは、何時頃なるが詳かならざれど、蓋し、和蘭人の長崎に持來りしものたるは、殆んど疑ふべからず、

ハト 【鳩】 ▲鳩は角質にして、鼻孔の裏に鱗片状の軟蓋あり、翼は長くして尖り、甚だ速に飛ぶ、脚は赤く、三趾は前に、一趾は後に向ふ、常に山野に在り、樹上に棲息して樹實及び穀菜を食ふ、從つて田畑に害あり、春秋の二季樹上に巢を構へて産卵す、雌雄交もこれを抱きて温む、親鳥の雛を養ふや、自から食餌を呑み下し、口中に乳糜様のものとし、嘴を雛の口中に入れて吐出す、鳩は驚く可き大食にて、一日間に食ふもの體量を超ゆと云ふ、又水を飲むにも、嘴を水に挿し入れて吸ひ、一々口に含みて頭を擡ぐることをし鳩に關する奇話、古來、珍ならず。支那にては三枚の禮を説き、當時の傳書鳩の如く、早くより書信を通せしめて飛奴と稱し、至る所の神社佛閣に鳩を畜ふは、始め八幡神社の使者として、白鳩を社殿に飼ひたるに基づく、老人に鳩を贈るは、咽はざる鳥の意なり、卵は脚氣を癒すに功ありと傳ふ。鳥類中最も早く僅眠術にかゝると稱せられ、醫學用に供す。

鳩肉を燉たき酒に和せたるを味噌を入れて煮たるを鳩酒と云ひ、黄にて煎黄の染を鳩染と云ひ、染革に鳩尾あり、袋物に着くる環の金を鳩目と云ひ、鳩の形に四つ車を着たる小供の玩具を鳩車と云ふ。▲種類 ▲雄鳩は頭、頸、胸は葡萄色にて、背部は黒褐色に、尾の先端だけ白し、頭の邊に黒青斑點あり、我邦にては四時棲息し、夏は山間林野に棲み、晩秋は主に田畝平野に來る、味美なり、▲家鳩 野生の川原鳩の變生せるもの、羽形形状色々あり、人里を離れず、多く人に飼はる。▲川原鳩 暗黒色にて、背の真中は白色又は灰白色なり、頸胸は綠又は紫にして光澤あり、主に波斯より本邦に至る海岸の巖窟内に群棲す。▲青鳩 山鳩、尺八鳩など云ふ、本邦にては至る所棲息す。▲紅鳩、金鳩 共に形小なれど、羽色美なるを以て籠養せらる。▲傳書鳩 家鳩の已が住所を慕ふて、如何に遠路も厭はず歸來する性を利用して、軍事の通信に使用す。昔支那の張九齡、鳩に書を傳達せしめ、飛奴と云へり、西洋各國之を試用し、普佛戰爭、南阿戰爭等にこれを用ひ、多少

の奏功を得、本邦第一師團鐵道大隊亦之を飼養せしが、其後無線電線の創始と共に、其必要なきに到り、廢止せり。

ハトムギ 【蕒苡】 ▲二種あり、一は稈の丈け高く、粒細長くしては薄く、實は白色にして粘氣強し。一は粒圓く、皮厚くして堅く、實も亦粘氣強し、又一種川穀と稱するは、使用に適せざれど、珠数を製するに用ひらる、禾本科の草本にして、備荒植物の一なり、果實は顆果にして堅く、且つ小孔あり、享保年中憲政仁と稱し、支那より傳來したるものにして、收穫多量なるに現今にても之れを栽培するもの、往々之れあり、之れを栽培するには一反歩につき凡そ二升の割合にて、三四月頃、畦幅を一尺餘とし、三四粒づつ、點播し、十月頃に收穫す、温暖にして稍々潤潤なる土地に適し、肥料は陸稻、粟等と同様に、堆肥、草木灰、厩肥、過磷酸石灰等を用ひ、又稀釋せる人糞尿等を時々追肥すべし。一反歩の收穫を春まで精選せば、一石五六斗に及ぶ、而し傳來の當時は、強壯劑として、常用せられしが、今は炊きて飯に代用し、其の

粉未は、餅、團子、餡、又は煎餅等の原料となる、磯部煎餅、鳩麥煎餅は、之れを原料として製したるものなり。又肺病に効ありとて、之れを用ふるものあれど、近來漸やく廢れたるが如し、主成分は澱粉にして、蛋白質と脂肪とに富み、最も滋養の効ある良好なる穀物なり、成分は水分二〇・七四、蛋白質一三・六五、脂肪五・三八、無窒素物六四・九四、灰分〇・二二なりといふ。

ハチニンゲイ 【八人養】 ▲物質似の條を見よ。

ハリ 【鍼治】 ▲古來按摩法と共に行はれたる一種の療病法にして、身體の或る部分に鍼を挿込みて、神經の運動を盛にし、又血行を順調にするものなり。▲鍼治に燃針、打針、管鍼の種あり。燃針は直接に指を用ひて、鍼を體中に挿込むものなり。打針は小さき種を以て打込み、管鍼は管を用ひて皮切をなし、以て痛みを減するものなり。鍼には多く金銀製のものを使用す。鍼の太さは、流義により幾分異なれりと雖も、最も細きを二番といひ、次に毛鍼、一番、二番、三番と順次太さを加ふるなり。又一番以上

和一ありて管鍼を發明し、杉山流の開祖となり、又出雲の人吉田意休は吉田流を開き、大塚寛海は電海流を創めたり。然れど近世醫學の進歩に隨ひ、鍼治は又其の當時の隆盛を失ふに至れり。

ハリバコ 【針箱】 ▲裁縫用の器具を仕末し置く箱なり。普通は、長さ一尺に幅五寸、高さ一尺位の箱にて、上部は蝶番を以て半開きの蓋とし、こゝに針刺を入れ置く木匡を作り、他の開かざる半分の方に抽斗を附け、線、鉄、筒、其他裁縫の用具を納るゝなり。大抵のものは漆塗とし、銀、銅、金の器具を用ひたり、また桐の白木にて造り、上を被せ蓋としたるものあり。▲針箱の一種に京針箱といふが有り、之は小形の抽斗ある箱に、高さ一尺ばかりの蓋を附け、その上に針刺を附けたるものにて、其蓋は結塗を兼ねる仕組なり。また女兒の學校用などには、文庫針箱といふが用ひらる、之は掛こつきの木製針箱の文庫にて、その掛こに針刺を仕込めたるものなり。近時また西洋針箱流行す。之は靴の如き形したる皮製にして、旅行用などには便利多し。總て裁縫

には各々並と細目の區別あり。主として用ひらるゝは一番、二番のものにして、其の長さは普通一寸三分を定度となすも、時には一寸六分又は二寸の鍼を使用するものあり。▲鍼は種と軸の二部分より成り、種一寸軸三分の割合なり。▲鍼を刺すに當りては、先づ鍼を消毒し、手術者は姿勢を正し、身を固め、右膝を立て、兩肘を張り、左の食指を以て患部を按じ、右手に鍼を取りて、左手の母指と食指との端を合せたる所に、鍼を挿入して固定せしめ、徐々に右手を運ばして、眞直に鍼を刺入るゝなり。一刺に要する時間は一定せざれども、五分間に普通二本打つる例とす。鍼を打込みたる時は五秒間位留め置き、直ちに復た抜去るなり。鍼治などは身體の表面を大別して十四經となし、各經に又夫々小別ありて、何病には何所に刺すものと一定せり。然して危險なる場所は、禁鍼として、打つ事を禁じたり。▲鍼治の理論及び効能に至りては未だ全く明瞭ならずといへど、察するに知覺神經を刺激して、運動神經を興奮せしむること、交感神經を刺激して、麻酔作用を起さしむること、細胞を刺

殺して、組織の新陳代謝を補助すること、及び僅少の電氣作用を起すこと等により、主として神經又は血行に影響を與へ、身體一部の疼痛、障害を療すにあり。例へば齒痛の場合の如き、鍼治を施して効力忽ち現れる、所以のものは、此の病は神經より起るか、若しくは血行の障害にて血液の滯るゝにより、血管の壓迫を受くるより起るものなれば、鍼を打てば、第一に刺戟によりて其の部の細胞興奮し、血管運動神經の働きを弛めて血行を促がし、第二に其の神經を麻痺せしむるより、痛みの去るに至るが如し。又は胃痙攣の如き場合には、胃筋肉の神經の甚だしき興奮によりて、痙攣を起すものなれば、先づ背部に鍼し、次に痛み場所に打つ時は、初めの鍼にて興奮を背部に誘導し、第二回目に局部を麻痺するにより、忽ち治するものなり。▲鍼術 元是支那より傳來せしものにして、徳川時代には一時隆盛を極めしことありき。徳川氏の初め、長崎に澤田意春といふ人ありて、支那人より、燃針を傳授せられ、京都には藤木伊勢守等ありて、打針を善くし、徳川秀忠の時代には、杉山

要具は、使用の後一々點檢して針箱に納め、必用の時間限附かざるやうにすべし、また針は使用前に本数を數へ、使用後また數へて其數に合せ、紛失して、不測の眞傷など爲さざるやう注意すべきなり。

ハリ子ズミ 【蛸】 ▲樹林 龍塔の下などに棲息す、食蟲類に屬する小獸なり。産地は歐羅巴の大部、亞細亞及び亞非利加の各地にして本邦朝鮮にも棲息せり、長さ六七寸體の背部及び側部は、短き鋭尖なる棘毛にて被はれ、尾は極めて短く、外部より始んど見えず、體の下向及び頭の上には棘毛なく、灰褐色の剛毛を有す、鼻は豚の如く四股短く、前後肢共に五趾を有し、大なる爪を具ふ、腹に翼はるゝ時は球の如き體を縮め、頭及び肢は内方に包み、恰も栗毬の如き状態を呈す、昆蟲、蠅、蚊、蝸牛、蛇、蜥蜴、鳥卵、其他小動物を食餌とす、又時には果實等をも食する事あり。

ハリン 【馬蘭】 ▲草花の條を見よ。

ハオリ 【羽織】 ▲衣服の一なり。もと小袖の上に塵除けとして著たるものにて、羽

織の名は、故りかるといふことより出た。大抵絹、紗、綿などなり。婦人は、禮服に縮緬を用ひざるが本式にて、普通冬は縮緬、紋羽二重、縮緬などを用ふ。夏は皆羽織を着せす。紋は五所なるが正式にて、略して三所も用ひ、婦人は多く三所なり、但し、小紋染の如き一所に限られたるもあり。胸裏は無雙羽織とて表裏同地質なるものもあれど、普通は表と別の地質を用ふ、最も多きは縮緬、綾子、紋羽二重、甲斐絹、縮子、八橋などなり。婦人のものには、尙友縮緬、友禪紋羽二重などもあり。縮緬の中には、繪胸裏と稱する精巧なる織物あり、之は肩より胸にかけて、花鳥、山水、人物、各所舊蹟

物幅並身ツ三

寸三		分五寸六		二尺五寸	
衿		袖		袖	
袖口		袖口		袖口	
腋入		二尺七寸		二尺八寸	
五分七寸		前身		五分七寸四	
五分五寸		後身		二尺七寸	
五分五寸		袖入		寸三	

真岡木綿なども普通の間用ひらる。夏物は、大抵絹、紗、綿などなり。婦人は、禮服に縮緬を用ひざるが本式にて、普通冬は縮緬、紋羽二重、縮緬などを用ふ。夏は皆羽織を着せす。紋は五所なるが正式にて、略して三所も用ひ、婦人は多く三所なり、但し、小紋染の如き一所に限られたるもあり。胸裏は無雙羽織とて表裏同地質なるものもあれど、普通は表と別の地質を用ふ、最も多きは縮緬、綾子、紋羽二重、甲斐絹、縮子、八橋などなり。婦人のものには、尙友縮緬、友禪紋羽二重などもあり。縮緬の中には、繪胸裏と稱する精巧なる織物あり、之は肩より胸にかけて、花鳥、山水、人物、各所舊蹟

尺二寸の布を以て裁つには、總長の中より、八尺二寸を取り、兩端の幅を六寸五分

と三寸とに互違に折り、縦に二尺七寸とつ剪を入れ、其尖端を通して横に四寸七分

物縮身ツ三

一尺二寸		二尺九寸	
腋入		袖	
分五寸三		四尺六寸	
衿		袖	
分五寸四		寸六	
前身		後身	
三尺九寸		一尺九寸	
後身		二尺	
後身		前身	

身ツ四

寸九		三	
袖		袖	
分二寸二		分五寸六	
腋入		後身	
分三寸四		四尺七寸	
四尺九寸		衿	
腋入		五寸	
後身		分七寸四	
後身		前身	

返折身ツ四

寸九		三	
袖		袖	
分二寸二		三分八寸六	
腋入		後身	
五分五寸		六尺五寸五分	
五分五寸		前身	
分三寸四		分七寸四	
一尺三寸		袖口	
腋入		前身	
後身		後身	

五厘つ切込み、其間を縦に切せば、身頃と腋入とを得、残りの五尺を六寸五分幅と三寸幅との二つに切り、袖、袖口及び衿を得、(二)三ツ身縮物幅一尺五分、長九尺七寸の縮物を以て、袖長一尺四寸五分、身長一尺九寸のものに裁つ。圖の如し(三)四ツ身縮物を以て、袖長一尺四寸五分、身長一尺九寸のものに裁つ。圖の如し(四)二ツ身縮物を以て、袖長一尺四寸五分、身長一尺九寸のものに裁つ。圖の如し(五)一ツ身縮物を以て、袖長一尺四寸五分、身長一尺九寸のものに裁つ。圖の如し(六)縮緬、縮子、綾子、紋羽二重、甲斐絹、縮子、八橋などなり。婦人のものには、尙友縮緬、友禪紋羽二重などもあり。縮緬の中には、繪胸裏と稱する精巧なる織物あり、之は肩より胸にかけて、花鳥、山水、人物、各所舊蹟

物男織羽單身本

袖	九寸	袖口	二尺七寸	腋入	二尺三寸
袖	三寸	腋入	二尺二寸五分	前身	二尺五分
後身	二尺九寸五分	前身	二尺五分	後身	二尺五分
袖	三寸	前身	二尺五分	後身	二尺五分
腋入	二尺九寸五分	前身	二尺五分	後身	二尺五分
袖口	二尺七寸	前身	二尺五分	後身	二尺五分
腋入	二尺三寸	前身	二尺五分	後身	二尺五分
袖	三寸	前身	二尺五分	後身	二尺五分
袖	三寸	前身	二尺五分	後身	二尺五分
袖	三寸	前身	二尺五分	後身	二尺五分

織羽裕

袖	二尺九寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
袖	三寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
後身	三寸九寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	四尺二寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	八尺一寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	八尺一寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	八尺一寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	八尺一寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	八尺一寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺
前身	八尺一寸	腋入	二尺九寸五分	袖口	六尺

バカガイ【馬鹿貝】

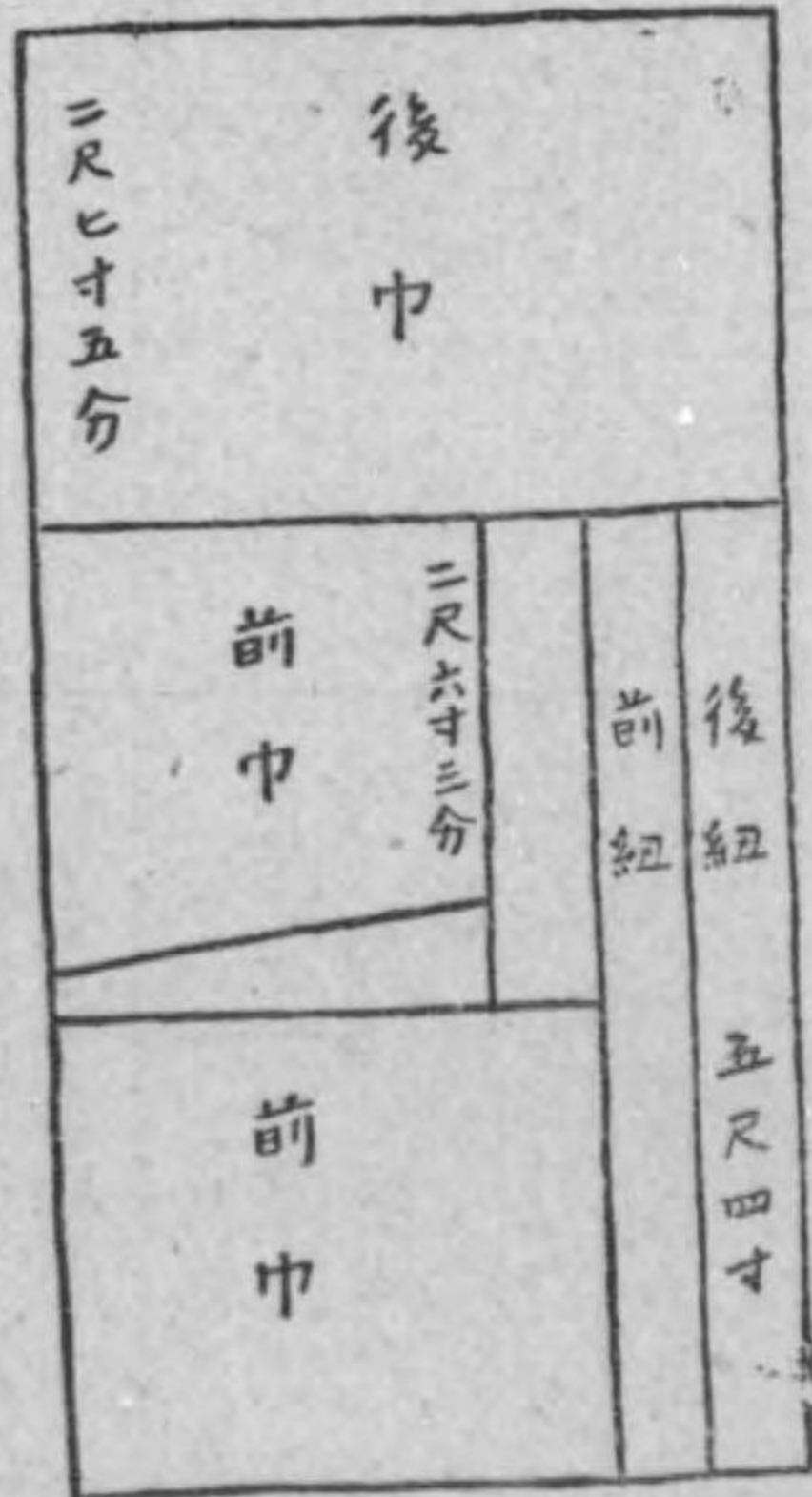
此貝は鹽度強くして淡水の混ざる浅海の砂泥地に産し、夏手産卵するものなり、東京灣及び三河灣等に最も産す、辨別に難し、二枚の介殼は稍々三角形をなし、殻頂少しく前方に傾く、左殼の齒は山形をなし、右殼のものは著明ならず、前後の肉柱は略ぼ同形なり、殼の表面には少しく輪層をなし、淡褐色にして、濃褐色の放射線あり、長を三寸に達するあり。

ハカマ【袴】

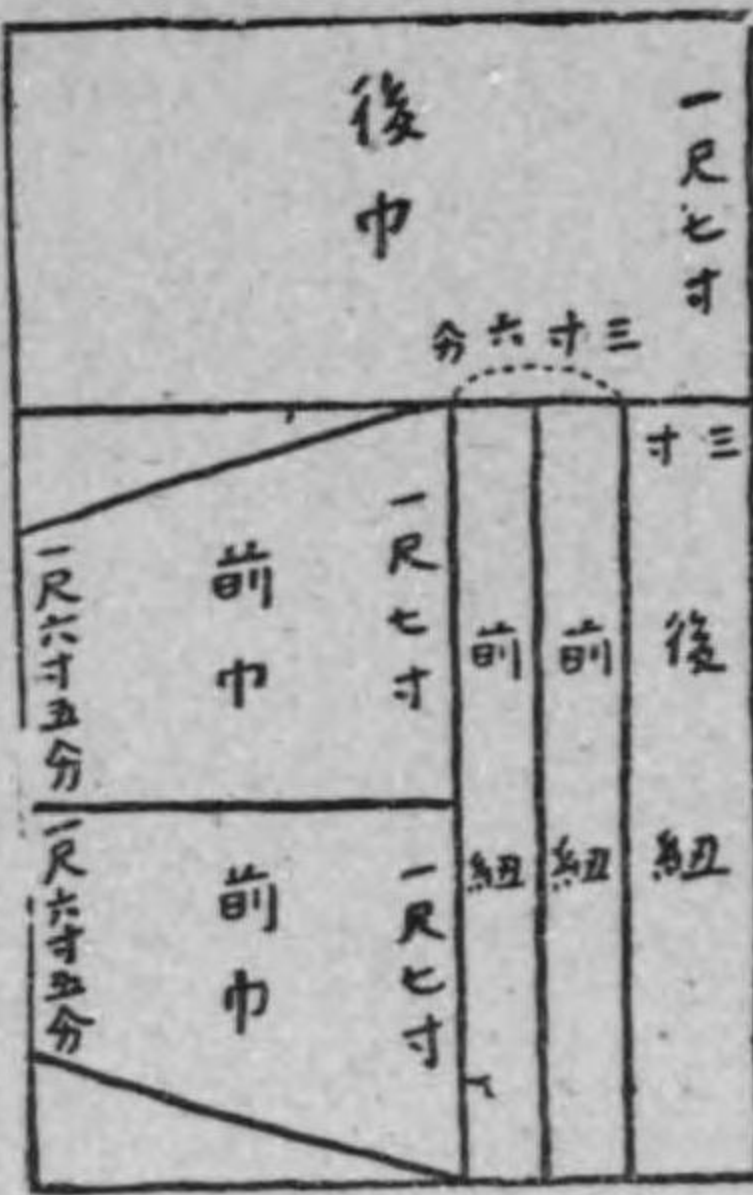
男子用と女子用とあり。男子は之を以て禮服とすれど、女子は未だ禮服として定められず、唯學校に於て制服と定められたるあり、されど實際は男女共に之を用ひ、以て一の禮となせり。男子の袴は上下の下ののみ獨立したるものなり、徳川時代には上下を禮服とし、貴賤上下の別なく一般に之を用ひ、武士の袴は袴高として馬に乗るを以て袴を高くし、町人の袴は平袴として、袴を下げたるものを用ひたり。

地仙臺平、村上平、鹽瀬、琥珀などあり。色は海老茶、紫、紅など最も流行す。▲仕立方は、裁縫中の最も至難なる一にして餘程注意と熟練を要す。先づ仕立方を讀む以前に、袴の圖に就きて部分の名稱を承知し置くべし。さて裁ち方は、袴の種類及び大小に依りて色々異なれども、練習用及便せん爲め、最初に最も簡單なる、五六歳の用ふる小裁袴無袴の裁ち方を示す。之には幅二尺、長さ五尺二寸の布帛あれば充分

(一) 袴女



袴無袴裁小



にて、即ち後長一尺七寸、前長一尺六寸五分、分(内)切上五分、後紐、三尺五寸、同幅一、寸八分、前紐六尺、同幅一寸八分あり。仕立上りの寸法は、紐下一尺四寸、相引一尺、

一丈三寸、一丈三寸、五寸六分の布を以て行燈袴を裁つには、第二圖に依る。其仕立上りの寸法は、後三寸、後紐一寸五分、後紐一寸五分、相引一尺六寸五分、後紐一寸五分、前紐

一、一寸五分のカシメル布を以てせば、第一圖の如く、總長より二尺七寸五分を裁ちて後巾全部とし、残にて前巾二枚及び前後の紐二筋を取る。前長二尺七寸の内、切上七分、前紐長一尺一寸五分、同幅三寸五分、後紐長一尺四寸、同幅四分とす。(二)次に二尺幅、幅四寸とす。(三)次に二尺幅、幅四寸とす。(四)次に二尺幅、幅四寸とす。(五)次に二尺幅、幅四寸とす。(六)次に二尺幅、幅四寸とす。(七)次に二尺幅、幅四寸とす。(八)次に二尺幅、幅四寸とす。(九)次に二尺幅、幅四寸とす。(十)次に二尺幅、幅四寸とす。(十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(二十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(三十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(四十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(五十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(六十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(七十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(八十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十一)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十二)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十三)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十四)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十五)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十六)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十七)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十八)次に二尺幅、幅四寸とす。(九十九)次に二尺幅、幅四寸とす。(百)次に二尺幅、幅四寸とす。

じて遊び、受損したる者は、罰として白粉... 又は墨を塗らる。▲羽子板、長方形にして... 手元を細く作り、材料は主に桐の木を用ふ。

如く三輪なるものあり、或は蛇、藤、羅漢の如く... 葉の相分れたるものあり、之れを羅漢といふ。

するものなり、十字形とは大根の花の如く... 四箇の花舞、互に相對し、恰も十字の形。

を爲すといひ、葉、植葉、とは、葉、蒲公英、... 其他菊科植物の如く、葉のみ相連なり、花...

内には雄蕊と雌蕊とを保有するものを两性花... といひ、柳の如く、其の一方のみを有するもの...

ハナガルタ 【花骨牌】 ▲興味深き點... より云へば、骨牌界の王なり、花札とも花合...

Table with 4 columns: Month (一月 to 七月), Flower Name (e.g., 牡丹, 燕花), and Point Value (二十點, 十點, 五點, 一點).

八月薄	一名坊主	雁	素二枚
九月菊	鹿杯	青短冊	素二枚
十月紅葉		青短冊	素二枚
十一月柳	小野道風	赤短冊	素一枚
十二月桐	鳳凰	素一枚	素一枚
枚数合計	計	九枚	十枚
計	百	九十	五十
合計	百	九十	五十
計	百	九十	五十
計	百	九十	五十
計	百	九十	五十
計	百	九十	五十

但し素とあるは、花弁のみを描きたるものを指すなり。▲花合せの競技方法には、中々込み入りたる規約多く、一通り解る迄には、少なくとも三十回以上、實地に臨んで深く研究するを要す。その種類も八十八(略して八八)七短、素倒、輿一兵衛、十五などあり、中には唯一例を擧げて置くべし。先づ四十八枚の札を能く切り、競技者の数によりて分配せよ、その分配の比例を左に示せば

六人 四枚 ○ 二枚
にして、任意の方法により親と定まりたる者、能く切りませし札を、裏返のまゝ、次番より四枚宛配付し、競技者に一回の配付終らば、場に三枚を、表向に並べよ。次に又次番より三枚宛配付し、終りに場に更に三枚を、表向に並べ、残りの札は中央に場に接し、近づいて積み重ね置き、これは三人の場合の例。なれば他は推知されし。札配りはこれにて終りたり。次に親より順次に札を取始めよ。札の取り様は先づ持札を其の場に置き、場札の我が手にある札と同じならば合せ取り、更に伏札を割り、合ひ札あらば同じく我取得とす。若し場札、伏札共に合ひ札なくば我が持札は捨つるものなりと知るべし。かくして順次に進行し、最後のもの打終り、伏札も皆表向にしたる時、各々得たる點數を調べ、勝負を決するものなり、極簡単なやうな要し、死活の別るゝ所なれば、よく深慮して行ふこと肝要なり。

バナナ 【甘蔗】 ▲熱帯産の大草本にして、芭蕉科に屬す。莖は通常の芭蕉に異

ならざれども、花果共に大いに異なり、通常の芭蕉は、數年を経始めて花咲けど、バナナは年々紫色の花を着け、果實を結ぶ。果實は長さ四五寸、幅一寸位にして、黄緑色を帯ぶる漿果なり、觀賞植物として栽培し、或は其の纖維を取りて芭蕉布を織り、或は製紙の原料に供する等、通常の芭蕉と異なる事なく、なほ其の果實は皮を去らば軟脆にして味甜く、芳香に富める肉質ありて、生にても食用に供せらる、又小片となし、油にて揚げて食せらる、或は又火酒及び酢等を醸造す、我が國にては、琉球、小笠原島、臺灣等に産す、琉球には香蕉と呼ぶ。唐紅色の花を開く一種あり。

バナナ 【花見】 ▲花骨牌の條を見よ

バナナ 【花見】 ▲梅、桃、菊など、記憶にあるもの、みにも花の種類に數多けれど、単に花見と云へば櫻、櫻を云へり、櫻とは櫻の事なり。梅、桃などには花見と云はずし、梅見、桃見と呼びなし、いとなく櫻と區別されたり、花を觀賞して楽しむなり。

古くは千余年前奈良朝の頃の歌に「百敷の大宮人は眼あれば櫻かさして今日も華し」と

あるに見ても、その頃既に花見ありたりとせむ。一首の上に表現せられたる上古の花見のみやびにも亦のどかなるさま思はれてゆかし。▲櫻は國の名にそむかず何處に行きても櫻の咲かざるを見ざるなけれど、わけて名所と云はれて人口に膾炙せるは東京に於ては、向島、飛鳥山、小金井、京都にては嵐山に、祇園は夜櫻に名高く、吉野山の千本櫻は海内に冠たり。▲櫻の花はや見頃かると新聞に書き傳へらるれば人の心も浮き立ちて何處も人足繁し、彼方此方の櫻樹の下に花籃毛布を敷きて宴を張れるあり、或は張り圍らるる紅白の櫻幕の風に揺られてはるがへる間より舞へる女の姿の見ゆるなどもおもし。女の子の足のかまびきくして三昧の音の洩るゝは何處にや、遊藝の師匠の弟子共數多連れての復習がてらの花見なるべし、千鳥足にて歩むもよけれ、假面を被り異装をなしてあらゆる雑技をなせし人は今は見受けず、其筋より堅く禁ぜられし爲なり、淋しきことかな。▲宮中におかれられても例年花爛漫たるの候を撰び清離宮に於て聖上陛下親しく臨ませられ群臣に宴を賜はる。之を觀櫻

會と云ふ、古くは平安朝の頃、花の宴といひて朝廷の儀式としてありし由記録に見えたり。▲諸所の繪畫展覽會の開催さるるも亦此時季にして岡田川の端、競漕も都人士の心を惹く一つとして數ふべし。

バナシカ 【嘶家】 ▲諸説の條を見よ

バナシカ 【香蕉】 ▲種類 甚だ多く、其數實に二百以上に達すとす。高尾尾科に屬する宿根草にて原野の濕潤なる所に生じ、又は庭園に植えて、地下に多年生の根を張り、之れより剣狀の並行脈の葉を生ず。夏、莖を地上に抽きて、花を著す。莖は丈一尺位より、高さは三尺に餘り、花の色は紫、白、赤、淺黄、紋り等様々あり、花辨の數も六片より、多きは十數片に至るものありて、大なるは花經一尺餘に達す、之れを培養するには性湿地を好み、故に、春四月頃より秋季に至るまでは、天然の溜水中に植え置き冬季は水を去るべし、されど溜水地の得難き、庭園内等にては、株の周圍を少し低くして、水をして全く乾く事なからしめば足れり、肥料は主として人糞又は油粕を用ふ、もし早く花を咲かしめんとな

らば、先づ寒肥をなし、次に芽の出でたる時、其の芽先に肥料を施すべし、最も餘り出来過ぎて、花の反つて少なき事あれば注意すべきなり、又根の疲れか養はんとせば、秋季に肥料を施すを良しとす、其他、注意して常に雜草を除くは勿論、三四年毎に、秋の彼岸の頃に植替へをなし、餘り古き根は取去るを要す。繁殖法には、春種を蒔き置かば、三四年にして開花を見るに至れども、往々種の變りて劣る事あれば、分株の安全なるに如かず、庭園縁に水邊などに植えて花を賞し、若しくは生花として愛玩せらる、極めて雅致あり、東京附近に於ける名所は府下堀切及び其の近傍なる四ツ木の吉野園等とす、此の花は歐米諸國にても非常に愛賞し、近頃輸出せらるるもの頗る多しといふ、かきつばた、あやめ、いちじく等も此種類なり。

バナビ 【煙火】 ▲煙火は、夜と畫とによりて大いにこれを異にし、夜は主として、火色を賞し、晝は主として打上げを行ひ、これを賞して、空中に翻々たるしむるにあり。左に夜打煙火につき、調合すべき火藥の名稱

其性甚だ強く、花は八重にして栗殻の如し、さんせういばらと同種類なり、白黄、薔薇、芳香を有する八重の淡白花を著くるものに、盆栽として室内に置く時は、其葉終歲常緑を呈す、ホルボン薔薇、ホルボン島より出でたるものにて、性甚だ強く、久しく繁茂す、マカルトニー薔薇、マカルトニーといふ人の、支那より歐洲へ移植したるものにて、其の葉厚く、光澤あり、香の如き香氣を放ち、麝香薔薇、波斯國邊の山野に自生せしを、移植せしものにて、幹は小なれども性甚だ強く、新芽は六尺乃至一丈二三尺に達す、よく寒氣に堪へ、花季や、遅れども花甚だ多し、其他なほ四季咲には、支那薔薇、茶薔薇、ベンガル、グローク、デザントネ等の數種あれど、類はしければ略す、現今薔薇の栽培法は、大いに進歩して錯雜なるも、要するに、繁殖、虫害、培養の三法に大別する事を得べし、繁殖法を細別して六法とす、挿枝法、伏枝法、分植法、接木法、播種法及び鐵精法これなり、挿木法は、秋又は初冬の頃、其の年の新枝を凡そ五寸許りに截り、三分の二を地中に埋め、三分の

一を地上に露して、土を踏み固め置く時は、翌春新芽を發して成長するものなり、之の法を用ふべき種類は、刺なきものを、最も適當とし、一季咲のものに用ふる事頗る難し、伏枝法は夏の末頃に、新枝を矯めて地に到らしめ、其の一部に土砂を敷ひ、根を生ぜしめて後之れを切斷し、他に移植するものにて、若し矯むる處の新枝に傷口を附けて土を敷ふ時は、早く出づ根せしむるを得、之の法は、一季咲のもの、其他、挿枝法に過せざる種類に行ふを宜しとす、分植法は、毎春栽培の障害となるべきすわえを、根を附して地下より、刈取り、分植するものにて、主として、砧木を作るに用ふ、一季咲の種類には、すわえ多きものなり、接木法は、初夏の頃、開花の後に至り、能く根附たる砧木と十分に熟したる新芽とを用ひて、或は冬季に至りて截枝の廢棄すべきものと、根を用ひて、劈接、挿接、皮接等種種の方法にて接木するものにて、良種を繁殖せしむるには、殊に必用なり、歐洲にては之の法を用ひて、一株の砧木に數種の新芽、或は接木して、其の珍奇を觀賞するもの多し、播種法は、

秋の末に至りて、熟果より種子を取り之れを、樽などにて打ち、更に水に浸して發芽を催さしめ、又これを數日間陰乾として、肥沃なる苗地に播くものにて、種子を取らば、直ちに播種するを要す、然らずば發芽遅く、甚だしきは、二三年を経る事あり、播種法は、異種の花をして、人々に受精作用を行はしむるものにて、新奇なる雜種を作るに、必要なる繁殖法なりとす、蓋し昔時は、植物に雜種のあるべからざるを信じたりき、一七三一年、瑞典の植物學者リンネ氏の雜種ある説を公にせしより、この法先づエラニアマ、フオクシャ等の植物に用ひられて効果を奏せしかば、次で薔薇にも用ひらるゝに至れるなり、現にホルボン種の如きは、ホルボン島の宮苑中に數種の薔薇相列して、垣をなしたるもの、雜種なりといふ、之の植物の病害を防ぐ事、及び害虫を除く事の二者に細分す、病害を除くには、薔薇の葉上に黄色を呈せるラスト、灰色を呈せるエルチユー、及び灰色にして褐色の斑點を有するモルト等の菌類ある時は、非常なる害を爲すにより、或は其の葉を摘取り、或は

砧木花水を塗りて、此等の菌類を絶滅するなり、又薔薇の體若しくは葉に、骨蟲、蠅蟲等の昆蟲ある時は、石鹼水若しくは煙草の液汁等を用ひて、之れを驅除すべし、又培養法に附ては土地に關する事と、移植に關する事との二に大別す、土地に關する事は、薔薇を栽培するに、成るべく、温暖にして、肥沃なる眞土を選び、眞土三分、堆肥一分の比例にて耕し、冬もなほ汚水又は人糞等を二三回施し、春夏の候は、牛馬糞、人糞、鳥糞等の水肥を數回施すべし、又湿润の地或は煤烟の犯す地、風の激しき地等は、最も害あれば、之れを避けざるべからざる事なり、移植に關しては、薔薇は同一の場所に三四年ある時は、土地瘦せて生育衰ふるが故、時々肥地に移植する必要あり、之れを移植せんに、秋末、或は初春を期とし、又種を刀斷するを要す、此の他冬季は盆栽として温室に入れ、春時は出して花壇に陳列するなど、時々注意を要する事等なり、薔薇は之れを庭園に栽培し、或は盆栽となし、或は壇壇に作り、或はこれを種々の裝飾品となして愛玩せらるゝのみならず尙其他に

多く効用を有す、其の花を蒸溜して香水を製し、薔薇水と稱して之れを頭髮に又は衣服等に澆ぎ、或は之れを藥用に供し、又花冠より揮發油を取り、日本藥局方に用ひて薔薇油と稱す、其の果實の半ば熟せるものを薔實と稱へ、松魚に酔ひたる時などの魚毒を消すに甚だ妙にて、又藥用にも供せらる、或は玫瑰の根皮は、樟色に染むるに用ひらるゝ等、一々茲に述べ難し、▲附説、西洋人は薔薇の種々の意味を寓せしむ、例へば、紅色と白色との薔薇の花束は、温き心の意なりとし、満開の薔薇の一輪を、二つの香の上に置く時は、秘密の意なり、草束に薔薇を一輪添ふる時は、友より望む者を受くるを得る意なりとし、薔薇の花の香は處女の心の意なりとする等これなり、又西洋の傳説に隨へば、薔薇花は美を意味し、美の神に仕ふるものなれども、其の容色却つて美の神をも凌ぐに至りしなりといふ、又薔薇はもと白色のもののみなりしが、キューピットの神(愛の神なり)天國にて他の神々と遊び戯る際、誤りて薔薇の蕾に神酒を澆きしかば、それより後ち紅色のものあるに至れるなりなど

ハラノイタミ 【腹痛】 ▲フクツの條を見よ。

ハラチアス ▲腸室扶助と殆んど相類似せる急性熱病にして、九種傳染病の一なり、ハラチアス菌に因りて起るものにして、主に腸及び胃を冒すものなり、菌の形は矢張腸室扶助菌に似たるも性質少しく異なり、されど十數年前までは該病を全然腸室扶助と混同し、そのやゝ輕症のものなりと思惟したり、▲原因は主として不潔なる飲料水及び食物より來るものなり、大抵徐々に發熱し來るものなれども、時には俄かに惡寒、戰慄を以て起生することあり、熱はあまり上下の差なく、普通朝夕の差一度位にして、頭痛及び全身倦怠、食慾不振、煩渴、口内乾燥等の徴候を呈す、又舌苔、脈搏の緩徐、脾臓の膨大、盲腸部の壓痛あり、期間は大抵三週乃至四週間なり、ハラチアスは比較的恐るべきものにあらずと雖も、重症なるものは、腹室扶助と同じく激烈にして、往々腸出血、腸膜炎を起し、又は危険なる副症を惹起

することあり。▲療法としては、患者を入院せしむるを最上の策となす。薬物には未だ特效あるもの發見せられず。血清療法は多少の効力あるが如きも、未だ一般に確證せられず故に看護と食物に大なる注意を拂ひ、靜かに臥床せしめ、頭痛あるときは、氷嚢を用ひ、固形物は全然之を食せしめず、極めて消化し易き液体營養物を與ふべし。例へば牛乳、粥汁、葛湯、スープ、肉汁等を用ゆるを良しとす。下熱後と雖も一週間乃至二週間は成るべく固形物を與ふべからず。又解熱後二週間経過せずば床を離れしむべからず。該病は上述の如く傳染病なる事を以て、患者を生じたときは直に健康者と隔離せしめ、その排泄物、殊に糞尿及び喀痰の始末を怠るにすべからず。又此等にて汚れたるものは悉く嚴重なる消毒をなさざるべからず、又患者の使用せる器具は一切嚴重に消毒すべし。即ち患者を看護すると同時に他に患者を出さざる豫防を行はざるべからず。本病は内務省の規定により届出を要す。

ハラオビ

【腹帯】

▲岩田帯と稱するも

のにして婦人妊娠中に、腹の甚だしく弛む事を防ぎ、胎兒の變化を豫防し、又は産婦の運動を容易にする爲め等に用ふるものなり。岩田帯は結肌帯の義にして、昔は七月位位にて締めしことあれど今は専ら五ヶ月目の成の日を選びてこれを着し初むるを例とす。これ即ち着帯式なり、成の日を選びたるは、大の安産にして且つ生兒のよく發育するにあやからんが爲めならん。帯は正式に云へば生絹長八尺を、四つに疊みて良人より渡し、妊婦はこれを右の袖より受取りて結ぶなりと雖も、普通には紅白の木綿を用ひ、三重ばかり縫はして、端を挿みおくなり、着帯視ひの當日には身分に應じ、夫々質選を張るこゝとあり。▲又妊婦ならずとも一般に用ゆる腹帯あり。腹帯といふ。看病上、殊に婦人に用ゆる場合多しとす。一は腹部を温かにし、一は懸垂せる腹部を支ふるにあり。材料としては普通のフランネルにて充分なれど、産後於ける腹壁の弛緩、懸垂腹、及び腹内臓器の降下には、専門家の製したる、中に護謨の如き弾力性のものを織込みたる腹帯を用ひざるべからず。一般に腹帯は腰から

す、緩からず、身體の運動に妨害とならざるものを良しとす。

ハラカケ

【腹掛】

▲一種の被服なり。胸より腹にかけて纏ふ。職人、嫁人などは半纏と合せ用ひて之を職衣とし、また小兒に腹部の冷を防ぐ爲めに之を着せしむ。普通用ひらるる小兒用のものは、眞四角の布を二枚合せ、左右の隅に紐を附け、上部に別に小さき四角の布を當て、之にも二本の紐を附くる。上部の紐は頭の後に結び、左右の紐は後に纏して結ぶなり、また夜間寒冷ならしむる爲めに用ふる寝冷知らずといふが、これは仕立稍々複雑なり。今、並幅三尺一寸の布を以て三四歳兒のものを裁つには、先づ其布を一尺六寸と一尺五寸の二つに切り、一尺六寸の方を縦二つに折りて裁つなり。職人の腹掛は大抵、紺布にて作り、前に井と稱する嚢袋を防ぎ、背に藤を十文字に組む。總て腹掛、腹巻などは腹部の冷を防ぎ、衛生上有利益のものなれば、小兒などには是非用ひしむるが善し。

ハラマキ

【腹巻】

▲腹帯ともいふ。腹に巻き附けて、冷を防ぐに用ふるものなり。

多くフランネル、メンフランネル、もんば等にて作り、紐、釦、またははばきなどにて止む。大抵二重又は筒袋にして、中に金銭など入れ得るやうに作り、また単に女帯の如くぐる／＼と巻くに過ぎざるものもあり。近時、夏季など洋服のチョッキを略して、ツボンの上に締むる腹帯も出來たり、之は多く羅紗又は琥珀織にて作る。

ハラ

【燻風】

▲豚の腹の肉を鹽漬と爲し、次に燻煙したるものなり。ハラは其の切方に依り之を大別して、シヨウカットハラ、及びロングカットハラ、の二種とす。シヨウトカットハラは一名アメリカンカットハラ、と云ひ、比較的肥満せる肉より造らるるものにして、其形圓く短かきものなり。又ロングカットハラは、脂肪少なく赤肉多き豚腹より造らるるものにして、全體を長く切り整へたるものなり、本邦に於て製せらるるものは、普通此ロングカットハラ、の形状に切り方を行ふものなり。製方等にはクニクニの條を見よシヨールダハの肩肉より製造したるものにして、成るべく大形に肩肉を切り取るものなり。又肩肉の上部を切り去り、

下部のみを以てハラの如く製したるものを、ビクニツクと云ふ。(製法は燻肉の條を見よ)ベーコン燻肉の半身より前後の肢を切り去り、残りの肉の上半分の一に於て縦に刀を入り、約三分の二なる下部の肉を取り、注意して肋骨を剥ぎ去り(或は肋骨を取らざることあり)、長方形に整理したる肉片なり。(製法は燻肉の條を見よ、その他ビクニツクシヨールダハの條を参照せよ)

パン

【麵包】

▲食糧包と菓子麵包の二種あり。▲穀包には小麦、裸麥、大麦、燕麥、玉蜀黍、米粉、豆類粉などを用ひ、普通は小麦粉を使用し、先づ小麦粉五斤に少し鹽を混ぜ、湯を注ぎて軟かに捏ね、酵母三匙を加へ(酵母の條を見よ)よく捏ねて毛布類に包み一夜を經て泡立ちたるを待ち、更に小麦粉を入れて餅状に捏ね固め、塊に切り、焼籠器に入れ、籠に入れて焼くなり、菓子麵包、前記に砂糖や、小豆餡など加へて製す、種類限りなし。▲固穀包、小麦粉四百目、砂糖二百目、水九十目、酒石酸小匙に半分、重曹小匙に三杯をよく煉り上げ、焼き上げて焙籠に乾かす。▲カステラ、砂糖百

目、小麦粉百目、雞蛋百目、重曹一摘みに水少し入れて捏ね合せ焼籠にて焼く。▲豆粉麵包、砂糖百五十目、引割豆五合、小麦粉百三十目、炒種一合、重曹小匙に四杯を水適宜に入れて捏ね合せ型に打抜いて焼く。▲黒穀包として獨逸にて軍用に使用しつゝあるは、燕麥にて製造す。▲小輕食用パン、近頃世に流布せる家庭食用パンの製法は、小麦粉八合五勺を搗鉢に入れ、茶碗一杯の鹽を加へて水にて捏ね、別に一合五勺の麥粉にパン種子五勺種入れて混ぜ、前の一所に捏ね、十二三に切り蒸籠に並べて蒸すなり。

ハンペン

【半平】

▲半平、蒲鉾の條を見よ。

ハンダエーフシ

【半太夫節】

▲語物の條を見よ。

ハンノキ

【赤揚】

▲山野に自生するものと溪谷山腹などに自生するものあり同種類にして、樺木科に屬す、前者は一名りのきともいふ、後者はやまはんのきといふ、何れも成育、速かにして樹皮はあらく縦に裂目を生じ、葉は卵形にして尖り、邊緣は鋸齒形を爲す、花は二月頃、雌雄花共小形なるを爲す。

開く、而し雄花は稍々長し、果實は松の徳果に似たり、材は高さ五十尺餘もある巨木なるが故に質軟かなれども建築及び諸器具の料となし、殊に薪とせば火力甚だ強く、其炭は火薬を製するに足り果實及び樹皮は共に染料に供せらる。

ハンケチ 【手巾】 ▲ハンケチは英語のハンカチーフを訛りたるものなり。多く手拭き、汗拭き等に用ゐられ、大なるものは風呂敷に代用せらる。普通は方一尺四五寸より二尺程の大きにて、地質は多く木綿、麻、絹等なり。▲木綿手巾は極く細き線にて織り、縁は稍々太き線を用ゐ、通常白無地なれども、時に染模様、縞模様あるものもあり。麻手巾は大方舶来品にして、リンネルのもの最も多く行はれ、價は木綿手巾の約十倍なれども、洗濯の利便あり、保存に適す。絹手巾は京都、桐生の紋織、秋田の織、福井の羽二重等種類甚だ多く、内地の供給は勿論、露國、米國、支那等に輸出さるもの年々多し。歐米の婦人界には、それ等の一の裝飾品に用ひ、形の如きも必ずしも方形に限らず、花形などもあり、刺繍を施し

て様々の意匠を凝らし、價格も一ダース數十圓に達するものあり。
ハンエリ 【半襟】 ▲編織、長編織などの襟の上に掛ける細長き布巾なり。男子半襟は、黒八丈、毛織子など地質の種類多からざれど、婦人の半襟は、其の嗜好と流行の變遷とにより種類甚だ多く、冬は縮緬、羽二重、紋羽二重、縞など、夏は縮緬、紋縮緬、縞縮緬、縞など多く用ひらる。模様も、染出したるあり、刺繍をしたるあり、また染出しに更に細なあしらひたるものあり。地色は、若向としては青紫、紫根、藍色、薄藤色など流行し、其地には梅風、櫻風、葡萄風、鶯色、納戸風、鏡色、微攪色、利休茶など流行す。之等は素より絶えず流行の變遷あり、一概に云ふべからざるは勿論なり、半襟を選ぶには、衣服の色合、柄柄などの配合に注意を要す。▲半襟の外に、衣著、捲巻、羽織、半纏などに掛ける掛襟あり、著物の襟に共切にて掛くる共襟あり、三者合せて単に襟と稱す。稱は總て、汗、油、白粉などにて汚れ易きものなれば、時々洗濯する必要あり。大抵のものは、揮發油に

て靜かに洗はゞ、容易に污垢を除くことを得べし。
ハンテン 【半纏】 ▲半纏は、羽織の代りに着るものにて、中流以下の男女間に廣く用ひらる。尤も、職人、稼人などの用ふる。印半纏と稱するものは、腹掛股引の上の如く襟を折らず、それに黒織子又は黒八丈などの襟を掛く、また紐なきを普通とす。半纏の一種にちんべいと稱するがあり、之は袖のなきものにて、田舎の老人などよく之を用ひ、袖無しなど、致す。印半纏は、襟に屋號、會社名などを書き、背の中央に家の印を染抜き、腰の邊り一杯に種々工夫を凝らし、消防夫の半纏は製を異にし、革にて作れるか、又は木綿を幾枚も重ねて密に縫ひたり、之も勇肌として、腹掛股引の上に直に着す。▲裁ち方 半纏は普通二丈あれば充分なり。先づ袖丈を取り、次で襟を取り、残り二つに切りて身頃とすればよし、襟は、半纏にして襟にて綴るやうに取る。其長さは、半纏の長さに三寸五分を加へたるものなり。

ハンショウ 【斑蟊】

▲みちなしへともいふ。普通は路傍に歩行者しくは飛翔して、人を案内するが如きを以て、みちなしへの名あり。此蟲は鞘翅目に屬する昆蟲にして、體長六七分、體は頗る美麗にして金線と紫色と相混じり、光線の方向により、多少其彩色を異にし、觸角は糸状にして長く、眼は大にして突出し、大顎強くして弓形に彎曲し、三個の鋸齒あり、性甚だ強暴にして、他蟲類を食す、幼蟲はしちほこむと稱し、大なる頭を有し、地下に垂直の圓孔を造りて其内に在り、此類に屬する者にて我が國に産するものは、此外ははんめう、おはらはんめう、(又かはらすめ)ひめはんめう、にははんめら、(又ははすめ)等あり、皆害蟲を捕食するを以て農家に有益なる昆蟲なり。▲はんめう、は歐洲に産する昆蟲にして、亦鞘翅目に屬すれども斑蟊とは全く科を異にし、葉鞘科に屬す、體長くして緑色なり、発胞劑として醫藥に供す、此の類に屬するものにて本邦に産するは、まめはんめう、及び地膽あり、前者は黒色にして頭部は赤褐色を呈す、之を乾燥したるものは煎

たりし、劇薬となる、後者は黒藍色にして、兩者共發胞劑に用ひらる。
ハウタ 【端唄】 ▲小唄めりやすともいふ、段物に對する名稱にして、短文句を、絲竹に合せて、座唄に唄ふ俗語をいふ、要するに、其の時代時代の流行歌にして、古くは能馬樂について、今も歌あり、平安の朝より鎌倉時代に至る迄、最も隆盛を極めたりしが、室町、將軍の頃に至り、今も廢れて小唄、専ら行はれ、天正文祿の頃、和泉國堺、顯本寺の僧隆達といふ者、美音妙調、自ら作歌して歌ふ、時人もてはやし、隆達節といふ、其の後、慶長元和の頃、弄齋、一に龍濟といへる僧、弄齋節を詠ひ始めしより、諸人競つてこれが弟子となり、其の盛大、遙かに隆達に超えたり、ついで出でたる種々の流行節も、みなこの弄齋節に基因せるものといひ得べく、總じて小論の祖とも見らるべきものなり、幾ばくもなくしてこの節變じて、投節となり、京都鳥原に於いて盛んに行はれ、同時に大阪新町に、節、となり、江戸芳原に、編節、出で當り、三都の名物と稱へき。さてこの外、相前後

して起りたるもの頗る多し、めりやす、安永の頃、萩江露女の謠ひ出でし一派なれど、後には小論の稱の如くなれり。めりやすとは、手取にて、手の大小よく合ふの意なりといひ、又めりかりにて、音聲の上下する意なりともいへり、柴垣節、明歴の頃始まる、野原なをどり、頭を加味したるものなり、岡崎節、寛文以來流行せり、土手節、また同時代なり、慶長頃の、さざんざ、寛永頃の、ほろり、萬治頃の、加賀節、貞享頃の、同念節、元禄頃の、古今節等いづれも有名なり、又歌謡節といふは、いと近き世のものにて、安政二年より起れりといふ、其他上方唄、小室節、祝儀もの、二より新内、大津繪、とつちりと、甚句、都々一など、今日の端唄として残れるもの、一々かぞへきれす。(俗曲の條參照)
ハクサンチゲリ ▲多年生にして高山植物の一種なり、葉は掌状に深く三裂して、殆んど複葉の如し、短き刺毛密生し、六月頃、莖の上部に、つちりん草に似たる白色の花を開く、培養するには、腐葉土に軽く植うべし鉢は稍々深きものを選ぶ可と

す、底には赤土のドロを厚く敷き、日光の強きを避け午前十一時前後は本陰に置く可とす、性移しを厭ふものなれば、移植後雨三年間は開花せざるものなり肥料は澆きを避くべし。

ハマアサ 【草】 ▲鷹の條を見よ

ハマナス 【玫瑰】 ▲草花の條を見よ

ハマグリ 【蛤】 ▲此貝は淡水の注入する浅海の深さ五六尺以下の沙泥の處に棲息するものにして、我が國にては東海及び内地に多く産す、伊勢の桑名は此の貝に依つて名高し、辨認類に属する貝にして二枚の殻介ありて、其の背縁の蝶番には三個の主齒と一個の側齒とを有し、靱帯ありて、兩殻を確と結つく、殻の内面には、圓き痕二個あり、之を肉柱殻といふ、介殼の外表面は、暗褐色をなせる太き放射狀の帶紋あり、内面は白色にして光澤あり、大なるは長さ四五寸より高さ二寸内外に至る、蛤のむきみは其の體にして、肉柱は二個ありて、生活する時は兩殻につき、靱帯と相應じて、介殼を開閉す、外套膜は二枚ありて體を包む、其腹縁の大半は相離れたれど背縁にて相合し、且つ後端は延びて、水の出入管をなす、外套膜の下には、辨狀の鰓左右に二枚づつありて呼吸をなす、足は肉質にして其形舌の如し、沙泥を掘るに適せり、肉は甚だ美にして寒疾共に適す、介殼は堅硬にして、蝶番に工合宜しければ青紫等を容るによし、蛤仔、は蛤と同類なり、介殼のみは稍々三角形を爲し、薄くして小さく且つ膨脹せり、其外面は輪層あり斑紋あり、蛤と同様淺海に棲む、其他沖蛤と云ふ一種あり、其殼厚質にして粗く、種々の斑紋あり、何れも美味なれば、吸物、天麩羅、酢物等の材料として用ゐらる。

ハマヤキ 【濱燒】 ▲炙物の條を見よ

ハマキムシ 【葉巻蟲】 ▲毒蟲の條を見よ

ハマユミ 【破魔弓】 ▲江戸時代、子供が新年に弄びしものなり。はまは薬又は繩を丸めて作りたる的を子供の射たるなり。その矢を破魔矢といふ。この遊びの基因は詳かならず。後には廢れて、飾り附けたる玩具と變じ、細長木板に弓矢を飾り附け、其の下に押繪の職人形などを添へ、肩には假な

り、往いて初花を奪ふ、初花節を持して毒刃に整れ、その靈樞現の瀧水に浴して生前の祈願を完了し、験を得て夫の病を治す、勝五郎因りて義人徳右衛門、忠僕筆助の義心により、遂に上野を殺して、素懷を果すと云ふ筋なり。

ハコベラ 【葉巻】 ▲七草の條を見よ

ハエ 【蠅】 ▲昆蟲類の二翅類に屬す、三對乃至六對の脚あり、悉く同形なり、其の末端には吸盤を具へ、天井裏、玻璃面等に止まることを得、又粘氣あるもの、上を歩むには別に鈎爪あり、此等を交互に使用するなり、又蠅の口は管狀をなして突出し、其中に四本の針を藏す、之は蚊の口器と同しく、大顎、小顎の變形なり、蠅の幼蟲は腐敗物の上を生ずる蛆にして、始めは白色なるも、生長に従ひ皮膚固まりて暗褐色を呈す、蛹之れなり、この蛹は二週間すれば體の前半より裂けて皮膚を脱ぎ、初めて成蟲の形となる、この状態を名づけて昆蟲の完全變態と云ふ。▲種類 蒼蠅 色は蒼黒くして、人家の周圍に集まる、青蠅とは金色したるにて好んで糞上に集合す、馬蠅

縁にて相合し、且つ後端は延びて、水の出入管をなす、外套膜の下には、辨狀の鰓左右に二枚づつありて呼吸をなす、足は肉質にして其形舌の如し、沙泥を掘るに適せり、肉は甚だ美にして寒疾共に適す、介殼は堅硬にして、蝶番に工合宜しければ青紫等を容るによし、蛤仔、は蛤と同類なり、介殼のみは稍々三角形を爲し、薄くして小さく且つ膨脹せり、其外面は輪層あり斑紋あり、蛤と同様淺海に棲む、其他沖蛤と云ふ一種あり、其殼厚質にして粗く、種々の斑紋あり、何れも美味なれば、吸物、天麩羅、酢物等の材料として用ゐらる。

ハアリ 【羽蟻】 ▲蟻の條を見よ

ハエモニカ 【風琴草】 ▲外觀優美にして誰にも容易に吹奏せられ携帯に便利なり。大小種あり。普通長さ四寸、幅一寸、厚さ三分計りの細長く扁平なる木函に、四角なる孔を數多穿ち、中に金屬製の振動板を備ふ。外面は別に包板と稱する金屬板にて包みたり。▲片手の指にて兩端を支へ、孔に口を當て、吹き或は吸へば、振動板に觸れて種々の音を發し、音曲を吹奏することを得。▲音色變りたる時は、まづ包板を取外し、温湯にて振動板を洗ひ、塵を去るべし。

どを取附けて、縁起よきものに作り、男子の初正月に贈る例となれり。

バゲツ 【馬穴】 ▲バゲツは、英語のバケット(Bucket)より來れる語にて、馬穴を書いたてはあて字なり。鐵板に鉛を引けるものを以て圓筒形に依り、鉾の如き手を附けたる一種の手桶なり。専ら水を運ぶに用ふ。されど、同々之に水を貯へ置くものなり、之は鉛の有毒なる化合物水に溶くるが故に、危険少なからず。

ハブ 【假是術】 ▲毒蛇の條を見よ

ハコネレーゲンイザリノアタウチ 【箱根靈驗靈仙】 ▲全十二段、眞柴久吉の臣、飯沼勝五郎の仇討を敘したる淨瑠璃なり、司馬芝夏作、享和元年八月演す、初め勝五郎の兄三平といふもの、佐藤剛助に殺され、父亦其讐を蒙りて切腹す、後剛助は北條氏政の援を得て瀧口上野と改名し、勝五郎妻初花に眷戀して、これを奪はんと謀り、勝五郎初花率ゑ去り、竊に復讐を圖る、途上病を得て聲となり、窮乏して、乞食の群に入り、流浪して相模に到り、病を箱根權現に請る、警敵上野これを知

ハキ 【萩】 ▲野生の灌木にして、藪科に屬す、幹は叢生して、高さ四五尺に至るものあり、葉は羽狀をなし、秋花を開く、紅紫色、淡紫色、白色等なり、果實は莢の中に生じ、莢は節をなして其中に種子一箇を收む、種類極めて多し。▲種類 宮城野萩、萩、みだれ萩とも云ふ、葉は本末共に尖りて三小葉品字形に排列す、花房は垂れて、白紫などあり、盛り久しくして美觀を呈す。▲山萩 幹は直立す、花は前者に劣る。▲木萩 淡紫色の花を著け、山野に自生す。▲効用 古來萩は七草の一に數へられ、花委麗さしく歌枕として、庭見草、玉水草、野字草、秋地草、幼兒草、月見草、玉萩、絲萩など又鹿の妻とも云へり、葉は煎じて茶の代用とし、又牛馬の飼料に用ふ、幹は筆軸、抽垣、簾などに用ひ、雅致愛す可し。

ハジ 【楳】 ▲漆葉藨本にして、漆樹科に屬す、はざとも云ふ、葉は複葉にして、

ハジ 【楳】 ▲漆葉藨本にして、漆樹科に屬す、はざとも云ふ、葉は複葉にして、

夏穂状の小花を開く、雌雄樹に異なるものあり、普通なれど、一樹中雨花を具ふるものあり、花は帯黄緑色あり、暖地に適し、九州、九州地方に多し、はせうるし、又はやまはせと云ふは、山野に自生す、吉野地方にては弓木に用ふと云ふ。▲効用 材質は漆の如く、黄色を呈し、古來黄檀染は之にて染む、其實よりははせ織を採る、晩秋紅葉を爲し、美観を飾る。

ハシカ【麻疹】 ▲小児の流行病にして、大抵この病に罹る小兒なし。然れども一度犯されれば大抵再發の憂なし。皮膚に一種の發疹物を生ずる病にして、甚だしき傳染性を有す。▲特種の麻疹毒の存在は明なる事實なるも、其の病菌と傳染の工合とは確ならず。されど其の病菌の口及び目より吸入せらるるは、最初に呼吸道の犯さるゝを見ても、信じて得べきが如し。其の毒は頗る猛烈にして、患者の汗、涙、唾、呼吸、痰、蒸發氣、空氣、器具又は病人に接したる醫者、見舞人等より間接に傳染することあり。▲病状として第一に認むるは口中の斑點にして、此の斑點の生ずるに先だち眼にうるみを生じ、光を眩しがり、咳嗽烈しく出で、食欲減じ、舌には舌苔を生ずるものなり。然して三四日経過せば第二期の發疹期となり、發疹次第に擴がるに至る。最初は耳の邊に生じ、それより顔、口邊、頸、胸、脊と漸次蔓延す。其の發疹は初めは鮮孔なる粟粒が小豆大の斑點なるも、漸次黒色を帯

れども唯材質緻密にして堅硬なるが故に薪炭とせば火力強し。

ふ、愈々全部發疹せしむる熱降下し、蓋明き内ばになり、水鼻汁減じ、食欲増進し、初めて發疹せし耳の邊より次第に發疹の色薄らぎ來り、皮剥け始むるなり、これ即ち第三期の落屑期なり。以上の如く其の期が別すれば潜伏期十一日間、加害兒期三日間、發疹期三日若しくは四日、落屑期十二日間なるを以て、初め傳染せしより全快まで四週間を要するなり。以上は普通の病状を述べしものなれど、近來頗る悪性の麻疹流行するに至りしを以て今其の二三の例を擧げん。(一)外部に多く現はれずして、粘膜にのみ發疹し、鼻口、咽喉、氣管等を甚だしく犯すものなり。腸にも又發疹することありて、爲めに下痢を起し、發熱烈しく、甚だしく衰弱することあり。(二)チフテリアの如く呼吸困難となり、時に窒息するが如き症状を呈することあり。(三)麻疹十分發出せずして、内部を犯し、咳嗽出て、羞明を感じ、急に脈搏弱り、心臓痙攣を起すものあり。麻疹の爲めに初兒の死するは重に此の悪性なる種類に犯さるゝが故なり。▲麻疹は大部分經過良好なるものにして、重き併發病

を生ずること程なれども時には重き眼病、鼻咽喉の炎症、麻疹實扶的利亞等の發することあり。麻疹實扶的利亞は稀なるものなれども、咽喉に實扶的利亞性の症候を起すものにて頗る危険なり。されど最も多く且つ最も注意すべきは麻疹肺炎なり、百日咳を起すことも又少なからず。▲幼兒は三歲位になるまでは可成的該病に罹らぬやう注意せざるべからず。既に麻疹の微候現れたらんに、直に寢床に入れ、室内の温度を六十度以上に暖め、部屋を少しく暗くし、咳嗽出づれば含嗽をなさしむべし。昔は麻疹にかゝる時は湯に入れざりしが、之は甚だしき悪見なり、皮膚の清潔は此の病氣には最も大切なるを以て適當なる温度の湯に入るべし。又は湯に浸したる布を以て身體を拭ひやるべし。又熱高き時は水枕、水袋を用ひ、又解熱劑を與ふるを要す。又氣管支や肺炎になる虞ある時は、濕布を施すべし。麻疹は暖く治せなど云ふものあれど、必ずしも然るにあらず、而し只失聲に解熱劑を飲ませ、熱を下ぐることは又避くべきことなり。非常に高熱の場合を除き、普通の熱ならば其の儘にな

し置く時は、病氣の輕快と共に解熱するものなり。食事は極めて消化よきものを撰み、滋養ある牛乳、玉子の黄味、粥汁の如きものを與へ、藥品、含嗽には硼酸にてもよろしく解熱劑は一應醫師の指定によるべし、兎に角大體に於ては、暖く治すといふ方針を取らべし。故に衣具布團などを苦に粉々に撥除けぬ様になし置く必要あり。

ハシヨウフー【破傷風】 ▲破傷風は、創傷、又は腫瘍等より、破傷菌を以て、太鼓の撥状をなせる陰濕にして、酸素少なき土中に、棲息せる、微菌の侵入して起る病なり。發作後暫時は、少しの障害もなく、創傷を治癒したるにも拘はらず、突然全身に痙攣を發し、疼痛甚しく、下顎關節の運動不能となり、異様の顔貌をなし、身體弓の如くなり、體温甚しく昇りて、苦悶の狀を見るに忍びざるものあり、次第に衰弱して遂に死す。療法としては、先づ創傷の有無を檢し、其の状況によりて、手當をなさるべからず、初めより醫師に一任すべきものなれど、看護人も特に注意し、神經を刺戟する物を除去し、藥劑としては、鹽酸莫爾比涅及び抱水クロラル、臭素劑等を用ふ。▲内庭、床下等の如き、陰濕にして酸素少なき場所にて、負傷したる時、之等の土に觸るゝ時は、破傷菌の侵入する虞あり、微細なる創傷と雖も、常に消毒を怠るべからず。

ハモニカノ【風琴】 ▲實扶的利亞の條を見よ

ハゼ【沙魚】▲形、小さく、鱗細かくして、吻延び出で、眼接近す、背鰭低く、尾鰭は圓形を爲す、體の背部は茶色を帯び、所々に淡黒色の斑紋あり、背腹及び臀の三鰭に灰色にして、胸鰭は黄色なり、長さ四五寸が普通なり、深さ五六尺から一丈位の静かなる港灣内に棲みて、外海に出づることなし、六月頃粘着性の卵を産み、雄魚よく之を護る、くろはぜ、あかはぜ、とらはぜ、むつころう、わらすは河、橋など此の類なり、秋の頃蚯蚓、小蝦類を餌として、河、湖に糸を垂る、俗に彼岸釣と云ふもの之れなり、▲料理法、鹽焼、田樂煮、附などに適す。(料理の部を見よ)

ハセ【蓮】▲宿根草にして睡蓮科に屬す、蜂の巢に似たるよりはちすと稱す、其略なり、幹は白圓形にして數ヶの節に分れ、長さ三四尺、寸に餘り、孔十箇内外を通す、幹は即ち連根にして泥土の中を匍匐ふ、葉は圓形にして長き葉柄には刺を有す、夏時長き花茎を水上に描き出だし、頂に花を著く、其色に淡紅、白、黄色、色々あり、花には單瓣、複瓣とあり、美麗にして清香を放つ、花被は數箇の萼片、許多の花萼より成り、花托は上に伸び、膨れて碗の如し、果實は閉果にして、形、櫛の大きなり、▲種類、花蓮、大白蓮は青白色、單瓣にして大輪なり、紅天上は紅色にして重瓣大輪なり、一天四海、白地紅立校りの大輪なり、▲睡蓮、葉を小面に浮べて花莖を抜き、豊大絶美なる花を開く、芳馥郁、畫間花を開き、夜間は閉花す、盆栽として雅味あり、▲茶碗蓮、白赤の各種あり、名の如く小盆に培養す、花は大輪にして美芳を放つ、▲効用、冬より春にかけて、連根を採掘して食用に供す、砂糖漬とし、又、澱粉に製す、葉は蓮飯とし、果實を生にて食ひ、熱せると澱粉に製す、花托は乾して土瓶等の下敷によし。

ハセ【櫃】▲ハジを見よ
ハスイ【馬騮】▲唐の功臣にして、字は帕美、代宗、德宗に歴仕し、田悅、李懷光を討て大功を立て、北平郡王に封ぜらる、貞元十二年卒す、凌烟閣に圖形し、莊武と諡す。
ハスオリ【馬糞織】▲經に綿或は毛絲を用ひ、緯に馬尾毛を以て平織或は綾織とせる織物なり、其彈力を利用して洋服胸部の眞地に用ふ、もとは舶來品多かりしも、今は東京附近にも産す。
ハスハル▲佛國の有名なる數學者、哲學者なり、十六歳の時圓錐曲線論を著し、デカルトを驚嘆せしむ、三十四歳の時感ずる所ありて宗教界に投じ、尋でポルト、ロヤル退隱し、専ら神學の研究に従事す、地方書館「ハゼスイツト派に對し、ヤンセン派を辨護したるものなり」
ハスツール▲有名なる佛國の化學者に、顯微鏡學の始祖と稱せらる、其他酸酵及酸酵菌、恐水病及其接種療法をも研究す、又嬰兒の微粒子病、マラリヤ熱、チブス、チフテリア其他各種微菌に因る諸病を研究し、斯界に貢獻する所多し。
ハスユ【巴豆油】▲巴豆の種子を壓搾して得たる帶褐色、臭異の脂肪油にて毒藥に屬す、主成分はチグリン酸、クロトン油酸等とす、緩下劑として頑固の便秘に内用し、刺戟塗布藥にも用ふ。

ニの部

ニニシバカマ【三人袴】▲狂言の二人袴を改作したるものにて、福地樓痴居士作の常盤津振事なり、其の筋書は簡單に云へば、住吉左衛門の娘鶴鶴に、高砂尉兵衛の子息右馬助を婿に取らる、結婚の夜の出来事なり、右馬助取急きたる爲、袴を著るを失念し途中にて氣付く、家に歸らんに路を遙し、父子當惑の末一計を案じ、父尉兵衛の袴を前後二つに裂き、兩人これを着て結婚の席に列す、式終りて左衛門、婿の父子に祝儀の舞を所望す、兩人是非なく、互に背合せとなりて、袴の破綻を隠しつゝ、舞ひ、事半にして露はれ、大滑稽を演じて實を告ぐ、住吉も笑ひて、二者の袴を持って來らしめてこれに與へ、再び高砂を舞ふに終る。

ニニサンキヤクキョーリ▲戸外遊戯の、二人組人三脚競走、▲相接する二人の片になりて競走すること、相接する二人の片

ニオイブクロ【匂袋】▲匂袋は香芳ばしき藥を調合して、之を小さき袋に入れ、縮緬、縮紗などの奇麗なる上袋に包み、内、懐、腋下などに下げ置くものなり、古くは誰か袖、花袋、浮世袋、匂玉、香包などといひ、平安朝の頃、衣裳に香を焚き沁むることより起りたるもの様なり、古今集にも「色よりも香こそあれとおもほゆれ、誰か袖ふれし梅も」など、詠める歌あり、最も流行を極めたるは、元和、延寶の頃なるが如し、▲匂袋の現今行はるゝは、ハート形をなせども、昔時の匂袋は皆袖形をなし、紐を付けて二個相連れたり、普通は腋下などに隠し持つものなること前に述べたるが、昔は縮緬、縮紗などが、臥床の蚊帳に掛けたるもありき、▲匂に入る、香料は、普通、龍腦、玉奴、白檀、六分、沈香五分、茴香五分、麝香一分、丁香九分、二奈二分、甘松六分、七香一分、薰陸二分、五分、三奈一分、五分、零陵香三分、五分を混合せるものにて、裏

飼養と稱するは、種別七、五分、白、控二分、五分、茴香七分、五分、麝香二分、五分、丁香五分、甘松五分、木香二分、五分、阿仙藥二分、五分を割合す。其他種々の配法ありて行はる。

ニオイスミレ 【香菓】 ▲西洋草花の條を見よ。

ニワ 【庭】 ▲庭園の條を見よ。

ニワトリ 【鶏】 ▲本來地上の生活に適し、飛翔甚だ拙く亦果を嘗む事巧みならず。雞族にして元來東印度、爪哇地方の野生なるが其後人為の淘汰を受けて自然に變形したるものにして今は其種類も甚だ多し。雄は羽毛美麗にして頭に赤色の肉冠あり、毎朝三時より四時の間に三十分乃至四十分を過る毎に時を告げて鳴くなり、雌は羽毛の美、雄に及ばず時を告げざるも雛を育つ事親切なり、雄雌共に脚強くしてよく走り、地上を掻き食を求め、雞は鳥類中最も産卵数の多きものにて一年に約二百個以上を産む、産卵期は三、四、五の三ヶ月を最も盛んとす夏期は羽毛脱

替の時なれば産卵少し、雌は卵を産分た後之れを孵化せんが爲め、通例十個内外の卵を地、孵化期は普通二十一日とす食物は動物性の兩種なり、孵化法には天然と人工との二種ありて母鶏に卵を抱かしむるものと、孵化器を用ゐるとあり、天然の孵化は鶏の種類に依つて異なるも先づ八九個より十五六個迄を限り、人工孵化は其容器に依つて一定せず母鶏抱卵後凡そ一週間を経過したる際、夜間窺かに卵を取出し燈火に透し視るに、中央に黒點ありて之れを中心として數多の血筋を引けるは孵化する徴候なり、内容の透明なるは無効と知るべし、又二週間以後に於て毎日母鶏の巢を離るる時卵に糞を吹き掛けて水分を與ふべし、二十一日にて孵化したる後は雛に熟卵の細片を與へ漸次水を經るに隨ひ碎米、青菜、肉類等少々、與へ飲水も適宜に給すべし、人工孵化法は頗る熱練を要すべければ省略す、鶏を飼養するは其種類によりて異なるも凡そ雌八羽乃至十四羽に雄一羽の割合にて可なり但しよき種を取らんとせば一雄一雌を可とす、食餌は麥、秕等の穀類を主と

し青菜又は牡蠣の介殼等を與ふ。農家の副産物として最も可なり、孵化の好期は春と秋なれど、成るべく梅雨期の頃若しくは降雪期に入る頃には既に成長し居る様心懸くべし、鶏肉は頗る美味にして盛饌に供すべく、卵は大に滋養に富む、▲鶏の飼養法(病氣を生ぜしめざる注意) 鶏は他の動物と異り生來虛弱なるもの極めて少なく、凡そ死亡數の八九割は飼養管理の當を得ざるよりして不健康となり、次第に衰弱して竟に病鶏となるものなり、▲注意 濕地の土間を埽となすべからず、已むを得ざる場合には周圍に深き溝を掘りて土間を高くし其上に床を張るべし、埽の中には多量の糞を堆積せざる様努めざるべからず、埽には常に精製せる乾きたる切葉を敷き驅蟲散、石灰等を撒布し其上に糞をなましむれば一は健康を補ひ、一は以て埽の中を清潔にし且つ肥料を得るの便あり、尙ほ埽は空氣の流通をよくし暑中は冷しく寒中は暖かなるを要す、病鶏なりと看する場合には直ちに健康のものと同離して互に交通を絶たしむべし、病鶏は日中のみ砂を敷きたる場所に糞

び天候惡しき日は埽の中に入れ、決して風雨に晒れしめざる様注意し又飲水は之を缺くべからず、▲鶏卵貯藏法 種々あれども華羅林を綴漆する法、石灰水中に貯藏する法、水硝子溶液に貯藏する法等成績先づ良好なりとするも一失あるを免れず、ワゼリンは煩勞に堪へず、石灰水は惡臭を帯び食用に不適なり、水硝子は浸水の方法及簡單なれども比較的廉價ならず獨り硫酸の爲め一旦煮沸して冷却したる水硝子に對し硫酸曹達十五乃至二十(水硝子に硫酸曹達凡そ七八十位)の割合にて能く混和し、之を熱湯洗滌等の法により消毒せる桶又は壺に入れ、之に新鮮にして汚物を能く拭ひたる鶏卵を浸積し、穴倉又は冷蔵庫等の如き冷處に貯ふるに在り、而して是に付き注意すべきは下層のものは積重に由り害を受くることあるにより、二三重毎に格子戸様の木製支柱にて、其の加重を避くる装置を施せば最も可なり、又卵は液面に晒はれざる様注意を要す、是等の注意を怠らず貯藏したるものは克く一年以上を保つべし、▲

鶏のハムシ及虱 埽、舎内、運動場、敷薬より砂等に至るまで清潔に注意せざるより生ず、▲ハムシの驅除法、羽毛を逆に撫で二倍の石炭酸を刷毛にて塗り置けば日ならずして除去するを得べし、又石炭酸を銀屑に注ぎ、之を埽の内に敷くか、又は煙草の粉末若くは少許の石油を切葉に吹きかけ、埽の中に敷くも大に効あり、▲虱の驅除法ハムシの場合と同様に可なるも比較的簡單にして奏効あるはインセクトボーター(除蟲散)に多量の硫黃末(藥屋にあり)を混じて砂箱に入ることなり、▲鶏の下痢症、概言すれば食餌の不良、埽の不適當、及天候の不順等より來るものなるを以て、下痢あるものには燕麥末、蕎麥末等は宜しからず決して與ふ可らず、▲療法、病鶏は清潔溫暖なる埽に養ひ一室に二羽以上を入るべからず、輕症のものには蓖麻子油四グラムを與へ、後炭酸石灰〇・三グラム大黃末〇・三グラム番椒〇・一五グラムを混合して與ふべし、然れども重きものには約二分程の水にクロロゲン(藥種屋に在り)五滴を入れ、之を一日分とし、三

回に分ちて與ふれば大抵一日にして下痢を止むる事を得べし、埽には此の四乃至五分の一を適量とす、▲鶏の氣管支炎、初め喉嚨を發し、漸次喘鳴し精神は縮縮となり運動は活潑ならず、病勢進めば益々疲勞して呼吸困難となる、▲療法 夕刻睡眠に就かんとする頃甘菜〇・六グラム吐石石〇・〇一を混和して與ふべし、鶏の虎列刺、若し鳥に多く一種の菌により傳染する激しき急性の疾病なり、腐敗水又は腐敗物を食せしめざる様注意すべし、病鶏は苦悶下痢し次に硬青色の糞を排泄す、羽毛は簡れて一種の臭氣を放つ、大概十二時間乃至三十六時間にて斃る、斯く經過の短きより藥效を奏するの暇なし、故に治療を施すより寧ろ撲殺して傳染の預防を嚴重に行ふに若くはなし、▲鶏の良否鑑識法 鶏の善惡及健康を鑑識することを得ざる時は、意外の損失を來すことあり、故に鶏の鑑識法の大要を摘録すれば、内冠及肉髯の緻密にして軟かく鮮麗なるものな若し若くは老いたるなり、又健康なるものは赤く

の色薄紫となり、漸次變じて黒色となる。皮膚は少しく黒味を帯びたる赤色の斑點を生じ、食欲缺乏し、脚腫脹れて裏を垂れ、悪臭ある下痢を起して死するものなり。

▲治療法なしとせざるも、恐る可き疾病なるを以て、治を施すよりも寧ろ撲殺して傳染を豫防し死體は直ちに燒き捨て、同時に糞舎は嚴重なる消毒を行はざるべからず、而して之が豫防は、病獸の肉を糞に與ふべからざるは勿論、病獸を糞舎近くに寄せざる様注意するに在り、爰に尤も警戒を要するは、若し人にして其の手足等に少しの傷にてもある時は、感染の虞れあり、若し已む無く病獸又は其死體に觸るる場合には直ちに嚴重なる消毒を行ふ事を忘るべからず、此の場合の消毒薬は、石炭酸五に對し水百の割合にて石炭酸水溶液を作り更に酒精を加へたるもの最も効あり。

ニダシ(煮汁) ▲煮出汁の略稱にて通例だしとも云ふ、鹽節の削りたるを煮出して用ひ、又乾したる鰯魚の類を用ゆるものあり、昆布を用ゆるを昆布煮汁と云ふ、又味の

もなどをを用ゆるもよし。▲使用法 先づ鹽節を撰み(鰯魚の部を見よ)一旦微温湯に漬けたる後、把蕪にて汚物を去り、水分を拭ひ取り、鍋にて削る、▲用量 水一升の中、鰯魚四十匁程の割合にて、十分煮立てる鍋の中に入れ、池の浮上を捨て鍋を下し、二分間を煮て清き鰯魚の類にて井、片口の中に濾過す、之を一番煮汁と云ふ、二番煮汁を採るには前に取捨たる滓を鍋に入れ、三四合の水を加へて煎立て、後濾すなり、汁物には鰯魚の心の淡紅色所をよしとす、鹽節の部を見よ) ▲昆布煮汁 精進料理に缺く可からざるものなり、京阪地方に汎く用ひらる、使用法は上等昆布二寸四方位に切り、裏表共に布巾にて拭ひ、水一升に十枚の割合にて十分煮立て、鍋中に投じ、蓋して二分間を煮下しおき、上澄を使用す可し、又鹽節を煮立て、後、浮き上りたる泡を取捨て、昆布を入れ二分間を煮て濾取る法もあり。

ニツケイ(肉桂) ▲常緑喬木にして樟科に屬し、幹の高き二三丈に達す、櫛より大なる葉あり、夏淡黄綠色の小花を開く、支那、錫蘭、マラバール、スマトラなどを原産地とす、本邦にては土佐、紀伊の産を良種とす、葉、皮、根に、桂アルデヒドと云ふ一種の揮發油を含む。▲効用 桂皮は辛味ありて、香氣強く、菓子、屠蘇酒、薬用酒に用ひ、アルコールに溶解したる桂皮油丁幾とし、薬用、飲料、化粧品、石鹼等に製し、極めて有用品の一なりとす。

ニツシヤビヨ(日射病) ▲夏の炎天などに熱き日光に照らされて、發生する病氣なり。此の場合には劇しき頭痛、眩暈、無感覺、氣絶及び痙攣を起すを常とす、病氣は急に來るが故に注意宜しきを得ざれば二三時間にて死することあり。▲手當は冷水を盛んに吹き掛けるか、又は冷水に浴せしめ、若しくは氷嚢を頭部に當て涼しき室に静臥せしめ、同時に葡萄酒、エーテル、樟腦等を與へて、元氣を起さしむべし、又豫防として、度々水を飲み、又冷水を以て頭部を濕す可とす、冷水に浸したるハンカチやタオルなどを頭上に載せ置く可なり。▲日射病に類似せるものに熱射病といふものあり、こは曇天にても、筋肉を過勞せしめたる結果、

身體の熱度高まり、爲めに水分殆んど發散して、恰も日射病と同様の状態を來すものなり、其の手當は日射病の場合と同じ。

ニラ(菘) ▲百合科に屬す、莖は鱗莖を爲して地下にあり、葉は扁平にして細長く、夏、花莖の頂上白色の五瓣花を簇生す、實は三稜形にして、仁は平たくして黒し、葉の大小によりて大菘、小菘の別あり。▲効用 煮て食ふ可し、強き葷香を有するを以て、臭臭ある肉類に混じて煮、臭氣を消す功あり、漢方醫は脚氣、腹痛、下痢等の薬用に用ひ、温める作用ありとせり、支那人は之を珍重して、王侯の膳に上せりと、麻米にては肉汁に混じて用ひ、需用多しと聞く、下痢防止の爲め、小兒ある家庭には一株を培養す可し。

ニンニク(大蒜) ▲菘の條を見よ。

ニンギョーシバイ(人形芝居) ▲珠の條を見よ。

ニンシヤン(妊娠) ▲妊娠とは胎兒を母の胎内に宿すことにして、精蟲が卵巣より出て、卵と相合するを云ふ、胎兒は普通子宮内に起るものなれども、稀に喇叭管、又は

卵巢の近傍に行はる、事あり。然して子宮外に妊娠は甚だ危険なるを以て注意すべし。

▲妊娠とは受胎時より分娩期に至る期間にして、通例二百八十日なるも、前後一週間若しくは一ヶ月位の差違あることあり。俗に妊娠期間を十月月となすもこれは陽曆にあらずして陰曆による數へ方なり。妊娠の中絶し胎兒の生存力を失ひたる場合を流産といひ、胎兒未だ前述の胎生期間を経ずして出産するを早産といふ。▲妊娠中は母體は月滿ちて分娩に應ずる變化を徐々に來すものなり。子宮の常態は、長さ凡そ二寸三分なり、妊娠期には凡そ八寸二三分に至り、重さも殆んど平時の三十倍となる。而して其の位置は最初二ヶ月間は、尙小骨盤内に止まれば、三ヶ月目には、漸く大骨盤中に進入し、下腹部に手を觸る、時は、外部よりこれを感ずるを得べし。されど腹部の膨脹を見るに至るは、これより遙か後の事なり。六ヶ月目に至らば、子宮は臍の高さに達し遂に九ヶ月目には最高頂に達し心窩の直下迄到り、十ヶ月目には再び八ヶ月の高さに歸るを常とす。妊娠中特に初期に於て母體に起る變

化は人により大小長短の差あれども其の變化の重なるものは精神、神經、消化器、泌尿器、血行器及び皮膚などに、異なりたる作用を生ずるものなり。即ち平素爽快活なる人が非常に沈黙となり、或は怒り易くなる、時に或は更に快活となることあり、其の他頭痛、齒痛、腰痛を起し、頭暈、眩暈、發熱、惡寒等を催し、殊に甚だしきは時々嘔吐を催し、毎朝空腹時などに胃中より水液を吐き出す事あり、此の外平素の好癖の食物に變化を來たし、時には普通考へ得られぬ食物などを要求することあり。又小便の頻數繁となり、時に咳嗽を催し、噴嚏をなすことあり、皮膚の變化は全身に多少の浮腫を來し、顔又は胸の邊に薄き斑點を生じ、横腹、乳房、上肢、腕などに妊娠線と稱する赤色線を現はすことあり、斯の如く身體に種々の變化を來たすとも、妊娠は因より病氣に非ざるを以て憂ふる要なし。又この變化は何人にも發するものにあらず、それが爲め却つて健康となり、精神も活潑になるものあり。▲妊娠の徴候不確實のもの、確實のものとの二種

し、長さ三寸、中生にして收穫多し、▲ベリシヨルトホーン 極めて早生にして、根は丸く燕草に似たり、赤色美味なり、▲効用 種々料理に供し、衣を掛けた乾菓子とす、嫩葉は漬物とし、又根の汁は火傷に効あり、種子は薬劑として、風邪、利尿、水腫、腎臓炎に用ひ、其香氣はリキニール酒製造に使ふ、肉汁に用ふ、又牛豚の好飼料なり、本邦至る所に産し、殊に遠江、摂津、武蔵に出づるもの佳良なり、大抵夢の後作にて九月より十二月の間に收穫す、採掘後は日に酒らし、日蔭に穴を穿ち砂と共に入れ置かば、貯蔵によし、葉は莖干として貯ふ、

ニンジン (人参) ▲五加科に屬す、莖は直く、葉は掌状複葉なり、淡緑色の五瓣小花を附け、中に白き蕊あり、根は太く、本邦産は直根なれども、朝鮮、支那の産は人形の如し、廣東産は太くして横紋多し、朝鮮人參、廣東人參など種類あり、寒冷の地を好み、日光の直射を忌むを以て、初年は日蔭をなす、實熟するに至れば種子を採取し、土中に埋めおきて、發芽したるを移植するなり、又は花壇に日蔭をして、日

光の直射と雨を防ぎ、夏其中に播種し、冬移植してよし、又種五粒位を二寸四方に時き、翌年秋、根の大きくなりたるを一本立とす、此等は皆三年後花梗を抜き、開花結實す、其時花を摘み取り、四年目の秋收穫す、始め堆肥(肥料の條を見よ)を施し、播種又は移植後は雜草を抜き、油粕、糞などを施肥し、年々其量を増す可し、有機質に富む土壌をよすとす、本邦にては出雲、尾張、下野、因幡、信濃、岩代、羽前などより多くを産し、日光、宇都宮、會津より出づるもの殊によし、朝鮮、長白山附近は世界有数の産地として聞え、自然生もの少ながらすと云ふ、本邦へ朝鮮より傳來せしは慶長の頃なり、又寛延年中支那より廣東人參を傳來す、朝鮮種は、初年に一葉を出し、二年目には二葉に分れて二葉を生じ、三年目には三葉三葉となり、中部より莖出で、開花結實す、即ち極數と葉數により容易にて盛んに薬用に供せられ、本邦より支那に輸出穀、年々四五十萬圓を越ゆと云ふ。

とす可きものを總稱す、筋肉、脂肪、軟骨、骨類を含み、化學的成分は百分中、水七十、蛋白質十六又は廿三の外、膠質、鹽類、糖、砂糖、乳糖等の少量を含有す、其風味、滋養の度は、肉の種類、年齢、雌雄、飼育方法、捕獲の時期、屠殺法によりて異なり、凡て野禽の肉は家畜に比すれば多く香味を有す、然し肉の良否は其中の滋養分の多寡に因るものにして、家畜にては其種類の選擇法、飼育法にて滋養分を増加することを得可し、よ

ニクイ (肉類) ▲鳥獸肉の食用

る、又肉類は如何程度とも滋養分に到底肉類には及ぶ可くもあらず、其他近來流行する肉エキスなどの肉製劑は肉成分の一部を抽出したるに止まり、病人などに適す可けれど、健康體には肉を食ふ方違ひに益ありと知る可し、(牛肉、鳥肉、魚肉の項参照)

ニクノミワケカタ (肉の見分方)

▲牛肉の良好なるものは、三歳より八歳までの牝肉にして、一般に鮮褐色を呈し、繊維は大にして常に脂肪に富む、脂肪の色は白色乃至黄白色にて硬し、然れども營養不良なる牛の肉に在りては、暗褐色を呈し、而して肉と皮との間に、著しく結締織(筋の膜)を露出し、且つ脂肪は黄色なり、▲牝牛肉は、黄色或は灰色を帯び、甚だ軟かにして普通の牛肉より結締織多く且つ水分に富むを以て、牛肉に比すれば其滋養價値大に劣れり、尙ほ生後二週間以内の牝牛肉は、健康上害あるものなり、▲馬肉は、新鮮なるものに在りては、暗赤褐色なれども、空気に觸るゝ時は暗色となり、後には黒褐色と變し、

多くは脂肪に乏しく、脂肪の色は赤黄色にして柔軟、且つ牛肉の夫に比して粘稠性に富む、▲豚肉は一般に脂肪に富み、淡赤色乃至暗赤色にして、營養佳良なる幼豚の脂肪は、顆粒状を呈し、純白色なり、然れども老豚のもの若しくは、營養不良なる豚の脂肪は、淡黄色にして且つ粘着性あり、▲綿羊肉は、光澤ある鮮暗赤色を呈し、二歳より三歳まで位の肉は、尤も美味なれども、脂肪は純白にして佳味ならず、其肉多くは特異の臭氣を有するを以て、需用餘りに多からず、▲山羊肉は綿羊に反し其色淡し。

るときは容易に油らぬものなれば、徒らに新開廣告の賣藥などを用ゆるも決して効あるものにあらず、先づ第一に行ふべきは、不斷の清潔にして、常に加里石鹼を以て洗ひ、皮膚の純潔となりし時、藥を用ゆれば、幾分効力を奏すべし、藥品は外用として毎日數回、ベルツ水を含ませるがよろし、其の處方は、苛性加里〇、五、リスリン二〇、〇、アルコール二〇、〇、メルガモット二滴、水一〇〇、〇の六種を混合するなり、内用にはインタルビン一、〇を一、〇を一日三回に分服すべし。

ニシン (鱈、青魚、鱈) ▲此魚は一般に北海に多し、我が國にては房總以北及び北陸の沿岸にも多少産すれども、北海道、中津、西、南、沿岸と對岸なる朝鮮の東海、慶尚南道、永興、通川、海州、長前、瀨野、日海、蔚山、海州、豊産、喉類に屬し、形は鱈に似たる點多し、鱈は粗大柔軟にして剥れ易し、體の背部は藍色、腹部は銀白色に淡藍色を含むあり、或は微紅色を帯びて光澤あり、性寒氣を好むが故に、三四月の頃産卵して、一般に北海に多し、雖も、三四月の頃産卵する爲め風潮、種に海藻繁茂し且つ食物

煮る、▲獨活の葉を、皮を剥きたる獨活二寸許りに切り、一日燻てたる酒、味淋、醬油にて味を付け、千枚漬の葉を鹽出したるに巻き、砂糖、鹽に煮詰めたる汁に入る、▲鳥の鱗を、若き鳥の肉を細く切り、酒、味淋、醬油にて煮、青豆を入れ、又葛を解きて入れ、どろ／＼に煮て、井物に用ふ、▲茄子の煮方、干蝦其他魚の煮汁を用ふれば味宜し、葉を取り、縦に庖丁目を入れたる茶釜煮と云ふ、▲初草の鹽煮、葉を除きて釜に鹽を撒りかけ、空鍋にて煮附け、青海苔を添ふ、▲伽羅款冬、干乾にしたるを一寸位に切り、庄醬油に赤、蕃椒を混ぜて煮詰む可し、其色赤く黒びみればしか云ふなりとぞ、▲百合の丸煮、百合根を洗ひ乾かし、鍋に伏せて鹽、味淋を入れ、半時間煮るなり、▲結昆布、湯煮にして、軟かになりたらば、短冊に切り、味淋に醬油を交えて煮る、椀盛取者の附合によし、▲湯松茸、松茸を切り湯煮にしたるを、葛かけとし、袖子を卸して出す、▲巻鳥賊、よく洗ひたるを切目を縦に入れ、藥にて束れ、酒、醬油を半々に煮て、薬を取り小口切にす、▲蛤の時雨煮、蛤

の割身に生姜を刻み入れ、生醬油に煮詰む、▲豚の角煮、豚肉を湯煮にし、二寸角厚さ三分位に切り、鍋に煎茶を入れて、其中に煮、汁の煮詰まれた頃、醬油を入れて煮詰め、汁の無くならは火より下して用ゆ、豚肉一斤につき砂糖二十目、醬油三勺、酒二合、水二合、水少し許すとす、▲紅葉蛤、蛤の割身に醬油に煮しめ、汁を明け、鹽多量に入れ、麻の實を炒りて加ふ、▲款冬の薑の甘煮、款冬の薑を燻て、砂糖、醬油と煮詰む、▲八方菜、栗、胡蘿蔔、長芋、葱、姑、推車、牛蒡、蕪を細く刻み、味を付け、豆腐の水を搾りて、餛飩粉を入れて前の品を包みて油揚げとし、煮汁、醬油にて淡葛をかけ、卸山葵にて出す、▲鱈の南蠻煮、素焼にした鱈を、鍋に葱を敷き列べたる上に置き、醬油に、砂糖にて鹽節を入れて煮る、▲甘藷の梨もどき、皮を剥き水に浸して灰汁を抜きたるを、長さ一寸五分位、一分角位細切にし、酢及鹽に三十分間漬けおき、酢の汁にて煮る、其を針に入れ、白砂糖かけて食へば味梨の如くにてよし、▲玉葱の煮方、上皮を除きたるを二割とし、小口切にして油にい

ため、味淋、醬油にて油る、▲鳥の田每煮、鳥肉を細切にし、酒、味淋、醬油の中に玉葱と共に煮、尚三葉を入れて、鍋を下し、井り又は深鉢に盛り、別に雞卵を破り、黄味の中に入れて、白味の白くなる迄蒸し、胡椒をかく、
二七エ (似繪) ▲古代の肖像畫、百濟河成、巨勢、金岡等に始まる。江戸時代の役者似繪繪等も此一種とす。
ニス (假漆) ▲器具用塗料の一種にして、土、漆、青若くは、各種の樹脂類を乾性油、酒精、或はアセトン油に溶解して製す。
▲用途、専ら器具用塗料として使用し來りしも、近來印刷用及び寫眞の修盤にも用らる。

木の部

ボハン (母斑) ▲皮膚にある斑點の總稱なり。形は概ね圓形若しくは橢圓形なり。母斑は一定せず、母斑に血管性母斑、淋巴管性母斑との二種あり。血管性母斑は、又血痣と稱し、皮下の血管の、平常外に増し、且つ太くなるに因り、斑點を生ずるなり。故に其の血管の、動脈なるか靜脈なるかに随つて、色にも種々あり。鮮紅、濃紅、青色等に於て、母斑は、格外の大きさに成長せんとする性質を有し居れり。淋巴管性母斑は主として結節性淋巴管腫といふものなり。尙ほ蠶風夏日斑も母斑と俗稱せらる。有毛母斑之は色黒く、大抵皮膚より隆起し、太き毛を有するものなり。類毛を以て被はれ、異形の相を呈し、或はこれより腫物に變する事あり。其の外、初生兒に多く見る、臀部の青き痣は、皮下に色素集積するより生ず。こは小兒の成長と共に消失するものなり。其の發生の原因はいまだ確

かならざれど、遺傳的關係を有する事は疑なし。母斑は其の性質により、外科手術にて切除るか、或は電氣燒灼法にて摘取ることもあり、又強き酸類にて腐蝕して除去する方法もあり。▲白癬は生後直に、或は稍々過ぎせるものなり。一度生せば一生消失せざるとしては黒きものあり。俗に之を白なます、黒なますと稱す。療法としては、五十倍のサリチル酸 (アルコールに解くもの) 又は苦利沙羅並を持續塗布するにあり。▲雀斑は小き斑點の、顔面及び體皮に生ずるものを云ふ。妊娠時に表はるものは、直に消失すべし。生來のものは難治なり。ペルツ氏の皮膚液、又は二十倍の硼酸液一〇〇安息酸丁度一〇の混液を塗布して效あり、又漢藥の茯苓亦効あり。
ホトケ 佛 ▲佛とは今より凡そ二千四百年の昔印度に生れし釋迦牟尼 (墨墨の) とを云ふ。故にその教を佛敎とは云ふなり。又佛敎の理想とするところのものをも佛と云ふ。佛とは覺者の意味にして、三世十方に通じ平等無差別を主義とし且自利利他の徳を有

すること意味す。又佛なる語は梵語にてブツダ、支那語にては佛陀、浮屠或は佛と發音するものにして浮屠より轉じてほととなりこれに佛語を添へてほととせしなりとも云ふ。佛を分ちて三身となし法身、應身、報身といふ、法身とは眞言宗の大日如來の如く各宗より信ぜらるるものを云ふ。應身とは釋迦佛そのものを云ひ、淨土宗の阿彌陀如來の如きは之を報身といひ、我國に於て最も深く信ぜらるるもの四つあり、即ち大日、阿彌陀、藥師、釋迦の四如來とす。▲大日如來、眞言宗の本尊にして又日の別名なり。抑々眞言宗に於ては萬有即佛身を説き、形のあるところ必ず大日如來のあるところと信じ、鬼畜とも大日如來の化身と信するが故に其本尊は常に種々なる事物の形に於て表はるるなり、されば人の其教に依りて覺の所在を知り而して後、大日如來の化身なる事物によりて成佛すべき道を修め以て一生二生來は遍一切處、大日遍照の義なるは又明らかなるべし。▲阿彌陀如來、梵語に二種ありて一はアマターバ (無量光) 他はアマター

ユス(無量壽)となす。淨土宗の本尊にして其昔此無量光無量壽の佛は悪人女人のみ如何なる佛にも救済せられざるを憐れみこれを救はんが爲に法蔵比丘となり五劫の間工夫に工夫を積み遂に四十八の超世無上の大願を達して再び佛に成り極樂淨土の教主となりしものにして、此佛を信じ、南無阿彌陀佛を唱ふるものは惡人又は女人たるを問はず救済せらるるが故に深く信仰せらる。日本及支那に於ては阿彌陀にて通ず。▲藥師如來。阿彌陀佛の西方極樂國の教主たるに對し東方淨瑠璃國の教主にして衆生の肉體上及び精神上すべての病を治する本願を有す。之を諸病悉除の願と云ふ。されば藥師瑠璃光如來又は大醫王佛と稱せらるるなり。世人此利益を蒙らんが爲深く信仰す。奈良藥師寺の本尊はこの藥師如來にして其周圍には十二神將と稱する十二人の將軍あり。次ぎの如し。毘羯羅、眞達羅、招杜羅、摩虎羅、波夷羅、因達羅、類羅、珊底羅、安底羅、迷金羅、伐折羅、宮毗羅。▲釋迦如來。釋迦五百の大願として五百の願ありて殆んど總ての佛教宗派に本尊

とせられ或は安置せらる(但し眞宗を除く)。▲其他世間に於ては菩薩をも佛に加へ時には天部、明王、羅漢等をも含ましむることあり。即ち次に其主なるものを説明すべし。(觀世音菩薩)。救世菩薩又は觀音とも稱せられ實に三十三身を現はし、其何處に於て其名を唱へ念ずるも直ちに之を見聞して、衆生を苦しみの中に救ふべき慈悲的菩薩にして、勢至菩薩と共に阿彌陀佛の脇士となれるものにして六觀音七觀音といふ。即ち次ぎの七つに分つ。第一(千手觀音)。三眼四手手を有し二十五の變化身あるを以て其手一千に及ぶ。第二(馬頭觀音)。馬頭を有す。第三(十一面觀音)。左の三面は忿怒を現はし、右の三面は牙上に遊ひ前の三面は慈悲を表す。第四(聖觀音)。冠に阿彌陀佛を戴き、蓮花を握る。第五(如意輪觀音)。六手を有し一は頰を支へ、一は膝を案じ他の四手には各蓮花、珠數、寶輪、如意珠を握る。第六(準胎觀音)。三眼と各手に武器を握れる十八臂を有す。第七(不空索觀音)。世音。これは六觀音の中に入らず。▲地藏菩薩。世間の六地藏といひ、延命、寶手、寶處、

寶印、持地、堅固の六道に配すと云ひ、四十八身を現出して衆生を救ふ。釋迦滅して後彌勒世に出づるまでの間衆生を救ふことを釋尊より委託せられたる菩薩なりと云ふ。其信仰せらるる事大なり。▲勢至菩薩。智慧の菩薩を云ひ觀世音菩薩と共に阿彌陀佛の脇士となりて其左につき、一度其の光に浴せんか三塗を離れ、無上力を得といひ、一度足を伸ばば魔殿はおろか、千世界を震動すと云ふ。▲虚空藏菩薩。左手に如意を、右手に劍を握りて諸願を叶ふと云ふ。▲彌勒菩薩。今は兜率天にありて、此世にあらす釋尊滅後五十六億七千萬千の後世に現はれて成道する菩薩にして梵語にてはマイトレーヤといひ譯して慈氏といふ。▲普賢菩薩。及び文殊菩薩。釋迦佛の脇士にして普賢は象に、文殊は獅子に乗る。淨土中の成佛を誓ひ十六願を立て、常に佛に隨ひ、衆生に願ひを施す。普賢、文殊は共に兄弟にして普賢は無衆念王の第八子なりと云ひ、文殊は第三子なりと云ふ。文殊は未來に成道して普現如來といひ一切の佛は皆これより發心するものとせらる。▲天部。聖天を除きては皆二十

天の中のものなり。(イ)梵天。ブラフマンにして大梵天、梵輔天、梵衆天の天上界を統御する王を云ふ。(ロ)金剛密迹天。寺門の左右にある二王の左側の一つを云ひ良く法を護るといふ。(ハ)毘沙門天。一名多聞天といふ。恒に佛の道場を守りて諸法を開くが故に此名ありと稱せらる。四天王の一にして東北方を護る。(ニ)大辨天。神體は女神にして東方を護る。(三)大勢天。神體は女神にして福を興ふること多く、大雄辯の才を守るといふ。辨才天又は略して辨天ともいふ。(ホ)鬼子母天。俗に鬼子母神と云ひ、印度大宛國中にありて千人の子を有す。日蓮宗之を記る。(ヘ)韋天將軍。聰明にして世欲を離れ佛法を保護する南方の天王八將の中の一なり。(ト)摩利支天。日本に於ては武士の守り本尊として信せらる。されど元來は兵衛を救ふに國民をも守護するものなり。(チ)日宮天子。常に須彌山の牛をめぐりて四大洲を照すものにして其宮殿の順行を目して日輪といふ(即ち太陽)。日宮天子一名日天子又は日天とも云ふ。(リ)月宮天子。一名月天子又は月天とも云ふ。日天と同じく四天王に屬し、四天下を遊行す。

萬物を成就せしむること日天に次ぐ。(ヌ)聖天。一名大聖歡喜天といひ、男女交接の像にして子なきもの主として之を祀る。之を祀る者は夫婦和合し、子を求めれば授けられ、長命し、福祿自由に興へらる。▲羅漢像。釋尊傳來以來盛んに安置せらるるものにして阿羅漢を證したる佛弟子を像となしたるものなり。又十大弟子とは大迦葉、阿難、舍利弗、須菩提、富樓那、目連、迦羅漢、阿那律、優波離、羅睺羅をいひ、十六羅漢とは舍利弗、大迦葉、大迦蘭延、離婆多、周利槃陀伽、難陀、阿難羅、羅睺羅、橋婆多、目連、寶頭盧頗羅墮、迦留陀夷、摩訶劫提、目連、寶頭盧頗羅墮、迦留陀夷、摩訶劫提、薄伽梵、摩訶俱絺羅、阿菟樓駄を云ふ。俗に撫佛と稱するは寶頭盧頗羅墮をいふものにして病疾の箇所を撫つれば之を治すと云ふ。▲明王。も天部の神にして、異相を表はして佛法僧の三寶、及び國土人民を護る神なり。不動明王、降三世、軍荼利夜叉明王、大威德明王、金剛夜叉明王、は所謂の五大尊なり。就中最も多く信仰せらるは不動明王にして一切の鬼魅障碍を降伏すと云ふ。降三世明王は東方を護り

食暈瘰の三類瘰を除く。軍荼利夜叉明王は南方を護り、一切の阿修羅鬼神を降伏す。大威德明王は西方を護り、一切惡毒龍を降伏す。金剛夜叉明王は北方を護り、一切可畏夜叉を降伏するなり。ホトトギス(時鳥、杜鵑)▲此鳥は晩春の候我が國に渡り來りて、各地の深山中に棲み、夏季中鶯、類白等の巢中に産卵する時鳥の一種にして鳩よりは稍々小さく、體の上は灰黒色にして、下面は白色にして、數多の黒横條を帯ぶ。嘴は稍々大なる方にて少しく彎曲して尖り、其根部は黄色を帯ぶ。未端の方に至りて擬黒色となる。脚は全部黄色にして恰も啄木鳥に於けるが如く、二趾は前方に二趾は後方に向へり、尾は中大にして所謂角尾なり。常に樹木の幹を食する毛蟲類を食餌とするが故に益鳥として保護せらる。而し時には天鷲兒をも食するが故、天鷲者に取っては有害なり、斯かる場合は狩獵規則中特に規定したる手續を踏みて驅除する事を得べし、夜陰空中を鳴き渡る事多きが故、形體を見る事稀なれど聲は屢々人の聞く處にて頗

【ホ】の部

鳥及び鳥の情を喚起せしむ、郭公、鶯、公は形、羽毛色等時鳥と大差なけれども體は稍々大なり、又鳥は其の鳴聲、恰も筒を吹くか如し、じういち、恰もじういちと聞ゆ、何れも時鳥と同じ。

て、頗る快速なるものなり。また帆柱を建て、帆を揚ぐるを得。帆には通常三角帆を用ふ。これ日本形の船と異なる點にて、成るべく船體の下部に風を受け、以つて轉覆の患少なからしむ。

ボートレース【端艇競漕】 ▲端艇を以つて競漕する壯快なる遊戯なり。東京にては毎年桜花爛漫たる春季に隅田川に於て、大阪にては堂島川に於て、今

【ホ】の部

し、遅きをロングピッチと爲す。▲出發點と決勝點との距離を、レイス・コースと呼び、大抵一千米乃至一千二百米なり。

は鴻にして、後には鰻、鰻は燕に喩はる。額に似、額は蛇の如く、尾は魚の如し、額は額にして、鰻に似、鰻は燕に喩はる。額に似、額は蛇の如く、尾は魚の如し、額は額にして、鰻に似、鰻は燕に喩はる。

ホーレンザウ【渡橋草】 ▲野菜の條を見よ。ホーリー【抱瘡】 ▲昔は急性傳染病中最も恐るべき病の一ツとして數へられたり。

し、且つ併發病を發するにあれば此の際特
に注意すべし。皮面一體に腫るゝを以て、疹
疹甚しきが上に、容貌を醜からしむるもの
なり。手の甲、又は摩擦、壓迫を受ける部分
も亦甚しく犯さるゝ、されど胸部は一般に少
し。口、舌、咽喉、氣管、食道等の粘膜に
も、同時に同様の發疹あり。故に聲啞れ、息
の詰まるが如きは、理の當然なり。十二日目
若しくは十三日目に至らば、結痂期來りて、
膿疱内の膿汁は、乾固して黄色の痂皮とな
り、皮膚の腫れ退き、數日を経過して、痂皮
剝脱するに至る。同時に熱度下り、次第に個
みを減じて、恢復期に至るべし。膿疱の癒
ゆるときは、甚しき痒痒を感じしめ、三四週
間を経て皮膚の全く剝落せし跡には、皮膚に
黒褐色の痕を留め、其の全く消失するは、
更に數ヶ月を要す。化膿によりて、眞皮の深
く犯されたる時、瘻管をつくり始めて癒ゆ
るものなるが故に、所謂瘻管を生ずるなり。
△膿疱化、假痘とも云ふ。眞痘に比し發疹
甚だ僅にして、或は二三散在するに過ぎざ
ることあり、随つて化膿熱も全く起らざる
か、或は起りたりとも氣色許りなるのみ。一

般に膿化痘は、八日乃至十日にして結痂期
に入り、其の後の全経過も眞痘に比すれ
ば極めて短し。總て痘瘡は病毒に感染し
てより、二週間位にして、急に悪寒發熱、
頭痛を起し、舌乾き、不眠に陥り、譫語を發
し、容態甚しく重體に陥る事あり、高熱
は此後三日持續し、脈搏早く個週止り、
食氣を失ひ、嘔吐を起すもあり、婦人にあり
ては、著しく月經を來すものとす。尚ほ皮膚
には發疹を見ざれども、内股脚の側面、下腹
等には一種特別の紅斑若しくは出血性の
斑點を生ずることあり、之を序期發疹と云
ふ。初期は通常三日間続き、熱度著しく
下ると共に、皮膚に痘瘡を發し來る。是を發
疹期と云ふ。已に痘瘡に罹りたるものは特別
の療法なきものなれば、頗る困難なり、先づ
手雷として、初期は熱の下る機頭痛等には水
薬を用ゆべし。後食養生をなし、膿疱の
潰るゝときは、他の病菌の侵入する虞れあ
れば、看護人は、石炭酸、オレフ油等を
混合せる煉藥を、片布に塗り、患部に貼り保
護をなさざる可からず。顔面も一面に塗り、
又咽喉等は、消毒をなす爲め、鹽刺水、カ

マンガンカリ等の含嗽をなし、併發病に
は、一般に冷浴有效なり。
【ホー】 (防風) ▲普通刺身の妻とし
て多く見る草なり、根は午莖に似、莖は紫紅
色を帯び高さ二三尺に達するものなり、葉
柄長くて圓し三裂して三葉を生ず、葉の裏
面は表面よりも稍々白色なり、夏に至り紋
形の白色花を附けて實を結ぶものなり、又
伊吹防風といふ一種あり葉の形胡蘿蔔に似
たり、海濱の砂原に自生す、之れを培養する
には細沙多き土質を選び十分に肥料を施す
べし、莖葉は共に芳香あるが故にぬたなどに
混入し、生にても食す、又根は藥用に供する外
味醗漬とし食するも可し。
【ホー】 (法會) ▲また佛會ともいふ、佛
並に菩薩を供養することなり。或は理世の
祈禱をなすあり、來世の冥福を祈るあり其作
法も、施主の身分によりて大小輕重異なり、
その大會には、梵唄、散華の法用あり、幡幢、
華鬘、其他の佛具も盛んに堂内を飾り、表
白、願文、願文、願文の事あり、昔時は宮中、
官等にて法會を修行したるが、維新以後は
全く廢せられ、今は寺々にて修するもの、

個人團體等に依りて修するもの、外ならず。
▲普通に修せらる佛會には、施餼飯、十夜、
祖師忌等あり。(一)施餼飯は、亡者の餓鬼道
に墮ちたるに、食を施し法味を興へ、以て
其苦を救ふなり。(二)十夜は、無量壽經
に、現世にて十日十夜の善をなすは、他方に
て千歳の善をなすに勝るといふことあるよ
り、中世以後専ら淨土宗にて行ふ佛會なり。
(三)祖師忌は、開祖の忌日に修する法會にて、
各宗皆行ふ。天臺宗は六月會として、六
月四日延暦寺にて修す、以前は勅使の參向
ありしが、今はさる事なし。眞言宗は御影
供として、三月二十一日弘法大師入定の日
を以て、全國の寺院にて營む。最も盛んなる
は紀州高野山及び京都東寺なり。淨土宗
は御忌として、一月廿五日法然の忌日に修す。
東京増上寺、京都智恵院等最も盛ん
なり。眞宗は報恩講又は御講、御七晝夜と
て、十一月二十二日より開祖親鸞の忌日たる
廿八日まで一週間、全國の寺院にて修す。日
蓮宗は御會式又は御影供として、十月十三日開
祖日蓮の忌日に修す。池上本門寺の御會式
最も盛んなり。其他各宗皆開祖の忌日に

佛會を營む。
【ホー】 (法會) ▲法會、追善、佛事等
ともいふ。即ち死者のために僧を招きて佛を
供養し、讀經して冥福を修すること云ふ
なり。人死してより七日日間を中陰と云ひ、
七日毎に法事を營む、これを初七日、二七日、
三七日、三十五日、四十九日となし、四十九
日も既に経れば、百個日、一週忌(報年の祥
月命日)、三回忌、三十三回忌、五十回忌
等に法事を行ふものとす。人忌日の前夜を
速夜又は宿忌といひて、特に僧を招きて讀
經し、人を饗し、靈に供す。而して、七七
日の法事、一週忌の追善等は、既に昔より
行はれしが、年忌の法事は、鎌倉時代に始
まりたるもの、如し。當時、法事は寺院に於
て催し、十種の供養、或は一切經の供養な
どとめたり、又僧侶には布施として、金
錢、太刀、牛馬等を與へ、親戚知己等その場
に詣り、又此の時代より足利時代を通じて、
富者は、亡者の追福のため、千本萬本の卒都
婆を建てることあり、又關東及び四國に

【ホー】 (實生流) ▲論
【ホー】 (風仙花) ▲西洋草花の
條を見よ
【ホー】 (菩提樹) ▲印度にては
釋迦此の樹下に座して正覺を成就せりと
傳へ、因て菩提樹と命名して神聖なる樹木と
す、東印度原産の喬木にして、葉料に屬す、
葉は心臟形にして端長く尖り、長葉葉柄を
有し、葉面は平滑にして光澤あり、互生
す、葉の風を受けて容易に動揺すると、嫩葉
の紅色にして美麗なるものに依りて、著し
五月頃花を開く、頭花序をなす、材質
稍々硬くして密なり、其種實を以て念珠を
作る、樹幹を傷つれば液を出し、それより
讀經を製すべし、同名のものにして東北地方
の山中に自生する植物あれど菩提樹とは全

【木】の部

其形を異し、高さ數十尺に達する巨木にして、葉縁には鋸齒あり、上面は滑かなれども、裏面は灰白なり、六月頃五辨の白色なる花を開く、花冠は淡黄色にして細長なる葉形の苞を備ふ、我が邦にて普通稱する苦提樹は即ち之れなり。

ホタル (螢) ▲火岳 或は火照の轉なりといふ。種類頗る多く、隨つて其形状も異なるが我が國には多く、源氏螢、平家螢なり、甲蟲類にして皮膚硬く、頭、胸、腹の三部互に密接し頭は赤く全體黒し、頭は胸部の前に存する凹所に散入す、腹眼と觸角とを具ふ。口は咀嚼性にして鋭し、前翅は角質に變化して、後翅の被鞘と成る、之れに疊む時は背上に並び、左右相接して一直線を畫せり、後翅は稍々大なりども之を疊む時は前翅に蔽はれて見えす、臀部に發光器を具へ、晝は淡緑白に見ゆれども夜は鮮かに青綠色の光を放つ、雌雄著しく外形を異にするものあり、卵生にして完全な態を経過す、卵形は鰾粟粒程にて黄色なり、一ヶ月程過ぐれば孵化して蛆となる、其體の兩側には、松脂と薄荷の混じら

る如き臭氣を以て自己の防禦とし、五月頃脱皮して蛹となり夫れより凡そ二週間を経て初めて地上を飛ぶなり、之の蛹の時代より麗しき光を放つ、又琉球にあるものは全身黄色茶色にして臺灣、支那の南部、新嘉坡、暹羅にあるものは茶褐色なり、メキシコの産は長さ一寸餘にして黒色に茶褐色を交へ、二種の光を有す、一は頭に近く胸背の兩端にあり、一は腹部にあり前者は晝は二個の黄色の點に見ゆれども夜は鮮明なり、一は其光より一層大なる光輝を放つ、常に前垂の如きものを以て之を蔽し光を發する時開く、土人は之れを提灯の代用とし、又婦人は往々首飾などに用ゆる事あり、又ジマイカ、キューバ、中央亞米利加邊にも居るといふ。次に英吉利の産は長さ三四分にして雌は翅なく鼠色の蛆なり、夜に入らば美麗なる光を放つて雄を呼ぶ、次に亞米利加の産は雌雄の差一層甚だしく雄は翅の外に總々としたる鬚を有すれども雌は黄色の細長き蛆なり、體は幾多の節より成り夜に入らば其節々悉く麗光を放つといふ、螢の光は一種の酸化作用に基づけるものに

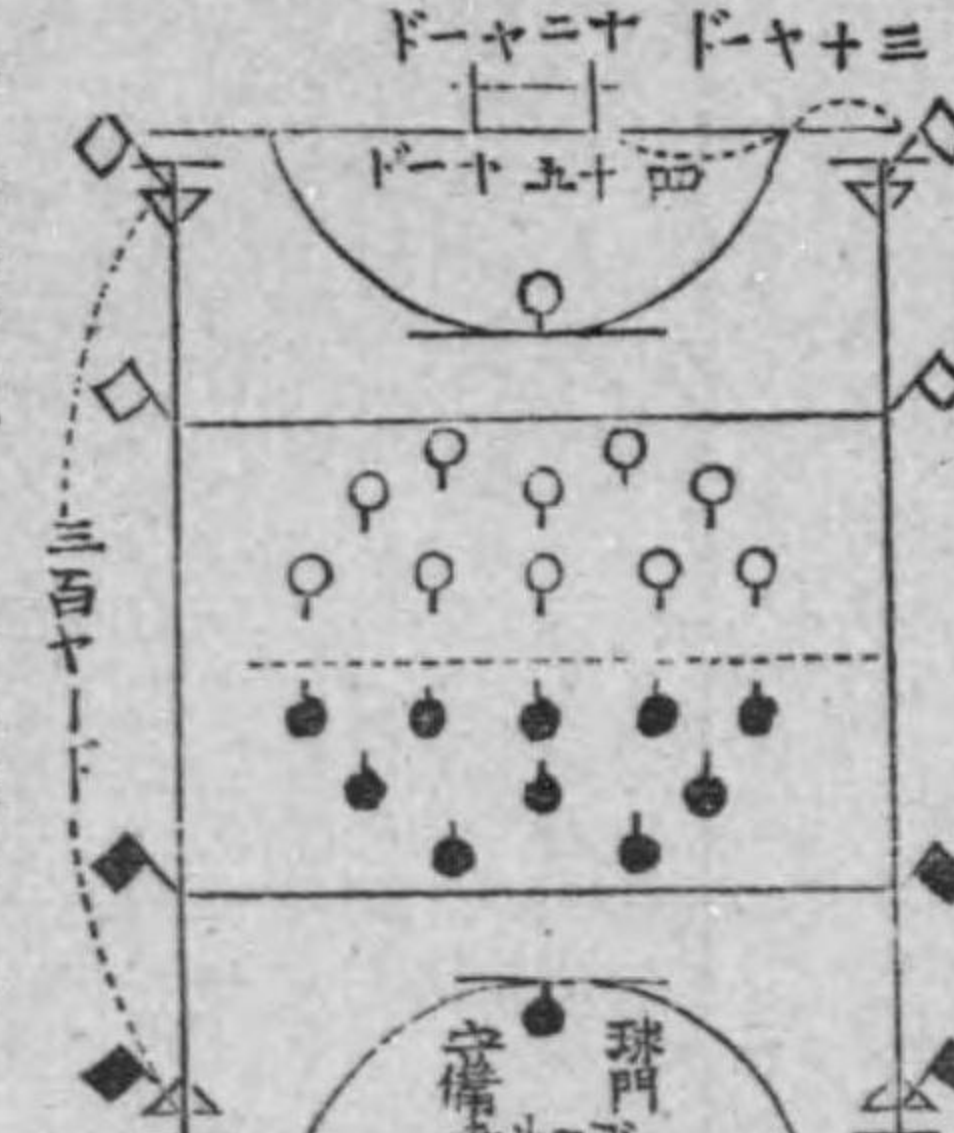
して其發光機關は無数の細胞より成り其周囲には幾多の血管ありて之れに纏繞しあるを見る察するに其細胞内に可燃物あり無管より来る空氣中の酸素に逢ひて酸化し初めて發光するものなるべし、而し其細胞内なる可燃物は如何なる作用に依つて發光するかは明かならずといふ。▲螢狩り我が國には古くより螢狩りの遊びあり先づ螢の名所としては、山城の宇治川、近江に石山、大和の佐保川等なり、近時名高くなりしは、山城の保津川、武藏の大宮公園、江戸川上流、後後の阿賀川等にて大小無数の螢飛交ふ時は實に壯觀を極むと、熱帯地方にて無数の螢集まりて一時に光を發する時は恰も電光の閃くが如しとぞ、毎夜螢の發光は大抵八時頃十一時頃最も盛んにして螢狩り行はる、は即ち眞盛前を可とす、また竹の端に杉葉などを着けたるを用ふるも又竹の端に杉葉などを着けたるを用ふるも

ボタン (牡丹) ▲牡丹は支那より持來たりしとの説あり、本邦にて盛んに培養せられしは、聖武天皇の頃なりといふ、隋の關

【木】の部

帝の時始めて之れを傳へ後唐の開元年中に上下競つて培養し之れを花の王と稱して、支那全土に賞翫せらるるに至り、落葉の灌木にして、幹は高さ普通三四尺あり、三月頃嫩葉を出して後花を著く、花には白、紅、紫等の色を有し、一重あり八重ありて一様ならず、花散りて後實を結ぶ、秋の初め葉裂けて實は地に落つ、黒色にして小なり之れを時々は翌春に至りて赤き芽を出す後五六年にして初めて花を開く、之れを栽培するには、實時も可なれども、移植するもよし、移植するには九月頃赤き芽を出したる頃にす、其他接木の方によりて殊に良種を出すと云ふ、本邦にては奈良に培養するは最も名高く、一株の價數百圓に至るものありといふ、澤津の池田又有名なり、牡丹は寒を嫌ふが故に、寒地に培養するには防霜の用意最も必用なり、霜防けとしては藁にて根を圍むか若しくは温室を設けて中に入るを最も可とす、牡丹は花の美麗なるより内外人共に賞翫せられ、近來歐米各國に輸送するもの頗る多しといふ、根は昔より薬用とす。

ホツケイ ▲戶外遊戯の一種にして二町四方位なる平地を選び、胡粉又は石灰を水に解かして左圖の如く線を引き、競技場を作る。▲競技の人数は二十四人とし



の嚴禁するところなれば必ず平面上にせられたし。球は普通クリケット用の球に胡粉を塗りに用ひ、履當は竹にて組合せたるものにして又兩組を一目瞭然たらしむるため帽子か上衣の色合にて示す事、その所屬地には紅白各々四流を立て、而して戦機熱するを待つべし。▲競技法とても別に難かしきものにあらず。準備定まらば、先頭隊より一人づつ中央に出で、球を打出し、やがて亂れて挑み合ひ、早く敵の城門に入れたる方を勝とするなり。▲フットボールのもとをなせしものにして、英國に於て最も盛んなり。心身修養上に利する又少なからず。

ホネツキ (接骨) ▲挫折せる骨を治療する事を云ふ。治療を二種に分ち、挫き、筋違ひ、又は腕、手の抜けなど、眞の挫骨にあらざるを直すなり。關節は、骨の頭部の末端の關節窩に嵌り、關節囊にて包み、更に靱帯と稱するもの、囊及び兩骨に附着するが故に、屈伸回轉等をなさしむる外は、關節をして其所に固定せしむるものな

り、外力によりて、靱帯切れ、關節囊破
る、ときは、關節は其位置を失ふに至る。挫
き、筋違ひなどいへるは、靱帯損じて關
節振れ、又は損傷するもの、骨抜けるといへる
は、關節囊破れて、骨頭全く關節窩を
離れたるものにて、近傍の血管神經も、
亦破れたるなり、此の場合は、靜かにもみ、
骨を原位に復せしめ、位置の崩れざる様副木
を當て、繃帯を掛け、患部を靜止せば、關
節囊の修補次第に成り、三四週間にして治す
べし。眞の挫骨、前述の挫き、筋違ひ、手の
抜けたなどより、治療困難なり。されど大體
に於て、異らず、之は先づ骨の折目を合せて、
固定繃帯を掛けて、移動を防ぎ、骨の癒合す
るまでは、些細の移動をも思ひなげ、繃帯
の固定に十分なる注意をなし、靜臥を守らし
むるを要す。場合により、局部に適當なる板
を以て挟み、其の上に繃帯をなすべし、かく
せば、骨の折れたる部分に骨質を造り、缺け
たる部分を補ひ、終には治癒するものなり。
小兒等は、走る所を以て引留める位にて、
手の抜ける事往々あり、之等の場合は直様
手當をなせば原位に復すものなりとす。され

ど大人にても、些細の事より、挫き、筋違ひ、
等惹起すことあり、かゝる時は速に接
骨所又は、醫師に乞ふて、速に手當をなさ
ざるべからず。

ホンチヨーニジューシコー

「本朝
二十四孝」 ▲武田信玄、長尾謙信と題せ
り、近松半三、三好松洛、竹田因幡、竹
田平七、竹本三郎兵衛等數人の合作、明和三
年正月、竹本座に出演す、全五段の淨瑠
璃、武田勝頼と上杉景勝との和睦より始ま
り、齋藤道三の、將軍、足利家を滅ぼさん
とするを知り、黨類北條氏、村上義清
をも併せてこれを平定するを經とし、勝頼と
謙信の女八重垣姫との許嫁のこと、勝頼
の上杉家の花作りとなること、道三の眞濡
衣の上杉家待女となること、右二女の勝頼に
對する戀情を緯とせり。

ボンタン

「文旦」 ▲暖地に適する常
緑、灌木にして、大なる幹は僅かに丈餘に
達す、ザボンの一種なり、うちむらさき、又
はたうくいんほとも稱す、夏に花開き、冬季
に至つて果實を結ぶ、果實は肉多くして且つ
果汁を多量に含み一種の香味あるも、ザボ

ンの如く甘酸にして苦味あり、外形は黄色
にして多くは圓形なれども往々扁圓形もあ
り、生食するものなり、苦味を嫌ふ人は、
砂糖を附けて食すれば甚だ佳なり、皮は砂糖
漬として茶菓子に用ひ、本邦の産地として
は、西南地方、就中、越後の産地最も名あり、
同様に蘆橋と稱するあり、現今、同地方に於
て盛んに培養せられたるあり。

ホーライ

「蓬萊」 ▲種々の傳説あ
り。列子の説に依れば蓬萊は、渤海の東に
あり、一を岱輿といひ、二を員嶠といひ、
三を方壺といひ、四を瀛州といひ、之を蓬萊
といふ。華實皆滋味なり、之れを食へば老
いす死せず、居る所の人は聖賢の種なりとい
ひ、決死の封禪書には、蓬萊、方丈、瀛州、
此の三神山は、渤海の中に在りて、諸々の他人
及び不死の藥あり、禽獸、盡く白く、而し
て黄金、銀を宮闈となす、また遠く之れを望
めば雲の如く、到るに及びて三神山なり水
下に居り、之れに臨めば風輒ち引去る、終
に能く到る者無しといひ、又和漢三才圖會に
は、山海經を引きて、蓬萊山は海中の三神
山なり、有道者に非ずんば至らず、といひ、

普陀山志は、昌國北界に蓬萊山あり、
衆山四圍に峙立し、小嶼を旋繞す、屹として
千丈の樓臺の如し、而して中央に又紫霞洞
あり、山と隣をなす、中、畔、明にして、方
に大車の輿の如し。潮水一たび退けば人入
る可し、或はいふ、人到る可からず、と然る
に泰始、皇帝の時、徐福(史記本傳には徐市)
といふ者、皇帝の命により、不老不死の藥を
得んが爲めに渡航したりといふ蓬萊島は、
明らか、我が日本の國土にして、時常に孝
靈天皇の御宇に在り、而して徐福は終に其
の引率したる童男童女三千人と共に我が國
に移住し、紀州熊野浦の海岸に一村を作れり
又一説に、徐福來位の地を尾州熱田とし、
鳥を以つて日本の稱とし、三神山を以つて熊
野、熱田、富士山の稱となす等の説を生ずる
に至れり。▲蓬萊節、歳首に縁喜を祝ふ節
に於て、三方の上に栴檀、勝菓、昆布、馬
尾藻、鰒等を盛り、蓬萊山の形に擬す、昔
は年首に限らず、嫁娶の儀式、出陣、凱陣
の祝儀にも用ひたり。▲蓬萊盤また、食積
ともいふ、鳥臺、蓬萊鳥臺の義にて、婚禮

ボンサイ

「盆栽」 ▲植物を盆又は鉢
に植えて栽培し、隨所に移して觀賞に便
したるものなり。古説に、盆に植ふるたるを盆
栽、鉢に植ふるたるを鉢植、又は植木と稱すと
あれど、今は大抵盆と鉢を問はず、總て
廣義に盆栽と稱す。盆栽の愛玩は古くより
我國に行はれ、徳川の中葉に至りて漸次盛
んとなり、現今に及びては、如何なる家庭も
一二鉢を持たざるなく、殊に東京等の如き
都會に於ては、土地狭少にして庭園など餘り
設け難きを以て、其流行殆ど絶頂にあ
り、盆栽の最も愛玩せらるる種類は年と共に
に變化あり、天保、安政の頃は専ら銀杏、松、
梅など栽植せられ、鉢も其頃より極めて華
麗なるものを用ひらる、其後蘭、石菖、萬年青
など流行し始め、葉紋の奇などを賞して、一

葉千金を惜まざるものさへ出でたるが、支那
趣味の輸入に依りて、萬年青は棠梨花、佛手
柑などに壓せられ、銀葉松は赤松、黒松な
どに斥けらるるに至る、鉢も交趾朱泥等雅
客の間に稱せらる。近來は西洋草花の價
格の廉なる所より一般に愛玩せらる。松、
梅、紅葉などは現今も仲々流行す。▲盆栽
用の植物を分類すれば、観葉、観實、観
花の三とすべし、松、柏、樺、桐、竹、柳、
楓、萬年青、蘭などは観葉、栴檀、桃、
李、柑類類などは観實、梅、櫻、山茶、
茶梅、藤、薔薇などは観花に屬す。また水
仙の如きを観球草とも稱す、最も愛玩さ
るものは、培養困難なれども樹態の雅趣
多きは観葉の樹木なり。總て樹木の盆栽は、
樹態の自然なるを賞するを以て、枝を曲げ幹
を斷ち、殊更に奇態をなすものは排斥せられ、
數十年の老樹も、盆裡にありて能く天然の雅
趣を失はざるものならざるべからず、また樹
木と鉢との關係は最も注意を要す。例へば
大なる樹木を力めて小盆に植ふるは、紅葉を愛す
る風の如き赤色の鉢に植ふるが如きは、全く
植物の美觀を傷くるものなり。總て樹木

類は一般に方、圓、橢圓等の餘り派手ならざる盆を用ひ、萬年青、蘭などは特殊の鉢に植

うる時に盆底に細砂又は木炭の片を敷き、其上に前の調度を以て植うべし。灌水は時々

を描き出したるものなり。多く室内の裝飾に用ひらる。種類に盆山、盆景、盆畫などな

振りかく。砂は粗に依りて各々用を異にし、丘陵、原野に用ひ、又は堤防を築き、瀑

膚の所々に色素を堆積せしむるにより生じたるものにて、醫學上淋巴管腫に屬す。顕

ホケンインシヨクリヨー 保健飲料 人間の健康を維持するに必要なる

Table with 2 columns: 燃焼する物 (Combustible substances) and 燃焼せぬ物 (Non-combustible substances). Rows include items like 水 (Water), 炭 (Charcoal), 脂肪 (Fat), 蛋白質 (Protein), 含炭素 (Carbonaceous), 一升五六分 (One liter 5-6 parts), 一匁三分強 (One ryo 3 parts strong), 四匁弱 (Four ryo weak), 百四十匁弱 (One hundred 40 ryo weak).

増すのみならず、或は皮膚の下にありて保温の用をなし、又は大切な器官や神経を保護するものなり。故に肉類の如き脂肪質に富みたるものは寒冷の時期に於ては頗る重要な食物なり。▲蛋白質は牛乳、牛肉、鶏卵又はペプトンの如きものにして、最も滋養に富めるものにして即ち副食物として頗る結構なり。▲含水炭素は日本人に取りては第一の滋養品にして、澱粉、糖類、野菜類を總稱したるもの即ち穀類、水素、炭酸の化合なりとす。例へば我等の常食とする米は十中の八九までは此の要素を含み、その他葛、片栗、餡等も又此の類に屬す。其の効用は體中にて燃焼し、體温及び力を發起せしめ、蛋白質の消耗を制限せしむるに最も大切なる働きをなすものなり。▲水は酸素と水素の化合物にして、其の代表的ものは蒸溜水なりとす。普通の水は多少礦物質を含有せり。水は人間に對し最も大切なものにして、之なかりせば我等は一日たりとも生存すること能はず。その効力たるは或は體内の廢物を流出し、或は滋養品を循環せしめ、或は食物を溶解し、其他諸所の機

- 一、無色透明、無臭、美味
 - 二、有機物を含むこと極めて少量
 - 三、硫酸、鹽酸、硝酸、格魯兒抱合物等極めて少量にして、硝酸鹽類又同様之なし。
 - 四、アンモニア、亞硝酸等を全然含まず。
 - 五、水の温度は春夏秋冬常に攝氏の九度乃至十一度位のものたるべし。
- 不良水
- 一、混濁にして、少しく置けば沈澱物の生ずるもの。
 - 二、多量の有機物を含めるもの。
 - 三、糞便等より滲入し來る硫酸鹽類や格魯兒抱合物を含めるもの。
 - 四、アンモニア、亞硝酸を含めるもの。
 - 五、水の温度の非常に變化するもの。
- 以上は其の大意に過ぎざれども、兎に角便所又は厩舎より餘程距りたる井戸水を使用するを要す。▲鹽類は石灰、加價、那篤、腐蝕、

腐屈溼更、硫酸、炭酸及び鐵などの化合物なり。之以上の四種と同じく人體に缺くべからざるものにして、血液の主要成分となり、或は筋肉の組織、骨の構造、腸胃の組織中に含まれ其の効用又莫大なりとす。されど平常は此の鹽類のみを特別に用ゆること甚だ少なく、大抵は他の食物中に含まるるを以て、適宜之が選擇をなすべし。▲以上の五種類は人間生命のあらん限りは、必須食料にして、又人間自然の要求なり。今これを我等の常食とする物品に就き、各種の營養分を檢査せん。▲米、我國人の主要食物にして、又最も滋養に富めるものなり。蛋白質は少なしと雖も、含水炭素に富み、消化も吸収も共に良好なり。殊に我が國人の體力を増進せしめ、體温を盛んならしむるに最も適良の食物なり。但し如何なる食物を問はず、よく咀嚼するを必要條件とす。粥の如き柔かき物にて、單に吸り込むのみにては矢張不消化となるものなり。▲麥、米に次ぐ主要物なるも、其の滋養としては米に劣る。されど麥飯を食する時に、空腹を來すこと速かなるは、胃腸

を刺戟して運動を良くし、胃腸を通過する時、間早く、糞便の量、隨つて大なり。これ故に麥飯を用ゆる人は、之を補ふ滋養品を取ること肝要なり。脚氣病者に對し麥飯の有効なりといふは、麥飯其の物の効能にあらずして、只下劑を投じたる時に、便通の更に良くなる傾向あるが爲めなり。▲豆、大豆、小豆は勿論其の他の豆類は皆脂肪及び蛋白質に富めり。隨つて之より製造したるものは總べて滋養に富み、彼の味噌、醤油、豆腐の如き類も効用廣きものなり。▲果實、大抵酸味と甜味を含有するものにして、食物の消化を助け、便通を良くするものなりと雖も、滋養分は比較的少なきものなり。如何なる果物を問はず、食するには必ず皮を剥ぐべく、又未熟なるものは一種の毒性を含むを以て、絶対に避くるを要す。▲食糧類、近來西洋風の料理漸く盛んなるにつれ、我が國人中にも麵類を常食とするものあるに至りしが、こは思慮なき模倣なりとす。食糧類の滋養の點に於て米に及ばざること遙かに遠し。▲芋、里芋、甘藷、馬鈴薯の類にして、其の主要成分は澱粉にして、蛋白質には

乏しきものなり。消化はあまり佳良ならず、滋養も比較的少なきを以て、人體にはあへて好ましからぬ食物なりと雖も、中流以下の生活を営む農夫などには三度に一度之を用ゆるも、運動充分なるを以て、害あることなし。▲野菜、副食物として缺くべからざるものにして、適度に取るときは身體の工合を調合する上に於て大效あり。されど過量に用ゆれば醗酵して瓦斯を生じ、悪しき結果を來すことあり。但し肉食を用ゆる時は必ず共に食するを要す。而して、何時にても、柔かにして、新鮮なるものを撰むべし。▲肉、こは重に牛肉、豚肉、羊肉等を言ふも、肉にして、其の脂肪、蛋白質に富めるは皆人の知る所なり。西洋人は之を主要食物とするも、我が國人には左程適せず。只副食物として適度に用ゆれば頗る體力増進に益あるものなり。赤肉は概して白肉より消化良し。▲鳥肉、獸肉より纖維細かなるを以て、脂肪は豊富なるも比較的消化良好なり。▲魚、我が國は四面海を圍らし、魚類甚だ多るを以て、古來之を盛んに用ひたり。非常に滋養に富み、獸肉の如く脂肪多からず、又比

較的安價なるを以て、日本人には絶好の副食物なりとす。▲貝、甚だ滋養に乏しく、隨つて消化悪しく、時には中毒することあり。▲牛乳なるものは、病氣の際、若しくは已むを得ざる事情の爲め、又は母乳缺乏せるか、有害なる時乳兒に與ふるに用ゆべきものにして、健康體の大人が食事を減じてまで使用すべき程のものにあらず。幼兒の養育料としても、又餘りに質美すべきものにあらず。世には往々にして善良なる母乳を棄て、或は牛乳を用ゆるものありと雖も、こは甚だ心得違ひなり。牛乳の條参照。▲雞卵、牛乳と略同様な滋養物にして、生か半熟にして用ゆるを最も良とす。雞卵一個の中に含む滋養分は大略牛乳一台に相當するものなり。▲漬物、調味液、鹽漬、酒粕漬、など種々あれど、別に滋養分なきを以て、只單純なる嗜好品に過ぎず。▲鹽類、山より取るものと、海より得るものと二種あるも、其の質に至つては岩鹽を遙かに優れりとす。鹽は何物にも缺くべからざるものにして、其の効用は蛋白質の分解を充進せしめ、食

【木】の部

し之は甘種のものに限る。

ホシエビ 【乾蝦】 ▲赤蝦、車蝦を主とし、河内池沼の淡水産小蝦も亦製造す。皮

附、皮剥及特に頭尾を存するもの、三種あり。製法に煮乾、焼乾、素乾の別あり。富山の

静岡の櫻蝦は皮付蝦として有る。静岡の櫻蝦は皮付蝦として有る。

ホシアン 【乾箔】 ▲粉及澱粉の條を見よ。

ホシザメ ▲板鰓類の横口類、體長、吻端尖り、眼小なり。背鰭二基、前基は後基より大なり、胸鰭稍圓くして、鰓孔の直後

下鰓にあり。腹鰭兩鰭共に小さく、腹鰭は體の中央に位し、尾鰭は下鰭基だ小きし。體淡灰色、白色の斑點あり、腹部は白し、長九尺に達す。

ホシザメ ▲板鰓類の横口類、體長、吻端尖り、眼小なり。背鰭二基、前基は後基より大なり、胸鰭稍圓くして、鰓孔の直後下鰓にあり。腹鰭兩鰭共に小さく、腹鰭は體の中央に位し、尾鰭は下鰭基だ小きし。體淡灰色、白色の斑點あり、腹部は白し、長九尺に達す。

ノの部

ヘニ 【紅藍】 ▲原産地は詳かならず、恐らくは東印度より傳來したるものならん

といへり、和名鈔に其の名を載せれば、我が國にては、既に一千九百年以前より用ひたる

事、明かなり、現今歐米諸國、印度、支那地方、到る所に栽培せらる。本邦産

は羽前、羽後第一とし、伊賀、筑後産之れに次ぎ伊豫、攝津、播磨等も産す。菊科越

年生草本なり、莖葉共に鋭刺多く莖は數尺に及び、夏、無數の紅黃花を着す。花

は形狀薔薇の如し、一名末摘花といふ。庭園に植ゑて賞觀用とし、又生花として

床間に飾るもあれど、多くは臘脂を得んが爲め、島地に栽培せらる。臘脂は紅花の黄色

素を水に浸出せしめ、紅色素のみ分離したるものなり、また紅花を水と共に桶に入れ、

足にて踏みて能く練り、之れを布袋に受けて水洗し、且つ壓搾して搾り上げたものを、籠

に擴げておかし、斯く繰返す事數回の後、陰乾にして固めたるものを紅餅といふ、之れ

を白に入れてよく水に浸し、よく碎きて布袋に入れ、黄色素を十分に除去したる後、薬の汁を注ぎ、紅色素を融解せしめ、直ちに梅醋を加へて之れを分離せしむ、之れを正味紅又は生臘脂と稱す、又前の袋の中には、多少の紅色素を含むに依り、再び灰汁と醋とを以て分離せしめたるを一番紅といふ、正味紅は、粘質泥状を呈す、或いは之れを灰汁に融解したるを、更に酒石酸にて分離せしめば、最上品を得べし紅の製法は、京都は最も發達せり、又洋紅は炭酸曹達を稀薄溶液に、紅花を浸して紅色素を融解せしめたる後、稀醋酸にて分離せしめ之れを反復して乾燥せしめたるものなり、西洋にては、紅花色素及びアルカンナ又はラタンヒアを使用す、又カルミンはコチニール

を白に入れてよく水に浸し、よく碎きて布袋に入れ、黄色素を十分に除去したる後、薬の汁を注ぎ、紅色素を融解せしめ、直ちに梅醋を加へて之れを分離せしむ、之れを正味紅又は生臘脂と稱す、又前の袋の中には、多少の紅色素を含むに依り、再び灰汁と醋とを以て分離せしめたるを一番紅といふ、正味紅は、粘質泥状を呈す、或いは之れを灰汁に融解したるを、更に酒石酸にて分離せしめば、最上品を得べし紅の製法は、京都は最も發達せり、又洋紅は炭酸曹達を稀薄溶液に、紅花を浸して紅色素を融解せしめたる後、稀醋酸にて分離せしめ之れを反復して乾燥せしめたるものなり、西洋にては、紅花色素及びアルカンナ又はラタンヒアを使用す、又カルミンはコチニールを白に入れてよく水に浸し、よく碎きて布袋に入れ、黄色素を十分に除去したる後、薬の汁を注ぎ、紅色素を融解せしめ、直ちに梅醋を加へて之れを分離せしむ、之れを正味紅又は生臘脂と稱す、又前の袋の中には、多少の紅色素を含むに依り、再び灰汁と醋とを以て分離せしめたるを一番紅といふ、正味紅は、粘質泥状を呈す、或いは之れを灰汁に融解したるを、更に酒石酸にて分離せしめば、最上品を得べし紅の製法は、京都は最も發達せり、又洋紅は炭酸曹達を稀薄溶液に、紅花を浸して紅色素を融解せしめたる後、稀醋酸にて分離せしめ之れを反復して乾燥せしめたるものなり、西洋にては、紅花色素及びアルカンナ又はラタンヒアを使用す、又カルミンはコチニールを白に入れてよく水に浸し、よく碎きて布袋に入れ、黄色素を十分に除去したる後、薬の汁を注ぎ、紅色素を融解せしめ、直ちに梅醋を加へて之れを分離せしむ、之れを正味紅又は生臘脂と稱す、又前の袋の中には、多少の紅色素を含むに依り、再び灰汁と醋とを以て分離せしめたるを一番紅といふ、正味紅は、粘質泥状を呈す、或いは之れを灰汁に融解したるを、更に酒石酸にて分離せしめば、最上品を得べし紅の製法は、京都は最も發達せり、又洋紅は炭酸曹達を稀薄溶液に、紅花を浸して紅色素を融解せしめたる後、稀醋酸にて分離せしめ之れを反復して乾燥せしめたるものなり、西洋にては、紅花色素及びアルカンナ又はラタンヒアを使用す、又カルミンはコチニール

解せば、何れも赤褐色を呈し、赤色染料を得るものとす、古來有用の染料なれど、其の價の不廉なるは、染色の堅牢ならざると又人造色素の發明等に依り需用漸く減少するに至り、化粧用の臘脂を口紅といひ、又他物を混して種々の化粧色料に製せらる、色料に供するを彩色紅といひ、葉子を染め、或は繪具とす、殊に絹木綿などを、桃色又は緋色に染むるに用ひらる、紅藍の種子よりは、油を製すべく嫩葉は食ふを得べし、我が國にて、慶安の頃には紅を薄くすす風習行はれ、其の後元禄の頃には白粉及び紅は、單に頬、唇、爪さき等に淡く塗り、濃く塗るは賤しき茶屋女など行はれず、又白粉に紅を加へて淡く頬に塗りしは享保の頃にて、元文の頃には、貴賤共に頬紅を止めて、白粉のみを淡く塗り、之を栽培するには苗のいまだ十分生成せざる内は、温氣又は氣候の不順に依りて消失し易きものなれば、紅藍の培養は困難なるはなく、極めて老練なる工夫を要す、土壌は稍々砂交りの眞土を撰み、秋彼岸の頃に種を下し、油粕を與ふ、下肥は草を肥大に

【ノ】の部

し、花を多くする効あれど、紅色悪しといふ、秋末に至り一回開引して、冬期間の霜除を十分にし、翌春成長する期節に及び、再び開引し、梅を切りて薄肥を施すといふにあり。

ヘチマ 【丝瓜】 ▲瓜及び化粧の條を見よ。

ヘルモツト ▲洋酒の條を見よ。

ヘル 【臍】 ▲正確にははそといふ、腹の前面中央にあり、即ち臍帯の取れたる痕なり。臍は身體の一部として何等の機能をも有せずと雖も、胎兒時代に於ては必須の營養器となりしなり。▲臍帯は兒體と母體とを關聯せる唯一の管道にして、分娩時に於ては長さ一尺六寸乃至二尺弱、厚三分六厘乃至五分九厘あり。臍質白色、羊膜鞘を被り、血管貫通して、胎兒より胎盤に向ひ、左方より右方に四十回螺旋狀に同轉せり。血管はすべて三條あり、右の二條は有筋動脈にして、左の一條は臍靜脈なり。神經は臍より一寸乃至三寸六分三厘の所に來りて消失す。故に臍帯を切斷するに三寸六分三厘以上たるべし。臍帯は胎兒

に取りては實に命の緒とも稱すべく、香人の口に相當するものなり。胎兒の血液は二條の臍動脈により、臍帯を通過して胎盤に入り、胎盤は毛の毛細管内に入り、臍靜脈となりて、また臍帯を経て兒體に還り、アランシー氏靜脈管を通りて、下大靜脈中に入り、心臟の右房内に達す(胎兒の條参照)。▲臍の病、臍炎は臍赤腫れて其の周圍一面に及ぼし、或體液の分泌して爲めに生命を損ふことあり。この炎症は臍帯の取れし翌日か三日頃に起るものにして、畢竟出產時の不注意に因るものなり。手當としては醫師の診察を乞ふを必要とするも、先づ臍の周圍を軟かなる布にて拭き取り、硼酸がザルチル酸の一分を〇、五に減らしたる〇〇を混じて、臍の周圍に塗り、防腐劑とすべし。又便通に注意し、滞りなきにせざるべからず。▲臍ヘルニアは俗に出産時と稱するものにて、小兒の號叫し、又は怒責するとき臍の膨脹大するものなり。其の内には、大抵小腸の一部又は網膜の一部を包めり。これは自然に治癒することあり。貨幣の如きものを包み、臍部に當て、

純創膏にて留め、綿帯し置くべし。
ベツノ 【別能】 ▲謡曲二十八番の總稱なり。左の如し。龍潜、一角仙人、錦戸、放生川、放下僧、鳥追舟、飛雲、龍太鼓、吉野靜、雷電、室君、歌占、雨、月土車、國柄、枕慈童、松島、現在、藤、胡蝶、繪馬、淡路、三笑、身延、水無月、秋、七面、照君、攝待。

ベツコ 【龍甲】 ▲タイマイ(琥珀)のことなり、昔はこれを用ふることを禁ぜられしより、タイマイにあらすして、スツボン(龍のこ)なりといひて用ひしより、今日に至りても、なほベツコの名存するなり。但し琥珀は、龍の一種の甲にして、小笠原島、琉球諸島、臺灣等の近海に産し、小笠原島にて、正覺坊と稱する龜に似たれども、この琥珀は、龍の如く曲り、その甲は普通の琥珀に似たり。甲は、帶黄淡褐色にして深黄色の斑點あり。正覺坊の肉は美味なれども、琥珀の内は、臭氣ありて食ふに堪へざれば、専ら甲を取らるるために捕獲せらる。而して甲は火に炙る時は柔かにな

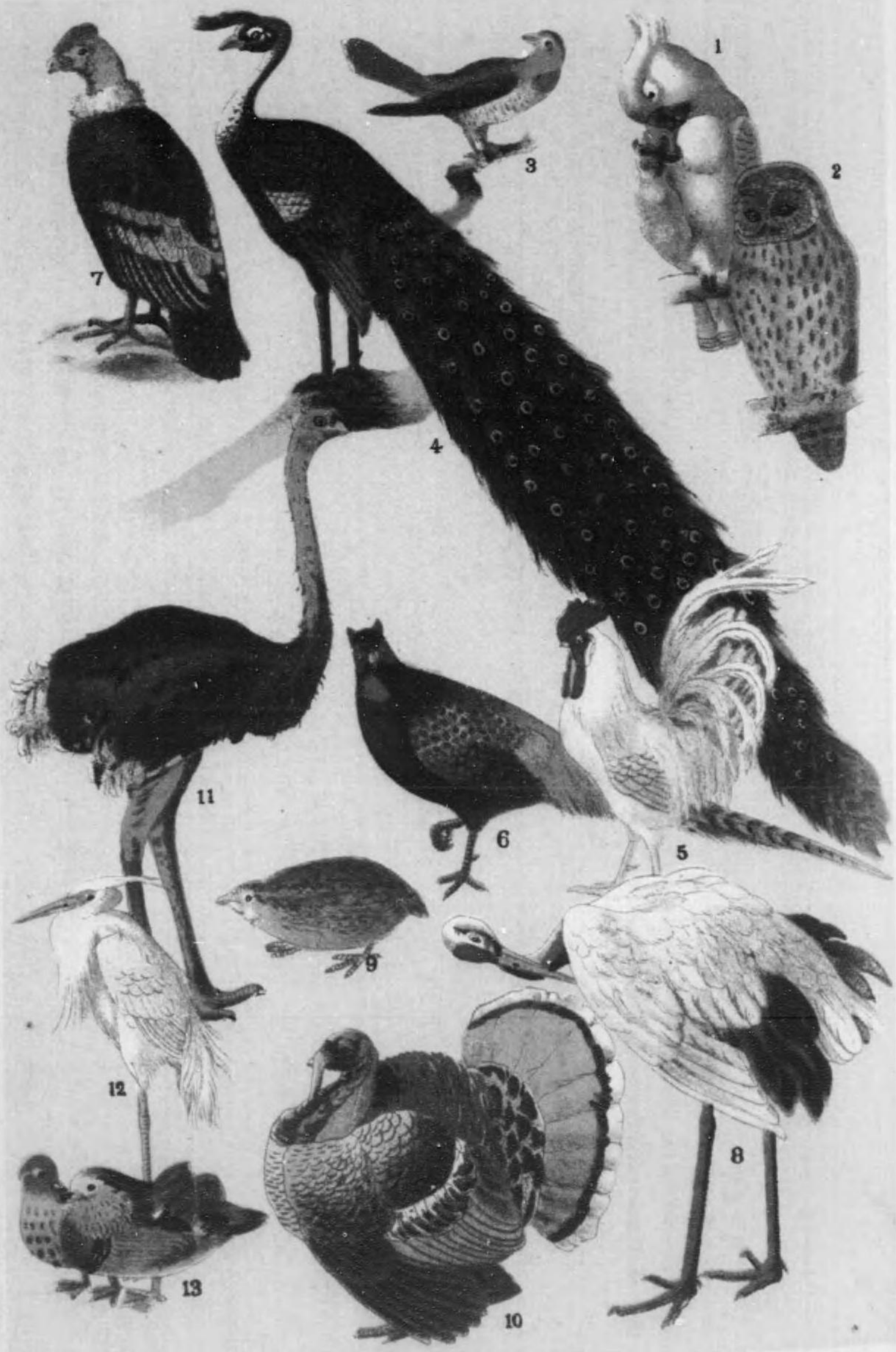
る故、焼金に挟み、打ちて接合せ、或は種々の細工を施して、櫛、簪、簪等、婦人用の裝飾品に製せらる。甲は極めて薄く、割きこれは張り重ねて製する物なれば、取扱に最も注意を要す。櫛ならば、平常使用する頭髪油を、櫛の間まで、全體に塗り、天具、櫛などの軟かき紙にて、櫛の間までも軽く拭ひ、櫛木に挟みて藏しおくべし。尙方今専ら行はる、「人造龍甲」は綿花をアルコールとエーテルとの混合液中に溶解して得たるコロチオン、樟腦を加へて製したるものなれば兩者の混合物を壓搾するときは、セルロイドと云ふ稍々透明なる物質を生じ其の性高温度に於ては柔軟なれど、冷却するに隨ひ、次第に硬化するより、適當の着色料を施して、象牙、龍甲の代用品を模造せられ又護謨、腕飾なども製す性質として火を引き易く、點火せば直に燃焼す、商品上にては、龍甲を種々に區別し、南京甲、異人甲、南洋甲など稱せり。南京甲は南支那海及びマラツク海、峽以東の近海に産し、多くは、支那人の手を経て本邦に來り、異人甲はボルネオ、ペルマ、

印度等に産し、歐洲より輸入せらる。又南洋甲はサモア等南洋諸島の近海より出で、近年は本邦人も土人も直接に交換して持歸ると、以上は何れも優劣なく、無地の櫛等には異人甲の斑なき所を選び、ばらぶ物には南京甲と南洋甲を用ふ。一般に、琥珀の甲にて製したる物は上等にして「つめ」として、甲の周りの所にて製したるは、大いに劣る。

ベツノ 【便所】 ▲便所はまた、厠、雪隠、後架などともいひ、古は河の上に架したるを以て、河屋(厠)といへるなりとぞ。便所は成るべく人目に觸れぬ所に設くべく普通の家にありては後側の一端、床、押入などの裏手に設くる方便なるべし、また相當の家にては、家人用、下婢用及び來客用を別別に設くる方善かるべし、其構造は、臭氣の外に洩れざるやう壁を厚く、戸は堅牢にて内外共に栓し得るやうにし、窓を上下に設けて換氣と掃除に便なるやうにすべし。また日光の射入激しきは汚物の臭氣を發散せしむるが故、周圍に樹木など植えて之を遮ぎるべし。汚物の壺は素焼瓶、桶或は漆喰

ベツノ 【便秘】 ▲大便の通じは普通一日一回なるが、時として二日以上、または一週間乃至二週間も全く無きことあり。之は便秘といふ。多く大病後、發汗過多の後、不消化性粗食をなしたる時、腸運動不十分なる時、其他種々な病氣の誘因によりて起るものなり。其他他妊婦時、ヒステリー、脊髄病、腸管狭窄、又は閉塞等の場合にも來ること風々あり。▲自然に排泄せらるべき物の停滞するが故に、其の影響は各

鳥類之圖



1 むらあ 2 ころう 3 とほき 4 じくや 5 にはり 6 きじ 7 こんど 8 つる 9 づらう 10 しめつ 11 だてう 12 しらしき 13 しどりを

【1】の部

機官に及び、食慾は減じ、腹は張りて心地悪く、遂に頭痛を來し、眩暈を發し、不眠に陥ることなどあり。▲療法としては、瀉腸を第一とす。之をなすには上等の石鹼を水又は湯に溶かし之をスポイトにて肛門に注入するなり。又ヒマン油を少しく水に浮べて飲むも可なり。瀉腸の劑一步進みたるはオリーブ油五〇〇、五位を用ひ行ふものにして、施したる際五六分間は其儘靜に右を下にして臥させ置くべし。之は最も効能あるものにして、初めの中は三四日目に一回、後には十日に一回、十五日に一回位行ふべし。食事は脂肪質の物例へば肉類、魚類、天麩羅の如きもの、鹽分を多量に含みたるもの、佃煮、鹽魚の如き類を最もよしとす。又砂糖や蜜にて作りし物もよろしく、飲料としては冷水も白湯も皆効あり常に朝早く起き食鹽水をコップに一杯位づゝ用ゆる時は、大抵の便秘を癒すことを得べし。單に冷水一杯宛にても可なり。但し朝四合若しくは五合の水を飲む時は、少なくとも一時間経過せし後にあらざれば朝食をなすべからず。

ベコニア ▲西洋草花の條を見よ。
ヘーケビワ ▲平家琵琶 ▲詠物の條を見よ。
ペーコン ▲豚肉の煙製にして、胸肉は上等とし、腹背、腰肉之に次ぐ。▲製法は鹽水中に漬けおくと、鹽を塗り附けるとの二通りの法あり、後の法にては鹽と硝石の混和物を肉の全部に塗り、鹽の中に入れておくこと數日、尙一回鹽を塗り二三日すればよく拭きて雨露の當らざる煙突の内側に懸け、燃木にて燻す可し、八日か半月程にて出来上るなり、秋より冬季にするを上等とす。ハムと共に洋食に賞用され、ハムの代用品として用ゐらる。
ペースポール ▲野球の條を見よ。
ヘビ (蛇) ▲其種類甚だ多く、黃領蛇、赤棟蛇、なめら等あるも皆爬蟲類にして皮面に鱗片を被り、心室は不完全ながら二分せられ、肺を以て呼吸する卵生動物なり、熱帯地方に至らば巨蟒と稱し體長二丈五尺より三丈四尺に達する大蛇あり、之の類は無毒なれども、諸動物を殺して食する事あり、蝮、飯匙柄、海蛇等は共に有毒

蛇なり(蝮の條を見よ)
ペスト (黒死病) ▲ペストに腺ペスト、皮膚ペスト、肺ペストの三あり、本病の始めは俄に惡寒、頭痛を感じ劇烈なる熱を發し、程なく意識朦朧となり、恰も酩酊したる人の如き徴候を呈す。熱は四〇度以上四一度位の高熱となり。脈は迅速となり、脾臟著しく腫脹し、肝臟擴大し、重症者は三日にして死するものなり。腺ペストはペスト菌の、皮膚の小傷より侵入し、淋巴管の道筋を辿りて發生するものなり。此の場合には、二日目又は三日目に、鼠蹊(腋)の附元の邊にあり、皮下腺、頸腺、頸下腺等の淋巴管の腫脹を來し、甚しきは拳位に至る事あり。經過良好な場合には、次第に其腫を減ずれど、普通は化膿して破る、と共に死するものなり。皮膚ペストは前者よりも、深き化膿と、組織の大なる崩壊とを來すこと多し。其特徴は、皮膚に膿疱、又は腫の如き腫れ物を生ず。肺ペストはペスト菌を直接に吸入したる時に起るものにして、出血性肺炎に同じき重症を呈し、殆んど死を免る、事なしとす。

トの部

トチノキ

トチノキ「七葉樹、椴」▲本邦森林に自生する落葉喬木なり、其の長く成長したる物は高さ十間内外、周囲も又随つて一寸餘に達するもの決して珍らからず、樹皮は滑かなれども老樹になると随つて厚き剥片となりて脱落す。葉は掌状複葉にして大小共に尖り、縁は淺き鋸齒を有し、五月中旬頃、枝頭に白き五辨の小花を穂状に開く、初秋の候實を結ぶ、果實は成熟するに隨ひ自然に裂れて落下す。種子は半面黒褐色にして光澤あり、材質は稍々硬く緻密なるが故に板材若しくは建築上室内の裝飾用材として重用なるものなり。

トドリ

トドリ「鳥」▲其種類極めて多けれど、之れを大別する時は、陸鳥類、猛禽類、燕雀類、鳩類、鶉類、雉類、水鳥類、水禽類の七種とす。何れも卵生にして雄は一般に強健にして羽毛美麗なるが上に、或は頭上

トの部

に冠を戴き、或は體に飾羽を裝ひ、又は足に趾を有し、或は美音を發して鳴くもあり、雌は生殖期に臨めば巢を營み卵を産みて之を抱く、種類によりて一定の地に永住するあり之れを留鳥といふ。食餌を追うて各地に漂泊するあり之れを漂鳥といふ。又季節を定めて去來するあり之れを候鳥といふ。何れも體は頭頸、胸及び尾の四部分に分れ、頭は球状にして他部に比し小さく皮膚には羽毛を生じ、骨は内部空虚にして軟骨と異なる點多し、其最も著しきものは、脊骨、肋骨、及び肢骨の構造にあり、即ち脊骨にありては頭部を除く外椎骨は結合して尾部は甚だ短縮せり、胸骨は扁平にしてその正面に龍骨突起し、前肢の手足は皆固着し指三本ありて何れも不完全なり、後肢は大腸骨と短く、踵骨の中部以下露出し之れと跗骨との間に跗骨より合成せる一本の長骨を具ふ之れを跗趾骨と名づく、趾は通常四本あり三本は前に向ひ、一本は後に向へり、後方の一趾は母趾にして二個の趾骨より成り他は第四趾に至るに隨ひ一個を増加せり、趾數は時に三本或は二本に減する事あり各趾に

鉤状の爪を具へまた趾間に蹠を張るもあり、羽毛は鳥に固有するものにして其種類に依り二種に區別す、一は専ら翼尾の二部より生じ組織密にして質剛く、扁板状をなせり之れを翼といふ、一は主として腹面より生じ組織粗にして質柔かなり之れを翹といふ、消化器の構造は食道の末端に薄壁の一囊を具ふ之れを嗉囊と名づけ食物を貯ふることに砂囊と稱する厚壁囊あり其實頗る強固にして内面の粘膜は往々角質に變化する事あり、呼吸器及び循環器は哺乳類に等しく、体温は高度なり、鳥肉は滋養分に富みて食料に供するもの多しと雖も毒物の如き有害性の物もあり、羽毛は其種類に依りて裝飾の用を爲し或は簪とし又細なる毛は布團に入れ老人病人等に用ゐらる。鳥の種類に依りては滅亡を豫防せん爲め其産卵繁殖期に於て一定の期間を定めて狩を禁じ又害蟲を食餌とする益鳥にありては全く捕殺を禁するもあり。鳥類の糞は燐素質を含むを以て肥料と爲す。

トリオイ

トリオイ「鳥追」▲門附の條を見よ

トリノイチ

トリノイチ「百の市」▲東京に於て



毎年十一月の酉の日に行ふ、市内名所に在る驚神社(俗に大鳥神社ともいふ)の祭禮なり、殊に下谷區龍泉寺町にある驚神社最も名高し、天日鷲尊及び日本武尊を祀りしものにして、もと武藏國南足立郡花畑村に在りしを、享保年中現地に移せしといふ、此月は酉の日普通二度なれど、年に依り三度あり、其の都度祭典を行ふ、此日縁喜物としては熊手あり、頭の字を燻で筐に通したるあり、黄金餅等なるが、熊手には先きに楡扇を附し、中にはお福面、寶船、鶴龜、俵など目出度ものを飾る蓋し、寶を扱込むの意味なり。

トリキ【取木】▲接木の條を見よ。
トローオドリ【燈籠踊】▲踊の條を見よ。

ト【籬】▲一種の禾本にして、棕櫚と同じ性質に屬す、熱帯地方の植物にして、東印度諸島、琉球諸島、臺灣に産す、竹に似たる莖を有し、細長くして周圍四五寸、高さは四百尺に達するものあり、葉は羽狀葉にして、長さ六尺に及ぶ、莖は鬆髓にして無數の小孔を有し、叢生す。▲効用 本邦には産すること少なければ、工業用品として、種

種の用途に使用せられ、需用頗る廣し、木質強靱にしてよく重量に堪へ、編みて椅子、寢臺、又た、其儘杖等に製す、又細く割りて柄等を締め固むるに用ふ、重籬の弓とは、籬を幾重にも巻き締めたるものなり。

トリーニョー【糖尿病】▲主として贅澤をなし、生活を不規律に營むもの多し、又精神の過勞、梅毒、痛風、急性傳染病等、其他種々なる病氣に誘因せられ、續發せらるゝことあり。又遺傳的のものも少なからず。▲病狀は初め氣分悪しく、何となく沈み勝ちな状態を呈し、次第に重くなるとに隨ひ、身體衰弱し、濁れる尿を排泄するに至る。之れ其の特徴にして、體中の糖分が尿に混じて流出するものなり。血液には常に少量の糖分を含むものなれども、尿に混することは甚だ稀なりとす。此の病は一般に男子に多く、殊に三十五歳より四十五歳の間に最も多く、十五歳以下の小兒又は五十歳以上の老人の此の病に罹るもの比較的少なし。▲健康者にありては、食物より入りたる砂糖、又は澱粉等の如き炭水化合物は、腸消化作用により腸内にて葡萄糖に變じ、腸

壁の血管より吸収せられて、次第に身體組織、殊に筋肉中に入り、茲にて動物性砂糖といふ燃え易き物質に變化し、酸化作用の爲め力と熱を起し、脂肪と相並びて、體力及び體熱の根源をなすものなり。然るに糖尿病者は此の能力を失ふを以て、新陳代謝の作用に變化を來し、爲めに身體諸種の器官に障害を及ぼし、特に肺に及ぼす影響最も大なり。故に患者の大部分は肺病にて死するものなり。皮膚に及ぼす影響又少なからず、即ち皮膚は乾きて、其の質脆くなり、且つ癢痒を覺ゆることあり。又大抵の場合に於て痔を生じ、後には癩を發し、化膿作用を起して身體を衰弱せしめ、終に死に至らしむることあり。其他足趾に壞疽を生じ、脚部に脱疽を生ずることあり。目の害せらるゝことも又著しき徴候にして、内障眼を發する場合多し。神經系統も亦冒されて神經性の急患疼痛、麻痺等を起すものなり。就中最も恐るべき徴候は所謂糖尿病性昏睡にして、突然人事不省に陥り時に心臟麻痺を起して死することあり。▲手當としては専門醫の指定によるを第一とするも、元來此の病は醫藥といふよ

りも先づ養生に重きを置かざるべからず。食事は糖分の無き物例へば雞卵、魚、肉、茶、葡萄酒等を良とし、嚴禁すべきものは一切甘きもの、飯、豆類、芋類、果物等とす。喉痛く場合には冷かなる飲料、氷片等を用ふべし。沐浴は毎々屢々之を行ひ、皮膚を清潔にするに努めざるべからず。又居室は極めて空氣の流通良きを選び、日光に當るをよしとす。内服藥中阿片は渴氣を止め、尿及び砂糖の排泄を減する點に於て効あり。其他他糖尿病に最も効力あるものはカル、ス泉なりとす。

トードリ【頭取】▲劇場に於ける樂屋取締の職にて、座附俳優の品行を戒しめ、無用者の猥りに樂屋へ入るを制止す。其他俳優の病氣等あるときは、即座に代理人を選定して、之に代らしめ、また出語り淨瑠璃の口上及び後幕に出で、まづ……今日は之限との口上を勤む。或は雑用に消費するもの、即ち煙草、白粉、紅、蠟燭、炭團、鼻紙の類を日々仕切場より受取りて、俳優其他のものに分配するなど随分忙しき職掌なり。然れば芝居道に精通したる古老の俳優を選抜し

て、此任に當らしむ。
トーガ【冬瓜】▲とうがわん又はかもつりと云ふ、一年生の蔓草本にして葫蘆科に屬す、葉は大きくして、淺く五つに裂け毛を有す、莖にも刺毛あり、六七月頃、葉腋に黄色の花を開き、雌雄同株なり、雄花には三ヶの雄蕊あり、雌花には一ヶの雌蕊を具ふ、漿果を結ぶ、西瓜の如く圓きあり、橢圓なるあり。▲種類 琉球大冬瓜、直徑尺餘あり、長きは三四尺に及ぶ、嫩きものは綠色なれど、熟すれば上皮白く、白粉を塗りたる如し、霜の後採收す、糖漬として貯ふるもよし。▲ながとうがわ 形最も大にして、外皮に白粉なく、滑かなり、九州地方に多く栽培せらる、京阪にては二三寸伸びたる頃料理に用ふ。

▲効用 膾、和物、鹽漬とし又煮て食す、水氣多く、消化宜し、節掛として食ふ、細長く切りて乾したるを干瓢、代りに用ふ、種子は藥用に供す。▲栽培法 四月種を下し、五月初め畑に移す、若き苗は害蟲に罹り易く、芽は萎縮して伸びず、蚜蟲出來たるときは、木灰、烟草汁、除蟲菊など撒りかけて驅除すべし、又採收するには白粉の生じたるときを

成熟と見て採る可し、然らざれば直に腐敗するものなり。
トーガラシ【蕃椒】▲葉の形狀柳に似て、稍小さく、叢生す、茄子科に屬する草本なり、實は莢形をなして熟すれば赤紫、黄色等種々の色に變ず、莢には大小、長短、圓角、長方形など色々あり、其中に多數の小粒を藏す、種類には八角、日光蕃椒、獅子蕃椒、たかの爪など重なるものとす。▲栽培法 春床播にして、二三寸生長したる時移植す、實には非常なる辛味を帯び、青き時は葉も實も共に煮て食ふ可し、又漬物として貯ふによし、乾したるは貯蓄して香辛料とし、又は藥品に製す可し、又實は葉生して色美しければ鉢植として賞美せらる。元産地は南米ブラジルにして天文年中葡國人之我國に輸入してより、全國到る所に栽培し現今多額の輸出を見るに至れり。藥味の項を見よ。

トীগン【冬瓜】▲トーガの條を見るべし。
トーナス【南瓜】▲かぼちゃ、ほうぶらとも云ふ、一年生蔓草植物にして葫蘆科

に属す、三四月頃播種し、五月若芽を出し、蔓の長さ十丈に達することあり、葉は大きく、五裂して、全體に毛あり、盛夏の候、黄色の花を開き、形西瓜に似たり、雌雄株を異にし、雄花には雄蕊三ヶ、雌花には雌蕊一ヶあり、漿果を結ぶ。▲種類 縮緬南瓜 形扁圓にして、疣多けれど品質良し、本邦諸所に栽培す。▲西京南瓜 一名鹿谷南瓜と云ふ、京都に多し、形圓の如く、大なる疣多し。▲内藤南瓜 淀橋南瓜とも云ふ、形大きく、圓く扁平にして果皮は滑かなり。▲縮緬早生 小南瓜とも云ふ、形小さく扁圓なり、疣小く、早熟なり、舶來種にて美味なり。▲効用 成熟したるものは永く貯ふるを得、甘味に富み、一般に食用に供せらる、葉柄の軟なるは食ふ可く、種子は炒りて食ふ。

ドーケオドリ 【道化踊】 ▲俄の條を見よ

ドーケカタ 【道化方】 ▲芝居にて「寺子屋」の邊くる、「玄治店」の藤八等の類に扮する俳優の稱にて、單純なる道化を主としたるものなるが今は専門の俳優なく多く半道が

兼たり。半道とは敵役を加味したるものなり。

トーフ 【豆腐】 ▲大豆にて製す、其法は大豆を長時間水に漬け、十分に脹れたるを石臼にて搗き碎き、三倍程の水を加へて攪拌し、釜にて煮る、少許の荳の油を滴らして泡沫を消し、其うち布袋に汲取り搾りて、滓渣を除き、搾汁に鹽水を入れて攪き通して、四方に澤山の小孔を穿てる槽の中に布を敷き、其中に入れて壓蓋をして壓搾し、凝固して水の滴らざるを待ち静に取出して布片を剥ぎ取り冷水の中に放ち入るなり。▲効用 多量の蛋白質を含有し、滋養分に富めるが故に動物性食器に代用す可く雪花菜の如きも魚介肉類を煮汁にせば總菜用として價廉なりとす、また牛馬の飼料として最も適す、分析表を示さん

▲絹漚豆腐 槽内に敷く綿布の代りに絹を用ひたれば、膚は滑にて外見美し、▲燒豆腐 豆腐を薄く切り、巾着き二本の竹串に刺し炭火に燒きたるものなり、往々賣残りを利用することありと云ふ。▲油揚 胡麻油、菜種油にて豆腐を揚げたるものなり。▲生揚げ 油揚の一種にて肉厚の爲め内部は豆腐のまゝなるを云ふ。▲凍豆腐 豆腐を寒に當て凍らせたるもの、紀州高野にて始めたれば高野豆腐の名あり、豆腐を小片に切りて嚴寒の候屋外に夜晒とし、蜜に載せて乾燥せしむ、寒さ不足なれば一旦さつと凍て、晒す可し、一夜にして出來上る時は熱湯を掛け水を解き再び前法を繰返す事再三可し。▲凝製豆腐 豆腐を布袋に入れて水氣を搾り去り、玉子、味噌、醬油、砂糖を搗り交ぜ、味を附けて燒き固め小さく切る。▲がんもどき 豆腐の水氣を搾りたるに刻牛蒡、胡蘿蔔、木耳、麻實など混へ煎餅の如くし油にて揚げて用ゆ。▲菘豆腐 菘葉に包み、竹の葉に巻いて筒形とし煮固めて小口より切る。▲豆羹汁 豆腐製造の際鹽水水を混する前に汲み取るものにて牛乳の代用として實用せらる。▲享數年間已に豆

名稱	水分	蛋白質	脂肪	無窒素	纖維	灰分
豆腐	86.5	6.5	2.5	0.5	0.3	0.2
豆腐粕	68.5	23.5	0.5	0.5	0.5	0.5
油	99.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
凍豆腐	72.5	11.5	0.5	0.5	0.5	0.5

腐實の歌あり、足利時代田樂の製あり、又豆腐を一名おかべと呼ぶは本居宣長の白壁に例へて名けたるものとす。

ドーアツ 【動物】 ▲上は人類、牛馬等の如く數十年の壽命あり、下は數時間の短命に終る蟲類に至る迄總て生命ありて知覺と運動との機能を有し、發生成長し且つ繁殖するもの、總稱にして、其種類實に數十萬に達す、今之れを大別する時は、單細胞及び異細胞動物となり、又脊椎動物及び無脊椎動物となすを得べし、脊椎動物とは人類を始め鳥獸、魚類をも含み、無脊椎動物とは節足類、混蟲類、蠕形動物等の總稱なり、之等の動物には胎生あり、卵生あり、水棲あり陸棲あり又は水陸兩棲あり、總て動物は一個以上の細胞より成るものにして細胞とは即ち、炭素、酸素、水素、窒素及水等より成れる化合物の小塊にして、多くは球形をなして細胞膜に圍まる内部に核あり、アミイバの如き下等動物の形態は單細胞にして能く伸縮運動し他より滋養分を取りて成長繁殖す、此の細胞は温濕、電氣、麻酔等外部の刺戟に遇ふ時は忽ち收縮して其運動を休止するも

のなり、而して高等動物に至つては種々の細胞ありて各部に器官を構成し所謂分業的作用により運動、營養、知覺、生殖等の諸機能を掌するものなり、單細胞動物にありては細胞個々獨立して生活するを其分業作用に母體に相似たる形態となる。即ち雌性生殖器の卵と雄性生殖器の精子と相合するを受精といふ。受精後細胞は二四八の倍数を以て次第に繁殖するものなり、兎角體壁の各細胞は外胚葉、中胚葉の二層に分れ一方に口を開く外に尙高等動物に於ては内外二細胞の間に新に細胞層を生ず、但し外胚葉は上皮神經、感覺器等の主要となり、中胚葉は筋肉及び脊椎動物等の泌尿、生殖器の主要となり、内胚葉は消化器、管、内面の上皮、肝臟、脾臟等の主要となる又海綿、蠕形動物の各動物を除く外は、中胚葉内に體腔を生じ其内に内臟諸器官を藏む、斯の如くして動物體を構成するものなり、體の内外面を被せる細胞列を皮膚組織といふ、動物の營養も各種に依つて異なるも先づ其攝取したる食物は消化器内に於て種々の分泌液の作用を受けて消化せられ同化されて營養分となる、下等動

物の消化器は單葉にて、食物は其の一方に開ける口より入り分泌液に依つて消化せられ體内に吸収せらる、且つ不消化物は再び口より體外に排出す、而して動物の消化器は長き管狀にて前方に食物の入口と後方に不消化物を排泄する肛門とを具へ其の間前中後部の三分に分れ、前部より食物を得、中部にて消化、吸収し、後部を不消化物の排泄所とす、尙高等なる動物に至つては前部に口と食道とあり、中部に胃と腸とを具へ、後部も分れて亦數部となり、涎腺、肝臟、脾臟等より各消化液を分泌す、下等動物に於ては消化器より吸収する營養分を直ちに體内の諸組織に配布すれども、高等動物の營養分は血液又は淋巴液となり血管又は淋巴管を通じて一旦心臟に達し之れより脈管を循環して體内の諸組織に供給するものなり、動物の體内に於ける酸化作用の要素を酸素とす、動物は之れを空氣中より吸収し又酸化生成物たる水蒸氣及炭酸を體外に排出す、此の作用は一般に皮膚の管む處なれど其種類に依りて同じからず、人類鳥獸類の肺臟に於けるが如く又魚族の腮に於けるが如し、動

物の神経組織は一方には外界の刺激に感應し、一方には筋肉を刺激して其伸縮を主宰す、神経細胞は多数相集合排列して所謂神経系となるものにして、神経系の中央は神経球及び脊髄に當り之れより出づる神経系の末梢は筋肉又は感覚器と連絡するものなり、動物の繁殖は種類に依つて異なるも、つりがれ蝨の如く一個の母體より數個の小體分裂するもあり之れ即ち無性生殖と稱す、高等動物は有性生殖にして雌雄生殖器の卵巣並に精巢より出づる卵と精子との抱合により生殖す、之の兩生殖器を一個體内に藏むる雌雄同體といふ、各個別々に有するを雌雄異體といふ、動物の分類及び分布に就ては實に複雑にして其正確を得ん事は容易の業に非ざれば動物學者は全動物の系統を大別して、原生、海綿、腔腸、棘皮、擔輪、扁形、紐形、圓形、前尾、環、節、節肢、軟體及び脊索動物の十三門として各門を更に綱目に分つ例へば脊索動物とは、脊椎動物の他に、ほや類、さるば類、なめくじ魚等を含める總稱にして、脊椎動物を、哺乳、鳥、爬蟲、兩棲、魚の五類に分つが如く其他の各門も之れ

に準ず。動物は吾人日常生活に至大の關係を有し其種類に依り自ら用途を異にすと雖も、鳥獸、魚肉の如きは日用食品に適し、耕作又は運搬の用を爲すもあり、肝油、鱈魚などの薬料となるもあり、鱒、鮭の如く肥料となるあり、其他の用途甚だ廣し。斯の如くして一方には日々消滅する動物の數も少なからざれども又一方には繁殖の方法ありて陸には家畜、家禽、牧畜、又水には養魚場の設けあり最近に至つては人工孵化法盛んに行はる又毒蟲を餌とするが如き鳥類には保護鳥として捕殺を禁じ繁殖を要する鳥類には孵化期間のみ捕殺を禁するに至り。

ドーブツエン (動物園) ▲我が國には動物園を有する都市は東京、京都、名古屋、朝鮮、京城等にして中にも東京上野公園にあるは設備整頓規模宏大なり。園内には世界各地の種々なる動物を飼養して吾人の娛樂に供するのみならず、動物學の研究に極めて必要なるものなり、東京にては明治五年二月始めて日比谷の原に設けられしが、同十五年三月上野公園内に移轉して一般公衆の觀覽を許せり、當時動物の種類甚だ少

なかりしも漸次珍奇なる外國産の禽獸を集め明治二十一年には暹羅國、皇帝より、印度象二頭を我が皇室に寄贈され日清日露の役に際し我軍の捕獲せる滿洲及び臺灣産の動物甚多あり、其他、濠洲産の大袋鼠、山椒魚、双峯駱駝、駝鳥、孔雀、北亞弗利加産の獅、虎、豹、北海産の白熊其他珍鳥獸あり、

トージ (湯治) ▲温泉又は鐵泉に浴して、病を治療し、或は身體を健康ならしむることなり。温泉は其の品質種類によりて効力に差異あるものなれば、湯治を試むる人は温泉の性質を知るの必要あり。▲温泉は其の含有する成分に隨ひて單純泉、酸類泉、炭酸泉、鹽類泉及び硫酸泉の五種に分類するを得。單純泉は普通の湯湯と同様なるものにして、只少量の鹽類を含むを常とす。酸類泉は遊離硫酸、鹽酸、亞硫酸、綠礬、硼酸等を含み、一種特有の酸性を呈し、然して炭酸泉は多量の炭酸を含み、振蕩せば氣泡を生ずるを例とす。鹽類泉は多量の鹽類、例へば食鹽、硫酸曹達、瀉利鹽等を含み、あまり瓦斯分を有せず。硫酸泉は到る所に多く多量の硫化水素、又はアルカリ性硫化金屬酸を含み臭

氣を有す。而して此等種類の異なるにつれ、湯治の効能亦異なるなり。例へば伊香保及び有馬の如き鹽類泉は、婦人血の道、子宮病等に効あり、草津の如き酸類泉は皮膚病、梅毒等に適し、其他硫酸泉は疥癬、頑癬等の皮膚病に効力あるが如く、各々特種の能力を有す(委しくは温泉の條にて説明すべし)。▲上述の如く温泉は諸種の病に効能ありと雖も、要するに重病又は急病には適當なる療法にはあらず。故に病後の衰弱者、身體虛弱者、慢性的疾患を有する者等に効力あるものとす。例へば貧血症、血行不良より生ずる病、神経衰弱、慢性の胃腸病、呼吸器病、肋膜炎、腎臟病、子宮病、腺病、ヒステリー、リウマチス、痛風、神経痛、古創、打身、一般花柳病等に卓効あり。温泉の効能は其の中に含まるる、鐵物質の作用によるものにして、共に血行を良くし、神経系統の機能を盛んならしむるを以て、一般に身體の新陳代謝を増し、食慾を進め、諸排泄分泌の作用を促すを以て衰弱者は體力を増し心身自ら爽快となり、健康を増加するを得べし。其の他湯治の効能としては、温泉地

の空氣の新鮮なると、温泉地周囲の閑靜なると、温泉地にて轉地的氣分を味ふ等の自然療法により偉大なる効を奏するとあり。▲湯治者の心得としては別に六ヶ敷しきことなす。温泉浴の度數は、病の輕重に隨ひ、多少異にせざるべからず。即ち衰弱者及び老人は大抵一日一回となし、健康者は二三回を適度とす。只幾度も入浴せば効能多かるべしと思惟するは大なる謬見にして滋浴をなすときは反つて有害なる場合多し、殊に老人などはこれが爲め腦充血を起すことあり。又あまり長浴するもよろしからず、時を隔てずして數回入浴するもよろしからず。入浴後は乾きたる手拭にて全身を摩擦し、十分に拭乾すを必要とす。

ドミヨージホシイ (道明寺補) ▲ホシイの條にあり。

トモロコシ (玉蜀黍) ▲穀類の條を見よ。

トカゲ (蜥蜴) ▲かなへび、やもり、カメレオン等の一屬にして形體蛇に類す、常に草原の中に棲息すれども、或は樹間若しくは壁の間に生活するもあり、形體は四肢を

具備し、皮面の鱗は背腹の別なく生じ、何れも皆細微にして覆瓦狀に排列し、或は單に粟粒狀を成せるもあり、皮色は種々に美しく多あり、眼は、鱗を具へ、口は小さくして數多の細齒あり、舌は一定せずと雖も多くは蛇類と同じく又狀に裂け、或は蠕蟲狀にして尖端膨らみ、又は下顎に密着して口外に伸出し得ざるもあり、敏捷にして巧みに疾走す、常に昆蟲類を食とす、尾は挫折し易けれども再び成長する性を有す、一見かなへびの如くなるもかなへびの鱗は粗にして、尾の長きを以て之れを區別すべし、又カメレオンは亞細亞及亞非利加の熱帶地方に産し光線に依つて皮膚の色を變する性質を有す、之等の一屬は一般に害蟲驅除の効あり。

トリ (鳥類) ▲山椒、防風、肉桂、桔梗、白朮等を調合したる藥品にして古來より傳はれるものなり、紅白の三角形の袋に入れ酒又は味淋に漬して新年を祝ふ、屠蘇は又椒油と稱へ嵯峨天皇の弘仁年中に始まると云ふ、古は除夜に井底に懸けおき、元朝に至り取出して酒に煎じ家内悉く東方を拜し、年少者より次第に年長者に及ぼし、藥滓は井中

に捨つと云へり。
トツチリトン ▲俗曲の一種。都々逸

坊間歌のうたひ出したるもの、酒席などにて三味線に合せて陽気に謡ふ。この唄ひとくちに評すれば気がきいた唄とも云はんか、しかも江戸つ子通有の軽い皮肉をいたるところに見るなり、二つ程抜きて示す。悪い事すりや鮮のやうに網に掛るは知れたこと乾上げられて括られて遠い所へ身をやられば数々とありながら何處のいづくで暮すやら其身は其身でひやされて濫い奴ぢやと笑はれて人の口の端にかゝります。「花のあづまで其名をのこ五八娘の浮氣の白木屋お駒は、髪結のどんなもつれもゆひほどく仇な才三を三つ揃で思ひきられずぐしが開きかゝりし花ぐしのあの寛帯をさし揃で香頭が情氣でつげのくし。」

トラ 【虎】 ▲多くは亞細亞の熱帯及び温帯に棲む獸にして猫屬中最も猫に近く獅よりも細長く牡の大なるは五尺五寸より六尺五寸に至り、毛色は輝ける赤褐色若しくは黄褐色にして黒褐色の横縞あり其縞色が周圍の草木に扮れ容易に見出し難し、我が國にては往昔より産したる事なきも、朝鮮の北部即ち咸鏡南北兩道に亙り四季共に現れ人畜を害する事あり尙南亞米利加又は北亞米利加の一部にも産す、之れをアメリカ産と云ふ、何れも其性殘忍にして殊に兒を青養する時季に至れば一層野蠻となる、平素好んで草木若しくは樹木茂れる湖畔、河岸等に徘徊し、時には水を泳ぎ又は樹林に攀ち上る事もあり、鹿、野猪、鳥、驢馬、水牛、孔雀、豚、其他の家畜を捕食し、時には人を襲ふ事あり、故に虎の棲む地方にては其害を避けん爲め移住する者あり、アメリカ虎は魚類をも捕食する事あり、體の大きは普通虎よりも四肢稍々短し。▲虎狩、印度人は通例象を用ふれども、朝鮮北部地方にては鹿若しくは牛を以て因となし木柵を作り、獵者は何れも其内に潜みて之を射止むるなりと云ふ又滿洲龍圖地方の土人は或る場所を選び恰も一小島の如くし其中央に人を坐せしめ其周圍に幅廣き深淵を繞り豪中には柴草を用ひて水面を覆ひ虎は何時しか小島の人に近づき一躍之に飛び降りんとする際却て深淵に陥るを槍若しくは銃にて殺すなりといふ、又或る地方にては虎の通

が國にては往昔より産したる事なきも、朝鮮の北部即ち咸鏡南北兩道に亙り四季共に現れ人畜を害する事あり尙南亞米利加又は北亞米利加の一部にも産す、之れをアメリカ産と云ふ、何れも其性殘忍にして殊に兒を青養する時季に至れば一層野蠻となる、平素好んで草木若しくは樹木茂れる湖畔、河岸等に徘徊し、時には水を泳ぎ又は樹林に攀ち上る事もあり、鹿、野猪、鳥、驢馬、水牛、孔雀、豚、其他の家畜を捕食し、時には人を襲ふ事あり、故に虎の棲む地方にては其害を避けん爲め移住する者あり、アメリカ虎は魚類をも捕食する事あり、體の大きは普通虎よりも四肢稍々短し。▲虎狩、印度人は通例象を用ふれども、朝鮮北部地方にては鹿若しくは牛を以て因となし木柵を作り、獵者は何れも其内に潜みて之を射止むるなりと云ふ又滿洲龍圖地方の土人は或る場所を選び恰も一小島の如くし其中央に人を坐せしめ其周圍に幅廣き深淵を繞り豪中には柴草を用ひて水面を覆ひ虎は何時しか小島の人に近づき一躍之に飛び降りんとする際却て深淵に陥るを槍若しくは銃にて殺すなりといふ、又或る地方にては虎の通

路に強き保衛を設けて捕る事もあり、其保衛は強き材木を以て箱を作り其蓋には仕掛けありて上に開く様にし箱の中央には鏡を斜に建て置き、虎来たりにて箱内の鏡に映する己れの影を他の動物と思ひ力を極めて之れと闘はんとする際俄然重き蓋は上部より虎を壓し之れにて生捕るなり。虎の毛皮は猫屬中の最も美麗高尚なるが爲め古來より上等の敷皮に用ゐる來れるが最近防寒用として外套の裏などに珍重せられ價も亦頗る高し。
ドラマ ▲戯曲の條を見よ。
トンボ 【蜻蛉】 古名あきつ ▲蜻蛉には其種類甚だ多くして、其形態色澤等も一様ならず、今其普通なる物は「やんま」といふ其の形最も大にして兩眼相接、近し、其色青綠なり、飛行早く、よく小飛蟲を捕食す、更に大なるものを「鬼やんま」といふ、雌には腰に一條の青筋あり、尙黄、黒色のやんまあり、其外殿、様とんぼと稱するは、やんまより稍々小さし、又赤蜻蛉は殿様とんぼよりも小し、燈心蜻蛉といふもあり、體の小さき事燈心の如くなるが故に之の名あり、其他鐵葉、早苗葉、蕪蜻蛉等の種々あり、何れにしても蝶

又は蜂と同じく昆蟲類に屬し、不完全なる變態をなすもあり、二對の翅ありて、其の性狀同一ならず。翅肢は細かき網目狀をなし膜の薄きが故に其狀恰も羅と稱する織物の如き觀あり、口は大にして物を嚼むに適し、眼には二様の別あり、一は通常見る所の眼にして光輝を發し形大なり、他は小さき眼にて其數、通常三個あり、頭の中央に位置す、兩個の大眼は各々多數の眼の龜甲形に集合して成れるもの故に複眼といふ、然るに他の三個の小眼は各々一個の眼より成れば複眼に對して之を單眼といふ、昆蟲類は總て一對の複眼を有すれども單眼は有するもあり有せざるもあり、蜻蛉の産卵は體を曲げて尾を水中に浸し而して卵を産落すものなり、夏の間に産落したる卵は一週間位にて孵化すれど秋季の卵は翌年に至らずば孵化せず、其幼蟲をたいこむし、又はやまめ、といふ六脚を具へて水中に棲息す、漸く長するに隨つて小さき翅を生ずるに至れば蛹と稱し水上に出でて水草又は石などに這上り、體で背部裂けて硬化し爰に始めて蜻蛉となる、形甚だ愛らしきものならず故、蝶、蛾などの害蟲を捕食する益蟲な

り、然れど生命は誠に短かく成蟲となりてより後僅かに三週乃至二個月位にて死すといふ。尙蜻蛉に似たる小蟲にて、和名かかげるふ、と稱するあり、體長く前翅は後翅よりも大なり、尾は二本又は三本の長尾を有す、幼蟲は池沼の泥中に生息し、腹側に腮を具ふ、其成して成蟲となるや直ちに交尾産卵し數時間にして死す、されど其の幼蟲は二年間水中に棲息するといふ。
トンボツリ 【蜻蛉釣り】 ▲一匹の蠅を捕へ、馬の尾の毛一本にて縛り、三四尺位の細竹の端に毛を結びつく。蜻蛉の飛び居る附近に於て振廻はす時、蜻蛉之を口にすべし。その時馬の毛を手繰りつ、捕ふ。
ドクソ 【毒草】 ▲有毒の草類を云ふ、有毒質は植物全體に存するあり、又は花、實、根地下莖を限り存することもあり、最も見易きものは、一、黄、褐、白色の液を出すもの、二、辣味あるもの、三、惡臭甚しきもの、四、鮮紅又は鮮青の實を結ぶもの、此等は毒ある徴證にして注意すべきものなり、中には美花を綴りて幼兒を誘引するものあり。種類は極めて多し。▲種類 ▲梅花藻

海針藻とも云ひ、田に繁茂し、葉は絲の如く細く、花は梅に似て、小白花を著く、實は金米糖に似たり。▲大葉 何所にもある蔓草にて、葉、葉にも毒あり、口に入れば口腫れて、齒は脱け落つ、葉は發泡劑に用ゆ、▲鳥頭 山林に生ず、鳥帽子形の紫色總狀花を開く、アイヌ人は此の草の液を矢の根に塗り附け熊を殺すに用ふ。毒葉猛烈なり。▲石龍肉 溝等に生じ、貝細工の如き五瓣小黃花を開く。▲曼陀羅花 葉は茄の如く紫色なり、水氣多く軟かにして、花は紫色をなし、牽牛花に似たり、實は圓く刺あり、熱すれば烈開して黒き種子を出す、眼り食へば一時狂氣の如くなる故、きちがひ茄子とも云ふ、▲黃蘗 花は黄色にて莢に黒き小粒を包む、花の紫なるは、▲紫葳 と云ふ、惡臭、強く容易に除き難し。▲たけごさ 博落迴し、しやきぐさ、と云ふ、葉は牛蒡に似て、縁にギザンあり、裏は白し、莖の長さ七八尺、其中に黄褐色の猛烈なる毒液を含む、丘陵などに生ず、この草を竹と共に煮れば軟くなりて細工に容易なり。▲同々 蒜 莖葉共に毛茸あり、實は球形なり、▲毛

蔓山間、田畔の濕地に自生し、花は黄に
て八重なり、一重咲は▲うまのあしけたと云
ふ。▲龍葵 葉は酸漿に似て短き毛あり、
石龍芮の如くして白し、南天程の實を結び、
熟すれば紫黒色となる、實に毒あり。▲龍珠
やまはづきとも云ふ、實は毒なり。▲蜀
羊泉 卷鬚ある蔓草なり、葉は菊の如くし
てギザ／＼なく、花は白く心は黄なり、南天
竹の如き實を結ぶ。▲澤漆 莖の高さ一尺、
四瓣の小花を開く。▲黄若 陰濕なる山地に
生じ、之を食へば狂すと云ふ、めきぐさとも
云ふ。▲甘遂 莖、葉、實皆白汁を出す。▲
大戟 宿根より發生し、莖圓く、葉は濃綠色
にしてギザ／＼あり、淡紫色の四瓣花を開
く、實に疣あり。▲草薢 毒あり。▲黍
蘆 藜藜蘆。▲延壽草。▲山梗菜。▲
半菫 莖、又毒草なり。▲石蒜 彼岸花、天
蓋花、舌まがり、死人花、幽霊花等の名あ
り、竹藪、墓地などに生ず、花も毒あり。▲
鐵色箭。▲鹿葱も有毒なり。▲芹 葉、鉤及び
▲大芹は芹に似たるものにて、地下莖は、
の如く肥大し、この草を食へば口舌共に拘
牽して死す。▲どくにんじん は矢鳩答と

云ひ、昔し希臘にて罪人を毒殺するに用ひた
り。▲天南星 は地下莖に毒あれど、よく
煮れば食ふ可し。▲象頭花 は天南星に似
たるも葉は大きく、▲うらしまきさう 竹林濕
地に生ず。▲斑紋 莖に蝶の脊に似たる
紫黒色の斑紋。▲商陸 花に白紫の二種あ
り、實に毒あれど、生根は薄く切り灰汁に煮、
二三日水に浸しおけば無害なり、葉は味酸汁
に入れて食ふ。▲藤麻 觸れば疹痛を覺え、
▲罌粟 はモルヒネを含む。▲有毒樹木。
▲榎木 牛馬之れを食へば中毒を起す、其葉
の汁は毒蟲を殺し、毒類を除く。▲橘 葉皮
は抹香に製すれど、實には劇しき毒あり。▲
毒蕪 野葛 皆有害なり。▲醉魚草
川岸に生ずる劇毒を有する植物なり。(菌類其
は項を見よ)

始めは痒痒、疹痛を覺え、劇しく熱發して、
呼吸困難となり、痙攣を起して死す、此葉に
飯粒を混じ、殺鼠に用ふ、諸國至る所の山野、
河原などに茂生す。

トクサ 【木賊】 ▲隱科植物、木賊科に屬
す、四季緑を放つ、葉は單一にして枝なく、
地上莖は二尺位に伸び、地下は地中に匍匐す、
莖は中空にして、節を具へ、節には黒き鞘を
有す、葉の變形なり、莖の尖端に楕圓形の穂
を出す、穂には多數の龜甲形の鱗ありて、其
内部には六七箇の子葉を生じ、其中に包子を
包む、河沼等の濕地に多く産す、丹波船井郡若
森邊の産名高し。▲効用 莖の表面は粗糙に
して、珪酸を多く含む故、工業用に用ひ、材
木、岩石、骨、角金屬類を研磨するに用ふ、
又之を乾燥したるを薬用に供し、之を堤防に
植えれば土壤を固むるの功あり。

トケツ 【吐血】 ▲原因は、胃潰瘍、胃
痛、又は心、肺、肝等内臓の疾病による胃
粘膜の鬱血、或は腐蝕薬の嚥下等なり。而
して、通常嘔氣、胃痛等を伴ふものなり。そ
の血液中には多く飯粒その他の食片を混
じ、暗赤色をなす。かゝる場合、患者を擗

中に横臥せしめ、絶食せしむべし、かくて
廿四時間後は、煮沸牛乳を冷却して、二匙
づゝ與へ、數日の後更に他の流動物を與ふ
るものとす。胃部に氷嚢を貼し、又氷水水
片等を嚥下せしめて、往々奏効することある
も、これらはいま醫師の指圖に従ふべし。患
者人事不省となりたる時は、顔面に冷水を灌
ぐべし。更に(喉血)として、肺結核、肺炎、
肺ジストマ、急性氣管支炎、肺炎、心臓病
より起る肺の鬱血の際にも、肺より出血す
ることあり。此の際に、普通咳嗽を伴ひ、其
の血液は、鮮紅色にして泡あり。かゝる時
は、病者を褥中に臥せしめ、心身を安靜にな
らしめ、出血多量なる時は、談話を禁ずべし、
病氣は空氣新鮮、稍冷かなるを可とす、食
物は過温、刺激性は共にこれを避くべし。

の産最も有名なり、採收は夏土用前のものを
上等とし、其れ以後は秋草として宜しからず、
種類にはおはふさ、きぬぐさ、おにぐさ、ひ
らぐさ、いそぐさなどの別あり、心太の製
造は萬治元年薩摩侯、山城國伏見の驛に宿し
たるに、従者理脂を食膳に供し、其残りな
地に棄てたるに、數日を経て凍りたり、これ
より始めてこの製造に着手するに至りりと傳
ふ。▲製法 天草を酒して水に煮、冷まして
固めたるなり、寒氣に曝したるを寒天と云ふ、
製造地として有名なるは、攝津、丹波、信濃
の三國なり、攝津二國の製方は、専ら細寒天
乃ち流蘇寒天を作り、信濃にては角寒天を作
る、乾燥法も前者は風によるも、後者は唯だ
寒氣による、▲漂白は九月下旬より十月中旬
迄に従事し、其法は天草を平地、堤防等に撒
布し、八日乃至十二日間曝露するなり、こ
れを一番曝と云ふ、更に之を水に浸し、春き
て介殼砂、石を除き、葎實の上に擲げ干す、
これ二番曝にして三回にて了る。▲煎薬法
▲十二月下旬より寒中六七十日間に従事
す、瓶附の大釜に水十七八石入れ、午前四時
に火を焚き初め、煮立ちたらば、前の漂白菜

二十貫を投じ、午後四時迄烈火上に煮て後、
火を去りて冷まし、水三四石を注入して攪拌
しなから、少時煮て午後九時頃になりて大な
る麻袋に入れて擗る、この擗り汁の凝
結せるもの即ち心太なり、これを適度の大き
に切りて用ふ、寒天にするにはこれを細く或
は角形に切りて野外の葎實の上に列べ、晩方
より夜明け迄、華氏三十度以下の寒氣に晒し
て製す、又赤色を着けるには蘇枋二百三十
匁、黄皮八十五匁、明礬一斤の七分を解き
交ぜ、白寒天を染む、又寒天紙を作るには、
上等の寒天五百匁に水三斗を注入して解か
し、淺き角盆の中に固まらしめ、更に板上
に移して乾燥せしむ、これを水に浸して洗ひ、
別の板面に貼附くるなり、色々の色紙を得る
にはこの水に種々の色彩を交へお可し。▲
効用 夏時に食用に供す、菓子製造にも用ふ、
西洋にては糊の代用とし、酒を澄すセラチ
ンの代りに用ふ、其他、食品製造の材料と
する外、パクテリア培養基の製造に用ひ、寒
天版と稱する、印刷器はこれにて作るなり、
心太は突出器にて突出し、皿に受けて、醬
油を交せて食ふ、如何なる山間の僻地にもあ

るは人の知る所なり。(料理の部参考)
トコカザリ 【床飾】 ▲室内装飾の條を見るべし。

トコスレ 【毒瘡】 ▲患者が長く病瘡にある時は、其の瘡にてすれたる部分に傷を生ず。これ即ち毒瘡なり。傷を生ずるは、壓迫を受けたる部分に、血液の循環不充分なるを以て起る現象にして、時として其の部分に全く腐蝕することあり。また血液の中毒を起し、其の他危険なる毒毒を齎らすことあり。毒瘡の最も多く生ずる所は、腰腎部、腕、肘、肩等に、殊に患者の甚だしく發汗する時、或は皮膚の濕ふ所に生じ易し。之を豫防するには、常に皮膚を清潔にし、度々醋水或は稀き酒精にて洗滌すべし。又臥床の選擇に意を用ひ、厚くして柔かきものを選び、出來得べくんば西洋ベッドを用ひべし、其の他護謄製の蒲團又は藁蒲團を用ひるも大に良し。然らずんば毒瘡の部分に護謄の圓き空氣枕をあつるを可とす。

トデアシ 【土手節】 ▲小唄の一種。投節の後に起りたり。吉原通ひの行きづりに「かゝる山谷の草深けれど君が住家と思へば

よしや玉の臺もおろかてござる余所の見る目もいとわかしやにお笑ひやるな名の立つに」と遊客のうたひしものなり。

トサフシ 【土佐節】 ▲淨瑠璃の條を見よ。

トミモトアシ 【富本節】 ▲語物の條を見よ。

トキワズ (常盤津) 淨瑠璃より分派せる語物なり。開祖を常盤津文字大夫とす。文字大夫は通稱駿河屋又右衛門といふ。宮古路豊後津の門人なり。元文の初め、江戸に下り、宮古路文字大夫と稱せしが、元文四年宮古路節(また豊後津ともいふ)幕府より禁制せらるゝや、三味線師佐々木市藏と共に工風して、同節の淫靡卑猥なる文句曲節を改め、常盤津節の一派をなせり。文字大夫の門下に名あるもの品太夫、文中等あり。品太夫は富本の一派を立て、文中は二代目文字大夫となる。文中の弟兼太夫、名人の聞え高くして、能く常盤津節の根柢を固め、爾來連綿として今に及び、多くは文字大夫の號をつけたり。今東京にて、十二世小文字大夫統を受け、清元と共に下流、特に職人、社會に歡迎せ

られ、各所に師匠ありて、其の勢甚だ盛んなり。

トシヨ 【鮎】 ▲柳、鮎、緋鮎など種々の名稱あれど之れを二種に分つ、一は普通通鮎、一は鷹羽鮎となす。後者は體に黒斑あり、多く京都地方より産す、又一種稻の花鮎と稱するは稻の花落ちて後水田に生ずるが故に之の名稱あり。鮎は支那、朝鮮、臺灣等至る處に産する喉類の泥鰌科に屬するものにして、鱗なく、形鰻に似て短く六七寸を最長とす。口部に十乃至十二本の鬚を有し、溝渠、水田等に生じ時々水面に浮びて泡沫を吐く事あり。本邦にては到る處に産すれども京都、上野、信濃、千葉地方は最も産出多し。捕獲後数日間清水中に放ち、よく泥を吐かしめ然る後焼き又は煮て食す、味頗る佳にして蛋白質及び脂肪に富む。

トシアテアソビ 【年節當て遊び】 ▲厚紙にて左圖の如きもの六枚作る。今其方法につき一例を擧ぐれば、假に爰に青年あり。年節幾歳なるかを知らざりしが、此札を見て、一と四と五の札の中に己れの年齢ある由、云ひたるにより、左端の數一、八、十六

を抜き、左上端の數字を加へれば容易く、其の年齢を當つるを得。
トビ 【鷹、鷲】 ▲羽毛は茶褐色にして尾端開き、其狀扇を開きたるが如し、猛禽類にして眼鏡く、嘴曲り、尾は硬鬚羽と稱して箭羽に用ひらる。脚は灰青色にて黒く鉤爪を具へ、外観大なれども體肉甚だ少し、食餌は鷓鴣、雀子等を捉り時としては不意に飛來りて、人の携へたる鳥類魚族等を攫去する事あり。而し害蟲驅除の効あるを以て、現今は保護鳥中に加へらる。附言 往古神武天皇東征の折天候かに曇り咫尺を辨せざる時一鷲來つて天皇の御彈に止まり、金光を發し鳥賊を驅服せしめ、皇軍の大捷に偉勳を奏せし事ありと、依つて現今金鷲勳章として軍功の章に選定せられたるは即ち之の故事に因るなり。

トビウオ 【飛魚】 ▲我國の各地に多少之れを産すれども、就中肥後、薩摩の海中に最も多しといふ。臺灣、朝鮮等に航海する船客は玄海附近に於て、又印度洋に航せば香港、新嘉坡の海中にて此の魚の飛行を見る事あるべし、此の魚の空中に飛ぶは通常、海豚の

如き大敵に襲はれたる時にて、其海水を吐づる際強き力を以て水面を拂ち一二乃至三四尺の高さを飛ぶものなり、其翔る距離は僅か三十秒内外にして二三尺に達すといふ。體形は鰻狀にして大きく、口は小さく、齒は短小なれども眼は最も大なり、背鰭は甚だ小なれども、胸鰭は大にして非常に發達し、體の兩側に附着して空中を飛ぶに便ならしむ。體色は背部若黒にして腹部白し、産卵期は四月乃至六月頃にして早朝又は月夜に乘じて、陸地に接近し水深ある深丈餘の海底、若しくは樹木の蔭ある所に群集して産卵し、後直ちに深海に去るを常とす。卵は粘着性を有し、茸毛を以て藻類に附着す、凡そ一週間位にして孵化し、稚子は七月頃に四五寸となり十月頃に至らば己に遠洋に退去すとす。

トビヒ 【飛火】 ▲此の病は、小兒に多く、急性濕疹の一なり。始め身體に粟粒若しくは赤豆位の淡紅色或は紅色の發疹を見らる。最初小結節を以て始まり、數日間に發疹増加し、結節は透明なる漿液を充ちたる水泡を作る。此の水泡中には、時として數日後其

(一)

1	3	5	7	9	11
13	15	17	19	21	23
25	27	29	31	33	35
37	39	41	43	45	47
49	51	53	55	57	59

(二)

2	3	6	7	10	11
14	15	18	19	22	23
26	27	30	31	34	35
38	39	42	43	46	47
50	51	54	55	58	59

(三)

4	5	6	7	12	13
14	15	20	21	22	23
28	29	30	31	36	37
38	39	44	45	46	47
52	53	54	55	60	0

(四)

8	9	0	11	12	13
14	15	24	25	26	27
28	29	30	31	40	41
42	43	44	45	46	47
56	57	58	59	60	0

(五)

16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	48	49
50	51	52	53	54	55
56	57	58	59	60	0

(六)

32	33	34	35	36	37
38	39	40	41	42	43
44	45	46	47	48	49
50	51	52	53	54	55
56	57	58	59	60	0

内容の蒸散及び吸取によりて、自から消散する事あれども、更に變じて膿疱となり、一定時後に黄色或は黄褐色の痂皮を以て被はるゝに至る事あり。かくして皮膚炎を起し、分泌物殆ど止み、表皮は徐るに補修せられ、皮膚充血去りて、唯だ僅かの時日、黒色の斑點を残して、全く恢復するに至るものなり。此の病の原因は多くシヤツの壓迫及び摩擦、温氣、炎熱、濕潤等の皮膚刺激が原因となりて發病する事多し。療法は、初期結節には、百倍の石炭酸水、或は三十倍のレゾルチン水等を塗りて効力あり。水泡及び膿疱には、硼酸或は亞鉛華等の緩和軟膏を貼布して、皮膚を保護し、發汗には亞鉛華軟膏の如き軟膏を用ひて之を制すべし。結核及び上皮膚剝離には、單にオレフ油浸注或は塗布して、其の上に撒布劑を施す可とす。此の病の發生したる時は、入浴或は洗拭を禁じ、皮膚を刺戟せざる様注意する等最も必要なる事なり。

【舌】の部

【舌】の部

は一定の語の全然發し能はざるもの、或は正確に發音し能はざるもの。而して他の一は、個々の發音及び音の聯結は、正確になし能ふも、發音筋、關節筋、呼吸筋等の運動不調なる爲め、單に談話の途切れるものにして、筋肉に變則なる運動の生ぜざる間は、その談話は平常の場合と相違なし。▲原因 前者は、通常先天的に不器用なること、又は談話の際の不注同等に因り起る。されど亦舌、唇、齒、顎、口蓋、鼻等の不調なるに因りて、生ずることあり。而して、此の種の言語障害は、三歳に達する迄は、言語は平常の如く發達するも、三歳を越ゆるに至りては、即ち病狀を呈す、若し夫れ本病にして益々その進行の度を増さんか、一般他人は勿論、父母兄弟等と雖も、その言語の了解困難となるに至る。何となれば、本病患者は、その發し能はざる音、或は言語を全然漏らさざるか、若しくはこれに、他の類似の音を以て代用となす。又困難の音の聯結する際には、第二の音を發せず、又は似寄りたる音を以てこれに代用するに至ればなり。一般に發音の不調は、語音に多く、これを分ちて三となす

を得べし。▲(一)單純の舌鳴とは、鋭く又は程かに話す時、舌尖の、下齒列の後ならで、上下齒列の間に押し入れらるゝにより来るものなり。▲(二)側方舌鳴とは、平常氣流の、下門齒の中央より出でず、側方白齒を越へて、一種の音を發しつゝ、出で来るものなり。▲(三)舌音の鼻にかゝるものにして、器官には缺點なし。即ち健康者の談話に於ては、軟口蓋板の起き上るに依り、鼻腔と口腔との連絡を絶たれ、發音に與らざるものなるに、この患者に於ては、音聲が口の氣流よりせしめて、鼻の氣流にてつくる。故に母音は一種の鼻聲を帯び來り、子音は不完全なる發音を爲して、甚だしく難解の言語となるなり。▲療法 藥物療法はその効を奏せず。故に器官上の關係を、通常の如く調節し、誤音又は發し能はざる音は、發音器を以て、自然にそれを發し能ふに至るまで、十分練習を爲すこと肝要なり。而して、子音の連續する言語はこれを避け、精神の安靜を保ち、ゆるやかに發音し能ふ様自らも力め、亦他動的にも然かなすこと最も必要とす。

【舌】の部

【舌】の部

【舌】の部

【舌】の部

とす。▲コンデンスミルク 煉乳は牛乳中の水分を蒸發せしめて、三分の一乃至五分の一に濃縮したるものにして、之に砂糖を入れたるものと、入れざるものとの二種あり、普通多くは砂糖を加へ、甘味をつけ、併せて腐敗を防ぐものなり。其の砂糖を加ふる割合は、精撰したる白糖、練乳百に對し十乃至十二なりとす。▲優良の練乳は良好なる牛乳に砂糖を加へ製したるものなれば、其の色帯黄白色にして、蜂蜜の如き稠を有し、少しも他の臭氣なく純粹の甘味を有せざるべからず、又刀尖を以て其の一部を取り、之を流下するに際し、毫も砂糖の粒などを含まず全液同質ならざるべからず、而して冷水四分中に全く溶解するを要す。但し練乳の色澤は、之を製したる時季に依り多少の差あるものなり、即ち夏季に製したるものは、其色黄にして、冬季に製したるものは、其色白し。凡そ新鮮にして善良なる牛乳を攝氏四十五度より五十五度の温度を保ちて、一定の良白糖を加へ精製したる練乳は優良品なるべし。▲煉乳製法には、鍋又は蒸發釜等を用ひ、極めて簡単に製する法あれども、此法は

大抵温度高きに過ぎ、臭氣を帯び、色澤を損するものなり。今多く用ゐらるるものは、真空なり。真空鍋は、二重底にして、前後兩面に硝子窓あり、氣壓計、檢温器、見本取出札煉乳及空氣活栓等一切附屬し居れり。▲コナミルク 粉乳は牛乳の水分を蒸發せしめ能く乾燥して粉末となせるものにして、通常脱脂乳より製す、粉乳に二種あり、砂糖を加へたるものと、之を加味せざるものとあり。粉乳は、嬰兒の飲用する乳汁の一部、又は全部に代用する目的にて製するものなれども、牛乳シヨコラード(小兒用粉)などと共に未だ需用多からず、粉乳は、脂肪の腐敗又は他の臭氣を有せざるは勿論、砂糖の外に異物を含有せざるを要す。小兒用粉は、蒸發濃物となしたる牛乳に、燕麥粉、大麥粉、米の粉等を混じて製したるものにして、多く小兒の飲用に供するものなり。▲ウシノチ、牝牛の乳房より分泌する白色にして稍粘稠ある甘味を有する液なり。之は主要なる滋養食品の一にして、身體の健康保存に必要なる總ての物質を全部含有し、小兒は此れのみにて能く發育す、大人も亦之を飲み又は之よ

り製したる物を食す、是れ其の食品中重要な位置を占むる所以なり。▲牛乳鑑別法 普通の家庭にて牛乳を購入せんとする際には、成可濃厚なるものを選定せざるべからず。其簡單なる見分け方は、牛乳を搾瓶の爪に點滴したる一滴が流れずに白濁の玉をなせば先づ良好なる牛乳なりとす。又熱を加へ消毒を行ふに際し凝固(うのはなの如きを生ず)するものは新鮮ならざるものと知るべし。方今市中に販賣する牛乳には水を混じて容量を増したるもの、或はバター製造の爲めクリーム(あぶら)を採りたる残渣、或は腐敗を防ぐ爲めに種々の藥劑を加へたるもの等擧げて數ふべからず、然れども其の眞實良否を識別するは化學上の技術にして素人の能くし得る程容易の業に非ず、故に善良なる牛乳を得んとすれば宜しく信用ある販賣者を選ぶにしかず。▲小兒用の牛乳 水を入れて牛乳を稀釋するときは、胃内に於て大凝固塊を生ずるガゼン(乳中の一成分)は其の性質を變じ、人乳と等しく消化容易なるものとなすことを得べし、然れども之が爲めに乳糖及脂肪の含有量をも減すること當然なり。故に之を補ふために含

水炭素即ち糖分を適宜に加へ、脂肪の代用をなさしむれば殆ど人乳と等しきものを得べし。而して牛乳を稀薄にする程度は其の一合に對する滋養精 茶匙一杯乃至二杯位にして、普通の白砂糖なれば此の半量位を程度とす

年齢	一ヶ月	二ヶ月	三ヶ月	四ヶ月	五ヶ月	六ヶ月	七ヶ月	八ヶ月	九ヶ月	十ヶ月	十一月	十二月
牛乳	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
水	三	三	三	二	二	一	一	一	一	一	一	一
練乳	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
水	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一

し、營養物質大に稀薄となるの虞れあり、宜しく七分乃至十分位を程度とすべきなり。而して液の注意は冷却に在り、此の冷却を行ふに際し、他の器に移し或は瓶の口を閉塞せしめて冷所に置くが如きは往々是る事なれども、かくては折角の消毒は少しも甲斐なきに至るもの故、瓶の口は消毒前のゴム栓又は青梅線を以て堅く栓を行ふことを忘るべからず。▲牛乳と人類との差異 乳汁は動物の種類に依り其の成分を異にすること殆どなきも、其の割合に至りては著しき差あるものなり。左に人乳と牛乳との差を示さん。

人乳	水分	ガゼン	脂肪	乳糖	灰分
牛乳	87.5%	3.0%	3.7%	4.0%	1.8%
人乳	87.5%	3.0%	3.7%	4.0%	1.8%

此の比較に最も注目すべきは牛乳の

乳糖に乏しく、含窒素物殊にガゼンに富めるにあり。而して牛乳中のガゼンは、胃内に入り胃液の作用に依り種々なる變化の後大なる凝固を生ずるものなり、然るに人乳に於ては細微なる凝固を生ずるに過ぎず、故に人乳の消化容易なること明なり。人或は人乳中には脂肪の量多く滋養の價値大なりと説くもあり、然れども脂肪の含有量は、人牛共に常に不定なるものにして甚しき増減を見るものなり、隨て脂肪の多少は、優劣を論ずる上に敢て重要な關係あるものに非ず。

チリメン(縮緬) ▲絹織物の一種にして種類甚だ多し。用途は着物、羽織、帯地、襟其の他友禪染等甚だ廣く絹織物中最も重要せらる。其の縦糸には普通撚のなき生絲を用ひ、緯糸にも生絲を用ふれど、これには極めて強き撚をかけ、而して普通の手織に製作し、然る後これを温湯中に入れ、糊抜きを施し、縮寄をなし、水洗せる後、木製の棒に巻きつけ蒸氣を以て蒸すか或は棒に巻かずして廣げたるま、其の織物の幅に出してよく揃へつゝ蒸し、以て其の仕立を終るものなり。其の経緯及び緯糸に本生絲を用ひたるものを

本製と稱し、経糸に本生糸、緯糸に玉糸を用ひたるものを玉製といふ。又紡製と稱するものあり、経糸に本生糸、緯糸に紡績絹糸を交へ、又は全く紡績絹糸なるものなり。其の全く紡績絹糸なるものを丸紡といふ。緯に紡績絹糸と普通の捻の強き生糸とを合せて織りたるものを半紡といふ。又強く捻られたる緯糸の使用の方法によりて種々の名稱あり。普通の縮緬は右に強く捻られたる緯糸と左に強く捻られたる緯糸を二杼づつ織り込みたるものなるが、今其の左右の捻糸を各々四杼或は六杼づつ、連続して打込むときは、其の紺織は全く同一の手織なりと雖も、縮寄せを行ひ粘結法を施すに至り著しく其の外見を異にすべし。之を縮緬又は縮緬と名く。又一種の緯糸のみを製織せるものあり。これを片縮又は縮緬と稱す。又鳥帽子縮緬といふものあり。こは縮緬の緯に縮緬の緯に縮緬二本と交互に打込みたるものなり。段縮緬といふものあり。こは縮緬緯數本と平緯數本とを交互に打込みたるものなり。又其の経糸に縮緬の緯糸となるべきものと羽二重の経糸となるべきものとを並べ、こ

れに羽二重の緯糸となるべきものを打込みば、一種の外見の異りたるものを得べし。これを混合縮緬といふ。以上の縮緬類にジャカート織機等にて紋様を織り出せるものを紋縮緬といふ。縮緬は二に御召縮緬といふ。この外、平縮緬、丹後縮緬、濱縮緬、岐阜縮緬等あり右捻及左捻の緯糸を二越つ、交互に織りたるものなり。六越四越又は八越等に織りたる時は鬼縮緬又は鎖縮と稱す。又縮緬は縮緬の緯糸に縮緬緯を織りたるものなり。▲起原 縮緬の始原詳かならず、兵衛記保元三年三月二十二日の條に縮緬の名見えたれど其の製法は今考ふるによしなし。今の縮緬は天正の頃泉州堺の織工が明人より其の織法を傳へたるものなりと。後京師西陣の工人に傳へ天和に入りては紋縮緬、柳條縮緬の類を織製せり。享保中丹後の峰山の人細屋佐平治西陣の巧を傳へて丹後縮緬の祖となり。美濃の岐阜の織工また其の法を傳へて紋縮緬を織る明和に入りては其の業大に進み、産額及び精巧の度は多く京師の製に譲らざるに至り。故に世に紋縮緬を岐阜縮緬といふ。寶曆の頃近江國東淺井郡蘇波村の人中村林

助、乾庄九郎、丹後縮緬の織法を傳へて縮緬を織る其製法は一旦長濱に蒐集せしより長濱縮緬の名を以て知らる。是より先元文三年西陣の織工上野の桐生に移住して縮緬の織法を傳へ、其地の工人京師の製に倣ひて一種の柳條縮緬を製す。世にお召縮緬といふものはなり。寶曆、明和に至り足利の工人また其の巧を傳へ、一種の縮緬を織りて「かさなり縮緬」といふ。木綿縮緬は、寛延中周防國の人富山秀意が始めて織製するところにしてこれを開光寺縮緬といひ後に岩國縮緬と稱す。其後明和に入り下總の銚子にて銚子縮緬を織り出し、天保中足利の工人また一種の柳條縮緬を織りこれを木綿しほりと名づく。維新の頃幕府の浪士縮緬の織法を倣ひて既述縮緬を織り一時世に行はれしが其の製法めて粗縮なるものなりき、近年縮緬交織の業盛になりて新お召、新縮緬など一見眞の縮緬に紛ふものを製するに至り、我國重なる産地は京都、丹後峰山、岐阜、近江の長瀬、桐生及足利等とす。

チヨ一ニケ 【鳥肉】 ▲凡て鳥類の肉を總稱するものにして、古くより東西共に食膳に供用せらる。脂肪は内部及皮下に存在し、肉の中には少なし、鹽酸は獸肉の三倍を含む。雞肉の成分は、水分七〇、〇六蛋白一八、四九、脂肪九、三四、有機物一、二〇、灰分〇、九一なり、飼養法及飼養料によりて味も異なり、肉食鳥は肉食鳥に比して味も異ならず、魚を飼料にしたる家禽類は味佳美にして蛋白量多く、脂肪少なく、組織密にして硬し。

す、頭の前方にある二本の角は、棒に似て鋭き感覺を有し、其の基底には一對の大なる複眼と云ふものあり、口は吸収性を有し、上唇と大顎は縮少し、小顎は延長して右左相合する所に細き管あり、常に巻き縮めあるも食ふ時はこれを延ばす、翅は前後共に開くして、色彩、斑紋皆美麗なり、且つ翅面には細かき鱗形あり。▲揚羽蝶 は卵を構木の葉に生みつけ、數月を経て卵へりゆすばうとなる、形甚だ醜く、これに觸るれば頭の黄色の突起物より惡臭を放つ、此の幼蟲は蛹となり、數日すれば中より美しき蝶出づ、之を成蟲とす、花の間を飛び行き花蜜を吸ふ、此の蝶は草木の葉を盛に食ふ故農作物に害あり。▲蝶と蛾の區別 蝶は日中飛び歩けども、間は潜伏して出でず、蛾は夕方より飛行す、蝶は止まるとき左右の翅を背上に直立す、蛾はこれを左右にたみみて背上に横たふ。

チヨ一 【疔】 ▲疔は瘡毒にては瘡瘡と云ふ、此の病は中年の強壯なる男子に多く發生する病にして、其の原因は、餘り強き食物、殊に肉食、熱性の病、慢性胃加答兒等より起る事多し。初め豌豆乃至李位の輪狀

をなせる外皮、及び下結締織の一部分の炎症に置り、其中央にある結締織及び腺組織を死に至らしめ、其の崩れたる組織より、所謂膿栓を生ずるものを云ふ。此の膿栓排出し、或は手術後排出せば、忽ち治する事あり。されど、かゝる炎症は潰瘍する事常なり。多くは毛囊の周りに、汗腺の傍に發生し、初め唯だ熱したる痒き紅點なれど其の後直に其周囲赤くなり、固く張切れて激痛を起し、其の頃は更に白くなり、上皮隆起せられて、圓錐形を呈す。然して熱は益々昇り、痛も増して膿少し排出す。口より見れば、底に汚き灰色の膿栓あり。皮の緊張及び炎症甚しく、高熱の發する時は速に、切開して膿栓を排除せしむ。痛も止まず治し難し。近來酒精消毒の効あるを知り、大に使用せらる。すべて此の病は、刺戟によりて皮膚を害し、疔の原因たる微生物の侵入を容易ならしむるに基く。微生物とは、即ち膿菌、菌、膿菌をつくる所の小菌の種類にて、此の侵入なき時は、汗腺等の炎症は起らざるものなり。此の侵入せる小菌に對しては、アルコールの外効あり。膿栓を生ずる初めに當り、無水アルコ

ルを毎日幾回となく撫づる時は、數日を出でずして膿乾固し、瘡の發生に至らずして己む事あり。▲瘡は甚しく崩れ易く、惡膿血中に入りて其の中毒を起し、或は周圍の器官をも襲ひて、遂に死する事あれば速に手術を行はざるべからず。瘡に罹らば、掌大或は其れ以上の場所の、深く腐れる事多し。此の場合には、局部を除き去せざるべからず。疔の場合にても最初のものが癒る間に、他の場所にも多くの新瘡を生ずる事あり。此の状態を名づけて瘡瘡症と云ふ。大抵瘡は後頭、頸部、背部、腋、腋下、横腹等に顯はるゝと多しとす。

喉は雄に比ぶれば、肉も軟く味も良し、鳩肉は雌と雄の中間にあり、家鴨と鴨とは同じ、蛋白、脂肪多く、營養に富む、凡て老たる鳥り若きは軟かにして味よし。▲鑑定法 鳥肉は屠殺後久しく経たるものはアルカリ性反応を呈し、暗赤色に變ず、病死に罹りたるは多少汚黄色を帯ぶ、汁多くして不快なる臭氣あり、赤紫色の斑點を呈せり、肉冠は暗色にして鼻孔、嘴より粘液を漏らす、死後多時を経たるものは羽毛脱落し易し、前述の外眼珠、肛門に異常なきはよきものと知る可し。

チヨーチンキョーレツ (提灯行列)

▲多數の人、隊伍を組み各自、手に提灯を携へて練り歩く、行列。遠くより眺むれば紅灯籠として續く、人数多きときは五十人若しくは百人位に分ちて一隊となし、その多くは各團隊の先頭に樂隊を附して奏樂しつゝ、行進す。明治年間になりて起りしものにて舊幕時代にはかゝるものなかりし。祝賀を表するに用ひらる。提灯を結びつける竹の長さは警察の内規に四尺以内と規定しあり、行列の準備整はる前日迄に警視廳に届け出で、

尚通過地の所轄警察署の許可をも受くるを要す。

チヨーカータル (腸加答兒)

▲腸の粘膜炎の炎症なり。主として腐敗せる飲食物、暴飲、暴食などより起るものにして、多く氣候の變化時期に發生すれど、殊に夏季には本症多く、只に飲食物の關係のみならず、暑氣の爲めに温熱過分に身體中に鬱積し、隨つて食慾を減じ、消化力衰へ、其の結果些少の過食も本病を引起すことあり。▲該病に罹るときは腹痛甚だしく、下痢烈しく来るを常とし、一日少なくとも四五回より十四五回に及ぶことあり。大便は全然半乳か或は黄色の水に似たり、又時には下痢なく只這ることなどあり。腹痛は絶へず至り、時に嘔吐を催すことあり。爲に身體甚だしく疲勞し、熱の高まるを普通とす。然して最も恐るべきは、この爲めに餘病を誘因することなり。該病は急性、腸加答兒、慢性腸加答兒の二種に大別す。急性は病狀の急激に來るものにして、夏季乳兒に多し。又或る急性傳染病の場合にも、發生することあり。虎列拉、霍乱、赤痢の如きは是なり。慢性は急性に續發し、若しくは

特發するにしても、緩慢にして其の経過永引くものなり。▲重病者は是非共醫師の診察を要す。然れども輕病者は食物の攝生のみにより、治療するを得べし。食物は成るべく流動物を取り、冷熱甚だしきもの、消化惡しきものは絶対に避けざるべからず。有効なる薬は散薬としてはタンナルビルピン二〇、〇、コロンブス末、〇、五、重曹二、〇、か水薬として、黄連根二、〇を水一〇〇、〇に入れ五分間煎じ、其れにレポールチン〇、五、苦味丁一、〇を調劑して一日三回に分服するをよしとす。又二者を兼用し、散薬を食前に、水薬を食後に用ゆれば一層の効能あり。

チヨーカーツカク (腸結核)

▲肺病は肺結核より傳染する場合多し、即ち肺結核患者が自己の喀痰を嚥下する爲め、其の中に存在する結核菌が腸管の弱き所、又は損傷せる部分に寄生、繁殖して起る病なりとす。其他菌には不良なる牛乳、或は結核菌を有せる不潔なる飲食物の攝取より來ることあり。▲病狀としては主として慢性下痢を起し、多く、嘔吐に發するを例とす。其他他腸痛、腹部膨滿、雷鳴、發熱、盜汗、衰弱等の

状態を來す。糞便は液性若しくは粥狀のものにして中に結核菌を含めり。小兒にして若しこの病に罹るときは身體次第に衰弱し、貧血、發熱、便通不整等を來し、遂に全身衰脱、或は粟粒結核、又は結核性腸膜炎を發して死するを常とす。▲療法は醫師の指定によりて諸種の鎮瀉劑を與へ、腹部に電法を施し、クレオソート劑を用ひ、其の他一般の衛生に注意し、食料を選択すべし。されど本病は極めて危険のものにして、治療の効力は殆んど現れざるものなれば、治療より寧ろ豫防法に留意すべし。即ち肺結核患者にその喀痰の嚥下を禁じ、又疑はしき牛乳其の他不潔なる飲食物に注意するを要す。

チヨコレート

▲西洋飲料なり、コーヒーに次いで廣く用ひらる、コロンブス亞米利加發見の際、携へ來りて歐洲に傳ふ、梧桐科に屬する植物の種子柯々阿を原料とす、熱帯地方に多く産す、柯々阿を烘りて皮を去り、搗き碎いて其中に砂糖、ワニラ、丁子、桂皮、肉豆蔻などの香料を加へて製す。▲効用 神經を興奮せしむること茶及珈琲と同じ、肺臟より多量の炭酸瓦斯を排泄せしめ、血液の

循環をよくす。

チヨーズメ (腸詰)

▲ソーセイジとも云ふ西洋料理の名なり、豚の腸を鹽漬となして仕舞おき、使用に當りては之を洗ひて暫時水に浸し、牛肉と豚肉とを適宜に交ぜ叩き碎し、搗鉢の中にてよく攪り、鹽、胡椒、雞卵の黄味を混ぜ、又セイジ、タイムと云ふ香草を少許入れ攪り交ぜたる後、先の腸を取り、漏斗形したる腸詰器の管の先を其の中に入れ、少しく寛やかな加減に詰め込む可し、一杯になりたらば、二寸位づ、經て、縁もて絞めくり、ヘットカレードにて少時間炒るなり、之をテンパン(オーヴン)の項を見よ)の中に並べ四十分間焼き上げ、結び目より斜かに切りにて皿に盛る、附合は青豌豆などよろし。

チクワ (竹輪)

▲蒲鉾の條を見よ

チヤ (茶)

▲蒲木にて、樹の高さ四五尺に達す、葉は橢圓形にして長く、深綠色を帯びて、光澤あり、常緑なり、花は白く五辨にして少しく黄味を帯ぶ、雄蕊と花粉多く、香氣強し、秋の末花を開き、實は顆をなし、二三粒の種子を包む、茶は桓武天皇の代、傳

歌大師始めて明より持ち來る、後土御門天皇の建仁二年、建仁寺の開祖榮西禪師、宗より茶の種子を携へて歸朝す、筑前國春振山及び同國博多、聖福寺の山内に栽培す、山城梅尾の明惠上人、之を梅尾に移植し、次いで宇治に移し、爾來各所に播種せられて、北海道を除き全國到る所に培養し、今や本邦輸出品中の重要な位置を占め、年々の輸額九百萬圓を下らず、之を地方によりて分てば、静岡の二百七十萬貫を第一とし、三重六十三萬貫、京都四十六萬貫、熊本四十四萬貫、奈良三十二萬貫を次ぎとし、鹿児島、岐阜、福岡、伊予、香取、千葉、茨城、栃木、群馬、山梨、長野、新潟、富山、石川、福井、滋賀、岐阜、愛知、三重、奈良、和歌山、徳島、香川、高松、岡山、広島、山口、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄の各地方に産す、其葉は苦味甚だしきを以て苦茶を製す、臺灣産の烏龍茶は之より製す、印度種は紅茶を製するによし。▲製法 茶摘みとて新芽の採收は四月初よりか、り、八十八夜(五月二日)後二三週間を最も盛んなる季節とす、摘方は未摘の若芽の開きか、らざるを、其下葉

一葉だけ残し、其上三葉か四五葉を摘み取る、三葉かけ四葉かけなど云ふ、三葉かけは上等物を製するに用ひ、以下葉数の多き程下等なり、指先にて摘み採り、折る可からず、摘初めより十五日間を一番摘みと云ひ、其の後二三十日に至る迄は二番摘、かくして三番も四番も摘むなり。▲緑茶 摘みたる生葉を竹節にかけ、塵埃及び舊葉を除き、蒸籠にて蒸す、温度は攝氏八十度乃至九十度にて、九十五度に達することあり、やがて蒸籠の蓋を取り、長き桐箆又は竹箆にて茶の葉をかき交ぜ、又蓋をす、かくて茶の葉柔くなり、箆に附著せんとするを見計ひ、蒸籠を下ろして葉を席の上にあげ、掻き交ぜながら、團扇にて煽き冷まし其れを焙爐場に送る、初手は蒸葉を平らに攤け、其水分を蒸發せしむるにて之を露取と云ふ、水氣失せて葉少し萎る頃、兩手に集めて揉む、かくて揉みては攤け、揉ては揉み、幾回も同じ事を繰替へし、葉の乾くに從ひ、益々盛んにこれを行ふ、かくするは葉状をしなやかにし、香氣を發し易からしめん爲なり、やがて茶の葉乾きて手に濕氣を覺えぬ様になれば、焙爐箱より取出すなり、こ

れを萎揚と云ふなり、これを冷まして又焙爐に入れて加熱す、粘氣出づれば、力を込め注意して揉む二番揉と云ふ、此度は茶葉の形状定まるときなれば焙程の注意、蒸籠を要するものなり、茶の焙の水分減じて黒色に變ずるに至らば、練焙爐に移し、火力を弱め注意して揉み、出来たる粉茶は別に焙爐の隅に集めおき、厚紙を焙爐箱の上に布き、練り上げたる茶を其上に撒布し以て乾燥するなり、又緑茶を海外輸出の目的を以て、焙爐にかけ再製する方に二様あり、甲は釜焙とて、鐵釜に茶を投して、片手に掻き廻はし、五十分経ては水分は蒸發して灰色となる、これを冷釜に入れ二十分研磨して、篩にかけ粉茶を除き、箱詰とす、乙は籃焙と云ひ、竹製の籃焙爐に入れ、五分毎に上下を轉廻し、冷釜の中に研磨篩にかけて箱詰とす、緑茶の染料にて着色し、美觀を呈す。▲曬茶 其中の薄茶には十年以上、二百年以内の葉を用ひ、濃茶には二百年以上の老樹の葉を用ふ、兩方共摘みたる葉は三分五厘位の目ある、めんさい篩にかけ、これを蒸籠に移す、徑一尺八寸、深さ二尺二寸の鐵釜と云ふに湯を

沸かし、蒸籠をかけ、其中に茶葉凡そ六十枚程入れて蒸す、湯氣の上がる頃、蒸走と云ふ臺の上に取出し、團扇にて直に煽きて冷ます、これを籃にまき、焙爐にかけて乾す、焙爐室は出入口を閉ぢ、空氣の流通を遮断す可し、さらへと云ふ竹籠にて茶の葉を掻き交ぜ、乾きたらば、鹽より出して箕にてふき、黄葉、莖など除き、數爐の分を集め、煉爐に移したるを、弱火にて乾かす、これを幾度も篩ひ分けて貯ふ、用ふる前二日に、籠にかけて攪きて粉にす。▲紅茶 煎すれば紅色になる故かく名づく、これを作るには生葉を日光に晒らし、一時間位経ては、葉を揉むも昔もなく、手を開くも其のまゝにて本には揉み歸らず、葉柄も折れぬ位の所にて、揉み採りするのには熱茶と同じ様なれど、焙爐の代りに、條溝の多くある揉葉臺を用ふるの差あり、而し之れも最も必要なるは、醱酵法なり、これによりて紅茶特有の香氣と色澤を附與す、扱てそれに二様の仕方あり、揉みたる茶を直徑三四寸位の塊にし、白布を覆ひて日光に乾す、尙一方は、籠に入れてよく蒸へ附け、白布を被ふて日光に晒すなり。▲玉露 茶の老樹

には其上に覆下と稱ふる日覆をなす、其下にはある茶の碾を摘みて製す、綠茶の最上品とす、方法は碾茶に異ならず、唯乾燥の際、焙爐上に鐵網及び鐵條を架し、其の上に框に厚紙を貼れる助炭を載せ、其の中に蒸葉を入れ、手にて差採りして乾燥するなり、凡て覆下の茶葉は柔く粘氣強よければ、手に附着し易し、故に熱達せる職工の手によらざる可からず。▲効用 茶の中に含む茶素の作用により、適量の使用は神經系を刺激し、血液の循環を良くす、筋、神經を活潑にし、動脈の血壓を強盛にし、尿の分泌を促がす、されど疲勞の甚しきもの、消化不良、虛弱の小兒婦人など漫りに之れを飲めば、頭痛、不眠、消化不良、心悸亢進、腦充血などに罹る。

▲先づ材料を用意しおき、茶碗の中に入れ、蒸籠の内に蒸す、盤の蒸汁に鹽、醬油を混ぜたる清汁の中に生雞卵を割り込み撻廻はす、雞卵は普通大は茶碗一つに一個の割とし次に記せる種物を入れ、汁を八分目程注ぎ入れ、釜の中に炭又は箆を渡し炭を載せて其上にて蒸してもよし。▲種物 三種から五種位とす、其の多

きより取合 大切なり、又香料を副ふること忘る可からず、種物を季節にて示せば。▲春 は鴨、雞、鯛、白魚、魴、鰻、烏賊、針魚、貝柱、乾海鼠などに、筍、葱、牛平、蕨、波蕨、草、三葉、嫩菜、土雞、椎茸の類。▲夏 蒲籠類、鱧、よせ烏に椎茸、長芋、菜、木耳、若荷の子など。▲秋 鱈、鱒、鮎、鮎、鰻のたき、鮎に松茸、初茸、栗、蓮根、葛、玉子豆腐、はちま豆、うす葛煮など。▲冬 鴨、比目魚、生鰻、鮫、伊勢蝦、蒲鉾、玉子、生むき大根、わらびの穂、もみりのり、百合根、獨活、銀杏などあり。▲栗 生栗の蓋を取り、大茶碗一箇に栗一箇の割にて山菜、卸にかけ、豆腐、薯蕷、葛など少しづゝ入れ、昆布煮汁にて好みの種物にかけ蒸す。▲湯葉 生湯葉を卸したる山菜類と一所に揃り混ぜ、上等の湯を解きて交ぜながら入れ、卵の代用とす、又木の芽、柚子、山椒、生姜など香料に適當なり。

以外の用無けれども、中流以下の家庭に在りては、或時は主婦の居間となり、家庭の團樂の所なり、子供の休息所となり、また食堂ともなる所なれば、家庭の最も重要な室なり。されば大家には主として女中、頭などり、監督下にあり、中流以下には主婦の司る所なりといふべし。茶間は成るべく廣く、日光の射込、風通などよく、臺所に覆きて設くるが適當なり。室内の裝飾も、愉快にして趣味深き繪畫など掛け、一家相集りて茶を喫し、面白き談話をし、一日の勞苦を慰むるに適はしき所ならしめざるべからず。此間に備ふべき家具は、火鉢、茶籠、菓子籠、筒、食卓などなり。

▲古來雅客の間に流行る儀式にして、其の盛衰は、建仁二年茶西國師の宋より歸れる時、始めて茶の種子を持ち來れるにあれど、一定の方式の來れるは、足利將軍義政の時なり。文明年間、南都稱名寺の邊に珠光と云へる閑人あり、常盤に湯を煮、同好の友引拙、宗陳、宗愔等を招きて茶を點て、興を塵外に求め居たり。時の將軍義政之を開き、珠光を召して茶道を

開きしに、珠光緒しく清淨、禮和の趣を言上す。義政甚だ意に協ひ、命じて眞、行の菓子

柱は、杉丸太の皮附又は杉、檜、榎など、礎は自然の石、床柱は古柱、社等の舊材又は

はづしたる釜を載するもの、簾編又は組板など多く、本式には紙を用ふ。(五)鏡、釜の懸け外しに用ふ、普通黄銅又は鐵製。(六)蓋

磁器、漆器、銅、木地等類々、種々、曳舟、釣瓶、鐘樓など。(十五)建水、和唐二様あり、陶磁器、銅器、木地、曲物等様々、大脇巻、差替、平曲など。(十六)炭斗、夏は藥籠又は組物、冬は瓢。(十七)火筋、鐵製、黄銅製あり、爐には鐵製のみ用ひ、冬は炭柄を用ふ。

をおこし、床間の懸物、香爐の飾附などし、次で数寄屋の入口の外なる手水鉢の水を換ふ。客は此時一同庭上に出で、並立して亭主

手に運び入れ、あとを羽帯にて掃き清め、客一同の香盒を見終るを待つ。(四)會席、次に會席として、客に飯と酒とを饗す。(五)中立

正し、建水の向ひに置く。かくて服紗をは
つして左へ渡し、膝の脇にて開き、よく調へ
て之を折る。是を袱紗さばきといふ。さて折
りたる袱紗を右手に持ち、左に茶入を取り
之を拭き、水壺の前に飾る。次で再び服紗を
調へ直し、左に持ち、茶杓を拭き、之を茶
入の上のせ、茶筌を拭き、之を茶入の右に
飾り、服紗を右手に持ち、水壺の蓋の
左隅を一字に拭き、また左に持ちかへ、
右にて茶巾を取り、之を水壺の蓋の上の
せ、次で茶碗を膝の前に直し、柄杓を右手に
取り、之を持ちながら袱紗を右指と食
指の間に挿み、柄杓を左に移して膝の上に立
て、服紗にて蓋の蓋を軽く拂ひ、その袱紗に
て蓋を取り、之を蓋置の上に置き、袱紗はま
た腰に挿み、柄杓を右に持直して湯を汲み、
茶碗の中に注ぎ、柄杓を釜の向ふの縁にか
け、右に茶杓を取り、左に茶碗を持ち、茶
筌をすく。これを茶筌とちといふ。茶筌と
ち終れば之を舊の所に置き、茶碗の湯を建水
へこぼし、茶巾にて茶碗の周囲及び内を拭き、
次で茶巾を三ツに折り、更に横三ツに折り
直し、釜の蓋の上に載せて、暫らく両手を膝

におき、指を組み、心氣を静む。さて次に、
右に柄杓、左に茶入を取り、柄杓を持ちたる
儘右の指手にて茶入の蓋を取り、之を小板の
隅に置き、茶入を横にして口を茶碗の縁に置
き、茶杓にて茶を搦ふて茶碗に入る。これを
おはくといふ。それより茶杓は茶碗の上にか
けて、茶器の口を指にて拭ひ、蓋して舊の處
に置き、また茶杓を取り、碗中の茶の塊を
直して後茶入の上に立てかく。次に水壺の蓋
を取り、建水の陰の柱に寄せかけ、柄杓を
取り、水三杯を釜に汲入れ、湯一杯を汲上げ
て、湯と水とを混和せしむ。之を湯かへしと
いふ。次に切柄杓とて、湯を一柄杓汲みて半
分を茶碗に注ぎ、残り半分を釜に戻す。さて
右に茶筌を軽く持ち、左にて茶碗を押へ、茶
筌もて強く茶碗の中を掻立つ。茶と湯は混ざ
りて一面の泡となれば、茶筌を抜取りて茶入
の右に倒して立て、右に茶碗を取り上げ、左の
掌に載せて右手をあしらひ、一膳繰出で、
茶碗の表を客の方に向け、上客の方に向ひて
懐中より別に用意する袱紗を出し、茶碗と
並べ置く。かくて、上客より順次廻し、
茶碗戻り来れば、袱紗をまた懐に入れ茶碗

は形の如く取上げ、一膳下りて釜の方に向ひ、
茶の立ち方如何を見る。それより茶碗の表を
右に廻して前に置かば、客より總體にて扱
あり、亭主を受け、柄杓を取り、湯を茶碗に
汲入れ、中を洗うて建水にこぼし、之を前
に置かば、上客よりお仕舞下されと扱ひ、
亭主畏まりて水を茶碗に汲入れ、茶筌とちを
して舊の所に置き、水を建水にあげて、其
こぼし口を茶巾もて拭き、其儘茶巾を懐中
に入れ置き、茶筌を取り、其上に立て、腰の袱
紗を取り、四角に疊み、茶杓を拭きて茶碗の
上に伏せ、袱紗をまた腰に挿み、前の如く一
回湯かへしをなし、柄杓は左に渡し、右に
て釜の蓋を取りて釜に蓋し、柄杓を蓋置の上
に載せ、次で水壺の蓋をなす。此時、上客
より三器（茶入、茶入袋、茶碗）拜見を所望
し、亭主は其の間に道具を取片附く。道具を
片附くるには、先づ建水、柄杓、蓋置、次に
茶碗（中に茶巾及び茶筌あり）、次に水壺を
持去り、三器拜見了りて返れば、それを受け
て、茶入の袋を左の掌にのせ、茶杓を上
にして二ツに折り、其外に茶入のせ、右手を
添へて持ち入る。この退く方には眞、行、草

の三式あり、眞は勝手口まで膝を立て、面
を客の前に後すりに退くなり。行は半途ま
で斯くし、草は初めより立ち退くなり。共
に勝手口までは客に後を見せず。道具運び終
れば、亭主は襖の外にて一禮し、續きて薄茶
を進むる旨を述べ、一旦勝手口を閉じて退く。
（七）薄茶平手前。さて濃茶手前終れば、菓子
を供し、煙草盆を出し、時分を計りて亭主は、
水壺を持出して勝手口の外に置き、襖を開け
て一禮す。客總體にて之を受く。さて亭主
は、水壺を風爐の右方に置き、次に棗（即ち
茶入）を右に、茶碗（中に茶巾と茶筌あり）を
左に持ち出で、之を水壺の前に置き、それ
より濃茶手前の時の如く、建水蓋置、柄杓
を持出で、各々其所に置き、さて居前を直し、
心を静め、左の手にて建水を前に進め、茶碗
を取り、右へ渡して膝の前に置き、棗を取り
て茶碗と膝との間に置き、右にて袱紗を取り、
左に棗を取上げて之を拭き、水壺の前に飾り
てまた袱紗を調へ、眞に疊みて左の掌に載
せ、右にて茶杓を取り、三度拭きて棗の上に
横へ、茶碗の中の茶筌を取出し倒しまに棗と置
き合せ、次に袱紗を二ツに折り、小板の右

をそと拭き、茶巾を取出して其所に置く。そ
れより總て濃茶手前と同じ取り出し、茶筌
をとちて出す。茶筌とちの後、茶筌は元の所
に置き、左にて茶碗の湯を建水にこぼし、右
に茶巾を取り、茶碗の周囲を三ふき半に拭き、
中をゆの字形に拭く。かくてまた茶巾を取上
げ、縦四ツ横三ツに折りて小板の隅に置き、
暫らく手を組み、心氣を静む。さて右に茶杓
を取り、左に棗を取り、茶杓を持ちたる儘右
にて棗の蓋を取り、裏かへして疊の上に置き、
棗の底を茶碗の縁にかけ、茶杓にて茶を搦ひ
入れ、其ま、指先にて棗に蓋し、之を水壺の
前なる元の所に飾り、茶杓を蓋の上に上向け
に載す。それより茶を點て、客に進むるまで
のさばきは濃茶と同じ。總て薄茶の時は、茶
柄杓を取るに先づ手柄の下に入れ、節の所を
摘みて取る。さて亭主は、上客の一口飲める
時その服加減を問ひ、客結構の旨を挨拶し、
飲終りて茶碗を返す。亭主は之を元の座に歸
り、水を一柄杓釜に入れて湯かへしをなし、湯
を汲み入れて茶碗を置き、茶巾にて拭き、以
下最初の一碗の如くして茶をばき、柄杓は草
に取り、直ぐに湯を茶碗に入れ、柄杓を釜の

上に置き、前の如く茶を點て、第二客、第三
客と順次に進む。斯くて一通り行渡りて、茶
碗戻り来れば、亭主、湯にて之を濯ぎ、上客
よりお仕舞下されの挨拶あれば、畏まりて茶
碗を膝の前に置き、水を汲みて茶筌とちをなし、
次に茶巾及び茶筌を茶碗の中に入れ、袱紗を取
りて眞に疊み、茶筌及び茶杓をふきて後腰に
挿み、また茶碗を右に取り、左にて風爐の前
に置き、右にて棗を茶碗の脇に寄せ、次に柄
杓を取り、釜に水を注し、前の如くして釜に
蓋し、柄杓を其上に置き、次に水壺に蓋す。
それより建水、次で茶碗と棗、次で水壺を持
て前の如く退く。茶碗一通り行渡りて戻りた
るときは、再び點て、一廻り進むるが法なり。以
上にて、茶會は全く終れるなり。▲尙次に
重茶碗、二茶碗及び盆點の事に就きて一通
重茶碗、薄茶手前のとき、客
進ぶべし。（一）重茶碗、薄茶手前のとき、客
の多き場合に一人宛飲むは待遠しき故、便宜
の爲め茶碗二ツを重ねて持出で、交るる點
て、進むるをいふなり。此場合上の茶碗を元
茶碗といひ、下の茶碗を二の茶碗といふ。初
め持出づるとき茶巾及び茶筌は元の茶碗に入

れ後に茶筌とをなし、また退くと茶巾、茶筌を入る、元の茶碗なり。(二)二茶碗初めより二ツ重ねて持出づるにあらす、席中俄かに客の増したるとき、茶碗を一ツ増すことなり。その扱ひ振は重茶碗と同じ。(三)盆點不意に客来りて、釜の用意などなきとき、鐵瓶の湯にて茶を點つるをいふ。茶の湯の略式の一にして、初め所要の道具を盆に載せて持出で、大方湯茶、薄茶手前の時の如くして進む。▲次に茶事に就き心得べきことは、茶會の招待を受けたる時は、前禮として、前に先方の好意を謝し、且つ參不參の確答をせざるべからず。また後禮として、茶會の翌日謝禮をなさざるべからず。茶會の時主人へ挨拶は、總て上客一人のなすべき事にして、次席下のものは何事も差控ふべし。唯、最初に於て、今日は拙者までも御相伴に預りて云々の挨拶をすればよし。是も三四客以下の者は、御同様にとばかりいへばよし。茶會は總て、上客一人が其日の正客にして、次席以下は皆相伴たるなり。點前の時、男子は皆羽織を脱ぐが本式なり。時に胸紐を解きて左右に分け置くこともあり。女は如何なる場合も、

羽織のみ、席に入る可不ならず。▲茶の飲法、茶の飲み様は、濃茶と薄茶によりて異なり。濃茶は、亭主茶を點て、茶碗及袱紗を客の前に出せば、上客は先づ次客に一禮して座を進め、右手に茶碗を取りて前に置き、次に左に袱紗を取りて茶碗と並べ置き、次でまた取上げて左の掌に敷き、茶碗を取りて其上に載せ、右手を添へて一度押戴き、次で一口飲む。此時亭主服加減を問へば、上客結構なる旨を答へて一禮し、二口飲みて二客三客へ一禮す。かくて三口半飲めば、飲口を指指と食指にて拭ひ、懐紙も指を拭き、茶碗を右へ廻して飲口を右にし、兩手を添へたるまゝ第二客に送る。第二客以下順次飲みて詰の客に至り、之を飲終りて一旦下に置き、次で上客の前に持行き元の座に歸る。此時上客は先づ茶茶を取りてよく拜見し、之を第二客との間に置き、次で服紗をも拜見し、順次また詰の客に至る。詰の客は之を拜見し終りて亭主に戻す。薄茶は、亭主茶碗に茶を入る、時、上客は第二客に一禮して菓子器を取り、懐紙を置きて其上に菓子を取り、第二客に廻す。かくて詰に至れば、遂にまた菓子器

を上客に廻はし、上客は之を元の所に置く。かくて茶出るときは、上客は菓子器を亭主の方に向け、茶碗の脇に置き、次で第二客以下に一禮し、まづ菓子茶碗の上に騎して、二ツに割り、食ふて後茶碗を左の掌に載せ、右手を添へて一旦押戴き、茶碗を廻して最初に持ちたる所を前にし、右の手先を縦にして添へ、三口半に飲み盡す。それより前の如く飲口と指を拭ひ、茶碗の飲口を向うにして元の所に戻す。▲流儀、茶道の流儀は、千家流を祖として數派に分れ、現今千家、遠州、石州流など最も普通に行はる。千家流は茶道中興の祖千利休の創めたものにて、正しくは利休流といふ。利休は、紹興の法を傳へて之を改良し、甚だ秀吉の寵を受けたり。蓋し紹興は、茶道の始祖、光の法を承けたるものなり。遠州流は、小堀遠江守政一の創めしもの、石州流は、片桐石見守貞正の創めしものなり、尙、織部流、裏家、武者小路家、有樂流、金森流、數内流、宗福流などあり。

チャキ【茶器】 ▲茶の湯の條を見るべし
チャメシ【茶飯】 ▲飯の條を見よ

チアス【瘧疾】

▲瘧疾に腸瘧疾と發疹瘧疾の二種あり。然れども普通腸瘧疾といふ場合には腸瘧疾を指すものなり。二種共に法令にて規定せる急性傳染病なり。▲腸瘧疾は腸に潰瘍を生ずる熱病にして、腸瘧疾メチルスを含みたる糞便、飲料水、牛乳、又は空氣などより傳染するものなり。又時としては不養生、及び精神感動の結果之を誘起することあり。腸瘧疾はベチルスは通常人體外には長く生存し得ざれども、時としては濕地、溜水中などにて一年以上も生活し、移しく繁殖するを以て、人これが爲めに犯され、遂に流行病となることあり。此の病症は重に血氣盛んなる人に多く、小兒又は老人には甚だ少なし。流行期は秋を最とす。傳染は成列刺などの如く劇しくらざるを以て、傍に居る人々の誰にも傳染するといふものにあらず。只體質の弱き人などに傳染の傾向あるのみ。▲腸瘧疾菌に感染してより、約二週間は潜伏期にして、著しき病狀現はれず。只幾分倦怠、食慾減退、輕き頭痛等を感ずるに過ぎず。その内熱度高まり、頭痛激しく、食氣無く、脈搏多くなり、

便通は大抵止まるものなり。かゝる微候を示してより一週間を増進期といひ、病勢次第に増進し、脾臓の腫大を認むるに至る。脾臓の腫大は腸瘧疾に大切な徴候なりとす。然して第二期即ち極期に入り、病勢頂上に達し、高熱繼續の結果昏睡状態に陥り、時に狂暴の態度を示し、又大聲を發して譫語を言ふことあり。便秘の代りに下痢を起し、日に二回乃至四回づつ、黄色の便出をす。此の期に於ける腹部の膨出は著しく現はる。極期は一週間乃至二週間にして、尤も注意すべき時なり。併發症を發するに於ては此の期間より。されど経過良しき時は病勢次第に衰へ第三期即ち減退期に入り、遂に回復するに至るべし。腸瘧疾は頗る重病に屬し、特に再發する傾向を有するを以て、手當及び看護は決して忽にすべからず。併發症としては腹膜炎を起し、又氣管支炎、耳下腺炎、肺炎等を發することあり。▲手當は素人には殆んど不可能なるを以て醫師に一任すべし。看護は極めて大切なるを以て、看護人は常に病者の身邊に注意を拂ひ、先づ病室には絶えず新鮮なる空氣を入れ、衣服を清潔にし、

食物は極めて消化良きもの例へば牛乳、粥汁、生玉子の黄味、スープ等を與へ、其の外の物は一切與ふべからず。頭部は氷嚢及び氷枕にて常に冷し、又冷水浴を行ふ方もあり。藥は醫師の指定に従ふべきも、赤痢病と同一のものを用ひ、解熱せしむる爲めに、鹽酸キニーネ〇.六をオブラートに包み、一日三分服せざれば可なり。▲發疹瘧疾は一般の症候、及び併發症の點に於て腸瘧疾に似たるも、全く異なる病なりとす。原因は一種のベチルスなること明らかならず、未だ確定せられず。傳染は直接に患者より、又は間接に器具若しくは衣類より來ることあり。▲病狀の腸瘧疾と異なる點は、一體に急激なることにして、其の徴候現はる、や忽にして極期に達し、其の繼續期も比較的短かく、大抵二週間にして快方に向ふものなり。又其の経過中に發疹することあり。潜伏期は約十日間にして、多少倦怠、食氣缺乏、頭痛、四肢の疼痛等の前兆あることあり。これより急に初期に入り、熱度急ち上り、四〇度乃至四一度に達し、數日にして激烈なる頭痛、眩暈、耳鳴、重き場合には昏睡及び譫語を發す。

然して三日乃至七日目に此の病に特有なる發疹を生ず。發疹は微毒疹にして胸及び四肢時には顔面に發出するものなり。中には斑點稍々大にして麻疹に似ることあり。發生後二三日にして出血性となり、紫斑に變ずる例とす。されど輕症なるは紫斑に變ぜずして消失することあり。輕症は二三週内に快方に向ふも、重症なるは往々死することあり。▲併發症は耳下腺炎、内耳炎、肺炎、肋膜炎、赤痢に似たる腸の病、黄疸等を主なるものとす。就中肺炎は最も多く、且つ最も危険なり。死亡数は平均、患者百人中四人乃至十人なり。▲手當は腦室扶助の場合と殆んど同じく、水治法を最も良しとす。又此の病は甚しき傳染性を有するが故に、患者を速かに隔離するを必要とす。

チユードク 【中毒】 ▲(一)ニコチン中毒 (二)阿片中毒、(三)毒蛇咬傷、(四)狂犬咬傷、(五)毒蟲刺螫、(六)草中毒、(七)腐肉中毒、(八)鉛中毒、(九)莫兒比温中毒、(一〇)酒精中毒、(一一)水銀中毒、(一二)青酸中毒、(一三)砒石中毒等は普通あるものなり。而して、これ等中毒は通常毒物は第一口より胃

に入り、胃より腸に、それより血液中に送られ、血液の循環に依りて、始めて中毒を起すなり。故にすべて未だ血液中に毒物の侵入せざる以前にこれを除去せば、中毒を起すことなきを以て、毒物の侵入せし場合は迅速なる手當最も肝要なりとす。▲(一)ニコチン中毒は煙草の中に含まる、劇烈なる毒物にして、殊にマニラ煙草に於ては、その一本中優に四人の生命を奪ふに足るニコチン含有すと云ふ。その急性中毒には、毒物を除去して安母尼亞を吸入せしめ、顔面及び胸部に冷水を注ぎ、胸、腹及び腿を摩擦し、濃珈琲、水、葡萄酒を與へ、過度の喫煙より起りたる中毒には、粗製醋五〇〇、蒸溜水二〇〇〇、單含利別五〇〇の半分を服用し、爾後毎五分時に、一食匙づつを服用せしむべし。(二)阿片中毒莫兒比温中毒の條項を見よ。(三)毒蛇咬傷受傷後、速かに創痕を吸ひ、昇汞、石炭酸、無水亞爾爾保爾等にて洗滌すべし。なほ流動性腐蝕剤を用ひて傷口を腐蝕するか、又は燒灼せば一層効果あり。蝮に咬まれたる際、一般に傷口の上下を紐してしるは、血液の流動を防ぎ、毒物の侵入を防止する方法として

學理的の良策なり。(四)狂犬咬傷は前述の毒蛇咬傷の療法と同様なり。(五)毒蟲刺螫即ち毛蟲、蚊、南京蟲、蛇、蜂等に刺され、若しく噛はれたる場合には、刺嘴のその局部に残り居らざるやと精密に検査し若しこれあらば、除去したる後安母尼亞を塗るべし。カンブル丁幾亦費用せらる。(六)草中毒俗に櫻の皮を煎じたるものを服用せば効果ありといふ、通常吐劑及び下劑を與へて、速かに毒物を排除すべきなり。(七)腐肉中毒古き肉類を食し中毒することあり、此の場合には硫酸銅一〇、蒸溜水四〇〇を吐劑として服用し、場合に依り更に幾半分を投すべし。又甘汞〇・二五を下劑として、服用せしめ効果なき時は、更に同量を追服せしむべし。(八)急性鉛中毒は、胃洗滌器にて、胃腸内の鉛分を去り、その症狀の如何に因りては吐劑、下劑を用ふべし。又醫師間に於ては、鹽酸亞刺莫兒比温〇・一、蒸溜水一〇〇〇の四分の一乃至三を皮下に注入し、腐爛液浸一〇〇〇、硫酸那篤倫二〇〇〇を二回に服用す。然れ共、鉛分既に血中に吸收せられ、吐劑下劑共に効果なき場合は硫酸那篤倫浸又は硫酸那篤倫浸矢亞の一食匙を

毎半時乃至一時に水一杯に混じて、服すること有効なり。而して、此の他鉛毒痲痛には、阿片を投じ、腹部に温電法をなし、頑固なる便秘には、洗腸及び緩和劑、殊に麻痺藥を用ひ、毒麻痺には、電氣療法、局部硫酸浴、及び沃度加温を試み、鉛毒痲痛には、微温浴兼冷水灌注、麻痺藥、興奮藥、及び沃度加温を用ひ、鉛毒痲痛には、温浴沃度加温効果あり。(九)莫兒比温中毒、未だその毒體內に侵入せざる以前ならば、吐劑を用ひ、或は胃の洗滌を行ひ、毒物を除去すべし。若しくは鞣酸、珈琲、或は赤酒を用ふるを良しとす即ち焙珈琲、五〇〇を適當の熱湯に浸漬して濾し、これに鞣酸四〇〇、單含利別五〇〇・五を加へ、毎五分時に一食匙づつ服用すべし、而して、毒物の既に身體内に侵入して患者絶息せし場合は、直ちに樟腦依的兒等を試み患者を温浴内に入れて頭部に冷水を注ぎ、兼ねて人工呼吸を行ふべし。硫酸亞篤倫浸〇・一、蒸溜水一〇〇〇の四分の一乃至一箇を解毒劑として注入すべし。慢性中毒には、第一に離絶法を行ひ、冷水浴を試み、鹽酸古加乙混一〇、苦扁桃水一

〇〇を十滴乃至十五滴を數回に分服せしむべし。(一)酒精中毒通常飲酒家に最も多し。普通の鎗頭には、患者の頭部に冷電法を施し、安臥せしむれば十分なり。然れ共、心臟の動作障害を蒙り、妄想を起せる急性中毒には、胃中に残留せる酒精を除去し、患者を温浴せしめ頭部に冷水を注ぎ、興奮劑を用ふべし。即ち鹹砂加茴香粉十滴、水一五〇〇、單含利別二〇〇〇を頓服せしめ、又は百非聖二〇〇、蒸溜水二〇〇〇、酸一〇〇を、毎五分時一食匙づつ、用ふを良しとす。慢性中毒には、入浴兼冷水灌注、脚湯を行ひ、硝酸篤利幾尼混〇〇六及び蒸溜水一五〇〇の二五乃至〇・五を毎日一二回、皮下に注入すべし。然れ共以上は必ず醫師の行ふべきことにして、素人のなすべものにあらず。(二)水銀中毒急性は、口腔、咽喉、食道、胃腸の劇しき腐蝕を生じ、嘔吐、下痢尿閉、虚脱等を來すものとす。胃洗滌、吐劑を用ひ、次に乳汁、卵白、鐵粉等を用ふべし。鐵粉一四〇〇、硫黃華八〇、單含利別六〇〇をよく震盪して、毎五分時一珈琲匙づつ、を服用せしむ。なほ口内の腐蝕には鹽刺水の含嗽を行ふべ

し。凡そ藥品中毒には、急に四五個の卵白を服用すること効用あり。卵黄は決して用ふべからず。(二)青酸中毒、小兒の未熟なる梅等を食し、突然死することあり、こは即ち一般不熟の果物中に含有せる青酸に依る中毒なりとす。而して、此の中毒に罹るや、患者は呼吸、緩徐となり、苦扁桃臭を放ち、瞳孔散大して、顔面蒼白に、脈搏降沈して殆んど識別し難く、時として痙攣を起すあり。療法としては、第一鹽酸亞刺莫兒比温の皮下注射を行ひ、冷水灌注、又は温浴をなし、硫酸アトロピン九(一粒〇〇〇・五)を與へ、或は格魯兒水を用ふなり。なほ興奮劑、人工呼吸等を施すことあり。(三)砒石中毒、此の毒は、近時最も流行せる瀬戸引鍋の瀬戸中に、或は小兒の玩具に塗れる繪具中に、混ぜらる。又石見銀山と云ふ捕鼠藥を誤つて服用し、若しくは鑛山工夫等の不知不識の中に服用し、恐るべき中毒を起すことあり。急性中毒は、劇しき嘔吐、米洗汁の如きもの下痢、激烈なる腹痛等を起し、須臾にして心臓麻痺して、死に至ること常なり療法としては、急に胃を洗滌し、又は吐劑として硫酸亞鉛を用ひ、

特効薬たる砒石解毒劑を服用せしむべし。然れ共大急の場合に此の解毒劑を得る能はざる時は、石灰水を乳汁及び卵白に混じり、服用せしむべきなり。而して、中毒は殆んどすべて唐突の事柄にして、醫師を迎ふるの遅なきのみならず、多くは周章狼狽してその爲すべき術を知らざるが如き有難なるを以て、吾人は常に此の應急手當を解し、萬一の變に備ふること肝要なり。

チユードク 【毒毒】 ▲毒質は種々あれど普通は蟻、蜂、毒蝶及び蛇等の毒なり、蜂に刺されし時は、一時其部分には、稍痛みを感じずれど全身に害をなさず、其毒は蟻酸と稱する一種の酸にて刺されし時は、其の口より體內に毒を注入するが故に、刺戟によりて腫れ痛む、蟻、蜂等に刺されし時は、アンモニア水をつくるを可とす。最も恐る可は、蛇類にして、此内蝮蛇、はぶ、コブラの如き毒蛇に噛まれ全身に毒の廻る時は、實に危険なり。其の内ハブ、及びコブラ等の毒の如きは最も激烈にして生命を失ふ者も亦少なからず。既に毒蛇に噛まれたる時は、直に傷の上部を緊縛し、傷口より幾度も血を吸出しては吐

出し傷を能く洗ひ然る後醫師を招くべし。其他毒を有する蟲類は斑猫、守宮等なり、之等は皆昔し人を毒殺するに用ひ今も荒毒として劇薬に製す其他蚤、虱、蚊等は刺すと云へど只單に人の血を吸ひ一時稍膨れかゆきを覺ゆるのみ又蟻、南、毒、などの毒にはカンブル丁幾効あり。又熱帯地方に於てはマラリア熱の一患者の血を蚊が吸ひ去りて健康者の血を吸ふ時附着する病毒を傳播し世人の最も恐るべきマラリア熱病を引起す事少なからず、之等は特に注意すべき事なり。

チシマリンドー 【千島龍膽】 ▲龍膽科に屬する一年生草本にして、高さ七八寸に達す莖は細長くして、餘り分岐せず、葉は卵形にして柄無く、對生す、八月頃一二枝を分ち、頂端に、龍膽に似たる帯紅濃紫色の花を開く、培養は、極めて困難なり、一説に高山山嶺の白砂に植ゆれば、三年間は生育せしむることを得と。

チシマギキョウ 【千島桔梗】 ▲桔梗科に屬する多年草本にして高山植物中の一種なり、高さ二三寸、葉は長楕圓形にして、邊緣に鋸齒を有し、互生す、上部の葉は無柄なれども下部は長き葉柄あり、八月頃濃青紫色の花を著く、形、土梗の花に酷似せり、培養は頗る困難なり、五年迄は生命を保つを得れど花を見るは三年を過ぐることを稀なり、用土は腐葉土にてよろしけれども、ゴ屑を混すれば殊によろし、強き日光に照らすも堪へ得れど、盛夏の候は、午後は實の下に置くを宜しとす、鉢の底部に赤土のゴロを敷くの注意は決して怠るべからず、肥料は稀薄なるを用

りの部

リヨリヨコ 【料理用語】 ▲昔より用ひ來れる用語を示さん、▲獸立、膳に載す可き料理の品数を云ふ、▲花籃、籃節の赤身を極薄に削りたるものなり、▲紅葉下ろし、之は龍田おろし、雪の梅などとも云ひ、大根の切口の中央に箸を通して、其孔に蕃椒を刺し込み、卸金にて下すなり、▲霜降、魚肉を生のみ、熱湯中に投じて、直に引上げたるものにて、色白くなるより名づく、▲照煮、魚肉を味淋、醤油、砂糖にて煮、汁なき迄煮詰むるものなり、▲南蠻煮、魚類、野菜を煮るに葱を入れたるものなり、▲鹽類、鹽節煮、出汁に醤油、味淋を混ぜ、生姜の押汁を交ぜて煮たるもの、▲いこみ煮、筍、胡瓜、南瓜などに種々のものを詰込みて煮る仕方なり、▲ふるふき、大根、蕪菁などを蒸し、味噌を塗りたるもの、▲紅梅煮、白魚などに醤油七分、酒三分とし、砂糖を加減して煮るなり、▲白煮、煮出汁、味淋、食鹽にて煮るもの、色附かぬ故、しか云ふ、▲煮附、醤油

酒など混ぜ、砂糖を加へたるを煮る、▲深山煮、醤油に酒、鰹魚の煮出汁、水を加へて、乾海鼠の輪切を煮込む、▲關東煮、蒟蒻を醬油にて煮附く、▲せんげ煮、醬油に鰹魚の煮出汁、酒、食鹽など交ぜて煮たるもの、▲櫻煮、醬油と酒と同量に交ぜ、鰹魚を入れて汁の濃くなる迄煮る、▲小倉煮、鹽燻にしたる鮑を殻子目に切り、淡醬油に煮て小倉餡を塗り附く、▲丹波煮、葱を胡麻油に煎り附け、胡椒粉をまき、別に鰹魚汁に砂糖を混ぜて蝦を煮、醬油を入れたるもの、▲煮受し、煮汁の中に野菜、肉類を入れて十分に煮詰るもの、▲ふくら煮、貝類を味淋にて煮附け、酒、砂糖類を加へたるもの、▲隠し山菜、蒲鉾を四分位に切り、其背部の中央に庖丁にて孔を明け、山菜を下ろして挿み込む、▲かけ醤油、刺身に使う醤油にて、普通生姜、芥子、山椒、胡椒、山葵を和せて作る、▲かけ酒、味淋に鹽を加へ、溜り醤油を入れたるもの若しくは、酒二升の中に削り鰹魚一升と鹽出し梅干廿位を入れ、一升位に煮詰めたるもの、▲煉酒、酒一升の中に、雞蛋の蛋白二個、白砂糖一斤を入れて、土鍋の中に煉り

たるもの、▲漬汁、鰹魚煮出汁に醤油を和せて用ふ、▲粉、進漬汁、椎茸又は昆布の煮出汁に、醤油を和せるもの、▲潮汁、煮出汁に食鹽を和せるもの、▲鐵砲和、魚類を蕃椒味噌にて和せたるもの、▲腸和、鰹魚の青腸を茹で、味噌に混ぜたるもの、▲木芽和、山椒の嫩芽を取り味噌に混ぜて和へたるもの、▲草和、介類を葱味噌、芥味噌などに和へたるもの、▲卵黄和、介類を和へるに、茹鶏卵の卵黄をよく搗りて白味噌、食鹽、胡椒粉と搗り交ぜたるものを用ふるもの、▲おらんだ和、肉類を先づ三杯酢に浸し、焼味噌、油揚げ豆腐の細切り、刻み葱、削り大根、木耳の細切、粉蕃椒などを交ぜて和へる、▲鋤焼、淺き薄鍋にて焼きたるもの、▲かすてら焼、肉を搗りて、鶏卵の搗りたるを混ぜ、玉子焼鍋にて焼きたるもの、▲富士和、白胡椒を炒りて搗り潰し、酢、味噌に混ぜ、葱の白根を茹で、和へる、▲土藏焼、肉片に山椒味噌を塗りて焼く、▲焙烙焼、焙烙を火にかけて其中に鹽を撒り、上に肉を載せて上下より火にて焼く、火の加減は上六分、下四分なり、▲蝦焼、鹽純粉に醤油、鶏卵を交

ぜ、之を肉に塗りて焼く、▲土蕪焼 山椒味噌を肉片に塗りて焼く、▲水介 鮑を大きく穀子目に切り、鹽を撒り冷水に浸す、▲魚田 味噌を魚肉に塗りて焼く、▲素焼 鰻魚、乾魚にても其ま、焼く、▲壺焼 鰻魚を介殼のまゝ火上に懸して焼く、▲羽節 鳥などの羽毛の附根の節のことにして又骨附の節とも云ふ、▲もげ 鳥の腹部にある圓形のもの以上は用語のみを記したるものにして詳しくは、日本料理、普茶料理、會席料理、漬物などの項を参考す可し。

リヨリキリカク 【料理切方】 ▲切

方の起原は鎌倉時代より始まりなりと云ふ、其方式作方は諸家によりて異なり、▲魚類切方 魚類をよく洗ひて、ぬかに載せ、頭を左手に、腹を前に向け、庖丁を右手に持ち、左手にて頭部を押へ、鱗を除きて、頭あるものは、腹を左の指にて開き、庖丁尖にて腹を扶り去り、腹部を割き、腸を出し、水に洗ひて血を清め、水氣を切りて料理に供す、魚類の小なるは腸、鰓を除きて筒切とす、又種類異なるに従ひ料理法亦異なり、▲背開 筋鱈、火魚、鰻、鮎、たなご、鮎、鰻、鮎な

どは、此法を用ひ、腹部を割かずして背より刺るなり、▲背切 先づ魚類の頭を除き背を開き、兩方の薄肉を腹部に沿ひて切り、腸を除き、頭を右にし、鱈のまゝ、厚さ五分程に小口切にす、鰻 鯛など此法による、▲背ごし 腸を除きたるを水に洗ひて、其のまゝ、庖丁を風かし、小口切にしたるもの、好、針魚、鱈、鮎など此法による、▲平背切 頭部を除き、水に洗ひて尾の方を右に、腹を前にし、尾より庖丁を臥せて、小口切に四五分厚に切る、▲片背切 鱗を水に洗ひ、左右より適度に片身おろしにし、平背切の如く、片々に骨を附け、尾より切る、▲すい切 三枚におろし、薄肉を除き、左より庖丁を寝かしてすくひ切にす、▲ふり切 三枚におろして薄肉を除き、横に切り又二つ切にす、▲小口切 おろして薄肉を去り、内部の肉を二つに割り、皮附のまゝ、尾より一分位に庖丁を立て切り、肉の崩れ様にする可し、鯛、鰻などに宜し、▲筒切 鰻に限る、鱗を除きなき頭、腸を其まゝに、尾より立て、庖丁を使ひ、五分位の厚さに丸切せるもの、▲一つ切 鱗を除きて、頭や腸を其まゝとし一寸程の丸切にす、

船などに用ひてよろし、▲細作 三枚におろして薄肉をへぎ取り、尾より厚さ一分程に切る、長さ五六寸に切りたるを、四角になる様細切りにす、刺身の調理法にして、鰻、鮎などに適す、▲大平作 鮑の酢貝、田樂などに用ふ、魚の皮を切り除き、庖丁を伏せて作る、▲切りかけ 三枚におろしたる肉を、四分角に庖丁目を入れるなり、鰻焼調理に用ふ、▲櫛形切 縦二つ割として、小口切にす、▲投作 鰻を三枚におろし、脊肉を取ら、中部の血肉を除き、皮を去りて、庖丁を斜めに薄く平作とす、又鱈、針魚などは、三枚におろし薄肉を去りて尾の方より幅五分位に大平作とす、▲早作 鰻の刺身又は生作り切方にて、横に五六寸に切りたるを縦に向へぎ取り、小口よりへぎ取る、▲介殼の切方 ▲赤貝のへぎ作 介殼を割し肉を二つ切にし、腸を除き、よく洗ひ、内側より少し庖丁を伏せて薄く割く、▲赤貝の大へぎ 右の仕方をして大切にするもの、▲赤貝の切方 介殼を割したるを、肉を二つ切にし、細作にす、又丸切のまゝ、一文字に細く切りてもよし、▲螺のへぎ作 肉を取りて、周囲の黒き部を切り離し、

平に薄切にするもの、血に水を盛り其上に箸二本を渡し、鰻を伏せたるもの、又釣にて引出すもよし、▲螺の切方 前の如くして小口に切る、▲螺のづぶ切 介殼を取り黒皮を除き、四つに割りて、庖丁にて一文字に切る、▲鰻の切方 次の三法あり、▲割 鰻を鹽燻にして、庖丁にて縦に二つ割とす、▲開 車鰻を生のみ、皮剥きにして、尾は其のまゝに切り除き、庖丁を脊より入れて割り、腸を抜きて右左に開く、▲さき 鰻伊勢鰻を鹽燻にして、介殼を取り、皮を破りて肉を取出し、小さく烈きて用ふ、▲草魚の切方 ▲浮木作 二分位の薄さに小口より切るなり、▲筏作 足一本を長さ三寸位に切り、疣の上なる様に縦に置き、三四箇に割る、▲いぼ 附作 疣の付いたまゝ、周囲の皮を薄く剥き、よき程に切る、▲かの爪作 草魚の足を斜めに交互に小口に切る、▲鳥の切方 ▲木口切 羽節、鰻の附根より切りて橋に引割く、▲太作 右と同じくし、橋に引割き、切る、▲細作 前の如くして小口切に細く作る、▲叩肉 ば小鳥を骨肉共に、庖丁の脊や刃にて激き混ぜる、▲野菜類の切方

▲亂切 薄く剥き取りたるを、重し、若しくは巻きて小口より切る、▲小口切 小口より横に切る、せん切とも云ふ、▲短冊形 細長く薄く切る、散子形 小きき立方形に切りたるなり、▲銀杏形 半月形に切りおき、更に真中より二つに切る、▲半月形 蒲鉾形に切り、又これを小口より薄く切る、▲色紙形 薄く方形に切りたるもの、▲ささき 斜に庖丁目を入れ、削りて切る、牛蒡を切るに用ふ、▲織切 大根、胡蘿蔔などを切るに用ふ、細長くするなり、之れに鱈せん、針、普通せん、長せん、荒せん、小算木などの別あり。

石をおくなり、▲砂糖の灰法 砂糖を水にて煮返し、其中に鶏卵の白味を入れ、浮上るとき、灰を掬ひて取るなり、又卵の代りに薯蕷を掬ひて用ふるもよし、▲梅干をせんに打つ法 肉のみを蒲鉾に入れてよく搗り、水蒸に濾し、板に薄く攤り付けて、助炭にて乾かし、織に打ちたるを酢に漬して取る、▲魚鳥の鹽出し方 魚鳥類何にても水に漬けておき、鹽を一握か、薬一束入れておけばよし、野菜類にも應用す可し、▲胡桃の甘皮を剥く法 梔、栗などの澁皮を剥くには、熱湯を注ぎて、竹串又は楊枝の先にて割く可し、濕りたる布巾にて拭きて取るもよし、▲鹽松茸又は鹽筍の鹽の出し方 生薑蕪を入れて水に浸しおくなり、▲鳥の脂肪を抜く法 脂肪ある部分を鍋に入れ、南瓜の内部を抉り取り口の方を伏せて鍋に入れ、水煮せば、鳥の脂肪一面に浮び出づ可し、之を冷せば、脂肪は自然固まりて、南瓜の内面に集り附くなり、▲小鮔の鱗の取り方 蒲鉾に竹の葉を入れて蒸過す可し、▲鳥の骨を叩く法 組の上に葛粉少し撒しおき、骨の飛散らぬ様にするなり、▲鳥賊の煮方 鍋の蓋をせしめて少時間

煮るなり、▲馬芋の皮を直す法 山椒の皮を剥いて、根、莖共に茹で、よし...

如くする法 裏面の白きを搦びて砂糖水に浸す可し、▲蓮根の白茹法 鍋に入れ其上に...

を去りて其皮を鹽水に浸け、少し、て引上げ、水氣を去りて粉の鹽水の桶肉を附け布...

其の大根を小口切にして米糠と一緒に入れて久しく煮る可し、▲鶏肉を細にする法...

方前に、膾は汁の向に、附合せば飯碗の向に、手鹽皿は、膾の中央におく、それより平皿の...

りて大別せば、色のものと、青白色のものとなすを得、▲紅林檎とて、一般に...

形、扁平、尖頭形等種類頗る多し、今各種の内最良なる物二三を挙げて略説すべし、紅魁、は樹性強健にして、よく氣候の變化に堪へ、果皮眞紅にて果肉白く、稍々酸味を帯び、重さ五十乃至七八十匁もあり、料理用に適す、生食用として最良品なり、初葉は前者と同じく樹性強く、果皮は熟後淡紫色を呈し、果肉は紅白色にして、多量酸味を有し、生食用に適す、小町、は果皮に濃紅色を呈し、果肉黄色にして柔かく、甘酸相半す、小形にして、重さ二十匁内外なれど、樹性強く、且つ豊産なり、祝は果皮赤色に濃紫色を交へ、果肉黄白色を呈し、甘味多量にて、稍々酸味を帯び樹性強くして、枝條密生す豊産なれども、害蟲に罹り易し、紅紋は果皮緑紅色にして、深紅の條紋あり、果肉は柔軟緻密にして白色を呈す、甘味多からず、稍々酸味を帯びて、特殊の香氣あり、よく貯蔵に堪へ、生食用に良品なり、樹性強く、風害に耐し、生娘、は黄色に赤紋を帯び、果肉柔軟多量にして黄色を呈し、稍々酸味と佳香とあり、樹性強く成長速かなり、於福、は黄色にして、

日に當らざる所赤色を帯び、果肉は白色緻密にして、酸味稍々強し、國光、は黄色に赤條と白點とを交ひ、肉は稍々硬し、して白色なり、冬、成熟前に収穫す、稍々酸味を有すれど、永く貯蔵するに耐へ、強健にして枝條稍々密なり、鳳凰卵、赤色にして褐色の斑紋を交へ、肉質硬くして黄色を帯び、酸味と芳香とあり、重さ七十匁餘に達し、翌年の春まで貯蔵する事を得、木振不正にして枝條下に垂れ、性質強健なり、赤龍は黄色に赤色を帯び、肉は緻密にして、黄白を帯び酸味を帯びて、十一月頃熟し、翌年五六月頃まで貯ふる事を得、青龍は緑白色にして、綠色と褐色との斑點を交へ、肉質白くして硬く、稍々酸味を帯ぶ、冬熟し、翌年五月頃迄貯蔵するを得、樹性強健ならず、成長亦速かなり、旭、黄色に赤色を交へ、肉白く、甘味多量にして、稍々酸味を帯び、樹性強く成長速にして、有望の種類なれど、貯蔵に適せず、柳王、樹性強健にして、豊産なり、果皮黄白色、肉白色にして軟、汁液多くして稍々酸味を帯ぶ、貯蔵用に適す、其他蝦夷衣は俗に梨林檎と稱するもの、

優錦、は樹性強く成長速に、紅玉は樹性弱く枝細く、翠玉は樹性稍々強けれども成長遅く、何れも翌年の四五頃まで貯蔵する事を得、小林檎、又長崎林檎の名あり、我が國在來の種類にして、幹は高さ丈餘に至り、多くは他の林檎、海棠の接木の砧木となす、果形、通常の林檎よりも小さく、味も亦劣る、和檎も亦果實小さく、味劣等なり、尙本邦に培養せるものに、黄金丸、大錦、歴山王、醉美人、小錦、初日の出、薄雲、深縁等ありて、其種類多し、之れを培養せんとするものは、其の土地の氣候土質に適當なるものを選び、之が繁殖法として、廣く行はる、は接木法にして切接法、及び芽接法を普通とす、砧木は、主に實生林檎を用ふれど、又梨、山梨、木瓜、楓、檉、海棠、桶等を用ふるも可なり、林檎の實生砧木は二年生のもの、山梨の如きは、挿木法に依りて一年生のもの砧木に供せらる、また、壓條法に依りて砧木を仕立つるもあり、接木の期間は三月頃彼岸頃を最も適當とす、土地は南向の日當りよき傾斜地を最良とす植方は種類及び仕立方(果林仕立、園仕立)により異なるれど

も、狭きは五歩に一本、廣きは二十歩に一本位の割合にも、初年度に於ては蔬菜類の間作を行ふも可なり、肥料は、堆肥、人糞、尿等を主とし、魚粕、油粕、大豆粕、燐肥、糖粕、骨油粕、過燐酸石灰、木灰等を用ふべし、尤も、幼樹を早く成長せしむるには、人糞を時々用ふるを良しとすれども、多量に之れを施さば徐々に枝條のみ繁茂して、結實を減ずるのみならず、又害蟲を發生せしむる虞あり、施肥の季節は、春夏秋又は四季に行ふべし、即ち秋期落葉後には、厩肥、青草の如き、割合に分解の遅きもの、春期發芽前には、魚粕、油粕、又は人糞尿の如き、速効肥また、結實期の前凡そ三週間計に少量の薄き人糞尿を施用する時は、成績良好なり、苗木植附より結實までは、種類及土地の温度によりて一様ならざれども、温暖なる土地にては、一年生の苗木植附後、三四年にして結實するものあり北海道の如き寒地にては七八年を要するものあり、樹の壽命は二十五乃至三十年にして、其の間よく結實し、中には七十年間も結實するものあり、病害及び蟲害は、實に影しきものにて、病害は銹病(赤星病)

腐爛病、うどんこ病、腐敗病、黒星病等に於て、多くは菌類の發生に因る、害蟲は、綿蟲、葉卷蟲、一蠶蟲、粘吸蟲、天牛、尺蠖、螟蛉、葉蟊、苞蟲等其の主なるものにして、其豫防法と驅除法とは、専門家若くは著書に就きて研究すべし、兎角早熟の物は味淡甘にして、稍々酸味あり、生にて食ふべし、其の最も上等の品類は食膳に供して人の多く賞味する所なり、殊に病者口熱にて渴する時、好んで之れを食ふ健全保養の効ありとす、晩熟の物は之れを貯蔵するに適す、貯蔵法は一々丁寧に紙に包み、温度の變化少なき所に置くが、若しくは箱の中に、紙屑を入れ、其の中に容れて各々相觸れざる様注意すべし、寒地にありては、凍返の患なき様注意を要す、林檎は生食用に適するのみならず、之れを煮て調理に用ひ、又、糖漬となし、或は林檎酒若しくは、林檎酢を醸し、その他、羊かん、類を製す、林檎羊かんは、青森の名産あり、又材は堅くして緻密なるを以て、車の齒、車及び鉢蓋等を製するに用ふ、

リンシツ(麻疹) ▲普通麻疹病といふ。生殖器を侵す一種の傳染病にして、主として不潔より起り、西紀一八七九年ナイセル氏の發見せるゴノコクケンと稱する菌の尿道粘膜を侵すより發生する此の菌は濃液中にあるを以て其の濃液の附着せる衣類手拭などにより傳染することあり、罹病の初期は、尿道より稀薄なる膿汁を漏らし漸やく病勢の進むに従ひて其濃度と分量とを増し尿道は浮腫み、風濕腺は腫脹し、放尿の際には劇しき疼痛を感じ、時には便秘を起すことあり、かくして約一箇月を経過せば第二期に入り、病勢は次第に衰へ、膿汁も其の量を減じ、疼痛も去り、尿道容易となり、瘰癧、治癒如何により一旦快方に向ふものなりと雖も、若し根本より全治するにあらずんば、再發して慢性に陥り、數年數十年を経て尙ほ且つ治療せざるに至るべし、女子の麻疹は消渴と稱し、男子の症候と別に異なることなし、と稱し、男子の症候、子宮粘膜炎、卵巣、尿意切りに催し、子宮粘膜炎、卵巣、子宮周囲、骨盤腹膜等にも炎症を起し、大に生殖力を減じて不妊症を起すことあり、又例へば、妊娠することあるも早産、流産、若しくは胎毒質の子供を産むに至る、▲療法は専門醫に任すを最も可とす、徒らに素人療法を

試むるは、頗る危険なり先づ清潔を主とし安
静を守り、精神を興奮するものを見聞せず、
食事は刺激性の物、例へば酒類、薬味の如き
物を禁じ、特に鹽分の物を戒め左の薬を用
ゆべし。ウワウルシ葉四、〇を一〇〇、〇の水
にて三十分間煎じ、冷却せしめたる後、重
曹二、〇ウワウルシ一、〇を加へて一日三回
に分ち食前に用ひ、食後にはザロール二、〇
クバマツ一、五を混じて一日三回に分服す
べし。注射には硼酸五、〇を蒸溜水一〇〇、
〇に入れ、スプツエを以て行ふを安全なり
とす。

【龍】 ▲たつともいふ、▲原言
支那より出たるものにして、佛説上の動物
なり、易經にも、飛龍天にあり滑龍田にあり
など見れば、其起因甚だ古きを知らるべ
し。和漢の古書に曰く、龍に九似あり、頭は
蛇の如く角は鹿に似たり、眼は鬼の如く耳は
牛に似、頂は蛇の如く腹は蜃の如く、鱗は鯉
の如く、爪は鷹の如く、掌は虎に似たり、又
昔には八十一鱗あり、九九の陽數を具ふ、其
聲銅盤を打つが如く、口の側に鬚あり、頷
の下に明珠あり。喉下に逆鱗あり、頭上に博

山あり、尺水と名づく、尺水なくんば即ち
天に昇る事能はず、氣を呵して雲を成し、既
に能く水に變じ、又能く火に變ず龍は卵生に
して思抱し、唯は上風に鳴き、唯は下風に鳴
く、風に依つて化す、其交る時は、即ち變じ
て二小蛇となる性粗猛にして美玉と空青とを
愛す。喜んで燕肉を嗜み、鐵及び茴草、與蛇
棟葉、五色系を畏る、故に食燕者は水を渡
るを忌み雨を祈る者は燕を用ひ、水患を鎮
むる者は鐵を用ふ云々とあり、こは何れも天
子、皇太子に譬へたるものにて、如何に珍
びしかを知るべし、されば支那には國の紀章
となせるなり、又天子の玉額を龍額などい
ひ、逆鱗に觸るなどの語もあり、其種類
を擧ぐれば、飛龍、元龍、龍、青龍、赤龍、
白龍、元龍、黑龍、癡龍、懶龍、紫龍、蛟龍、
應龍、電龍、抱龍、蒼龍、斑龍、福龍、薄福
龍、惡龍、毒龍、蟠龍、等、其主なる者にし
て、其他尙數々あれど何れ皆其場合又は性質
に依りて、名づけたるものなり、例へば千里
の外能く見ゆるを騰龍と名づけ、また昇天
せざるを蟠龍といふ、人を害するを惡龍と稱
し、人を殺すを毒龍等と名づけたるが如し。

リユーイン

【留飲】 ▲原因は種々の胃
病より起ること多し。即ち胃潰瘍、慢性胃加
答兒、胃擴張等なり。其の他、貧血、萎縮、
病、神經衰弱、ヒステリー、憂鬱、暴飲、暴
食、冷熱過度の食物、刺激性食物、飲酒喫
煙の進行等より來ること多し。▲症狀は
強弱輕重一様ならず。輕きものは、胸下
膨滿、不快の感を覺ゆるに過ぎず、稍々重き
ものは、發作性の疼痛あり、強度のものに至
りては、痙攣様の劇痛を訴ふ。いづれも食後
二三十分より二三時間内に起る。これ鹽酸の
分泌多量なるが故に、胃粘膜を刺激するに因
るなり。食物を嘔吐することは稀なれども、
往々瀉瀉せる酸性の胃液を吐出し、酸性變
氣を吐出することあり。▲療法、まづ原因
治療を施し、運動を適宜にすべし。又主とし
て蛋白質を取り、刺激性食物を避け、脂
肪質は少量を用ひて、含水炭素質を制限す
る等食物の攝生に注意を要す。手術として
は、胃洗滌有効なり。薬劑としては、重炭酸
曹達、緩性麻痺温矢亞の如き、アルカリ劑を
與へ、劇甚なる時は、莫爾比温、古加乙温等
麻酔劑を用ふべし。アルカリ劑を空腹時に用

ふれば、却て酸の分泌を亢進する傾あれば、
消化の正に盛んならんとする際に用ふべし。
食間、或は食後に於て、アルカリ性鹽泉を
服用する等は素人療法として、効果多し。
【龍眼】 ▲南清地方原産
の常綠樹にして、高さ數十尺に達す、無患
子科に屬す、葉は羽狀複葉にして互生し、
橢圓形にして縁圓く、若き時は、美はしき紅
色を呈す、葉の裂片は覆瓦形に排列し、花
は小形にして五弁あり、果實は球形にして、
多數の剛毛を有し、果皮は茶褐色の細紋あ
り、稍々荔枝の果實に似たり、種子は肉質に
して、甘き種皮を以て被せらる、此の種皮
を、食用又は藥用に供す、所謂龍眼肉是れ
なり、荔枝、は楳形龍眼に似たる常綠樹にし
て、高さ數十尺に達し、亦無患子科に屬す。
羽狀複葉にして花被を有せず、果實は卵形
にして、鱗片を以て被はれ、亦甘き種子を有
し、食用とす。

【隆達節】 ▲小唄の
一種、泉州堺の人隆達の唄ひ出したるもの
にて、室町の末期より徳川初期にかけて時人に
もてはやされたり。この唄弄齊節とともに

リユーマチス

【假麻質斯】 ▲肢體の關
節或は筋肉の痛む病にして、十五歳より四十
歳迄の人に多し。分つて關節假麻質斯、筋
肉假麻質斯の二種とし、これに又急性と慢性
の別あり。▲關節假麻質斯は多く感胃などの
誘因より起る事多きも、其直接の病因は醫
學界諸説區々にして一定せず、之れリ
イマチス(病原不明)の名ある所以なり濕氣と
温度は此の病氣に對し最も深き關係を有す
るものなるを以て、空氣の流通悪しく、濕氣
の強き所に住む人、又は水仕事、冷仕事等を
營む人に多し。初めより慢性に起るなり、又
急性より變じて慢性となるものもある、其間
あへて大差なし。唯急性は三十七八歳以下の
人に多く、慢性は五十七八歳以上の老人に多
きが如し。▲病狀は肩胛骨、肘、足、膝其の

他の關節に數箇所又は一個所の痛みを生じ、
腫れ上りて動かすこと能はざる程度に達し、
皮膚は發汗し、時には消化不良、便秘、尿量
減少等を來たし、熱は常に上下し、患部は日
毎に自由を失ひ、瘦せ衰へて患部は變形し少
しにても動かすときは甚だしき疼痛を感ずる
に因る。急性のものは大抵二週間位にして治
療し得るも、慢性は容易に全快せず、中に
は生涯治療せざる者も多し。▲該病は元
來空氣、濕氣、温度の關係より發生したるも
のなるを以て、室内の空氣、温度等に注意し、
務めて温暖、乾燥にして清新なる土地に常住
し患部には柔かき布又は綿を纏ひ置くを可と
す。食料は牛乳、玉子、スープ、粥汁の如き
最も滋養ある消化よき物を撰ぶを第一とし、
努めて體力増進を計るべし。入浴は最も効
能あるものなるを以て、一日二回位入浴して
身體を温むべし、特に温泉などは最も特效あ
る療法なり藥に特效藥としてはアスピリン
二、〇を一日三回に分服し、イシチオール一
五、〇、アルコール一〇、〇、及エーテル一〇、〇
とを溶解して患部に幾度も塗付すべし。▲筋
肉假麻質斯の原因も又關節假麻質斯の場合

と同じ。急性は患部腫脹する事多し、慢性は殆んど腫脹することなくして、疼痛甚だしく、一寸觸るも腹痛する程痛みを感じ、遂に其の患部は無感なるに至る主として四肢の筋肉、頸、胸、腰及び内臓を貫す事あり、慢性は陽氣の悪き時、又時候の變り目などに一層疼痛を覺ゆるものにて急性は治療の効早く現はるゝも慢性は遅々として容易に癒へず。▲療法として最も行ひ易く、又最も効能あるは温浴の續行なりとす。按摩療法、電氣療法等有効なり。薬科は略々關節痲痺質斯の場合と同じ。

リユーコーセイノーセキスイマク

エン 【流行性腦脊髄膜炎】 ▲一名を頸硬といふ程にて、頸部固く眞直となり、後頭部に手を入れて、頸部を屈めんとするも能はざる状態となる。只に頸部のみならず、腦脊髄に關係せる筋肉は短縮せられ且つ強直す。最初は惡寒を催して震慄し、頭痛、背痛、四肢牽付けらるゝ痛等ありて、次第に高熱を起し、脈搏増加し、劇しい頭痛、頸筋及び背筋の痛、眩暈、嘔吐、痲痺を來し、意識不明となり、眼球振蕩し、齒か喰ひしげり、

臍部を發するに至る。同時に便秘を催し、腹部は陥落し、筋肉及び皮膚の感覺過敏となり、觸接によりて、甚だしき疼痛を覺え、又硬き物體にて皮膚を摩擦すれば紅色を残して、久しく消失せず。病勢急なれば、一週間に一週一週にして數週を経過せば治療することあり。本病は一種の流行性傳染病にして、ワイクセルバウ△氏發見の胞内重球菌が鼻腔より腦膜に達して起るものなりと云ふ。流行は多く冬季及春季にして、學校、兵營、監獄等に發生するものなり。▲療法は患者を柔かき蒲團の上に安臥せしめ、身體及び精神を靜かならしめ、稍暗き室内を遊ばし、萬事靜寂に取扱ふべし。頭部及び頸部には氷嚢を當て、胃腸にて便通を圖り、食物は牛乳、葛湯、スープ等の液體物を與へ、薬科は醫師の指定に隨ふべし。

リユーサン

【流産】 ▲妊婦が身體の異状又は、或る動機に依り産月に至らずして、出産するを云ふ。例へば、心身の過勞、落下、損傷、等流産の原因となること多く大抵、妊娠後三箇月迄に起る事多く四箇月を経過する時は、流産の危険減少す此外、流産の生理的原因としては、母體に於ける子宮の發育の不完全なる事、胎物其他の病にて、壁の厚くなるが如きは皆然り。子宮病より流産の屢々起るは、其の内面を蔽ふ粘膜に、炎症ある際にて此場合に於ては卵膜容易く其の附著面より離れて、卵は子宮より驅出され易きを以てなり。又腎疾、心臟病、栗癩、肺癆、等の諸患も流産の原因となる事あり。

リス

【栗鼠】 ▲常に樹上に棲息し、樹間を枝より枝に渡る事猿猴の如く巧なり、啗齒類に屬する小獸にして、歐羅巴及び亞細亞の北部に産す、本邦にても往々森林に見る處あり、長さ一尺三四寸あり、尾長くして體極めて短し、全身光澤ある灰色又は褐色にして、耳には長き毛の房あり、脚亦短く、食物は木の實、樹皮、嫩芽にして時は、鼠の如く後部及び體の後部にて坐し、前肢にて食物を抱きて嚙り食ふ、巢は木の洞穴等に造り六月頃三四疋の子を生む、毛皮は標、巻等に用ふ。

又の部

又イハク 【縫箔】 ▲華美なる衣服にして、絹地に刺繍を施して箔箔を加へたる者なり、縫箔は金銀糸、五彩糸、箔は金銀箔、銅箔等を用ひ、糸の縫りたるをマヒ、縫らざるをカラマヒと稱す、室町時代に流行せる繪箔物の次第に發達せるものにて、現今亦裝飾用として重んぜらるゝ(刺繍の條に詳し)。

又カ 【糠】 ▲玄米の糠膜を云ふ。蛋白質及び脂肪に富み、古來家畜の飼料、肥料及び漬物用等に供せられしが、近來玄米食の人體に有益なるを認められ、糠糖として常食用ひらる。

又ガミソツケ 【糠味噴漬】 ▲漬物の條を見よ。

又タ 【沼田】 ▲沼田産の柿、蜜物の條を見よ。

又ノ 【布】 ▲麻、亞麻、苧麻、芭蕉其他の木皮革等々の纖維を以て織り出せる織物の總稱なり、主として衣服の材に供せらる。

又ノメヌリ 【布目塗】 ▲布の目を現は

し、漆器に塗り込めたるものにて、雅致あり、明治十年の交、金澤の鶴田某氏の發明に係る。

又ノメガミ 【布目紙】 ▲糞の目を隠さ

すために、布を蔽ひて洗きたる紙なり、現今は多く紗絹を用ひて紗漉と稱す。

又ノシヤシン 【布寫眞】 ▲絹を温湯を以て充分に洗ひ、食鹽八分、鹽化安母尼亞八分、安母尼亞少量の液中に浮かべ、水五オンスを加へて攪拌し、更に硝酸銀十二分の液中加入し、乾かして濃く焼付け定着するなり。

又ケマイリ 【被參】 ▲家人に無断にて伊勢大神宮に參詣する事を云ふ、天明の頃より種々の奇瑞全國に流布せられ、沿道の民家にては、飲食、宿泊等好意を以て寄與せしより、一時大に盛に行はれしが、終には飢饉に迫る者現はれ漸く衰微せり。

又エ 【鶴】 ▲猴首虎身蛇尾の怪獸にして、其聲稚兒の泣くが如く、聞く者忽ちにして死すと傳へられ、近衛天皇の御宇、源三位頼政が此怪獸を退治したる故事は、今猶人口に噂する所なり、元より單なる妄想に過ぎざるべし。

又サ 【幣帛】 ▲被等に用ひ、神前に奉獻する布帛なり。昔時五色の絹布を正にて納め、又木綿麻の織らざるを用ひたり、之を被麻と云ふ、中古木綿に代ふるに白紙を用ひ、終に今日の幣となれり。

又メ 【洗】 ▲生絲にて織り、精練して書畫用に供す、繻子の如き光澤ありて上品なり。

ルの部

ルイレキ 【瘰癧】 ▲瘰癧は初めに頸部及び頸下の皮膚に、圓形の硬き腫瘍の如きものを生じ、別に瘰癧もなく、皮膚の變化もなく、後に至つて、軟化し、多少痛を覺え、其の部分に稍赤く腫脹して、外部に破れ、稀薄なる膿汁を漏し根治せる後も尙瘰癧を残し頸部を醜くす。尙胸部、腹腔の淋巴腺をも侵す事あり、又皮膚、粘膜の炎症を起し、骨、内臓に結核性の變化を發し來る事あり。原因は先天性に存すると後天性に存するものもあり、両親の結核、梅毒、癩腫等に罹れる際に生れたる兒は、本病の素因を受くる事多し。其他他飲食物及び空氣の不良等により本病發生の原因となるものなれば、生活状態の不良なる囚人等に多し。▲療法は食物其他一般に日常の生活状態を佳良ならしめ、新鮮なる空氣中に運動をなし、肝油、沃度鐵舍利別、亞砒酸劑等を應用し鹽浴を行ひ、夏時は海濱に轉地し、日々海水浴を行ふをよしとす。之れ單に預防法たるのみならず、

又療法の主要なるものに屬す。

ルリ 【琉璃鳥】 ▲おほりり、こりり、の二種あり。禽類に屬する小鳥にして、おほりり、は夏期我が國の山地に多し、又こりり、は東部西伯利亞地方に蕃殖し冬季は印度支那、馬來等に至るといふ、おほりり、は又竹林鳥ともいふ、鷄よりも稍々大に、翼三寸内外あり雄は上面一體に琉璃色にして、喉胸部は黒く、腹部は白く、雌は上面一體に橄欖色を帯びたる茶褐色にして、腹部は黒褐色なり、こりりは胸鳥に近きも稍々小なり、翼長二寸五分許、雄は背部藍色なれども、おほりり、の如き鮮明並に光澤を有せず、嘴の基部、眼前、頬、及び耳部は黒色にして體の下面は一體に純白なり、雌は其の羽色おほりりの雌に酷似し、背部は一體に暗褐色を帯びたる橄欖色なり、上尾筒は藍色を呈す、兩種何れも昆蟲を食餌とするが故に我が國にては保護鳥の一なり。

ヲ(オ)の部

オイヘモノ 【御家物】 ▲御家騒動を主としてたる芝居の狂言にして加賀騷動、實錄仙代萩の類なり。

オイワケアジ 【追分節】 ▲俗曲の條を見よ。

オバナ 【尾花】 ▲七草の條に詳し

オハグロ 【鐵漿】 ▲カネの條を見よ

オドリ 【踊】 ▲舞曲に合せて身體にて動作をなす技藝なり。田樂舞、白拍子舞を元とし、爾來幾多の變遷を経て、今や日本獨特の舞踊として完全なる發達をとげたり。▲

踊の秘訣を一口に云ふことがたけれど、その人々の身分職業等ば扇子一本煙管一本の持ちやうによりてそれと肯づかれるやうに思はるるなり。又唄の文意により、さす手引く手の振りの變化に森羅萬象を舞ひ納むるなり。▲流派に藤間、花柳、若柳、西川、坂東、冬木、一山、猿若、志賀山の諸流あり。以上の外各地方に於て行はる、年中行事的のもの及其地方獨特のもの又頗る多し、乃ち。▲

ヲ(オ)の部

盆踊 孟蘭盆の頃、夜男女打交りて踊り、所によりては終夜踊り明かしたるものなるが、往々風紀上の弊害を生じ、且つ唄の歌詞も卑俗淫猥に流れやすければ、近來其の筋の取締嚴重にして各地共撤れ禁せられたり。▲伊勢踊 伊勢古市にて伊勢音頭に合せて踊るもの今も行はる。▲岡崎踊 岡崎女郎衆、岡崎女郎衆、岡崎女郎衆は善い女郎衆の世上に名高き岡崎節に合せて踊りたるもの。▲小町踊 七夕の夜、町内の女子供、小路小路の友達の許へ行き、唄面白く踊り廻りたる由享保十七年の愚案問答に見えたり。七夕の夜なれば七夕踊とも云ふ。▲雀踊 承應頃より流行せり。笠を被りて踊る。雀籠、雀籠、雀籠に「かくす年百になりて忘れぬ雀踊や梅の花笠」とあり。葛西西念佛、普淺草、觀音の奥山に念佛堂ありし頃、葛西の土人來りて念佛を唱へたるに始まるとの傳説あり。念佛踊の一種にて、武藏葛西の人、鉦、太鼓の合奏にて江戸の町々を廻りしもの。右に飛び左に跳ね、頭を垂れ尻を振るなど、其の狀滑稽にして滅盡念佛に等しかりしと。▲念佛踊 一名踊念佛とも云ふ。

念佛踊は和讃など高く唱へつゝ、鉦、太鼓など叩きて踊る。町人の好奇心に投じ、寛永六年頃より江戸にも流行せしが、夜間往還の妨害甚しき故一時禁せられたり。▲泡齋念佛 造花を挿したる笠を被り、鉦、太鼓にて拍子を合せ、數人連れ立ちて、踊歩く、踊ると云はんよりは寧ろ飛跳れると云ふ方近し。見る者腹をかへたりとぞ、其の滑稽なる狀押し知るべし。常陸の泡齋坊といへる人、我が住める伽藍建立勸進のためせしより起り、元和寛永頃盛んに江戸に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。▲住吉踊 攝津東成郡住吉に行はれたり。

雨無妙法蓮華經の七字に節を附け、村中の男女太鼓を叩き踊る。京都の北修學寺村及松ヶ崎邊にて重に行はれき。▲燈籠踊 又花園踊とも云ふ。骨董集に都事記を引きて、長谷、岩崎、花園にては、様々な花を飾り、巧みを盡したる四角なる燈籠を戴き、六字の念佛に節を附けて踊る。何れも肝に入りたる一節極めて品あること、都にも恥ぢず面白し。氏神の前より踊りはじめ、其の年死せし者ある家に行きて、深更まで踊歩く云々また日次記事を引き、男子は太鼓を撃ち笛を吹き踊を進む。踊るは少女にて、燈籠は早朝よりこれを造り、互に其の作る所の模様を蔵す云々とあり。▲都踊 明治五年京都に博覽會の開設したる時より創始されたるものに、祇園の歌妓より成る。舞妓三十二人、歌方十一人、鼓四人、笛二人、太鼓兼鉦三人、大太鼓一人合計五十三人の大勢を一隊として踊る。其の艶麗なること人目を奪ふ。▲鴨河踊 創始されたる時は都踊と同じ。先斗町の歌妓より成り舞妓三十二人、歌方十人、太鼓一人、小鼓四人、太鼓四人合計五十一人にて演ず。絢爛なること都踊に譲らざるものなり。

り。近時大阪に於ても浪花踊、邊踊など稱へて毎年或る季節を限りて興行せられつゝあり
オトギバナシ 【お伽噺】 ▲歴史上の事項又は小説體のものを、兒童本位に、面白く解り易く組立てたる物語なり。また童話ともいふ。古きものには、浦島太郎、桃太郎、舌切雀、かち／＼山、猿轡合戦、花咲爺などあり。今日は、少年讀物として非常に歡迎され、單行本の出版相次ぐは勿論、各少女雜誌等には必ず新作の面白きもの掲げられ、之無からずは兒童の讀物たる價值なきものとせらるゝ程なり。またお伽少年少女會などの開催せらるゝものも多し。現時のお伽噺は、古きものを改作又は補修したるもの、西洋種を翻譯せるもの、全く新しき創意に出でたるものと大體三種に分る。お伽噺の大家として、巖谷小波、久留島武彦等あり。▲お伽噺なる名は、お伽草紙より來れるが如し。お伽草紙は、足利時代のものと稱せられ、其中には、古きお伽噺の原形とも見るべきもの多く載せられたり。お伽噺の起原に就きては、種々説をなし、確とは定まり居らず。童話長篇の序には、其さま大方は神代の古

事など、爰彼所取り、語り傳へたるごとにて、最も古代なるものなり。日本記の神代の巻に「一書一書として擧げられたる、若くはさ様の筋に上れる代より傳へたるなどが、世々を経るまでに、片はし語りつゝも、今に傳はりたる物などにはあらじか。よしさらすとも、古き書どもに據りありて、甚だめでたくをかしきものなり。」とあり、其起原を神代若くは上世の物語に歸せんとするもの、如く、且つ一々其據る所を擧げて「桃太郎」は、少彦名神の、かみの舟に乗りて、いさなの小濱に流れより給へるが、後に粟がらにはじかれ常世の國に渡り給へりといふ古事に、伊弉諾尊が、桃の實をて黄泉の軍を追いひらひ給ひしといふ古事を取交せて傳へたるもの。かち／＼山は、古事記に見えたる、稻羽の白兔の神の、ことを傳へたるもの、龍宮の乙姫は、玉依姫の大龜に乗りて渡れりといふ日本記神代の巻の龍宮の一書を傳へたるもの。猿轡の仇打は、日本記神代の巻の、海草彦と山幸彦と、互に幸を取りかへし給ひしより、海神の力をかりて終に反報し給へしといふ古傳に、古事記なる猿田彦の神の古傳を合せて語り

傳へたるものなりといひ、尙古切雀は、宇治拾遺物語の雀の子、花咲爺は、同じく癩取の翁より出でたるものなりといへり。また瀧澤馬琴は、其著燕不禱誌の中に童話の起原を述べて、同じく日本記、古事記、日本書紀、竹取物語、拾芥物、舊事本紀、太平記、如時能の犬の條、爲朝の故事等に所ありとなし、且つ漢土の述異記、西冥錄、桃花源記、本草綱目、風俗通、孔子家語等にある支那の童話よりも出づとなせり。是等は専ら學者の研究にして、創作家の側よりいへば、一書に多少の類似思想を發見したりとて、未だ必ずしも其古原と斷するを得ず。兎に角參考の爲に之をあげたり。

ていふに、(一)普通織物とは、織物の表面、経緯の線の組織が、製織のまゝなる外觀を有するものにて、羽二重、海氣、透綾、銘仙、縞子、縞子、縞子、縞子、八ツ橋、群内、風通、紬、厚板、絲綿、縞綿、緞綿、雲霞、小倉など之に屬す。(二)縮織物とは、縮の緯線を打込み、又は経緯の張伸を異にし、経緯異なる材料を用ひ、或は藥品によりて織面に縮みを見せ又は縮寄せなどせるものにて、縮緬、御召、縮、縮、壁千代目などに屬す。(三)起毛織物とは、製織の後、織面を掻き出して毛を生ぜしめたるものにて、羅紗、フランネル、ブランケットなどに屬す。(四)編織物とは、一の並行せる緯と、他の並行せる緯と、互に摺合はせたるものにて、網、紗、レースなどに屬す。(五)添毛織物とは、特に毛となるべき緯を添織し、又は製織の後、經或は緯の緯を切りて毛状を呈せしめたるものにて、天鰐絨、絨氈、コール天、タランなどに屬す。▲産物と産物我國は、佛、英、米、獨、伊などと共に世界の織物國にして、其産額は年々増加し、明治四十三年の調査に依るに、絹織物一億八百六十一

萬圓、絹織交織物二千四百八十三萬圓、綿織物一億一千九百二十五萬圓、麻織物三百六十四萬圓、其他三百六十一萬圓、帯地八百七十九萬圓、總計二億六千八百萬圓に及ぶ。今(一)絹織物の重要なもの(其産地を擧ぐれば、羽二重(福井)、縮緬(京都)、縮太織(群馬)、絲織(東京)、甲斐絹(山梨)、平絹(埼玉)、絹(群馬、新潟)、縞綿、縞子、金縷(京都)、帯地(埼玉、新潟)、縞綿、縞子、金縷(京都)、白木綿、二子織、縮木綿、フランネル、緞綿、英大小、織色木綿、縮木綿、蚊帳地、袴地、帯地等。其産地は愛知、大阪、和歌山、三重、愛媛、埼玉、栃木、兵庫、朝鮮等。(二)交織物は二子織、絲入木綿、女帯地、縞子、絹、縮緬、縮綿、男帯地、袴地、勾配甲斐絹等。其主産地は栃木、愛知、群馬、埼玉等。(三)縮織物はモスリン、羅紗、大原、埼玉等。(四)編織物は、毛布(東京)等。産地は括弧内の外兵庫、群馬等。(五)麻織物は生麻布、蚊帳地、上布類等。其主要産地は滋賀、北海道、富山、福井、栃木、石川、朝鮮等なり。現今是等の織物は、單に内地の供給を満すのみならず、非常なる勢を以て海外

に輸出され、我が國主要貿易品の一をなす。大正元年の調査に依れば、羽二重二千六百八十八萬圓、縮織物二千五百七十六萬圓、莫大小類七百三十六萬圓の巨額に達す。▲起原と變遷 我が國の起原は明白ならぬが、舊き史に、粟田忌部天日鷲神をして木綿を織らしめ、倭文、連祖天、羽雄神をして、文布を織らしむと載せあるを見れば、太古既に一種の織物ありし事を想像し得らる。されど當時は尙狩獵時代を去ること遠からざるを以て、其製品の粗雑なりしは云ふまでもなし。されば、製織の街の漸く發達を見たるは、支那三尊との交通開け、之等の入種が我國に歸化するもの多くなりし頃よりにて、正に應神天皇以降のことなり。其後漸次發達して、孝徳天皇の頃には大仙仙錦、小仙仙錦、東形錦、菱形錦、藤原錦等の錦の織出あり、之等は、支那人の神錦と稱して、賞美するものなり。それより降りて平安朝の時代は、藤原氏の榮華を極めたる時として、上一般に服裝の美を競ひたれば、精巧なる織物の産出さる、もの多く、模様、色の配合、金銀絲の織出、眞珠、螺鈿の織込等皆優美を極む。

されど承平、天慶の二亂は其發達を阻止し、爾來一盛一衰、徳川氏に至るまで遂に斯業の挽回を見ざりき。たゞ此間に記すべき事は、豊臣氏の海内を統一せる時、京都西陣に織工を移して、其發達を奨励したると、其先明の織工の和泉堺に來りて、彼地の織風を傳へ、京都の織工之に就きて習ひたる結果、紋紗、金紋紗、縮緬などを織出し、彼我折衷したる、絳錦、倭錦、唐織錦、蜀紅錦などの高尙優美なるを織出すに至れるとなり。豊臣氏の末葉、歐洲、印度、其他の諸國との交通開け、彼地の製品を得て之を模倣し、金銀モール、天露絨などを織出し、製織業挽回の曙光を認めたるが、徳川氏の代、殊に元祿の頃に至りて其發達著しく、文化文政の頃に至りて正に其極に達す。當時創めて織出を見たるものには、元祿の頃織珍、絳、茶字あり、文化文政の頃、綴織、金華山織あり、また圖案の如き我が國風を取り、大意匠を凝らし緻密なる花草紋様に織出したりされど其末年は、天明天保の大饑饉あり、加ふる外交多事なりしかば、人心離れながら、各種の工藝皆萎靡して振はすなり、織物

もまた一時萎微の己むなきに至りて。然るに維新の後には、歐米各國との交通俄かに繁く、生活の程度は急に上進し、一般に服裝の美を誇るに至る、一方製絲紡績業の物與著しく、俄然舊態を一變して、各種新案の織物相並で現はれ、技術の精巧なる前に比なく、遂に今日の如く殷盛を見るに至れり。

オーイリバ

【大入場】▲劇場にて俗に迫込みといひて一番安直に見物するの場所なり。劇場によりて向正面の下機敷を充つる處もあれど、多くは立見の前に席を設く。

オーイヌタテ

▲藁の條を見よ。

【嘔吐】▲俗にあげる、もどすなど云ふ、胃の飲食物を逆に口より吐出することなり、胃の急激なる收縮又は横隔膜並に腹筋の收縮の爲め、腹壓を起すより起ることあり、此の時胃の兩門は、幽門のみ收縮して、噴門は静止す、故に胃中の食物は腸に出でずして、噴門より上方に押し出さる、なり嘔吐に先立ち、気分悪しく、甚しきは顔色蒼白となり、發汗し、脈搏早く、嘔吐済めば、急に快爽を覺ゆることあれど、

又甚だ疲勞することなきに非らず、幼兒の苦痛を感じざる如きは、胃の構造大人の如く發達せず、横に振れることなれば、嘔吐に抵抗少なきを以てなり、嘔氣の起るは、胃中より發するが、下腹管器の反射作用、腸の刺激より起るもあり、即ち胃より起るは、胃病、過食、毒物等より起り、下腹管器より來る嘔吐は、腹膜炎等の病より起る、特に女性の生殖器、管の疾より來ることあり、即ち月經時の第一日、妊娠中の初半期にあり、又腸刺激より來るは、腸病、神經症、ヒステリー等にして、肺炎、猩紅熱等の急性傳染病の初期、船酔、暈船の爲、異臭を嗅ぎ、異物を味ひて起る場合もあり、吐出物も粘液、血液、膽汁、糞便等に分つ。往々脱腸、脱肛、早産などの原因とあることあり、▲手當原因により多少手當を異にすれど、安臥せしめて食物を與へざるをよしとす、鎮吐劑には碳酸セリウム、コカインなどよし、

【オ】の部

【狼】▲此獸は多く歐羅巴、北亞米利加、及び亞細亞に産し、露西亞、ラブラント、スカンヂナビア等に最も多く繁殖す、我が邦に産するおほかみは其一種に屬す

【黄疽病】▲全身黄色に變ずる病氣なり、▲原因 肝臓若しくは膽囊より、膽汁の流出に妨礙を生じ、胆汁の上部に膽汁の鬱積するより起る、此蓄積せる膽汁は肝臓の血管及び淋巴管中に入りて血液と共に循環し、其黄色素は、皮膚は勿論、糞尿に迄染む、其色は薄黄、硫黄色、綠黄、黒黄などにて、尿は褐色麥酒の如き觀を呈す、又膽石を生じ、小腸加答兒を起して、輸尿管を塞ぐ、糞色は灰白色となり、多量の脂肪を含み、悪臭を帯ぶ、此病氣に罹れば、食慾減退して、消化安しく、皮膚は痒痒の感甚し、之れ膽汁色の血中に入りて、皮膚の神經を刺激すればなり、▲療法 素人の恐る、程の病氣にはあらぬと、捨て置

【オ】の部

【ヲ】(オ)の部

く可きに非ず、療法も亦原因により異なる、先づツツプ、牛乳、牛肉など採取し、且つ果實、蔬菜類を併せ食ふ可し、内服薬には、大黃末一〇、重曹二〇、答糖、適宜以上三包に分ち、一日三回、一回一包分服、治せざれば醫師に診を乞ふ可し、

オーツエフシ 【天津繪節】 ▲俗曲 大津追分にて賣りたる戲畫大津繪の數々を詠み並べたるに節附したるものなりと云ひ傳ふるもその作曲の年代は未だ詳かならず。けほう階子剃りを元唄としこれによりて大方作りし由なり。その元唄を次に示す。けほう階子剃りかみなり太鼓で釣りをすお若衆は鷹をすさ笠笠おやまは藤の花座頭のふんどしに犬つげば 仰天して杖をばぶりあげあらきの鬼も發起して 鐘撞木へうたんなきづをおさへます娘の行列つりがね辨慶矢の根五郎。

オーム 【鷓鴣】 ▲此鳥は種々の面白き舉動を爲し、又人語を真似るに依り、籠鳥として愛玩せらる、普通飼養せらるるは南米産にて、灰色にして赤き尾あるものは、面部亞非利加の産なり、元熱帯地方の産にして其種類多しと雖も、白鷓鴣は最も普通の種に

なり。尙此の外に四部合唱を加へて、合奏隊を編成することあり、さて、これ等樂器の配置、按排は如何といふに無論、時と處とによりて異れり、

オーエンカ 【應援歌】 ▲野球試合、學生角力、短艇競漕などにはつきものなり。最も新らしきものにて、學校または團體を代表して出で校園を獎勵應援し以つて士氣を鼓舞する歌。就中第一高等學校の「フレ、フレ、勝つた方がい、勝つた方がい、」は入口に膾炙するところなり。

オーキ 【扇】 ▲夏日扇きて涼味をとるに用ひ、また儀式用として携ふ、扇子ともいひ、末廣ともいひ、また古くはかはほりともいへり。竹を薄く削りたるを幾枚も合せ、根の所を要にて綴ち、其竹を骨として、地紙を裏表、兩方より張り、開閉を自由にしたるものなり。扇の名は、専らあふぐに用ふるより來れるにて、末廣と呼ぶは、祝賀の贈物に扇を添へ、行末の廣がり榮ゆべきを毒く意より來れるなり。またかはほりといふは、開きたる形状の蝙蝠に似たるより、いひしこ

と、源氏物語に書かれたり。要といふは扇

して體は鳥根の大きなり、全身白色にして脚は灰黑色を呈す、其嘴は潤大にして、上嘴は其の先端鉤曲し、下嘴には鋸齒狀の刻みあり、頂上に毛冠ありて聳え、喜ぶ時は之れを開きて菊花の如くし、或は蓮花の如くす、之れを開花と名づけ、又芙蓉冠と稱す、好んで蕎麥及び鶏卵を食す、其食する時は常に舌を以てし、嘴を動かす事なし、又嘴にて樹枝を咬み、背を下に向くる性あり、壽命は七十年以上生きしものありと傳へらる、食物は主として果實なるも稀には蟲魚をも食ふ也

あり、翼は裝飾に用ひ、肉は食ふべし、又鷓鴣、は鷓鴣と同種類の鳥なり、同じく熱帯地方に産し、形鷓鴣より稍々小さし、また稍々人語を真似す、種類は凡そ數十種ありて、皆羽色群麗なり、あをいんこ、こしきいんこ、おはないんこ、せいがいんこ、だるまいんこ、むらさきいんこ、狸々いんこ、べいんこ等あり。

オーケタテ 【絃草】 ▲藝の條を見よ。

オーケストラ 【管絃樂】 ▲一定の組織によりて、管絃樂器を合奏するを、オーケストラといひ、その合奏團體を、オーケ

の最も肝要なる所なるより其字を充つに至れるならんが、古は蠶目と書きたり。また源平盛衰記にはかめとあり、蠶の目の意ならんが。鹿の眼と書けるもあり。▲扇は我國の創製なるが如く、和訓彙に「今の扇子は日本より造出せり。爾雜に、扇起于東夷而盛于今日」といふ是なり云々」とあり、また閑窓瑣談に、唐にては、明の時、我が國の扇に倣ひて造りしよし記されたり。昔の扇は薄き板を合せ、末を糸にて綴ち、本を要にて一所に集めたるものなり。今も、檜扇、粗扇、たどいひて、高貴の方の、五衣袴など着せらるる場合用ひらるるは夫れなり。昔は、身分ある婦人が、人に面を見することを耻としたるを以て、扇にて面をさし隠せるが、やがて今日の如く、儀式に携ふる風習となれるならん。▲種類 扇には、普通涼風を呼ぶに用ふる扇、京扇、名古屋扇などいふもの、外、専ら儀式用のもの、脚扇、手扇等に用ふる、舞扇、藝人などの用ふる扇、種類多し。

(一) 摺扇は、現今最も普通に行はるる扇にして、骨の數一定せず、太骨あり、細骨あり、平骨あり、また白扇あり、畫骨あり、大小

ストラ、バンドンと云ふ、管絃合奏隊の人員は時代と場合とによりて、差異あり、小管紅は、僅に四十一人より組織せらるることあれど、一千八百八十年、倫敦水晶宮に於て、行はれたる、ヘンデル祭典の式場にて、四十八人より成る、大管絃樂合奏隊を組織せしことありその樂器人員は、

木製管樂器	ピッコロ・フリユート	六人
	フリユート	八人
	オボエ	八人
	クラリネット	八人
	バスーン	八人
	コントラ・ファゴット	二人
	トロンプエット	六人
	ホルン	二人
管樂器	トロンボーン	九人
	コルネット	六人
打擊樂器	太鼓	一人
	シンバル等	四人
絃樂器	第一バイオリン	九二人
	第二バイオリン	八五人
	セロ	五七人
	ダブルバス	四八人

長短なども一様ならず。(二)京扇は、骨數少なく、親骨細し。京都の名産なり。(三)名古屋扇は、骨數對なく、親骨太くして、疊める時親骨の扇幅一杯なるものなり。名古屋の名産とす。(四)檜扇及び(五)粗扇は多く晴れの場所に携ふものにて、檜板を以て作り、前者は骨數三十三、二十五、或は二十八、男子用。後者は骨數三十九。女房用なり。(六)杉目扇は、杉骨二十五枚、泥箱を施し、繪畫をかき又は色紙にて綴どり、要は金物にて綴、鳥など飾れり。弱冠の男子之を用ふ。(七)中啓といふは、疊める時末の方開くやうに、親骨を外方に曲けたるもの。骨は、檜骨七本なるが正式にて、後世は十二本なるを用ふ。(八)舞扇は、竹骨に厚紙を張り、流儀家元の紋など畫き、親骨には太き絹糸をかき、すべて優美に作れり。(九)張扇は、講釋師、浪花節語などの机又は掌をかき、拍子を取るに用ふ。之は、扇の親骨なく、紙を張りて巻き固めたるにて、開閉出來ず、その効力を失ひたるものなり。尙ほ、昔時武人の用ひたりし。(十)軍扇(十一)

【ハ】(ホ)の部

の最も肝要なる所なるより其字を充つに至れるならんが、古は蠶目と書きたり。また源平盛衰記にはかめとあり、蠶の目の意ならんが。鹿の眼と書けるもあり。▲扇は我國の創製なるが如く、和訓彙に「今の扇子は日本より造出せり。爾雜に、扇起于東夷而盛于今日」といふ是なり云々」とあり、また閑窓瑣談に、唐にては、明の時、我が國の扇に倣ひて造りしよし記されたり。昔の扇は薄き板を合せ、末を糸にて綴ち、本を要にて一所に集めたるものなり。今も、檜扇、粗扇、たどいひて、高貴の方の、五衣袴など着せらるる場合用ひらるるは夫れなり。昔は、身分ある婦人が、人に面を見することを耻としたるを以て、扇にて面をさし隠せるが、やがて今日の如く、儀式に携ふる風習となれるならん。▲種類 扇には、普通涼風を呼ぶに用ふる扇、京扇、名古屋扇などいふもの、外、専ら儀式用のもの、脚扇、手扇等に用ふる、舞扇、藝人などの用ふる扇、種類多し。

(一) 摺扇は、現今最も普通に行はるる扇にして、骨の數一定せず、太骨あり、細骨あり、平骨あり、また白扇あり、畫骨あり、大小

【ラ】(オ)の部

鐵扇あり。軍扇は、長さ一尺二寸、地紙六寸、骨十二本黒塗にて、要に緒を通して房をつけ、叶結にし、表に金箔にて日輪を出せり。かの熊谷直實の教盛を招ぐに用ひ、奈須與市の矢も射たりしといふもの、皆之れなるべし。鐵扇は、軍扇の親骨を鐵にて作れるものなり。オキビヨシ 【扇拍子】 ▲諸の拍子を取るに扇にて手又は他のものを打つと。オミフシ 【近江節】 ▲淨瑠璃の一派。江戸新吉原の近江大塚語の語り創めたるより此稱あり。

オカザキオドリ 【岡崎踊】 ▲踊の條を見よ。

オダマキ 【小田巻】 ▲イベの條を参照すべし。

オットセイ 【鰻鰐】 ▲此の鰻は北太平洋のベーリング海及びオホック海に産し、我が國にては北海道千島群島、中ライコケ、スレート、ウシロ等の附近に産す。哺乳類中の鰻鰐に屬する海獸なり、軀幹は長く、頭部は圓くして、眼は大なり、唇は薄く、上唇に剛毛球ありて、牡は特に長し、齒は上下に九枚づゝあり、四肢は共に短小にして鰻狀

をなし、前肢は歩行游泳共に之を用ひ、後肢は游泳する時脚の用をなすのみ、尾は甚だ短小なり、又體色は年齢に據りて異なるれども十分に成長したるものは紫褐色を帯び、往々濃淡色の上毛ありて腹部に至る、體の大きき七八尺に達すれども、北は其半に過ぎずといふ、▲産地 到る處亂産の結果、現今は其數甚だ少なし、多くは群を爲し、其棲處は、生殖期の外は殆んど一定の據地なく、唯だ自己に適したる海水、即ち其温度七度前後にして濁色を帯び生物に富み、潮流緩かなる所を追うて廻遊し、通常北緯二十五度位迄南下し來る、其時は遠く沖合に出で北上するに隨ひ陸地に接近す、其動作は活潑にして海面を飛躍し、又遊戯をなし、天氣晴明の日晝間は斜に水面に臥して惰眠を食り、又天を仰いで熱眼す、されど聴感及び嗅感と共に鋭敏にして頭は必ず風下に置き若し異響を聽き異臭を嗅ぐときは、忽ち遁去る、食物は魚類及び鳥賊類にして、夜間多く之を索む、この歌は北上するや、其初めは徐々なれども、四五月頃生殖期に近づけば急行して牡は先づ適當なる島嶼に上陸す、其體態肥

満するにより、陸上に於ける動作は甚だ鈍くして、僅かに地上に仰仰の、危急の時にても二十間許も走れば疲勞す、牡は七月頃到着し、上陸後一日を経て一子を胎生す、懷妊期は一ケ年なり、牝は産後四十八時間にして牡と交尾す、交尾後は、牡は直ちに海中に去りて食を索め、漸々南下す、牝は夜間海中に入りて食を索め、晝間は陸上にありて子を哺育す、されど其子に對しては愛情稍々薄きもの、如し、子は生後一ヶ月にして游泳を練習し十月頃に至らば牝と共に南下す、其成熱期は牡は六歳、牝は四歳にして、壽命は牡十五年乃至二十年、牝は九年乃至十年なりと、我が國にて之を捕獲するには、下總の犬吠岬より陸前の金華山沖、北海道の厚岸、千島群島までの近海なり、肉は食用に供すべし、其毛皮は幼稚なるものにありては、毛短小にして上毛を疎生するに依り價貴からざれども、三年に至れば毛漸次密生して灰白色を帯び、五年の後には紫褐色となりて貴重せらるゝに至る。

オンシツ 【温室】 ▲多くは寒帯地方に構造せらるゝものにして、其土地の氣候以上

に温度を高め生物の繁茂、若しくは發育を速かならしむに用ふる室なり、構造は種々ありと雖も熱帯地方の生物繁茂を圖るには、生殖地の温度を保たしむる方法を講ぜざるべからず、先づ周囲の下部には石材或は煉瓦を以て建築し上部は日光の直射を得る爲め、南方に傾斜せし屋根を造り、厚き硝子にて張り、冷氣室内に入らぬ様注意し、又日光の加減を圖るには天井に綿又は藁を覆ひて自由に卷舒し得る様の装置を施し、斯の如く内外の建築を終りたる後適度の温度を取るには蒸氣鐵管を室内に通じて自由ならしむ、而して床は漆喰には葎土とし水溜を設け置き灌水の便に供し、出入口は二重の戸をなし内外の氣の交換を防ぐべし、斯くして、目的の生物を入れ置く時は四季共に娛樂に供せしむる事を得、又野菜類を早熟せんが爲め、我が國にて以前より行はれたる温室は、北風を除き、特に日當よき畑に馬糞、木葉、塵埃等を堆積して温床を稱し、其上に胡瓜、茄子、菜豆、豌豆等の種子を蒔き四方を藁にて密閉し、上には油障子をかけ温度を保たしめ、冬期又は初春の候に實らしめて市場に出すを例と

す、又西洋の蔬菜早作方法は先づ木の框を作りて其上部に傾斜する硝子屋根を覆ひ其中に温床を設けて栽培するものなり、硝子屋根は亦油障子と同じく取放を自由ならしめ、日光の直射温度を加減し、覆盆子、赤茄子等生熟せしむ。又特別に玻璃罐を用ひて、一本づゝ植物を掩ひ、これを温暖なる空氣中に生育せしむる法もあり、又熱帯産の動物を飼養するも温室を用ふべからず、其他早産の生兒、バクテリアの養育法又温室を用ふるものとす。

オクニカフキ 【お國歌舞伎】 ▲芝居の條を見よ。

オクリモノ 【贈り物】 贈答の物品をいふ。古へ之に諸式あり。王朝の頃より鎌倉室町の頃、寄主人に獻け物なせば、主人は之に引出物を贈る。引出物は馬を元とす。引出して與ふる故、引出物と云ひ、後一般の被け物の名となりしなり。又被け物とは貴き人より目下の人に與ふるものを云ひ、之を受けたる人之を頭に被き戴きて退きたれば名づけたるなり。徳川氏の頃にも、法會の僧に賜ふ品など被物と云へり。又徳川氏の頃諸侯は

出府の時、又は時を定めて土産を將軍及若中、若年寄、御用人、留守居、奉行などに獻し、將軍よりは其の報酬として物品を賜ふ。其の時と品とは毎年一定にして、武鑑に之を記したり。將軍の皇室に於けるも之と同じく、將軍御鷹にて自から獲し鶴を天子に獻じ、又天子より宇治の茶を將軍に賜はる節、其の二品の遣中を往來するに當つて、諸侯と雖も之に途中に遇ふ時は敬禮をなす例にて、之に缺禮する者あれば嚴科に處せられたり。▲進物の式 進物は紙に包み、藁に載せ箱または櫃に入れ、竹の先、木の枝等に付け、水引にて結び又は鬘斗を付るの法あり。紙に包むこと能はざる大なる品は、品の上に鬘斗包を載せて、之を包むに換ふ。又略式にては、藁を用意せざる時は、扇面に載せて呈し、鬘斗なきは文字にて、のしと書く等あり。又御香囊、香典、香資等は有職問答に、作善などの事に送候揚紙に此分候。御前追善などに不可可限。法事には惣て此可可稱候。又被物捧杯。物によりて可可稱候とあり。

オクラカン 【小倉羹】 ▲羊羹の條を見よ。

【ラ】(オ)の部

オヤチカガタ 【親父方】 ▲芝居にて老人に扮する俳優の稱。例へば「平假名盛衰記」の権四郎、「野崎狩」の久作の類なり。

オケ 【桶】 ▲主に杉、椴等の木を圓く組み立て作り、竹又は銅、鐵などの筒をばむ。なげの語は、もと字を讀みて入れたる菅筒の轉じたるなりといふ。桶には、専ら水を運ぶに用ふる手桶といふがあり、紐を付けて天秤棒にて擔ふ擔桶といふがあり、また片手にて水を汲出すに用ふる片手桶といふがあり。此外にも、くりやま桶とて、水上又は軒下に据え置き、雨水を貯へ、其れを撒水又は防火用に用ふるものあり、また漬物を漬くる桶、酒、味噌等を醸すに用ふる極めて大なる桶等もあり。總て桶は、使用の後、乾き過ぎざる程度に於て日光に曝し、腐敗せざるやうに注意すべし。また時々磨き砂にて磨くも必要なり。

オコシ 【柵】 ▲おこしこめを略して云ふ、道明守柵を蒸して筒に和せ、型に入れて堅め、或は手にて少き球を作る、▲雷おこし 東京浅草雷門前に賣る、梅實位の握り固めたるもの ▲おおこし 岩石の狀より名づく、數千目形に切目を入れ、折りにて食ふもあり、▲栗おこし 糯米を使ふ、板形に固めたるもの、大阪の名物なり、▲オテダマ 【御手玉】 ▲女子の室内遊戯として、多少手廻の練習にもなり又注意力を養ふことを得べし、通常盤の上、椽の上などに座してする故、さわがしからぬ遊びなれど肢體の運動には効少なし、御手玉は、小豆粒若しくは大豆等を入れたる小きき布の袋を造り、三つ五つ七つと奇数を以て、種々の技をなす遊びなり、先づ全體を握りて程よくまき散らし、一つの親玉を定め、これを投上りて、其の落ちぬ間に下の一つを取りたるまま手早く前の親玉を受け、後の玉をば傍らによするなり、かくして、順次に皆取り終り、次に同じ様にして、下の二つと取り更に三つ四つに増し、或は二つとりては、一つおとし、三つとりては三つをおとし、なほ手の甲などに種々にあしらひ、無事に一通り終りたる時は一貫貫したりと云ふ、二人以上數人にて勝負をなす、又曲にとりて遊ぶ事もあり、この御手玉は何時の頃より始まりしか明かならねど、もと石投取とて、小きき石を

若干撒きて、一を空に投上げ、様々の技をなすことあり、よく御手玉に似たりといへば、それより來りしものならん、されば近來は種々の進歩せる遊戯多ければ、この御手玉も漸くすたれつゝあり。

オキモノ 【置物】 ▲床飾品。陶器、銅器、其他金石彫刻物、寶石、古物等にて、床の間に据置くるものなり。其何品たるに拘はらず、床の大小に應じ、掛物、花瓶、挿花など調和を缺かず、且つ清く雅致あるものたるべからず。また假令美術品として價値あるものも、人の見て不快を感ずるものは避くべく、殊更に高價のものな誇り、或は數多く陳列して、傲者を誇る如きも忌むべきことなり。

オメシチリメン 【御召縮緬】 ▲織物の縮緬と同じ方法に依りて織出せども、其異なる所は、一は生絲を以て織り、一は練絲を以て織る點にあり。之にも諸摺絲を使ふあり、摺絲を使ふもあり。御召縮緬は、小紋御召と稱して婦人の間に流行を極め、殊に妙齡の婦人の之を用ひて、頗る優美なるもの多し。また羽織、被布にも用ひられ、桐生よりは帯問

としても織出す。無地御召は、またコートなど作る。産地は、西陣、桐生、足利などにて、皆夫々特色を有すれども、その精巧優美なる點に於ては殆ど同一なり。御召縮緬の由來は、天保年中桐生の織工が、京都の製に倣ひて一種の柳條縮緬を織出し、之を御召縮緬と名づけたるに始まれり。

効ある事あり、近來我が國の教育發達したる爲め諸方に盲啞をも教育する學校の設立を見るは是れ實に聖代の賜といふべし、東京盤屋學校に於ては讀書、習字、作文、算術筆讀、體操とし、其他圖書、彫刻、指物、及縫裁などの技術をも教授するに至れり。

ゆかり香、雪鏡、花月香、九重、花園、花の露、白露、牡丹白粉、富士見形、雲井、小町水おしろい、キレー白粉、東にしき、花のつや、雪のつや、ダイヤモンド、フノー、新花玉白粉、花玉白粉、千代の玉、雪の友、富士露、八重露、都の花、鶴の友、佛蘭西美人、雪の梅、香羽菊、小町梅、毒美禮白粉、京の水、ふかま白粉、小町白粉、小町櫻、ホワイトローズ、やまと露、小足白粉、玉の花、八重櫻、宮田白粉、飯田白粉、小出白粉、丁子香、白玉香、天上白粉、都にしき、錦雪などあり、▲無鉛 の中には衛生白粉、白妙水晶おしろい、名譽白粉、やまと櫻、菊の露、はつれ白粉、夕顔、雪の華、すぐれはだ、宇津紅葉、御園の雪、メリー、パンジ、無鉛製衛生白粉、國の光、菊の露、新式無鉛やまと露などあり、婦人は平素無鉛のものを用ひて薄化粧をするは、女のたしなみなり且つ衛生に叶ひたる業なり、

オシ 【啞】 ▲啞は、元來の天性なるものと、生後何等かの場合に依りて腦出血の爲め言語を發せざるものととの區別あり、東京盤屋學校の調査に依れば、天性の啞は多く血脈結、婚者の間に設けたる兒童にして、且つ痴呆者多しといふ、啞は概して聾にして視力のみ發達するものなれども、凡ての理解に鈍きものなり、往々にして耳の聞えながら言語を發せざる小兒あり、さる場合は親たる者は輕々に看過すべからず、言語を發し得ずば教育を受け難く、只さへ才智の鈍き小兒は其の發達は殆んど中止せらるべきものなれば四五才以前に治療する時は、小兒の常性として物を言はんとする情盛んなれば、或は奏

オシロイ 【白粉】 ▲昔は鉛粉のみにて作りたれども、近來の色々の配合物を用ひ、京都にては錫粉を用ひ、又辰砂にて製するもあり、本邸にて雄略天皇のとき已に之れあり、持統天皇のとき沙門觀成鉛粉を製して奉りしかば、其佳品を賞して物を賜ふ、慶長頃の頃の錢屋家安、小西清五兵衛等明の法を傳習して白粉を製す、後更に唐土にて之を製し、近來は西洋に慣ひて澱粉を用ふ、(化粧の條を見よ) ▲種類 製法は炭酸鉛、硫酸バリウム、滑石、澱粉等にて、近來鉛毒の有害なるを知りてより、酸化亜鉛、硫酸バリウム、酸化錫、澱粉を主なる原料とするに至れり、▲水おしろい 水に溶したるもの、西洋風のもの、透明水にて、これを附ければ白くなる、白粉中。▲有鉛のものにては、玉の露、吉野香、菊がされ、菊わらべ、若ざくら、

オシロイバナ 【紫茉莉】 ▲草花の條を見よ。

オシロイシタ 【白粉下】 ▲化粧水

オシドリ 【鶯鶯】 ▲鶯鶯とも書く、本邦にては、信濃、武蔵、西南諸國に多く産する水鳥にして、嘴扁、頸は長く廻轉自由なり、脚は後方に偏倚する故に歩行甚だ拙なけれど、翼は飛翔するだけに發達せり、其の脚は三趾ありて、蹠あるを以て能く水中を游泳する事を得、多くは水邊に棲みて植物又は蠅蚋を食すとす、時としては魚類を捕食する事あり、樹林に止まるを好むが故に、巢は樹梢の枝間に造りて産卵す、其體は鳥よりも小さく鴨より大なり、雄は羽毛麗にして、頭部に紫黒色又は紫紺色の美しき羽冠を戴き、眼の兩側は白色に、頸の兩側は黄褐色にして端白し、胸は紫黒色にして下部は黒白の横斑となり、腹部は白く、背は黄褐色、翼は灰白色なり、翼の上部には黄褐色の鴨脚樹葉形なる一對の錦羽あり、これをおもひばね、いちやうば、つるぎば、などいふ、翼下は淡褐色に、黄褐色を交へ、黒き細き細横斑あり、嘴は濃紅色にして、脚は黄色なり、雌は全身者褐色にして、胸より腹に灰白色の濃斑あり、翼の表面は青紺色にして其端白し、眼の後部に白色の紋斑を具へ、

嘴は灰黒色にて、脚は黄灰色なり、冬季は沼地に淤泳し、夏に至れば山中の溪畔又は池邊に棲息して、北地に歸る事なし、或は夏期は北海道に渡りて、黒龍江地方に去るといふ、之の鳥は雄雌同棲して須臾も相離れず、人若し其の一を獲ば、他は相思ふて必ず死すと傳ふ、其纏綿の情最も濃なるを以つて、古より四鳥の名あり、夫婦の相和する事を鶯鶯の契などいふは但し之れに由るなるべし

オヒワケアジ 【追分節】 ▲俳曲の一種、秋後追分、北海道追分などの種類あれど、聲調にの僅の相異なるのみにて、いづれも哀調を帯ひ、母音を長く引くところに妙技を發揮す、若し月の光さやかに照れる夜、はるかに海邊、遠く舟人が詠ふ追分を聞くことあらんか、惘々として追分哀調に心しめやかに涙るべし、▲起因は詳かならねど傳へ云ふ越後の流夫の妻、其夫を慕ふて遙々北海道に到りしも途へざるを敷き、發狂して詠ひしが彼の有名な忍路高島の一曲なりしと、北海道追分は實に之に因りて起りたりとも云ひ、又は信濃北佐久郡の追分あたりには居居たるが追分節の始めなりとも云ふ。

諸説まちまちにして確證を得るに難し、越後佐渡より奥州の沿岸にかけて最も流行しつゝあり、次に二つ三つ人口に膾炙したる唄を示す、「おしよる高島及びもながせめて歌拾いそやまでスイスイ。」一鳥も通はぬ八丈が島へ、新島やらる、此身はいとはれど後に残りし妻や子は、どうして月日を送るやらスイスイ。」

オモト 【萬年青】 ▲千年草といふ。百合科に屬する常緑の草にて山野に自生するものなれども盆栽として賞翫せんに専ら園藝するを要す、昔より其色の青々として萬年を経て改めざるを以て世人の愛翫する所となれり、其葉實の大小色澤の異同一様ならず、然れども萬年青の原種と稱せらるるもの七種あり、日本の本、永島、久安寺、志加美、大名性、神代、秋津島是なり、凡そ花葉の變遷せる千態萬狀なりと雖ども其實皆此七種に由りて出でざるは無し、此七種を稱して葉草といへり、▲日本の本此種は立葉にして薄白の縞あり之を大葉の素草と稱す、今世に行はるる所の都の種類は多く此性より成れるものなり、▲永島 此種は細葉にして白き

縞の入りたるなり是まで屢々上等品を生じて世に愛翫せらるる光澤濃厚にして品質高尚なる之が右に出るものなきも變化乏しきものなり、▲久安寺 此種は其葉亂形にして黄白交りの縞の入りたるもの多し、此種變化極めて廣くして枚擧すべからず、殊に小萬年青は多く之より出ず又其内に一種、性として稱ふるものあり、其實より動もすれば向龍の類を生ずる事あり、▲志加美 此種も亦其葉亂形なり、白の浮縞入りて吹掛け斑を交ふまた縞の入り方他性に異なりて其實より生ずるもの概ね綺麗なり、▲大名性 卷葉の細きものにして白斑に吹掛け斑を交へ其狀最もよし、然れども縞と斑の分界甚だ混淆して辨別するに難し、凡そ此種より變生する者悉く然らざるはなし、時にまたべつ甲斑の入りたるものに變ずる事あり、▲神代 垂葉にして白覆輪を掛け縞と斑と交り入り、此種より生ずるもの葉の地合種々に變ず、▲秋津島 繖形の青無地にて葉の地合は芭蕉布の如し、是又大葉の素草なり、今世に稱する大葉、節宗、類發雪の類は皆此種より出づ、此外近代の實親即ち中興の祖とも云ふべき

もの十三種あり、永島より變出せる劍先、東かみ、煙草葉、日の本より出づる長龍、秋津の宗、久安寺の分生たる縞甲龍、借白葉、錦の輝、錦花屋性其他二面龍、折腕斗丸葉性、月影をいふ中に著明なるもの、性質を記せば劍先素草永島より出でたるものにて立葉に覆輪を掛く、白縞あるを白縞劍先といひ黄縞の入りたるものを黄縞の劍先と稱す、此種は變化極めて多く厚葉にして光澤の好き青龍の如き縞子地にして覆輪を掛けの入りたる牽牛の如き或は厚葉にして白縞類此種より生ぜしもの葉で敷ふべからず、文化年、間此種、江戸に於て非常流行を極め萬年青の名稱多くは此時より始まれりといふ、其中長龍は日本性より變化せしものにして葉細く立葉にして覆輪を掛け縞あり、葉背の中骨及び左右の筋高く恰も琴絲の如し、此實より往々裏甲龍あるものを生ず、花屋は性久安寺の一種にして亂形なり、縞ありて久安寺に酷似す、此實より多く小萬年青を生ず、今世に行はるる友髮白、白髮等は是なり、月影は細葉にして小波あり、他の品と異なり

て胡麻斑の覆輪を掛く小萬年青にて有名なる松の位といふ美形も此種の實より出で、此種時々變性して奇品を出すを以て樂しみ深き親草として賞翫せらる、▲葉形及稱呼 葉によりて大葉、中葉、間葉、小萬年青の四に分つ、大葉は其形最も長大なり、元九州地方より出たる故、薩摩性の名あり、中葉は大葉に亞ぐものを云ひ、間葉は中葉と小萬年青との間に於て、子の生ずる事、大葉より多し、又其一種にして、花の出るものあれども、實を結ばざるものあり、小萬年青、其葉最も少なく實、花を著けず、葉形の稱呼には立葉、細葉、丸葉、大平葉、亂形葉、蘭葉、垂葉、細卷葉等あり、斑斑には天さい、後さい、黄縞、白斑、吹掛け斑、霜降、墨流、墨縞、紺覆輪、其の他數多あり、此の外に爪縞と稱するものあり、都て何の種類に係はらず、日に強く曝す時は、葉の本色自然に失せて、其筋のみ青く残り、之に黄色を帯びて縞の出づるものなり、俗に之を爪縞といへど、こは縞とも、斑とも稱し難きものなり、葉面地合の稱呼には綾地、縮縞地、縹羽地、縞子地、黒地、羅紗地、砂子地、厚板地等あり、▲花

【ワ】の部

賞花は通常黄色一重にして、實を結ぶ、亂形の品には多く八重の花を生ず。墨流紺縹輪の類に至りては、重瓣なれど淡紅色を帯ぶ。開花の期は、毎種多少の遅速ありと雖も、概して、入梅前一週間花の盛りとなり。花の盛りには酒の如き香を發す。實を結ばしむるは、風雨を思むものなれば注意を要す。野生にして完全なる實を結ぶを見るは、葉の繁茂するか他の樹木等に掩はるゝによるなり。萬年青の實に、赤、黄、青、水晶の四種あり。赤實は深赤色、淡赤色などあり。黄實は初め青色にして、後ち熟するに隨ひて黄色を呈す。青實は初め淡青、熟するに及びて透明となる。放在(野生)の萬年青に結ぶる實より、時に奇品の生ずることあり、されど百粒の實を蒔くに十本乃至、十五本位は斑入りの品を生ずれど、多くは吹掛け斑にして、其年内に消滅するものなり。

オモチヤ 【玩具】 ▲中古より用ひ習はせるものに、犬張子、獅子頭、横笛、天神、赤馬、春駒、刀槍、長刀、弓矢、竹馬、でんでん太鼓、貝笛、鳩車、張子の面、市松人形、張子の虎、はじき猿、風車、竹蜻蛉、板かへし、紙製文福茶釜、舌出三番災、起上り人形、放し龜に鯛、竹製水鐵砲、米搗車、水からくり、岩雀、竹獨樂、木獨樂、錢獨樂、打獨樂、跳兔、籠雀、猿米搗、蝶々とまれ、倭ころし、拾風、竹筒眼鏡、すたすた坊主、水鳥、碓石の魚釣、手毬、羽子坂に羽子、紙鳶(はねうり)、達磨人形、各種の形等あり、また當今の玩具にては、金屬製の瀧車、瀧船、鐸打自動車、鐵道馬車、人力車、馬車、自動車、飛行機、軍艦各種、鼓馬、曲馬、器械の風、龜の子、水泳魚、籠入笛、附の雲雀、軍用喇叭、風琴、獨樂、新畫、パノラマ、假名の繪合せ、かるた及び雙六の各種、九々の繪合せ、寄本繪合せ、護謨輪、綿細工動物、紙細工動物、竹細工、麥藁細工、幻燈貝、角力人形、硝子細工、積本、並べ板、操木細工、輪並べ、球突盆、球通し、考へ物、ポンチ畫類、軍事に關係ある鐵砲大砲を始め、兵士、馬、輜重等に關係したるもの等あり、以上は世上有觸れたる、品目なり。▲幼稚園の玩具、幼稚園にて從來使用せられたる玩具は、兒童の年齢に應じて同じからず、毛絲製、六色輪は物體の現象と六色とを示し、圓、

【ワ】の部

圓柱、立方の三體は、物體の三形を示し、積木、並べ板、は幼児をして多少の工夫をなましむるものなり、箸には種々あれども何れも角箸にして、机、椅子、家屋等の形狀を作らしめ、輪並べは種々の形を並べて工夫をなましめ、或は紙刺、撃ぎ形、縫取り、紙切、等は絲また紙にて物の形狀を真似し、或は種々の彩色配合をなましむるものなり、此の外、板組、板連れ、組紙、紙疊み、豆細工、土細工、等あり、いづれも幼児をして、娯樂の傍ら、工夫模倣の修練をなましめ、心意の發育を助くる爲の具なり。

オモタカ

【澤瀉】 ▲水草の條を見よ。 【稀汁】 ▲粥の條を見よ。

ワの部

ワニ 【鱉】 ▲多くは熱帯地方に産する爬蟲類中最大の動物なり、種類甚だ多しと雖も、東印度に産するは、ガビアル、と稱し亞非利加ニール河に産するを、クロコダイル、といふ此二種は共に身長二丈餘に達す、又亞米利加の熱帯に居る、アリゲートルにクワイマンとチャカレの二種あり、趾間の蹼不完全にして自ら前二者と趣きを異にす、其他濠洲等の河川に棲む、ガビアルあり、何れも體長く、幅廣く、頭は扁平にして、鼻端は殊に延長し、其の端に鼻孔あり、相並びて半月狀を爲し、頸は極めて短く、尾は體よりも長くして水中に於て權の用を爲す四肢は稍々發達して前肢には五趾、後肢には四趾を有し、其の中三本の趾には鉤爪を備へ、趾間には蹼を具へ、眼は小さく三枚の膜にて被はれ、深く凹めり、耳の穴は蹼狀の皺膜にて閉づ、鼻孔は閉塞する事を得るにより、よく水中を潜行する事を得、體と尾とは、方形の堅厚なる鱗片を以て蔽はれ、所謂甲を

なす、殊に背面の甲片には隆起ありて、其狀恰も船の龍骨の如く、尾は殊に著しく、二系の鋸齒狀をなして昔時武士の甲冑を着けたるに似たり、動物學者は之の鱗片の數と、其排列の狀態に依り種類を定むといへり、舌は厚肥にして口外に伸出せず、喉中に二枚の膜ありて、烈しき香氣ある液體を分泌す、齒は獸類の如く齒槽に並びて爬蟲類には異様の觀あり、また心臟の構造も二心耳室より成り、寧ろ鳥類に近し、常に河沼に棲み、時として沿岸の海水、水中にも浮ぶ事あり、而して陸上に上るは睡眠時若くは産卵期及び其居るを移す際なりといふ、性質凶暴にして常に同類相率めて群を爲し、種々の鳥獸魚類を捕食し、時としては人類、牛馬を襲ふ事あり、其卵は鵝卵に似て堅き事陶器の如し、其産卵數は一回二十箇乃至百箇の多きに達すれども雄鵝又は他の動物の餌となるに依り無難に成育するものに至つて少なしといふ、其壽命は詳かならざれども人類の殆んど五倍位なるべしといふ、皮は、靴、煙草入、囊口等として世に重用せらる。

ワカランナカタ 【若女形】 ▲舊俳優の投柄の一つ。普通にいふ女形の事にて、之に數種あり。▲藝者、紙治の小春、五大力の小まんの類。▲傾城、助六の揚巻、廓文章の夕霧の類。▲世話女房、千雨樓のおとは、吃又のおとくの類。▲娘、千本樓のおさと、野崎村のお染の類。▲娘、入相樓の清姫、信仰記の雪姫の類なり。 【若衆形】 ▲芝居にて「忠臣蔵」の力彌、「血塗摩」の數馬の如く若き男に扮する俳優の稱。往時は市川門之助(初代)佐野川市松(初代)の如き若衆形の名優ありたれど、後には衆道流行の爲め技藝は漸次に衰へて女形より兼ねるやうになり、純粹なる若衆形は漸次に歸したり。 【ワタ】 ▲綿は元來本邦の産にあらずして、桓武天皇延暦年中三河國に漂着したる一異人より初めて傳へられたる物などが當時播種其宜しきを得ざる爲め、一時其種子を絶ちたりと、其後我が國に傳はりし年代は正確ならざれど、後柏原天皇の御代、西國の商人日本に來りて、之を販賣せりと傳ふ之に依れば、其の頃、海外より傳來せしものなるべし、其の後漸次全國に傳播し、

【ワ】の部

【ワ】の部

到る處に之れを培養せざるはなく、海外との交通大に開くるに隨ひ、善良の棉花、北米合衆國、支那、印度、の諸國より盛んに輸入せらるゝに至り、國內の産額大打撃を受け、年々衰へしが近年關西地方に於て、米國棉種を試培せしより、再び漸く好成績を見るに至り、此植物は錦葵科の一年生又は多年生の物にして莖は二尺餘に伸び、葉は心臟形に、深き裂目を存して互生し、淡黄白色の五瓣花を附けて莢果を結ぶ、形狀、桃の如く、内部三房に分れ、成熟するに及び、開裂し白色の毛狀纖維を吐く、種子は黒色にして稍々圓く多数の白毛を有す、種類多しと雖も大別して、印度産と米國産との二種とする事を得、前者は印度を主とし、南部歐羅巴、地中海沿岸、ペルシア等に栽培するものにて、其纖維は恰も羊毛の如し、後者は米國産にて、種子に纖維を密着せるものと、然らざるものとあり、後者には海島産と陸地産とあり、海島産は、綿葉美麗にして、細長く、遙かに本邦種に優れり、本邦に栽培せる棉は印度種に屬し、概れ綿葉太く短くして、細き絲を製するに適せず、之れに朝鮮、

土佐、青木等の種類あり、朝鮮には大朝鮮中朝鮮、小朝鮮、赤木小朝鮮、青木小朝鮮等あり、青木小朝鮮は品質最も良好にして、綿葉細長く且つ光澤あり、絹絲の歩合も多けれど風雨害蟲に罹り易く、赤木小朝鮮は樹性強健なれども品質劣等なり、土佐には、青木土佐、八寸土佐、田邊土佐等あり、田邊土佐はよく乾燥に堪へ、收穫多く、燥絲の歩合また多し、茨城地方にて栽培する地棉と稱するは、樹性強健にして綿葉細長く之れを栽培するには種子は、中頃蒴中より吹出でたるものを採集し置き五月頃微温湯に浸したる後、灰を着けて麥の畦間に播種す、肥料には過燐酸石灰、木灰、油粕、搾粕、等にして、又時々追肥し、或は稀薄なる人糞、尿等を用ふ窒素肥料のみを用ひる時は、徒らに枝等を増長せしむる虞あれば宜しからず、性排、水宜しき砂壤土若しくは腐敗植物性に富める土壤に適す、發芽後三寸許りに成長せし時、良苗のみ三寸置き位に殘し、他は悉く引き去り、能く、害虫を驅除し、結實期迄は時々灌水し、又苗の成長適度に達したる頃枝と幹の先端を摘取り、枝間

に發生せんとする芽も、亦悉皆摘取るべし、秋、蒴果の開裂せるものを採集し、其のまだ開かざるものは株のまゝ摘取りて日光に晒すべし、一反歩の收穫、凡そ五六十貫匁にて之れより製出する棉は、二十貫匁内外なり、もと熱帯地方の産なれども、我が國にては東北の寒國を除く外各地方に栽培せらる、米國種海島棉及び陸地棉の如きものとて、栽培法に其の宜しきを得ば、自然慣るに至るべし、一般に本邦産の棉は、其の纖維粗質にて、太くして短く隨つて細絲製造に適せざれど、米國種にあつては、紡績用殊に細絲製造に好適す、茨城地方などにては、棉の種と共に胡麻を播き、害虫によりて棉の消失したる所は、胡麻の收穫に依りて之れを補ふ様にせり、世界に於ける棉の産地は、北米合衆國を首とし、印度、埃及、支那等の諸國之れに次ぐ、我が國にては大阪、愛知、岡山、廣島、兵庫、茨城、埼玉、千葉、栃木、山梨、静岡、鳥取の諸縣を主なる産地とす、種子は晴に摘取りて、日光に乾燥し、綿葉纖維、又は綿葉機にかけて、綿纖維より分離す、之れ所謂棉花にして、之れを精製したるも、

の即ち綿なり、製法には機械製と弓打製とあり、機械製は初め綿葉機により、纖維と實とを分離せしめたる後、開前機に附し、前機の取残せる種子及び不純物を除去して、棉花の固結せるを去り、次に打綿機に附して、開綿機の取残せる不純物を除去すると共に棉花を軟かに打開き、然る後之れを梳綿機にかけ、打解したる綿纖維を適當の大きさに並列せしむ、弓打製は本邦に於て昔々使用せる法にて、其の構造、先づ絲を以て綿打弓の一方を釣竹に釣り、弓の弦を綿に接して水平に保ち、弦を弓にて打たば、其の震動によりて、綿纖維は弦に纏はり、なほ強く打たば、綿は弦より離る斯くする事數十度に至らば、種子及び塵芥を除去して、純粋なる綿纖維を得、是れ即ち市場に出づる綿なりとす、機械製の綿は、弓打製よりも、不純物を混ずること少なく、品質亦良好なり、綿は其の製造の精粗並に品質によりて、小袖綿、打綿、綿襪等々々の名稱あり、用途は主として被服の用に供せられ、被服原料中、最も多量を占む、之れを紡きて絲となす時は、靱にして且つ優美なるを以つて、各種の織物

原料、及び其の他の用に供せられ、されど紡ぎて絲に爲すには、近來紡績業の進歩せるあるが故に一旦綿に精製したるものを取りて紡ぐ事なく、棉花を直ちに紡績機に附するを以て、現今其儘之を使用するは、布圍の心、衣服の綿の如き止まる、されど其の需用は年々増加し、製造も盛大に赴き、支那、朝鮮、暹羅、布哇布に輸出する打綿は年々三十萬圓餘に上り將來頗る有望なりとす、又綿は綿火薬を製し、寫眞術又は醫藥、化學用コロヂウムを作り、或は人造絲の原料とし、又人造象牙、醋甲等を製す。

ワラビ (蕨) ▲本邦各地の原野に自生す、種類には陰地蕨、水蕨等あり、陰地植物の一種にして、羊齒門中水龍骨科に屬する宿根草なり、地中に長き根莖を有し、所々に骨節を出す、高さ四五寸に達す、骨は太き葉骨を有し、強靱にて茶褐色を帯び、光澤あり、羽狀複葉にて小葉に缺刻あり、早春地上に出で柔かにして捲曲し、恰も小兒の掌の如し、秋季に至れば、葉縁裏面に折返りて、薄き被膜をなし、其病部なる微細なる種様の芽胞は後地に落ちて、蕨を生するなり、而して陰地蕨は、秋月前を出し、葉には一葉に一の芽胞を著く、高さ五六寸あり、柔軟にして味美なり、水蕨は水中又は濕地に自生す、水生のものは大にして、陸生は小なり、夏間葉を採り、煮て食す、蕨は各地到る處の山野に自生すれど、殊に奥洲津經、南部、羽後、秋田及び庄内の産は、殊に肥大にして柔かく、最も良品とす、其の嫩きを採りて食用とし、或は乾かして貯へ置き、又鹽漬となす、又根よりは澱粉を製す、之れを蕨粉と

【ワ】の部

なし、炭餅を製す、又湯に解きて炭湯として、飲用に供し、また糊にも製す、莖は箸となし、又根莖を碎きて繩に縛ふ、之れを炭繩といふ、其の色黒くして能く水に堪ふるが故に種々の用に供せらる、成分は澱粉九一、一八、蛋白質二、八三、脂肪〇、一三、炭水化合物一、四一、纖維三、二七、灰成一、一八、の割合より成る。

ワシ 【梔】 ▲食器の一。飯、汁など盛るに用ふ。多く木製にして、黒、赤などの漆を塗りたり。本膳に用ふる梔には、大梔、汁梔、平、壺等あり、他に吸物梔、木皿など種々あり。すべて梔の如き漆器類は、漆の剥げ落ちざるやう注意せざるべからず、普通の漆器は、餘り熱きものを盛るか、又は使用の後に十分水氣を去らざれば、上等のものも尚漆の剥げ落ちる虞あり。

ワサビ 【山蕎麥、山葵】 ▲西比利亞、ヒマラヤ山、及本邦に産す、十字花科の宿根草なり、數種ある、根莖は太く多肉にして、不規則なる横裂を有す、莖の高さ尺餘に達し、根葉は心臟形を呈し、不齊の齒刻あり、裏面は葉脈著しく突起し、大なるものは徑四五

寸に及ぶ、花は白色四瓣、繖房状或は總狀をなして開く、雌蕊の柱頭は僅かに二裂し、種子は一二列をなす、深山の溪間に自生す、又内地の山國及び北海道に多く栽培せり、ゆりわさび、高さ二寸乃至五寸あり、莖は廣卵形にして縁邊に不整の粗齒あり、本島及び四國、北洲の山間に自生す、山葵大根、は歐洲南部の原産にして、根は半莖に似て長く、風味普通の山葵と同じきが上に、畑地に栽培し得るが故に、近時漸く用ひらる、栽培法は澆流の砂礫清き所を選び、地面を傾斜せしめて、水の停滞する事なからしめ、春秋の彼岸頃、分根して植附くべし、二個年にして收穫する事を得、栽培宜しきを得ば、根莖長さ八九寸、周囲八九寸に及ぶといふ、一種の揮發油を含み、高尙なる辛味を有するが故に、胃を刺激して食慾を促し、他の食物の風味を助くる事大なり、されば日本料理用香辛料の首位を占め、刺身のつま、つゆ物の吸口等には勿論、其の他、菓子製造の材料となり、莖葉は葉で浸物とす、亦辛味ありて佳なり、又山葵の粕漬といふは、根莖の肥大なるを短冊にうち、鹽漬にして翌日水を切り、酒

粕に漬け、蜜に詰めて目張し、用ふる時醬油をかかふるなり、薬味の拵方は、まつ庵丁にて皮を剥き、刀を立て、下部より上方へ逆にくそげ、綺麗に外皮を去りたる後、山葵擦にて、頭の方より擦るべし、擦りたる後、庵丁にて叩くも可なり。

寸に及ぶ、花は白色四瓣、繖房状或は總狀をなして開く、雌蕊の柱頭は僅かに二裂し、種子は一二列をなす、深山の溪間に自生す、又内地の山國及び北海道に多く栽培せり、ゆりわさび、高さ二寸乃至五寸あり、莖は廣卵形にして縁邊に不整の粗齒あり、本島及び四國、北洲の山間に自生す、山葵大根、は歐洲南部の原産にして、根は半莖に似て長く、風味普通の山葵と同じきが上に、畑地に栽培し得るが故に、近時漸く用ひらる、栽培法は澆流の砂礫清き所を選び、地面を傾斜せしめて、水の停滞する事なからしめ、春秋の彼岸頃、分根して植附くべし、二個年にして收穫する事を得、栽培宜しきを得ば、根莖長さ八九寸、周囲八九寸に及ぶといふ、一種の揮發油を含み、高尙なる辛味を有するが故に、胃を刺激して食慾を促し、他の食物の風味を助くる事大なり、されば日本料理用香辛料の首位を占め、刺身のつま、つゆ物の吸口等には勿論、其の他、菓子製造の材料となり、莖葉は葉で浸物とす、亦辛味ありて佳なり、又山葵の粕漬といふは、根莖の肥大なるを短冊にうち、鹽漬にして翌日水を切り、酒

病をも媒介するものなりとし近來之れが撲滅法を研究するもの多しといふ、豫防策として蚊の發生する四五六月の頃溝渠、水溜及び下水等に石油を數回撒布するは大に効果ある方法なりと云ふ。

カ の 部

カ 【蚊】 ▲蚊の種類には黒蚊、豹脚蚊、アノフェレス等ありと雖も、蠅、虻など、同類の蟲なり、盛夏の頃夜間屋内に群り來りて人畜を惱ます蟲なるが、其血液を吸ふは雌のみにて、雄は吸ふ事なし、口の構造は大小の兩顎細き針嘴となり、下唇に長き舌を具へ、上唇と共に全部を被ひて、管状を爲し、液汁を吸ふに適す、翅は前翅二枚を有し、後翅は發育不充分にて細小なる棍棒状をなし、飛ぶ事甚だ早く、往々蚊柱とて軒端などに無數の蚊の群飛して、柱の如く見ゆる事あり、之れ雌雄相求むるものなりといふ、蚊の生存期は僅かに二三週間に過ぎずして雌は卵を産めば忽ちして死するなり、卵は通例溜水中の木片枯葉などに産み附けらる、其數五十乃至百五十に及ぶといふ、此の卵を顯微鏡にて視る時は、恰も蜂の巢の碎片の如し、暫時にして孵化し、赤色或は黒色の蟲となり、水中に浮動する様、棒を振るに似たれば子と名附けたり、即ち蚊の幼蟲にして捕へて金魚

に與ふるもの即ち是なり、之の子は翅もなく脚もなく其形小さき釘に似たり、靜かるときは體を倒にして水面に浮び、末端にある氣孔にて空氣を呼吸し、物に驚く時は忽ち水底に沈む、溜水中の腐敗有機物を取りて食す、孵化後數日を経て、凡そ三分許りに達する時は、背部裂けて孵化し、小さき米粒の如き形となる俗に之れを丸子子といふ、後又數日にして再び蜕化すれば、頭部、胸部、腹部等全く具はり、翅及び足を生じて成蟲即ち蚊となり黒蚊は普通の蚊にて四五月の交り出初め夜間屋内に入りて人を刺す、豹脚蚊は通常の蚊より稍々大きく、體に白色の輪紋を有す、アノフェレスは主に沼澤の地に生じ通常の蚊より大きく、翅面に黒斑あり、物に止る時は尾を上げて體を斜にし通例の蚊の如くに屈曲せず、マラリヤ病の媒介をなす事あれば大に警戒を要す蚊の襲來を防ぐため青葉木片など種々の物を室内に燻することあり、中にも蚊を追ふに最も効あるものを除蟲菊とす、又近時鋸屑に硫黄末を混じ、細長き紙袋に詰め、一端に火を點して燻する蚊遣香といふものあり、印度地方に於いて、蚊は虎列拉

病をも媒介するものなりとし近來之れが撲滅法を研究するもの多しといふ、豫防策として蚊の發生する四五六月の頃溝渠、水溜及び下水等に石油を數回撒布するは大に効果ある方法なりと云ふ。

ガ 【賀】 ▲祝の條を見よ。

カイ 【貝】 ▲貝類の條を見よ。

カイドリ 【振取】 ▲襦袢及び服裝の條を見よ。

カイドー 【海棠】 ▲最も強性なる宿根草なり、その葉は薄綠色にして、不等邊の奇形をなし、鋸齒ありて大きく、節赤くして、且つ節ごとに葉を生ぜり、莖頭に四瓣の淡紅花を群がらして、その蕊は黄色にして、愛すべしこの草は性陰濕を好むものなれば、日光の直射を受くるところに栽培するはよろしからず、性甚だ強健なるものなればこれを栽植するときは年々發芽して、その株を繁殖し、容易に枯凋するものにあらず。

北向の小庭なる手水鉢の鉢回りに栽うるときは、最も能く繁茂するものなり、これを栽植するは、赤土、眞土又は果土のいつれにても可なり。乾鰯、魚腸などを與ふるときは著

【カ】の部

しく繁殖するに至るべし。
カイチヨウ 【開帳】▲佛像に安置せる佛像の扉を開きて、諸人に拜せしむるを云ふ。種々各地目ぼしき場所の目に觸れやすき所に廣告し、期間を限りて之を許す。又平日なりと雖も特に賽銭を出して、開扉を願ふ者に許すことあり。其の佛像安置の寺院に於てするを居開帳といひ、然らずして他所に本尊を移出してするを出開帳と稱す。室町時代より行はれしが、年を経て次第に盛になりぬ。中にも諸人の歸依して詣づる者の多きは、善光寺の彌陀、嵯峨清涼寺の釋迦、成田の不動にて、東京にては淺草の觀音有名なり。
ガイチュウ 【害蟲】▲動植物又は物品等を害する蟲類は其種類頗る多きを以て一枚舉すべからず、今其極めて普通にして、室内若しくは庭園に害を加へるものを略記し、併せて其驅除法を記さん。枯蝨は俗に毛蟲といひ、體に大小長短の毛を生じ、其種類甚だ多く、隨て被害植物の種類も亦多し、梅、桃、櫻の如きに附く種類にして、決して二三に止まらず、何れも葉を食して害を爲す或は春早く發生するあり初夏又は秋發生するあり、其發生一年に一回なるあり、又二回若しくは三回なるあり、後者に多くは繭を結び、蛹に化す。成蟲は蝶又は蛾に變ず。幼蟲及び蛾の外見は、色に依つて異なり、其著しきものは梅、林檎、梨、桃、李、櫻、薔薇等に生ずる、うむげなし桑、桃、林檎、梨、櫻等を害する、きんけむし、茶、山茶、茶、梅等を害する、まつげむし等なり、之れを驅除するには、幼蟲の巢に群生せるものは、竹竿の先へ布を纏ひ、油に浸して之れを取り、又檫油を石油又は松脂に浸し、點火して手早く之れを焼き、又は群生する枝を剪取りて之れを焼き、或は石油乳劑の二十倍液を噴霧器等に注ぐべし、石油乳劑とは、水五合を沸騰して之れに洗濯石鹼十二匁乃至廿四匁を溶解し、温めたる石油一升を混じり、水鐵砲の如きものにて、空氣を吹入れつゝ、混合し、生ぜし乳狀の液を温湯にて稀釋して用ふるなり、其他蛾、蝶、繭、卵等は見當り次第捕殺すべし、蛾は飛ぶこと速きもの故、網袋にて取るを得、又燈火に來るは火にて誘殺すべし、又幼蟲の他の木に這上るを防ぐには、樹幹に繩を纏ひ、タールに魚油三割を混じたるを塗るべし、烏鴉は俗に芋蟲といふ、芋に生ずるもの最も著しきが故なり、體には毛なし、觸目幼蟲類の幼蟲なり、其主なるもの十種あり、外見各々異なり、被害植物亦多し、葉を蝕害す、葡萄、櫻、桃、胡麻、馬鈴薯、茄子、甘藷、芋等に生ずるものは一年一回發生し、成蟲はうちすめの如き蛾に化し、胡蘿蔔、柑類に生ずるものは年三回發生し、成蟲はあげはのてふの如き蝶に化す、兩者共に外見各々異なり、之れを驅除するには、幼蟲は多く目に止り易きを以て取除くべし、或は被害植物を動搖すれば、容易に落下す、其の蛾は燈火にて誘ひ、蝶は百合の花等にて誘ひ殺すべし、尺、蠶も鱗翅目の幼蟲にして、主なるものは六種あり、外觀同じからず、被害植物の主なるものは桑、林檎、李、櫻、梅、杏等なり、葉及び幼芽を蝕害す、桑は其の被害殊に著し、一年一回或は二回發生し、繭を結び蛹に化す、成蟲は蛾に化す、外見各々同じからず、之れを驅除するには、冬期又は早春の葉なき幹枝に居るものを除き、又樹幹に薬液を纏ひ、之れに繭を結ばせて取除くべし、螟蛉は芋蟲に似て形小なり、主なるもの

り、其發生一年に一回なるあり、又二回若しくは三回なるあり、後者に多くは繭を結び、蛹に化す。成蟲は蝶又は蛾に變ず。幼蟲及び蛾の外見は、色に依つて異なり、其著しきものは梅、林檎、梨、桃、李、櫻、薔薇等に生ずる、うむげなし桑、桃、林檎、梨、櫻等を害する、きんけむし、茶、山茶、茶、梅等を害する、まつげむし等なり、之れを驅除するには、幼蟲の巢に群生せるものは、竹竿の先へ布を纏ひ、油に浸して之れを取り、又檫油を石油又は松脂に浸し、點火して手早く之れを焼き、又は群生する枝を剪取りて之れを焼き、或は石油乳劑の二十倍液を噴霧器等に注ぐべし、石油乳劑とは、水五合を沸騰して之れに洗濯石鹼十二匁乃至廿四匁を溶解し、温めたる石油一升を混じり、水鐵砲の如きものにて、空氣を吹入れつゝ、混合し、生ぜし乳狀の液を温湯にて稀釋して用ふるなり、其他蛾、蝶、繭、卵等は見當り次第捕殺すべし、蛾は飛ぶこと速きもの故、網袋にて取るを得、又燈火に來るは火にて誘殺すべし、又幼蟲の他の木に這上るを防ぐには、樹幹に繩を纏ひ、タールに魚油三割を混じたるを塗るべし、烏鴉は俗に芋蟲といふ、芋に生ずるもの最も著しきが故なり、體には毛なし、觸目幼蟲類の幼蟲なり、其主なるもの十種あり、外見各々異なり、被害植物亦多し、葉を蝕害す、葡萄、櫻、桃、胡麻、馬鈴薯、茄子、甘藷、芋等に生ずるものは一年一回發生し、成蟲はうちすめの如き蛾に化し、胡蘿蔔、柑類に生ずるものは年三回發生し、成蟲はあげはのてふの如き蝶に化す、兩者共に外見各々異なり、之れを驅除するには、幼蟲は多く目に止り易きを以て取除くべし、或は被害植物を動搖すれば、容易に落下す、其の蛾は燈火にて誘ひ、蝶は百合の花等にて誘ひ殺すべし、尺、蠶も鱗翅目の幼蟲にして、主なるものは六種あり、外觀同じからず、被害植物の主なるものは桑、林檎、李、櫻、梅、杏等なり、葉及び幼芽を蝕害す、桑は其の被害殊に著し、一年一回或は二回發生し、繭を結び蛹に化す、成蟲は蛾に化す、外見各々同じからず、之れを驅除するには、冬期又は早春の葉なき幹枝に居るものを除き、又樹幹に薬液を纏ひ、之れに繭を結ばせて取除くべし、螟蛉は芋蟲に似て形小なり、主なるもの

糖液にて誘ふ又稻につくものは網袋にて捕殺す、幼蟲の莖に喰ひ込みたるものは孔よりスポイトにて石油乳劑若しくは酢等を注入して殺すべし、又莖葉の萎凋し、若しくは枯れたるものは抜き取りて捕殺し、萌株又は地下に喰ひ込む事あらば之れを寒風に晒すべし、莖葉、主なるもの三種あり、何れも大豆、豆等の莖に喰ひ込み、豆を喰ひて大害を爲す、年一回又は二回發生し、幼蟲は小にして、成蟲も又小さき蛾なり、驅除法として、成蟲は網にて捕殺し、又は蛹を捕殺すべし、後者の不用の葉枝等を焼き棄つるも亦一法なり、葉捲蟲に主なるもの十三種あり、被害植物は林檎、桃、李、梨、櫻、桑、草棉、稻、竹等につき其芽及び新葉を飲食す幼蟲の多くは小にして葉を捲き又は綴りて、其内に蛹化する、成蟲は小なる蛾なり、之れを驅除するには、幼蟲は石油乳劑を注ぎ、又加害する前に、亞硫酸銅、亞硫酸ナトリウム、亞硫酸銅を注ぎ、新芽を食ひて死す、又樹梢より、天幕を被ひ、曹酸瓦斯にて蒸蒸す、又は捲葉を取り除きて殺し、稻の如きは田面に一反に石油四合を漉ぎ、捲葉を竹筒にて梳り、害蟲

十一種あり、被害植物は大根、蕪菁、甘藷等の蔬菜、烟草、草棉、大麻、南瓜、豆類、玉蜀黍、稻又は李、林檎等なり、多く其の葉を蝕害す、色及び其他の外見一様ならず、年に少なきは一回、多きは三四回發生し、蛹化する時は繭を結ぶものと然らざるものあり、成蟲は蝶又は蛾なり、莖葉を害するもの三種あり、一は白色にして、羽の縁角黒きものあり、一は白色にして、羽の縁角黒きものあり、一は白色の薄黒き脈あるすぢぐるてふに化し、一は暗黄の小さき蛾に化す、之れを驅除するには、幼蟲には三四十倍の石油乳劑を注ぎ、成蟲は燈火、砂液、或は葉花にて誘ひて捕殺すべし、螟蛉は一に體蟲といふ、主なるもの八種あり、被害植物は、稻、麥、神、花菖蒲、玉蜀黍、粟、藍、草棉等にして、蟲は其莖の心に喰ひ込みて害をなし、或は之れを枯らすに至る喰ひ込る莖には必ず孔あり、年に少なきは一回多くは三回、通常二回發生して、莖を出でて蛹化する、或は繭を結ぶ、成蟲は小形なる蛾なり、稻を害するものに、二化めいちゆう、三化めいちゆう、おほすあむし、の三種あり驅除法としては燈火に蝶を誘殺し、又

水面に落すべし、成蟲は網にて捕殺し、又或る者は燈火にて誘殺すべし、夜盜蟲及び蛾、は形狀蛆蟲の如し、其主なるもの七種あり、豆、類、蔬菜類、大麻、草棉、粟、麥、又は稗の莖を土際より喰ひ切る、多くは土中に潜み、夜に至りて害を爲す、年に二三四回發生す、成蟲は小形の蛾なり、之れを驅除するには、幼蟲は莖の地下二三寸の所に潜伏せる幼蟲を發掘して捕殺し、成蟲は糖液又は火にて誘殺すべし、地蠶の害を豫防するには、作物の莖地面上二三寸の所に新聞紙又は竹皮にて巻き、夜盜蟲は晝夜害をなすものにて、石油乳劑を注ぐべし、蠶蟲に二種あり、甲は果實を蝕害し、乙は樹木の枝中にありて害す、其主なるもの五種あり其幼蟲は形狀蛆蟲の如く、桃、梨、林檎、枇杷、栗等の果肉又は種子に蝕入す、其害に罹りたる果實は落下し易し、年に一回或は二回發生す、成蟲は鱗翅目のものは小形の蛾、鞘翅目のものは小き長方形の甲蟲にして、頭端の口吻は象鼻狀をなす、故に象鼻蟲といふ、之の驅除法は落果を拾ふて速かに燒棄すべし、又落花後、石油乳劑の三四十倍のものを樹皮全體に注ぎ、

又殺若しくは象鼻を捕殺すべし、木質蟲、にも主なるもの十七種あり、形状如く、大小一様ならず、桑、柳、杉、榎、密柑、無花果、棗、林檎、梨、桃、櫻、梅、李、葡萄、大麻菊及び竹等の木質中に侵入して外部に孔を開き糞を出す成蟲は、天牛なり體形長方形にて長き觸鬚を有す、他は或は小さき蠟とたり、或は象鼻蟲なるあり、天牛及び象鼻蟲は、莖幹等を蝕害して産卵す、或は新らしき莖又は梢を喫切る事あり、俗に小兒の蟲薬と稱して食用せしむる柳蟲、くさき蟲の如きは此の蟲の或る種の幼蟲にて、菊を害する菊吸も、亦天牛の一種なり、此驅除法は蠟孔に石油、酢、石油乳劑を注入し、殺害の莖幹を切りて焼拂ひ、又成蟲を燈火に誘殺し、又捕獲して殺し、又産卵の箇所を檢して突き殺すべし、葉蝨及び苞蝨、其形蛆蟲に似たり、樹木の葉等を集めて巢を作り其の内に居り、苞蝨は草等の蟲を以て、巢として其の内に住り、其巢を荷ひて諸所を運行し、草木の葉等を蝕害す、其の主なるもの七種あり、茶、梨、林檎、櫻、梅、李、稻等の葉又は莖等を害す二年に一回或は毎年一回發生し、成

蟲は小さき蟻なり、之れを驅除するには、巢を取りて殺し、稻を害するものは、田に水を湛へ石油を注ぐべし、又蠟を燈火にて誘殺し、早春木葉に亞硫酸銅の如き毒薬を湛せて殺す食葉甲蟲、草木の葉を蝕害する、鞘翅目の蟲類の幼蟲たる小甲蟲は其の種類甚だ多く、廿八量、蠟蝨、葉蝨、象蝨、金龜子等をばじめ其の主なるもの凡そ三十七種あり成蟲多くは圓形又は長楕圓形の三四分以下の甲蟲にして、年に一回又は二三回發生し、蘿蔔、燕菜、葉莖、茄子、馬鈴薯、牛蒡、胡瓜、南瓜、西瓜、甜菜及び大小豆、豌豆等の豆類、藍、葡萄、覆盆子、栗、林檎、梨、櫻、桃、薔薇、櫻桃、桑、稻、粟等の葉を蝕害す其幼蟲も亦或は根を害するあり、或は葉を害するあり、就中てんたうむし、たまむし、りりそうむし、うりばく、かめのこむし、まめはめんめう、まめこがれむし等は甚だ多く能く人目に觸る、驅除法としては、外物に驚く時は、脚をちぎめて容易く落下する性なれば、拂落して適宜に殺すべし、石油乳劑中に落すも亦可なり、生石灰二斗、石炭酸六合、水一石二斗五升の割合にて能く混じ、之れを被害植物

に灌げば、金龜子には殊に有効なり、又亞硫酸鉛、亞硫酸銅、綠色砒石等の如き毒薬を用ふるも又効あり、其他浮座子、飛蝗、いなこ及び蠟蝨、油胡蘆、干蟻甲蟲、穀盜、穀象、蠟節蟲、衣蛾、衣魚及び蠶蟻等は何れも有害の昆蟲にして之れを驅除するに當りて心得べきは、數千百足の幼蟲を捕殺せんより少数にても成蟲を捕ふるに若かず何となれば後者は短時日に於て更に多の幼蟲と化生すべき卵を有すればなり故に蟲類の蟻又は藪及び成蟲等は、見當り次第必ず捕殺するを宜しとす。

カイルイ (貝類)

貝類を大別して、辨頭類と腹足類との二とす、辨頭類は體淡水又は鹽水に棲息す淡貝、文蛤及び此等に屬する貝類は皆是れなり、其全體の構造は、左右に扁平にして頭及び觸鬚の區別なし、外套と介殼とは二枚ありて、體の左右に位置し、肉柱と外套膜の邊縁とに依りて殼の内面に附着す、揚套膜の下に四枚の頭あり、口は直ちに體の前方に開きて、其左右に各々二枚の觸鬚を具へ、呼吸水の二管は後方に供し、足は舌状、板状、若くは管状をなし、牡蠣の

如きは移動の必要な故に全く退化せり、又腹足類は淡水若しくは鹽水に産し、又陸上にも産す、其主なるものは蝸、螺、接尾螺、赤螺、ながにし、とこぶし等は鹽水に棲み、田螺、になは淡水に産し蝸牛、蛞蝓等は陸棲なり、多くは一個の介殼を有すれども、中には蛞蝓の如く全く裸體のものあり、之の類の體は一般に頭と觸鬚とに區別せらる、頭部は小にして、其背面に一對若しくは二對の觸角を具へ、視官器を具ふ觸鬚は大にして、其背腹兩部は一目瞭然たり、背部は著しく隆起し、外套膜を以て覆はる、此の膜は水棲のものにありては其邊縁、體の前方に於いて、深く注入して腮腔を爲せり腹部は扁平の足より成る、介殼は外套膜より分泌したるものにして皆多少螺旋狀をなし、其外觀蔬食性のもは稍々圓、肉食性のもは延長す、介殼頂を上にして介殼を存在すれば殼孔は右或は左に扁するを見る、之れに依りて螺旋に右旋、左旋の區別を立つ、足は概ね發達し或は扁平となり、或は趾をなすものあり、其足は殼の後方にある筋肉により懸下せらる、之れによりて殼内に收縮するものなり、口

は吻状をなすものあり、口内には其の上壁に一偏若くは其の左右に一個の顎あり、其の後方に喉頭あり、舌及び齒帯を具ふ、雌雄同體にして卵生し其の卵は鹽水に産するものもありては革質の殼に包まる、總て介殼は、其の形状、色彩等類多様にして一ならず、双殼の閉閉は、其の背縁にて二枚相合せる部分にありて、彈力性を具ふる靱帯と具柱との作用に依る、靱帯は双殼を著合し且つ其彈力によりて常に双殼を開かんとす、具柱は收縮弛緩自由なる筋肉なるを以て、其の收縮する時は双殼閉ち、其弛む時は靱帯の彈力に依り双殼開く、貝類の効用として著しきは、介殼を以て鈕、又は貝類、或は種々の器具玩具等を製する事、及び肉を食料に供する事なり、又眞珠貝の如きは其の内部に眞珠を産して貴重なる裝飾材料を供す、牡蠣の介殼は燒きて石灰とす、貝類は一般に蛋白質に富む事魚類に次ぐとも、脂肪分は少なきを嘗とす、多くの貝類中、牡蠣は滋養分に富み、且つ消化し易くして、良好の食料なれども、其他は何れも消化し難ければ、食料としては多量に用ふる事をさくべし。

カイマキ (掻巻)

▲死具の條を見よ

カイケツビヨ (懷血病)

▲症狀、先づ貧血となり、而して、木病に特有なる齒齦の腫脹及び出血を來し、終には壞疽せしむるに至る、これが爲め患者は不快なる口臭を放ち、流涎に惱まざる、外皮膚にも出血を來し、其表面に出血性斑點を見、又關節及び内臓にも出血することあり、而して、關節出血は、其の部の腫脹、疼痛、熱感等を誘致し、内臓出血は、血尿、下血、吐血、吐血等の原因となり、貧血、衰弱を招き、重症は往々死に至らしむ、▲原因、新鮮なる飲料水、肉類並に野菜の缺乏等、營養不良、飲食物の不良等が誘因となる、故に普通本病の最も多く發生するは、獄舎、寄宿舎、長途の航海、戦時の兵營等とす、▲豫防法、飲食物に最も周到の注意を要す、▲療法、齒齦炎には、百分の二乃至三の醋酸土液の含嗽を行ふべし。

カイゴ (蠶)

▲我が邦にては最も有利の昆蟲にして、之より産出する絹織物の輸出産額は本邦第一位を占む、體は十二個の環節より成り、第五と第八との節の背に、一對

の三日月形の斑紋あり、皮膚には多少の軟毛を生じて保護の用を爲す、此の毛皮は稚蠶にありて多く、成長に随つて次第に脱落す、體の第一、二、三、四、五、六、七、八、九及び十二の環節には各々一對の足あり、第一、二、三の節は胸部に當る、故に之れを胸足と稱へて第六、七、八、九節は腹部に當るを以て腹足といふ、第十二節にあるものは尾足と稱す、腹足と尾足とは蠶の蛾に化する時消失するを以て假足といふ、隨つて胸足を眞足ともいへり、されば此の兩足は、各々其構造及び作用を異にす、即ち胸足は末端に一つの鉤を有するのみにて食物を取り、物に取り附く用をなし、腹足及び尾足は、末端に多数の鉤を有し、且つ中央四みて白の如く其鉤を以て物に取りつゝ又第十一節の背の上に肉角あり、之れを尾角といふ、身體の平均を保つ爲めのものなり、頭は一見して口の如く思はる、部分にて頭

素手とて物の臭を嗅分くるものなり、吐絲口とて絲を吐き出す口あり、其の絲をあやつる小素手といふものあり、呼吸器は第一、四、五、六、七、八、九、十、十一の各節の兩側ありて橢圓形の斑點をなす、血行器は尾角の根部より、頭に向ひて走る一條の管にて成長すれば明かに血液循環の狀を認め得べし、消化器は全身に通じて、胃は胸より第九節、第十節との間にかけてあり、成齒器は、胃の左右に沿つて二條の管あり、之れを絲腺といふ既に蠶兒の絲を吐きて、種紙につり下る事あるは、常に見る處なり、されど第四齡を終るまでは絲腺の發育甚だ緩かにして第五齡に至り始めて著しく成育す絲腺は左右共に生絲部、貯絲部、送絲部等を具へ、生絲部は血液の中より、絲となるべきものを吸取りて、貯絲部に貯へ、夫れより送絲部を経て、吐絲口より吐出し、小素手もて手繰りて繭を作る、さて之の二條の絲線より出て来る絲の一條となるは、兩送絲部の合點に蠶腺と稱するものありて、蠶質を分泌して生絲に滑澤を帯びしむ(繭及び養蠶の條參照)

來茶の湯に伴へる料法にしては、簡素質料を以て特色とせしが、東京にては文化交政年間より、手料理より區別し、普通の割烹店にては集會の意味を取り、會席料理の看板を掲ぐるに至れり、然れども今尙簡單輕便の意を離れず、一碗の味噌汁、一枚の乾魚に香の物を添へ、會席と云ふなり。▲作方▲一汁一菜の獻立にては、膳の向に平碗か汁碗をおき、汁、飯の冷えざるを三口半づ、盛る食事終りて湯桶を出す、湯桶の蓋は湯盆の上に載せて持入り、襖を締む、普通湯桶の湯は飯を敷きたる釜の底に入れ、鹽少し投じ、飯粒の入りたるをよき撻廻して用ゆる方なり、湯の子と云ひて飯の焦、干飯など入れてよし、之には湯の子匙と云ふを添へて出す、其次に菓子を出して了る。▲一汁二菜、始め膳を出し、客の人数だけ膳を据え、挨拶等凡て前の如く、飯器を出して汁を替へ、引杯銚子など出す、杯臺を前に置き、酒を注ぎ廻りて銚子を引く、次に焼肴、焼き野菜など出す、此焼物は縁高の器に盛り、五人分づゝ出せば、香の物二切を添ふ、膳の上に焼肴あれば煮物を出す法なり、又初煮物あれば煮物

【會席料理】▲元

を出す、それから飯を出す、家の都合にてはそれを預け、汁を替へ、其より銚子を持入れ、取肴を出し杯事をなし終らば、湯桶を持戻す、初め膳に焼物あらば煮物を出す前の如し、香の物は湯桶の蓋の裏返したるに載せ、箸を添へて出し、通口の襖を締む、其間に待合へ煙草盆を出し、手水鉢に水を替へておく、次に湯桶及膳を下け菓子を出す可し。▲一汁三菜、初め膳を出し、飯の向に刺身、酢の物など置き、飯、汁共に三口半づ、盛る、平たき鉢に香の物を入れ、上客の前におく、客は一人分宛取りて順に過す、この時飯櫃を出して汁を替へ、香の物鉢と取り替へ、次に引杯銚子を持出し酒を酌む、盃は臺に据え、銚子を兩手に持ち、一通り済めば杯臺を下に置き銚子を持しておくともあり、次に脇取盆と云ふ食器の中に煮物五人分を載せ、蓋の上にはばらりと打水して持出す、焼物あれば此時續いて出すなり、飯器を持出て、汁を替へなす。獻立調理法 ▲汁物、新午、莖に青海苔、花蝦の類割烹、鴨肉に結び芹。▲焼物、若狭、練の胡椒、醤油附焼、鮎の鹽焼に薑酢、伊勢蝦の薑、味噌、味噌田樂。▲膳、松菜の煎酒、鮭

の小角形切り、杉菜の木の芽酢、鯛の作身、鯉の細作り、鰯附き、黒蒸姑の切重、三杯酢 ▲煮物、金海鼠の輪切りに山葵淡葛粉かけ、家鴨と土當歸の鹽煮。▲取肴、牡蠣の附焼に薑漬の鹽煮、鰯の附焼、梨子の輪切り、大蒲鉾に金柑の甘漬煮。▲漬物、燻で鶏肉に芹の葉、鳥介に木耳の山葵味噌和、款冬の菜味噌和、鯛味噌に土當歸の五分載、車蝦に若款冬、里胡麻味噌和。▲漬物、蒲公英の若菜に胡麻更の二杯酢汁、波菘、草に撒り墨栗、葉胡蘿蔔に摺胡麻の醬油汁。▲香の物、蓮根の淺漬に胡瓜の淺漬、土當歸の粕漬と胡蘿蔔の淺漬、絲瓜の淺漬に茄子の淺漬。▲菓子、羊羹、小倉饅頭、串柿、燒昆布、煎餅、▲菓子饅頭、櫻餅、番饅頭、蒸羊羹、大佛餅、栗きんとん、大徳寺きんとん。

到る所浴場の設なきはなし、本邦にては平安朝の時已に難波に盛に行はれたることあり、最近には明治廿年故松本順氏大磯海水浴場(清龍館)に始めて之を創め、次いで鎌倉、須磨に設けられ、今や都鄙の別なく、津浦等々に之を見るに至る。▲海水、の成分は結晶見ナトリウム(食鹽)を主とし、其他には鹽化カルシウム、鹽化マグネシウム、硫酸、普通溫泉の中鹽類泉(湯治の條參照)に屬するものにして、尙之に幾多の効力を附加するものなり、波瀾は實に其の一にして、之が爲め、身體に運動を興へ、血行をよくし、抵抗力を旺盛ならしむ。▲海水の温度、本邦の氣候にては、六七八の各月は、攝氏十三度より十九度の間を昇降するを以て、如何なる酷暑にても、一度海中に浸すれば肌膚に寒冷の感あらしむ、之が爲皮膚の抵抗力を強くし、外氣に當りて寒胃の憂更になきに至る。▲海氣、海邊に充滿する空氣は、鹽分水蒸氣を含みて、塵埃、微菌少なく、温度平均してオゾン量の最も多し、従つて、身體の酸化作用を盛にし、又水蒸氣は皮膚及び呼吸器の粘

【海水浴】▲海水に浴

膜に作用し、肺病氣管支加答兒、百日咳などに傳効あり。▲種類 冷浴と温浴とあり。▲海水冷浴 卓効ある病名を擧ぐれば胃病、肺病、慢性氣管支加答兒、貧血病、慢性胃腸病、神經衰弱、神經過敏、ヒステリー、麻痺、頭痛常癖、月經不順、盜汗、遺尿、病後等にして其他腺病、關節痛を除き大抵の人に適す。▲海水温浴 海水を湯槽に汲み入れ沸かして浴するなり。温度は華氏の百度乃至百七度位をよすとす。適應症は前と大同小異なれど、消化不良、慢性胃加答兒、胃擴張、胃潰瘍、慢性腸加答兒、骨腫病、肺病、氣管支加答兒、肋膜炎、常習便秘など、す。▲海水浴場 冷浴場には、遠淺の海岸にて、波程かに水清らかなる場所を選ぶ可し、東京近海にては、大磯、鎌倉、國府津、片瀬、腰越、江の島、鵜沼、茅ヶ崎、逗子、酒匂、小田原、熱海、牛久保、我入道、鈴川、清見海、稻毛、北條、館山、大吹崎、大洗、平、助川、一ノ谷、大原、金澤、横須賀、三崎などにて關西には須磨明石など最も有名なり。▲浴者の注意 時期は入梅後より土用明迄とす、乃ち七八九月に行ふを宜しとす、浴期は三週間以上ならざれば功少し、一日一浴乃至二浴を程度とし、早朝一回入浴するを良しとす、入浴時間は五分より二十三分の間とし、食前食後は十分が、一時間をふ可し、浴後は井戸にて鹽氣を取り去り、手拭にて拭ひ乾かす可し。

カバ 河馬 ▲亞弗利加の河湖に棲息する動物にして、不反芻偶蹄類に屬す、體頗る肥大にして長さ一丈四五尺、高さ四尺、重量六百貫餘に達するもあり、頭部甚だ大きくして殆んど四角形を爲し、鼻は擴大し、口亦大きく、大齒よく發達して三尺以上に延ぶる事あり、實象牙よりも硬し目は突出し、耳は小さくして圓し、四肢短くして太く、各肢趾を有し趾間には蹼あり、尾亦短く皮膚は殆んど裸出し且つ厚くして背部及び兩側面にありては殆んど二寸に達するといふ、乳房二個あり、好んで水邊に繁殖せる植物を食ひ、游泳巧にして日中は水中に潜み夜間出で、食を索む、時としては農作物に大害をなす、追迫せらる、時は反つて人を害す土人は其肉を食用とす。

カバン 【靴】 ▲革又は布類にて、袋形又は箱形に造り、運搬に便したる容器なり。其用途と形状とに依り、種々の名あり。(一)旅靴といへるは、旅行用手廻りの器具を容れ、提げて携ふる程の大きいにて、革製と布製とあり、革製は洋銀などの金具を附けまた毛織にて作れるもあり。(二)折靴といへるは、文書、小書き書冊など入れて携ふるものにて、革は軟かく薄きをよとし、裏は繩子、更紗又は琥珀などをあてたり。(三)トランクといへるは、旅行用の荷物を容れて運搬し、又は衣服調度品を入れて室内に藏め置くものにて、厚き革にて作り、堅牢なる金具を附け、多くは運搬に便する爲め小車を附けたり。(四)網靴といへるは、麻の強靱なるを以て作り、手と口金とを附け、之を締め提げ歩くやうにしたなり。(五)竹靴は竹行季を横にして、口に綿革を附けたる如き形状をなす。(六)籠靴といへるは、籠又は藁にて編めるものなり。(七)支那靴といへるは、輕き木にて箱を作り、上を革にて張れるものにて、衣服、手具道など容るゝによし、また堅固なる鍍金を附したるを以て、重要な物品を入れ置くに適す。支那靴又は、革の代りに紙を張れるもあり、またズックを張れるもあ

り。(八)學校用靴は、書物筆紙などを入れ、小兒の學校に行くに携ふものにて、帯皮を附け、肩より腋下に掛くるやうにしたなり。主に革靴又はズック製なり。(九)婦人用の手靴は、四季袋、信玄袋などの如く化粧道具、其他小書き手廻りの品を入るゝにて、手を附けて提ぐるやうにしたなり。其手は環狀の金銀、其地の裝飾を施したり。此外にも尙數種の靴あり、形状も一定せず。

カバヤキ 【蒲燒】 ▲鱧、穴子、八ツ目、鮎、鰻、泥鰌などを附焼にし、野菜にも用ふることあり、始めは鱧の全身を竪に串刺しにして、鹽を附けて燒き全身を竪に割きて骨を抜き、長さ四五寸づゝに切り、横に串刺しして、汁を附けて燒く、何魚にても一旦燒きて蒸し、又燒けば柔かくなる可し、されど燒きて直に平なる器に入れ、蓋をなしおけば適度に蒸さる可し、汁の配合は大切のものにして、砂糖、醬油、味噌を交ぜ一度煮立てたるを用ふ。

カボチヤ 【南瓜】 ▲夏間需要さるゝ蔬菜にして、煮食する外、油揚物とし餅にも製し、又薬用にも供せらる、外國にて一般食用とし、又家畜の飼料とす、其の成分内外

多く且つ其種類に依りて、甲殼の模様、色合及大小等を異にす、淡水にも鹽水にも、又種には陸上にも棲む甲殼類の一種にして、體の構造は稍々蠍に類すれども其の腹部は曲りて頭胸部の下面に著く、俗に之れを「種」といふ、之の種は、雌雄によりて其の形狀を異にし、雄のは狭くして長く、雌のは廣し、且つ雌の腹部の内面には、長き細毛を密生し産卵後卵塊を保持する用に供せらる、卵は最初一種の粘液にて被包せられ、數多の卵を連続して、腹部なる細毛に保持し易からしむ、歩足の第一對ははさみとなりて攻撃防禦の用をなし、他の四對は歩行の用をなす、其の歩行するや、必ず直前せずして横進す、毎年夏季に一回更殼す即ち甲殼の腹部に當り横に一條の裂け目を生じ、次で全體を出す、蟹の他の動物に捕食せらるゝは、多く此際にある。▲蟄時 又はかざめといふは、甲の形稍

カニ 【蟹】 ▲本邦全國到處、多くは水中の岩礁、砂、又は陸上石垣の間或は礫中に棲息し、介殼、小魚の類を食とす、種類甚だ

小かくして稍々圓し、左右の蟹を擡げる時は、長さ二間半に達するあり、節足動物中の最大なるものなり。▲鬼面蟹 は最後の歩足二對短縮して背上に屈折し、其先端に鉤狀の爪あり、二枚貝類の介殼を負ひて其身を保護す、甲背の區劃は、殊に著しく現はれて謂はゆる鬼面狀をなす、俗に之れを「平家蟹」と稱し、平家が「びん」とする時一族が化したるなりと言ひ傳ふるもの即ち之れり、四國九州の近海に多し。▲いばらがに は甲の形稍々三角形を爲し、甲背並に歩足に多くの棘を具ふ、北越の近海に多し。▲毛蟹 は甲の形稍々四角形をなし、外面には綿狀の絨毛を密生す、肉は體の割合に小量なれども一種の美味を有するが故に甲と共に蒸し足部の肉を取りて酢などにて食すれば酒の肴に良し又小なるは甲と共に捌鉢に入れて攪り碎き夫れに味噌と豆腐などを入れて汁に入れる時は其味最も良し。

種により異り、我國には天文年中初めて豊後の國に傳來したるなりと其品種甚だ多く、大別すれば左の三種なり。キニキニルビタマキシマ、南瓜中最も偉大なるものにして、洋名ボンキンといひ、和名にて大南瓜と云ふ。此の種の特徴は果柄に溝なく、熟すれば外皮柔軟となる。原産地は亞弗利加なりと云ふ。舶來、南瓜は多く此の種に屬す。「モシアタ」東印度の原産にして、本邦在來種は、多く此の種に屬す。▲箱橋南瓜 一名留木南瓜と云ふ。本邦各地に栽培さるるものにして、形は扁圓、果皮緑褐、疣瘡は多く恰も箱橋の織目の如く、品質佳良の豊産種なり。▲菊座南瓜 内籐南瓜又は箱橋南瓜ともいふ。前種よりも晩熟にして形大なり、外皮は平滑にて、菊座状をなし、皮は黄褐、風味佳良にして豊産の中熟種なり。▲鹿ヶ谷南瓜 一名西京南瓜とも云ふ。京都附近に多く栽培さるる、果形圓狀をなし、皮は綠褐、疣瘡多き甘味多く、中熟豊産なり。▲栽培法 通例苗床に下種して、五月初旬頃、麥畑の間に移植す。播種期は三月中旬下旬、苗床に於ける、取扱は胡瓜と同じ。本圃は能く深耕して、在

來種は四五尺の作條に三尺内外の株間を興へ、スクワッシュは方六尺、パニキン種は方九尺を隔て、徑一尺五寸程の穴を掘り、基肥を施し、淺く土を覆せて苗を移植して日覆をなし數回、薄の液肥を興へ、時々中耕を行ひ、結果後は葉を布く、肥料は一反歩に就き基肥として、堆肥二百貫、過燐酸石灰十貫、油粕又は大豆粕十貫を施すなり。偶々害虫に襲はる、事あるにより、注意して之を驅除方法を講ずべし。

カホミセキヨゲン

【預見世狂言】 ▲舊時の俳優は猥りに他座へ出勤するを許さず、各座元及帳元等が集合の上、俳優の交換を熟議し、これに依りて定められたる俳優を雇ふ期を例年十一月とす。備入契約の期限は一箇年とし、十一月より翌年十月に至る。されば一座俳優の顔を観客に示すの意より、昔は毎年十一月に預見世狂言とて華々しく行ひたり。之がため坊間の輪草紙店に、總俳優入替り番附といへる番附を發賣したりと云ふ。

カベ

【壁】 ▲家屋の周囲及各室を區別せる仕切の總稱にして土、石、煉瓦等を以て造

付けとなし、下付漆喰を喰分出さしめ、砂漆喰に打ち中付をなし、上壁仕上げをなしたる壁を云ふ。(ル)葎壁、木摺壁と同じ骨組を爲し、葎の經凡そ三分位のものを細網欄にて一尺位置に編みたる葎を張り塗り上げたる壁を云ふ。(ヲ)土蔵壁、土蔵の壁の謂にして、普通廻廻りを腰巻と稱して、煉瓦又は石積となし、之より上部壁下地は柱外面に切掛とて横小舞竹を取り付け四寸廻りのものを柱へ挿り込み、砂摺、村直の數回を重ね中塗を施すものとす。土蔵の上等のものにありては厚さ八寸位にして仕上げ迄に二十四回以上の手数を要するものと云ふ。

カトーフシ

【河東節】 ▲もと淨瑠璃より分派す江戸半太夫の門人河東の語出したるに始まる、河東、本性は伊藤十寸見堂と號す俗名河部屋藤右衛門河藤といひ、後河東と改む、江戸品川町の豪家なりしが、産を破りて家を成さず、半太夫、業、雲の門に入りて淨瑠璃を學び、一家をなして十寸見河東節といふ、享保十年四十二歳にて病死す享保年中最も盛に行はれ、今東京にて山彦秀次郎の一門あり、一中節と共に旦那藝と稱せられて、殊に魚河

岸邊江戸子に弄ばる。 ▲新内義太夫、長唄、常磐津等を語りて三絃を弾き人の門口に立ち五厘一錢の小錢を受くるを業とするものなり、其の扮装は、管笠若くは手拭を被るを普通とし、又一人は藪ひ、一人は三絃を弾きて歩行くもあり、若くは五錢十錢を投すれば、眾みの段物を弾く、又夏の夜など流しと稱して、高低の連弾にて、流し行くあり、これは呼び入れて段物を弾かしむるものにて、稍々高等の方なり、又一月の十五日に迄、編笠を被りて市中を徘徊するものを鳥追といふ、亦一種の門付にて、正月のみに限る、もと田島の鳥を追散らすに歌へるものと傳へらる、又近年男女打交り、厚化粧にて、編笠を被り袴を穿き、胡弓、月琴などを弾きて、俚歌を歌ふものあり、もと清樂の九連環を歌ひたる故、終は不解にて止むるより、これをホーカイ節といひ、彼等をホーカイ屋と稱す、此等亦門付に加ふべし、其の他尺八を吹き歩く虚無僧、又は阿房陀羅經の如き、共にみな門付の一種にして、又祭文語の如きも、時に門付をなすことあり、門付の收入は、通

カドズケ

【門附】 ▲義太夫、長唄、常磐津等を語りて三絃を弾き人の門口に立ち五厘一錢の小錢を受くるを業とするものなり、其の扮装は、管笠若くは手拭を被るを普通とし、又一人は藪ひ、一人は三絃を弾きて歩行くもあり、若くは五錢十錢を投すれば、眾みの段物を弾く、又夏の夜など流しと稱して、高低の連弾にて、流し行くあり、これは呼び入れて段物を弾かしむるものにて、稍々高等の方なり、又一月の十五日に迄、編笠を被りて市中を徘徊するものを鳥追といふ、亦一種の門付にて、正月のみに限る、もと田島の鳥を追散らすに歌へるものと傳へらる、又近年男女打交り、厚化粧にて、編笠を被り袴を穿き、胡弓、月琴などを弾きて、俚歌を歌ふものあり、もと清樂の九連環を歌ひたる故、終は不解にて止むるより、これをホーカイ節といひ、彼等をホーカイ屋と稱す、此等亦門付に加ふべし、其の他尺八を吹き歩く虚無僧、又は阿房陀羅經の如き、共にみな門付の一種にして、又祭文語の如きも、時に門付をなすことあり、門付の收入は、通

らるゝを普通とし屋内外各室其他の場所を圍ひ床、屋根等は支持するものなり。又木材、鐵材等を用ふる事あり、其構造法亦種々に區別せらる、現に普通用ひらるる、(イ)白漆喰、内部を土塗として表面を白漆喰にて塗り上げたもの(ロ)泥、大津川粘土に觸灰及苧を混じて上塗に用ふるもの。(ハ)茶大津、川粘土に黃粘土を交ぜ、觸灰及苧を混じて上塗に用ふるもの。(ホ)根岸土、壁の上塗に使用する上等砂質に膠質を混じて、塗るものを云ふ、而して實用上、裝飾上、種々の色合となす事あり、(ニ)大阪土、色塗に用ふる上塗土にして、本海苔を用ひて練合せ、上塗に用ふる(ト)砂壁、清淨にして光輝ある砂を海苔粉にて練り、上塗に用ひたるもの、(チ)板壁、板にて張りたる壁を云ふ。木骨に膠漆を打ち付け、堅板に杉又は檜四分板又は六分板を普通とし、(リ)紙張壁、木骨なれば下地を木摺とし、煉瓦壁のときは一尺位の間隔に格子形に枠組をなし縱横に木摺を打ち付け、紙張りとなしたるものを云ふ、(ヌ)板木摺壁、木摺貫又小舞貫と稱する杉三寸貫又は杉四方板を巾一寸位に縦割り、凡そ三分目透に釘

ガチヨ

【鷺鳥】 ▲もと舶來せしものにて種類多しと雖も、主なるものを擧ぐれば、佛國産ツールズ種、エンブデン種、支那産の三種にして何れも體形、羽毛等を異にする要するに、形、無に似て大きく、體長二尺七寸に達し、頭長し、尾脚共に短く、全身白く、頭は漆黒にして嘴黃にして大なり歩む様恰も鷺に似たり。▲ツールズ種は體形毛色共に雁に似、長大にして腹部に脂肪囊あり、重量三貫目に達す、エンブデン種は和蘭産にして其肉頗る美味なり、重量二貫内外なり。支那産又は一名唐雁ともいふ、多く我が國にて飼養せるものにて、體量一貫五百目内外とす、飼育するには、成べく園庭を設け、自由に奔走運動せしむる様にすべし、卵は初めは小さくして、且つ其數も少なけれども次第に大きくなりて其數を増加す、第一月に産卵せる鳥は翌月に至りて之を抱き、二十日間にして孵化す、雛は最初は乳にて浸したる麵包、又は細かに刻みたる菜葉等を食物とす生後三ヶ月程を経たるものは食用として最

葺茅等に代ふるに瓦を以てせしめしこと史に見えたり。然れどもこれ等の瓦は現今の瓦と異り所謂布目瓦と稱し裏面に布目を有する厚き重き瓦にして近世迄これを使用し來りしといへども住宅を互葺となすこと未だ全行はれず。天正四年織田信長城を安土に築くに當り、明國より瓦工を招き初めて瓦を模造せしむ。これ即ち現今の瓦の如く其厚さ薄く裏面に彫目ある瓦の始めにして、慶長五年徳川家康江戸城を築きて以來、武士の住宅は多く瓦葺を用ひ、元和三年、後水尾天皇詔して家康の靈を下野の日光山に祀らしめ、號を東照大權現と賜ふに當り、徳川秀忠大土木を起し、社殿、靈廟を造營し、葺くに銅瓦を以てす、爾來これに倣ひ、神社、佛宮の屋根を葺くに銅瓦を用ふるもの多かりしも庶民にして瓦葺となすもの罕なりしか、將軍徳川吉宗深く火災を憂へ、小石川小日向の家屋はみな瓦を葺かしめ、尋て同十二月には麹町區、同十三年には小川町、猿樂町火災ありしかば、再建の時には皆瓦葺となすべきことを令し、なほ番町、麹町元山王、永田町、小川町、猿樂町、駿河臺等の地にて、家

屋の修繕並に新築に際しては、必ず瓦葺となすべきを令せり、是に於て江戸市中には瓦葺の屋舎次第に多きを加ふるに至れり。明治維新以來、石盤を以て屋根を葺の法海外より輸入せられ、輕くして保存的なるを以て漸次流行し、現今は石綿盤なるもの又輕量にして防火的なり。

去り、庖刀を脇にあての様に三枚に卸らし、薄肉を取り、俎に載せて皮目を下にし、薄刃庖丁にて皮に透する位に刃を入れ、味汁一杯、酒一杯に水筒少々加へてよく煮立て、其中に右の鰹を列べ、蓋して醤油少量入れ、汁の煮詰りたるをかけ、鰹をおおして皿に盛り、粉山椒をふりて用ふ。▲鰹のあらひ、鰹の背より庖刀にて三枚にすき、鰹及び鰹を其まゝにし、三枚におろし、肉の皮を削ぎ、小骨を抜き、肉を薄作りにし、冷水をかへて、よく洗ひ、細き竹串を頭より骨をうり刺し、して皿におき、上に右の肉を載せる、之れに水及び越瓜のかつら、山葵の摺しを加へ、二杯酢又は醤油を共に出す。▲鰹のちりとは前の肉に沸湯を通したるものなり。▲鰹こく鱈のまゝ、一分位に骨切にし、これを筒切にして、白味噌八分、味噌味汁二と味汁を加へて煮る、吸口に粉山椒を用ふ。▲鰹の雀焼、一二寸の小鰹の背を開き、竹串に刺し、味汁、醤油にて煮たる汁を塗りて附焼にし、粉山椒をかく。▲鰹の昆布巻、昆布をよく洗ひて焼酎を包み、干鰹にて縛り味汁、醤油を注ぎ、弱火にて煮る。▲鰹のこがし漬、二三寸

位の鰹を甘酒の固縛りに二日漬けおき、三日目に出して遠火に焼き、冷やして白味噌に漬ける。▲鰹の蒲焼、鰹の片身開きにしたるを串にさし、醤油に味汁を加へて二三日附焼にし、一段蒸したるを焼けば更によし、粉山椒をかけて食ふ。▲骨抜き鰹、大鰹を目打ち刺して背開にし、腸を除き、骨を取りて頭を切り、一旦煮湯に投じて炭に上げ、水を注ぎて冷やし、別に煮汁を作り、牛蒡を鋭利なる皮刺にて笹の葉の如く薄削にし、水に酒して灰抜きしたるを、水氣を去りて鍋に敷き、其上に鰹を載せ、煮汁を入れて蓋をし、煮え立ちたる頃、鰹卵を解きてかけ、黒き塗蓋をし粉山椒をかく。▲鰹汁、甘味噌汁に笹かき牛蒡、小さき鰹を入れ、煮て椀に盛り、粉山椒、そき油添て出す。▲はや、小さき鰹はやを料理するには、肉を叩きて丸め、胡麻油に揚げて平焼に用ひ、醤油を付けて焼き、大根おろしに醤油を加へたる中に混ぜる。▲あなこの細焼、小さきあなこの竹串にさし、醤油を塗りて三回程附焼にし、粉山椒を添ふ。▲かじかの魚肉、かじかの腸を除き、串刺にして素焼にし、山椒味噌を塗る。▲鮎の

味噌焼、鮎を素焼にして、味噌、味汁、砂糖を搗り混ぜ、袖の汁を絞込みて炙る。▲鮎の魚田、水洗して鱗を去り、下身の鰹肉より、金串か竹串にてうり刺し、醤油を塗りて焼き、赤味噌を裏面にし、味、砂糖を加へ強火に煮詰め、鰹卵をよく攪拌したるものな塗り炙りて、串を抜き、皿に盛る。▲鮎の早漬、鮎を三枚におろして酢に漬り、焼鹽、花盤をかく。

一賑ひしが、別けて享保年中より文化文政の頃の川開その盛況譽ふるものなかりきと云ふ今尙盛んに行はる。

カワセミ【魚狗】▲鳴聲高く常に河川、池沼等の水邊に棲息する鳴禽類に屬する美麗なる小鳥にして、しやうびん、ひすま(翡翠)或はそなともいふ、嘴は長大にして、尾は短し、羽色頗る美麗にして體の上部は一體に極めて光澤ある、暗緑又は蒼色にして、脊には淺黄の羽毛あり、腹部は一體に赤茶色なり。常に小魚を餌とするが爲めに、養魚に害を加ふる事多し、巢は水邊に於ける深き穴の内に營む、我が國に産する者は、みやましやうびん、又きよらるとも、あかしやうびんともいふ。▲ゆましやうびんは頭部黒く、頸及咽喉部は白色にして背面は群明なる瑠璃色を呈し、腹部は褐色なり、嘴は甚だ大にして赤色を帯ぶ。

【カ】の部

カワズ

カワズ【蛙】▲カエルの様にあり。

カカンブ【火流布】▲防火を目的とする一種の不燃性の織物なり。單に薬品を塗布して製すると、石絨と稱する織物を織りて製するとの二種類あり、塗布す可き薬劑には、

んで達瀬にて、此のとし月の胸の間、今宵晴れ行く天の川、渡りくらべし七夕の、年に一夜の思を知らば、今の二人が行末を、守る誓の神垣や、あはれは御燈の光とぞ、云々。(五)河東節 十寸見堂河東の創始せるもの。文は多く俳諧師岩本乾什の筆に成る。(六)牛太夫の創出せる曲節なり。頗る俗調に移らんとして、尙古雅を離れず。(七)蘭八節宮古路豊前 蘭の門人、宮古路蘭八の創出せるものなり。享保の頃より盛んに行る。(八)宮本節 宮古路豊後後藤の門人文字太夫、後に破門されて宮本豊前と稱し、語り出せるものなり。(九)外記節、薩摩外記太夫真政の創始せる節なり。現今語物としては、義太夫、常盤津、清元など隆盛を極め、新内、一中節も可成行はる。其他の節は今は殆んど聞かず。尙常盤津、一中節、河東節、等は各々其條を参照せよ。

カカケ 【肩掛】 ▲婦人用 ショールの事にて冬、春秋重に使用する。▲種類 縮緬又は絹縮 有職模様、唐草などを、同じ色糸にて周圍に縫を施す、三尺、四尺幅のもの多し。▲唐松織 絹糸を用ゐ、唐松葉即ち線香花火などを織る。▲絹レース 絹地に模様の数々織り出したるもの。▲絹アラシ 毛織に絹糸を混じり、両面、片面あり、又単にアラシとは絹糸の入りぬを云ふ、和製は西京を主とし、光澤ありて艶麗なり、其他毛織製もあり。▲羽衣織 白糸にて一寸程浮かせて編む、天人の羽衣に似たり。▲玲瓏織 薄き模様の浮織にし、紗の如く見ゆる上品の肩掛なり、春より夏に着くるものなり、以上の品は京都を主とし、色台は、ブラシは赤紫、紫紺、納戸、鶯などあり、美しく光澤あるもの、其他に梅鼠、櫻鼠、栗鼠、檜鼠、藍色、鐵納戸など皆其人の年輩と嗜好により、又は衣類の均合により選擇を異にし、此の小形の肩掛は其流行最初のものなり。

カタケルマ 【肩車】 ▲小兒を肩にあげ、首の兩脇より前方へ垂れたる小兒の足を持ち、小兒にわが頭を持たしめて歩むなり。時に二三組集り上に乗せり者同士に落ちて合ひつたする遊びを見かくれど危険なれば行はざるがよろしからん。

カタクモ井ジョーシ 【片雲井調子】 ▲琴の調子の一つにして、平調子の入の絃を下げ、九の絃を上げて弾くなり。

カタアシズモ 【片足相撲】 ▲遊戯の一つにして、地上に白磁にて圓を畫き、二人共片足にて普通の相撲の如く取組み、線より出づるか、倒れたるを負けとす。

カタキヤク 【敵役】 ▲芝居にて悪人に扮する者の稱。元祿以前は敵役の名目なく悪人形と呼びたり。これを細別して七種あり。▲實悪 立敵ともいふ。謀叛人、假勅使などにて、「千代萩」の仁木、「安達」の貞任の類。▲色悪 一に公家悪ともいひ、「暫」の受、「車曳」の時平の類。▲實敵 一に二枚目敵ともいひ、「ハムレット」のクロードイサスの類。▲平敵 實悪に似て凄味のかけたるもの、即ち「寺子屋」の玄蕃、「封切」の八右衛門の類。▲端敵 實悪の下を働く役にて、「皿屋敷」の忠太、「金閣寺」の東藤太の類。▲千代敵 番頭などの敵役のこと、「法界坊」の長九郎、「女團七」の傳八の類。▲半道敵 道化方を兼ねたる敵役の稱。チャリ敵とも云ふ。「道行」の伴内、「扇屋」の忠太の類なり。

カタヒラ 【帷子】 ▲麻苧を原料に織り

たる単衣なり、酷暑の候着用す越後、薩摩の産上品なり、淺黄若しくは白色にて、色々に染む、麻衣は賤民の着るものにて、(或は條を見よ)死者に著せしむるを。▲經帷子と云ふ、壽衣とも云ふ、背に六字の名號など經文句を書き記すなり、其他琉球にては芭蕉布とて芭蕉の織維にて織るもあり。

カレイ 【鱈】 ▲海魚にして、形比日魚に酷似す、頭小に兩眼は近接して幼時は體の兩側において普通の魚と異なる所なれど、成長に伴れて一眼は他側に轉位し一種の奇觀を呈す其時間僅に十數時間を要するに過ぎずと、比目魚類は凡て皆然りと云ふ、其眼ある方即ち右側は褐色又は微黒色にして、線色を帯ぶるもあり、又斑紋を有するもあり、大なるは二尺に及ぶものあり、口は狭くして、齒は小なり、本邦にては、東海より、東北、西北にかけて非常に多し、沙泥ある海底、深さ三十尺に棲み、魚竹昆蟲類を捕食す、産卵期は一月又は三月とす、稚魚は六寸にして成熱す。▲効用 舊幕當時、北陸道諸藩より。▲乾燥 を造りたりしか、近來其方法を改良して、菊鱈、鰹鱈、木葉鱈、著鱈、

出平鱈など諸國にて産す、種類はおちば、めいた、いし、くちばそ、ばんご、鏡鱈などあり。肉味淡泊にして、消化し易し、料理法も種々あり。

カレイ ▲洋食に最も必要なる香料の二種なり、生姜粉末、芥子、胡椒各一杯に、コリアンダーの種子及びターメリック三杯、番椒末及カイインの種子四分の一杯を井せて碎き、カルダモン半杯を混合せて篩にかけてたるもの黄色を帯ぶ。

カツパ 【合羽】 ▲雨具の一。また防寒の用も爲し、塵除けの用もなす。男女共に衣服の上に着用す。種類は、長合羽、半合羽、高麗合羽、インパネス、吾妻コートなどにて、吾妻コート以外は多く男子用とす。地質は、紙に油を塗れるもの、木綿に護膜を引けるもの、外、セル、羅紗、木綿、袖、御召縮緬、無地御召縮緬などあり。▲由来と種類 我國にては、もと雨具としては主に蓑を用ひ、蓑の外に油單といふものありき。油單のことは宗吾記にもあり、また、枕草紙に雨皮とあるも之れなり。今の合羽は、慶長の頃、西洋人の衣服の、袖無く、裾廣きカツパと

いふものを模して作れるが原にて、當時は、紙に荏油を引きて作れり。坊主合羽といへるは即ち夫れなり。また徳川時代に於て、専ら町人の着用せしものに雨羽織といふがあり。之は木綿にて作り、西洋人のカツパと我が道服とを調和して出来たるものなり。其頃の合羽のことに就きては、衣食住記に「元文の頃までは、武家は紺黒の半合羽なりしが、町人は紺花色小倉織、肥後木綿等の長合羽を用ひ、元文の頃、武家も長合羽になり、其の後木綿の 紺織、芭蕉布となり、歴々は、享保の頃より羅紗、羅香板、寶曆の頃より黒琥珀、魚子織、丹後等なりと記されたり。女の合羽は、寛延、寶曆の頃までは、雨除けとして浴衣を著、大なる紋を五六個もつけたる、或は伊達模様に染めたるものありしが、後には木綿の合合羽を着ることとなり、下賤の者も尙浴衣を用ひざるに至れり。されど一説に依れば、正徳の末既に木綿合羽あり、振袖姿に着用して、袖長く、内袖を緋織子又は緋織子にし、ささ縁を紫にしたりと言はる。如何にや。明治に入りて最も行はれし合羽は高合羽なり。高合羽に次で廻し合羽あり。また

近來まではインペネス最も盛に行はれたり。吾妻コートは、明治十七年頃より婦人間に流行し、一時は、上は貴婦人令嬢より、下は茶屋の女中に至るまで、外出の際は皆之を用ひき。吾妻コートは、もとは紋羅紗、綾羅紗、黒羅紗など多かりしが、やがて紋羽二重流行し、近來は、無地御召縮緬最も多く用ひらる。

カッドーシャシン 【活動寫眞】 ▲連續したる寫眞を急速に廻轉し、光線及びレンズの作用により、前面に緊張されたる白布に擴大して映寫するものなり。映したる畫は立體的に活動し、まのあたり實際に接する思ひあり。▲映寫中俄かに寫眞の朦朧となり、明瞭を缺くにいたることあり。原因は光力の衰弱、フィルムと不完全、レンズの不良より來ることあるも、多くは内部に設置せられたるシャッターに故障を生じ、完全に連轉せざるによる。シャッターは眞鍮にて拵へたる、半月形のものにして、左より右に向ひて廻轉し、一定時毎にフィルムとレンズとの中間に入り、甲畫より乙畫に移る際、其區分を明瞭ならしむる作用を有するなり。映寫

に際して廻轉急に過るとときは、活動の狀態を明瞭に看取すること能はず、緩に失するときは甲畫と乙畫との連續が適當に現はれざるを以て映畫は間の抜けたるが如く見ゆるものなり。▲發明者は二人あり。一は佛國の解剖學者にてリミールといふ。心臓鼓動のありさまを學生に示すに當り、其狀の機微にして畫にも、言葉にも現はすこと能はざるに困じ、多年辛苦の結果之の發明を得たり。他は米國の有名なる電氣學者エヂソンなり。▲撮影術 活動寫眞として映寫すべき繪畫をフィルム（セルロイドにて作れる透明なるもの）に寫し取る方法なり。普通寫眞の撮影術を、活動寫眞に於ては更に一步を進めて、連續的に撮影するなり。例へば舞妓の踊るを撮影せんに、普通寫眞は踊れる舞妓の動作の部分をのみ撮影するに過ぎざれど、活動寫眞は踊の初めより終りに至る間に於ける動作の變化を連續して撮影するなり。▲撮影せんとする情景に撮影機を面接せしめたる時、備へつたるフアインダー（スリガラス製の目鏡なり）に現はる、被寫物の位置が正しきか否かを調査し、次でレンズの蓋を取外し

把手を持ちて廻轉するにつれて、フィルム安置されたる貯藏箱の底より、レンズを通りて順次繰り出され、同時に被寫物の活動狀態が撮影せらる。終りに直にレンズに蓋を施し、機械全部を暗室に運び、フィルムを現像するなり。▲現像の方法 強アンモニア六分、臭素アンモニア四分、没食子酸六分、水一升の割合（フィルム二十呎に對する分量）に、現像血の中に對合し、然る後フィルムをフィルム巻機に巻きたるまゝ、現像血の中に入れ、把手を廻轉するに従ひ、藥液はフィルムに浸みて、光線を受けたる部分は次第に黒色に變じ、光線の當らざる部分は白く抜けるなり。次に水皿に入れて廻轉し藥液を洗ひ落し、十分藥氣のなきに至るまで繼續するを要す。普通十四五回の廻轉をなさば十分なるを以て、次に定着液に入れて定着せしむ。定着液は次亜硫酸普達七十分、明礬一分、水一升の割合を以て割合す。フィルムを定着液に入れたる時は、凡そ百乃至三百回の廻轉をなさざるべからず。かくするときは定着液は十分フィルムに浸み渡るなり。後之を取り出し鹽に、清水を盛りたる

に入れ十分洗滌す。洗滌若し不充分なるときは時日を経るに従ひ、フィルムの色を來すものなるが故、凡そ二三十回水を取り替へて洗はざるべからず。洗滌したるフィルムは室内の風通し、よき場所へ掛け乾かし、よく乾きたる後スリンの稀薄液中に入れ二三回廻轉して、前の如く乾燥にするとときは鮮明なる情景を印せるフィルムを得べし。此寫眞を陰畫と稱す、陰畫に現はれたる情景は實際と黑白正反對なり。即ち黒く現出せらるべき人物、樹木等は白く抜け、白く現出せらるべき空間は黒色に映す、故に之を實際の情景同様になさんには、其白色部分を黒に、黒色部分を白に轉換するなり。此方法を用ひるを反對攝影術といふ。▲かくして出來あがりたる寫眞を映寫興行するもの、活動寫眞館といひ、映畫を説明する人を辯士といふ。▲普通座席の入場料は大入十錢、子供五錢なり。

カツオ 【松魚】 ▲鱈とも書く、體肥え、鱗極めて細かく、胸鰭の上部及び後部だけを被ふ、體色背は黒く、腹は銀色なり、體の側に四條乃至八條の蒼き線あり、長さ七八寸より二三尺あり、流は古くより行はれたるなる可し、萬葉集に「水の江の浦島の子が松魚つり鯛つりかかれ」とあるに、知らる可し、徒然草に「かつおと云ふ魚、鎌倉にて左右なきものとて、この程もてなすものなり」などあり、之を漁するに網と釣船による。▲種類 本邦にては、東海、南海、西海方面に産す、近海にあるは、まかつお、すちかつお、すまさうだの四種にして、其中 ▲すまは肉色薄く、味い美なり。▲すちかつおは同種類中にて大きく、游泳に巧み、活潑の性質を有す、常に深海の上部に棲めども、他魚を漁りて近海岸に屯集す、黒潮の變動に伴れ、游泳し、五月頃、水温上昇と共に北上し、九月に至り、水冷ゆれば南下す、六月の交産卵す、肉は淡泊にして脂肪なし。

カツオアシ 【松魚節】 ▲鱈節の由来は極めて古し、延喜式に煮鱈魚の名を用ふれば、一千年以前のものなるは疑なし、傳ふに所によれば、紀州熊野の住民、土佐薩摩に其法を授け、薩摩は其の舊法を遵守保存せしも、熊野は、漸次改良工夫して今日の良品を産するに由れり、産出高は一箇年約百九十四萬貫此の價額七百餘圓に上る。▲種類 鱈節に製す可き魚類は、鱈を重とし、鯖、鮪などを用ふ、鱈には眞鱈、筋鱈、すま節、さうだ節、石鱈、水鱈、油鱈、目鱈などの別あり。▲鱈節又は羽節 と云ふは筋鱈にて製し、形状は細長く、上等品にはあり。▲鱈節 さうだ節にて製す、形は甲に似たり。▲土佐節 土佐に産す、古來有名なるものにて、品質風味共に上等なり。▲伊豆節 専ら東京に行はる風味よし。▲薩摩節 形状頗る大なり、美味にして貯蓄に耐ふ。▲熊野節 紀伊の産、京阪地方に行はる。▲銚子節 下總に産す。▲仙臺節 陸前に産す、共に良品なり、粗製のもの、鬼節、荒節など云ふ。▲眞鱈 石鱈節、品質香味共に上等なり、各其體にて製したるものなり。▲生節 と云ふは、俗になまりと稱へ、切身にして生醬油をかけ、或は煮て食ひ、鮭掛にしてよし、これは鱈を蒸籠に蒸したるまゝ、未だ乾燥せざるものなり。▲製法は鱈の腸、頭部などを除き、三枚におろし、其二片を沸騰せる釜の中に入れて籠の中に並べ、蒸したるを取出して、水氣を去り、更に

蒸籠に掛し焚火にし、乾燥し翌日小骨を除き、松薪又は炭火にて乾かす。(料理の部を見よ)

カツラ 【桂】 ▲雲葉科落葉植物なり、喬木にして高さ十丈餘に及ぶものあり、俗に藪肉桂と稱する者なり、樹皮は灰色を呈し、葉は圓形にして縁邊に鋸齒を有し、春季葉に先だちて紅色の小花を開く、材は桐葉家屋、造船等の建築用材を始め、圓板、裁縫板、机、蒸籠の類より、挽物、下駄の齒等に至るまで、用途頗る廣し、其皮は剥きて屋根を葺き、染料を製し、葉は賀茂桂と稱して、京都賀茂神社の祭典に供せらる、支那にて桂花と云ふは、木犀のことにして、彼の國にては殊に其香氣を愛し、之を詩歌に詠む者少からず、又西洋にて珍重せらる、「月桂樹」は、本邦の木犀に類似せる香木にして、近來我が國にて、貴顯の或る名譽を永久に紀念せんが爲め、神社、佛閣、公園等に手づから月桂樹を植ゆる事、行はる、伊豆、相模地方には野生のもの多し。

カツラ 【薑】 ▲劇場又は踊などにて、俳優藝人等の頭に被る鬘形の模倣なり。我國の上古にては薑草を髮に飾る風習あり、之を

玉かづらなどいひたれば、薑の語はそれより出でたるものならんか。されど上古は鬘の事など薑と稱して、今日の薑とは全く異なる。其今日の如きものを稱して薑といへるは、能狂言の薑に始まれり。承應より萬治の頃までは、前髪薑として、單に前髪に假髮を添へたるもの、如く、延寶寛文の頃に至つて現今の如き薑出來、元禄年中、髪師友九郎現はれて、舊製に工夫して全く生髮の趣あるに至らしめ、次で善八といふ者、今日の薑の基礎を作れり。▲薑には種類甚だ多く、劇場用のものは各時代の髮風を表はせり。今主なるものを擧ぐるに、立役の被る薑には、(一)生髮車、といふが有り、之は鬘のいちを多く出さずして緩く結び、薑を車形の如く荒く出したるなり。若衆荒事の狂言に用ひ、暫く横五郎、景政、矢の根五郎等の髮形はせられり。(二)棒茶、筧といふは、俗に大將薑と稱し、千本櫻の義經等之用ふ。(三)大百日といふは、月代の長く延びたる髮形にして、暗闇狂言の賊首等に用ふ。其他(四)月はづし帽子附は、大名方の婦人の髮風にて、時代狂言に屢々用ひ。(五)下げ髮は、美人の年若き色女

の風。(六)烏田崩し帽子附は、世話狂言の良性の婦人風用ふ。▲薑の仕組は、薑金として、頭狀をなせる銅板の全面に無數の小孔を穿てるに、白羽二重を張り、人髮又は歌毛など生髮に擬して細かく斜に縫ひ、羽二重の餘を内部に折込み、銅板を髮の生髮の如くに切り、内部に合引と稱する裂紐を附け、髻の下にて結べるやうしたるなり。昔は髮毛の直立に植ゐたるが、今は實際の髮の生方の如く植ゐ、精巧なること全く眞物を欺くほどなり。能狂言に用ふる薑は、黒鯨の齒齧を細く引き、之を以て頭狀の如く籠を編み、之に髮毛を植う。また禿隠しに用ふる薑あり、完全なものは殆ど眞物と異ならず。

カツケ 【脚氣】 ▲東洋病と云はる、位にて、本邦には殊に多し、傳染病か、中毒性のものか判明せず。▲原因 帝國大學教授 醫學博士山極勝三郎氏は、鶏に就き實驗の結果、米を以て養ひし鶏は、脚氣に類せる疾患を病み四箇月程にて斃死したると米食人種に病の多きとより、米食が本病の基因なることを稱道せられ洋醫大家の説にも、東洋の脚氣を腐敗せる米及び肉類に歸せるも

のとして東西の學說一致せるを見る、又一方に於ては氣候風土に關すること甚だ密接にして、低地、都會は病氣を助成する傾向甚だ大なり。▲種類 急性、慢性の二種あり、慢性と云へども、放置せば危險状態に墜る事急性と異なる事なし、又水腫あると、然らざるとあり、水腫性のは知覺麻痺を伴ひ、足の甲、下脚の内方に最初之感じ、進みて上腿、腹部に及び、手先より口唇に及ぶことあり、歩行極めて困難となりて心悸亢進し、膝蓋腱は反射作用を失ひ脈搏次第に高まり、遂に心臟麻痺を起す、之を脚氣衝心と云ふ。▲療法 病因明かならざれば、適藥として未だ發見せられず、食餌療法と轉地を實行す可し、米飯を廢して、麥飯を勵行し、小豆を食へば便通を良くす、且なるべく、山間高燥の地に居を移す可し、二三週間に治癒するものなり、又近來糖を賞用し、蒸烙に炒りて毛飾にかけ、其ま、食後に用ふるなり、糖は無砂、手搦の一番のものを良しとす、然し一旦本病に罹りたらば、不消化物、亂食を謹み、毎朝一回便通を利し、絶えず胃腸の健全を計る可し。

カツギ 【被衣】 ▲きめかづきの略なり、古來婦人の外出に際し、頭より被り、兩手にて支へしもの、源平時代盛行はれたるが今は婚禮式の外用ひす、古へは白色にて單なる故、薄衣と云ひたれど、後ば色々染めて、裏附ける様になれり、模様を染めるもあり、古へ江戸にて岩間八三郎と云へる十八歳の浪人、松平伊豆守を刺さんとて、被衣を着て女裝したるも果せず、以來關東には被衣を禁ぜられ、女子も編笠を被るに至れり。

カネ 【鐵葉】 ▲またおはぐと稱し、齒を黒く染むる液汁なり。齒に鐵葉することば、今は都會などには全く行はれず、地方に於ても稀に之を見るに過ぎざれど、口は男女共に或年齢に達すれば齒を染め、之を以て一の佳例とせり。貞丈雜記に「女は九の年より男子は元服以後何れも鐵葉を附け云々」と記しあり。男子の齒を染むことは、鳥羽天皇の頃より起り、當時堂上の諸臣は皆齒に鐵葉を附け、婦人は貴賤の別なく皆之を行へりといふ。徳川時代には鐵葉初めの式といふが、あり、女子十三歳となる年の十一月十五日に齒黒染を行へり。其式は清黒といひ、下々

にては、七所にて黒葉を貰ひ、三ツ羽とて、鶴、雉子、鶯の三羽の羽根にて作れる揚子を用ふる慣習ありき。されど其時は單に式のみにて鐵葉を附けず、嫁入後、かこもり齒と稱して初めて齒を染め、肩毛を剃落したり。之を元服といふ。かくて明治の初年まで一般に黒葉を附けたるが、明治元年正月、公卿の淫齒及び點眉は古制に非るを以て、必ずしも船守せざるべきを令せられ、次で六年三月、宮内省、皇太后御黨、御鐵葉御廢止の事を公に達せられ、この風漸く廢れて、遂に今日の如くなれり。▲鐵葉は鐵の銷液にして、往昔は生鐵を水に投じて久しく放置し、後更に水を加へて黄色に變じたる時之用ひたるが、其後古鐵と米屑少量を水に投じ、數日間燻邊に放置して、液汁の黄赤色に變じたる時之用ふ。之を齒に塗るには、先づ綿揚子にて齒を磨き、次で其揚子を液に浸し其尖端に五倍子粉を少量附けて、數回之を齒に塗抹するなり。現今俳優などの用ふる早鐵葉と稱するは、瀧島といふ早著け鐵葉の一種にして、極めて輕便に齒を染むることを得。

カナリヤ 【時辰鳥、金絲雀】 ▲小鳥の

條を見よ。
カナキン 【金巾】 ▲用途甚だ廣くシヤツ、裏地、テーブル掛、ハンカチーフ、日覆等とす、従来は多く輸入品なりしが、現今は我國に於ても力織機を用ひ盛んに織製し輸出するに至れり。一般に経緯及緯緯は二十八乃至三十六番手の片燃綿線を使用し時には五十四番手の細線を緯線に用ふることもあり、之を製するには高道経緯は管線又は綿線より繰り返し整理したる後糊付機械によりて糊付は行ふ、此糊劑は生金巾のみ、販賣に供するものと晒金巾にするものと多少異なるれども概して次きの如き割合を施す。然れども會社により、人により多少の差異あること勿論なり。

水九〇カロン、小麦粉二八、〇封度、牛脂又は豚脂三〇封度、カオリン、二二四封度、鹽化マグネシウム六カロン
此の割合に割合したるものを充分煮沸して使用に供す、又綿線にて糊付する時は二三回行ふを普通とす。次きに經緯機掛の後機盤にかけて織製す。平織組織の金巾は緯緯二又四枚輻輳装置にて二本踏木式或は平織用

力織機を用ひて織製し、織は一時間三十八乃至四十羽のもの三十時乃至四十八時を用ふ。此織巾によりて二巾金巾三巾金巾と稱し織上三時乃至四十五時なり、長さ一定せず、二四碼四五碼一二〇碼等あり。織製の後精練漂白して用途により瓦斯焼、洗滌、染色、糊付、鬚付等の仕上を施すものあり、金巾中生金巾とは織製のまま、漂白せざるもの、晒金巾とは精練法漂白及仕上を施せるもの、緋金巾は深紅色に染めたるもの、其の色久しきに渡りて變せず。小幅金巾は一名天笠木綿或は天竺金布とも稱し、白地小幅の生織金布等なり。

ナカモノ 【金物】 ▲銅、眞鍮、青銅、鐵、鐵葉、錫、亞鉛等の金屬を以て作れる器具を總稱して金物といふ。金、銀の如き貴金屬にて作れるものは普通の金物といはず。屬にて作れるものには、藥罐、金盃、銅て銅にて作れるものには、藥罐、金盃、銅等の如き普通に銅器に稱するもの、外、金網、金串、鑿、引手、針金、紙、錠前、火箸などあり、眞鍮（銅と亜鉛との合金）にて作れるものには、銅と略々同じきもの、外、佛具の大部分は皆夫れなり。青銅、銅と錫との合金は唐より其製法を傳へたるを以て、また唐金と

呼び、花瓶、床置物、燈籠などの如きもの、外、社寺、堂宇、神具等の金具に多く使用せらる。鐵にて作れる金物には、鍋、釜、鐵瓶等の鑄物、鐵、庖刀、小刀、剃刀等の刃物、釘、金槌、鑿、鋸、鉋等の大工道具、鋤、鐵、鐵等の農具の外、鐵、錠前、金網、五徳、七風、涼爐、電、ストーブ等の種類あり、金物中最も用途廣く、其他舉げて數ふべからず。鐵葉は鐵を薄くして錫を引きたるもの、亞鉛と共に藥罐、金盃、馬穴其他種々の食器等を作る。▲總て金物は錆を生じ易きを以て、時々之を磨き、且つ濕氣を止めざる様保存すべし。殊に、銅、黃銅及び青銅の金物は、銅と炭酸と化合して、綠青と稱する有毒の物質を生ずるを以て、食器類としては最も嚴密なる注意を要す。之等の藥罐、銅等には、内側に、白蠟を引きて、綠青を止めたるものがあるが、之を白蠟中の鉛の酸、アルカリ等に依りて溶く虞あり、危險なしといふべからず。されば銅器類は、常に尤を發し居るやうに磨きて用ふる方最も安全なり。鐵器も空氣中に放置する時は鐵錆を生ずるを以て、七風、ストーブの如きは、石炭を塗りて錆止めしたるがよし。

鐵葉は、錫の中に鉛を混じたるものあり、注意せざるべからず。

カラ 【豆滓、雪花菜】 ▲豆腐の條を見よ

カラムシ 【芋麻】 ▲支那及スマトラの原産にして、ことに支那にては、盛に栽培し、英國にては、これをチャイナグラスと呼ぶ。熱帯亞熱帯の地方にては、毎年三回收穫し第二回のものに良品なりといふ。芋麻は大麻、亞麻とひとしく、強靱なる纖維を生ずるものにして、栽培甚だ容易なり。近年外國より輸入する芋麻の數量は、莫大にして、その價は百七十萬圓なり。されど本邦にても産出し、ことに山形縣の如きは、巨額を製出す。然るに輸入前述の如くなるが、需要年々増加したるによる。芋麻を栽培するには根分及實播の二法によりて蕃殖せしむ。根分法はよく耕鋤破砕したる土壤を作條し、原肥を施したる後、四月頃古株より生ずる新根を五六寸に切り取りて、適宜に挿植し發芽後は、丁寧に保護すべし。畦幅二尺株間三四寸とす。一反歩、大凡一萬本なり、發芽後は薄き液肥を給し、努めて除草すべし。もつとも初年はこれを刈取ることなく、この儘放置し、秋期

葉桿雜草の類を全面に撒布し、翌年春、新芽と共に焼き、その灰を給す。かくすること、三四年に至れば十分増殖するに至るべし。實播法は、初め床地にて苗を仕立て、三年目に移植するを常とす。三四年目より收穫す。花僅に收まりて、莖の下部漸く黃色を呈せる頃、刈り取るべし。▲製法刈り取りたる莖の皮を二つに裂き、小刀にて粗組織を去り、後これを流水に浸し、打ち砕きて、他の粗組織を去り、日光に晒すにあり。この纖維は、植物の年齢および生育部方によりて、細粗の度を異にする。すなはち幼若部の内皮層より採りたるものは、細くして、絹絲の如く、外方の老皮層部より製せらるるは、粗にして、細包袋、依等を製するに過ぎず。

カラギ 【唐木】 ▲紫檀、黒檀、鐵刀木、檳榔木を總稱して、唐木と云ふ。何れも材質堅密にして、磨けば美麗なる光澤を發す。▲紫檀、材質堅くその色は朱赤色、紫赤色、朱黑色等に於て、その心材はことに堅美なり。茶盆、煙草盆、箸、小函等の小細工に用ひらる又大なる器物にも用ひらるれど、高價なるが故に、寶藏の需要に應じて製造するに止

まる。この材を生ずる植物は、豆科に屬し、葉は奇數羽狀複葉にして、高さ五六十尺の大木となる。南印度より産するカタン即ち赤木及びハスノハキリなどを紫檀と稱して賣ることあり。甚しきは、栗、櫻などの材を紫赤色に着色して、檀の名を付することもあり。▲黒檀 柿樹科に屬する喬木なりその純黒なるは心材にして、その質堅緻緻、その他の器物を造るに適す。またシマコクタンとて黒色中に白理を有する材あり。畢竟吾が國のクロカキと似たるものにして、産地はインド、セイロン、カルカッタ、呂宋、ボルネオ、暹羅等にして、黒檀とよぶ。▲鐵刀木 鐵刀木羅等にして、密理あり。最も堅き材なり。小器具或は寄木細工に用ひて甚だ美なり。が故に、貴重せらる。▲華桐木 は安南及南海に出づ木理緻密にして、堅美、色紫檀の如し。また微紅帯ぶるものあり。花紋あるは、上品にして花紋なきは下品なり。床几及器皿、扇骨等を造るべし。而して華桐木を三味線の胴に作れば、美響を發す。▲檳榔子は棕櫚科に屬し、東印度、暹羅、安南、交

趾ビナン、錫蘭及び台湾等に産す。幹は、ヤシに似て細く、高さ七八間に達す。シユロの類にして、年輪なく、唯黒色の斑點あるを異なりとし、材心に近づくに隨ひて、質柔軟となる。家屋の床柱、その外茶桶、文臺、縁物、寄木、嵌木、柄類等もつばら裝飾物に用ひらる。これらの材木は支那の南部シヤム、ジャワ、インド等に多く産すれども、昔時は、みな滿商の手を経て輸入せられたるものゆへ、唐木の稱あり、わが國にても琉球、臺灣よりは、同種類に類似のものを産す。

カラス 【芥子】 ▲十字科の植物にして、莢菜の一種なり。白芥子、黒芥子、大芥子等あり。▲白芥子一名江戸芥子ともいふ。形状黒芥子に似て、その苗は微白色を帯ぶが故に早やく、子粒は黄色にして球形を呈す。▲黒芥子 葉は、油菜に似て少く、鋸齒細く、皺紋多し、花實は油菜より小なれ共、子粒は赤褐色を呈す。▲大芥子 和種と洋種とあり。和種は葉長大にして二尺許りに至る深緑色を呈す。古は上巳の艾餅に多くこの葉を雜せてその色を助くといふ。煮臭氣ありて葱の如く子粒は辛味少く、葉に至つて辛

し、洋種は一名露西亞芥子或はサレブタ芥子と稱し。凡て此等の子粒の粉末を芥子と云ふ。多く辛料は藥品及び食用に供す、和製の芥子は、其小粒を、盆にて潰し粉末としたる者故、子殻を混へ且つ細末ならず。▲西洋の製法は子殻を去りて粉末となす故、水に溶したるのみにて食ふべく、また和製品の如く、溶きたるものを月を経て酸化することなし。

カラス 【鳥、鴉】 ▲古來より反哺の孝ありとて、慈鳥又は孝鳥など、稱せらる。全身光澤ある黒色の羽毛を生じ、市街と村落との別なし常に人家に近き所に棲息する故に里鳥ともいふ、別に深山鳥、熊野鳥、蝦夷鳥と云ふ。烏ともいふ、別名、烏鴉、熊野鳥、蝦夷鳥と云ふ。烏鴉の名稱あるも、概して宿樹は人家離れたる森林などに定め、巢は別に高き樹上を撰び、枯枝、藁屑などを集めて造るを常とす、其狀極めて粗造なり、好みて害蟲を餌とし、又人の糞をたる塵埃などに集りて、同類相流り争ふ事あり、或は人の糞を視て、乾列べある食物などを奪去

る事もあり、されども其性機敏にして人事の吉凶を知り、其の家の上又は庭樹に來りて、鳴き告ぐるを傳ふ、殊に元旦の初鳥は、普く人の耳を傾くる處なり。▲深山鳥 一名だけがらすといふ、大さの如くにて、肥え頭大きく、頸、背及び胸、腹共に黒くして緑光を帯び、翼は着色にして風切羽は深黒を呈し、尾は少し長く、眼は大にして青く嘴は大にして淡黄色に、脚は淡赤色にして爪黒し。▲熊野鳥 一名那智鳥ともいふ、大さ白頭鳥の如く、全身黒く、頂毛立てり、又蝦夷鳥あり大さ熊野鳥の如く、背と腹とに小さき白斑あり。▲こくまるがらすは體軀小さく、頂より腹下に連りて白く喉胸は黒く、翼長く、尾短し之れ即ち燕鳥なり。▲鳥鴉は嘴大鳥ともいひ、體大にして、嘴最も肥大なり食を貪る事甚だし、常に山中に棲みて市中に出でず、偶々一羽人里に出づれば、群鳥噪き鳴きて之を害す、國に依りては之の鳥鴉多くして慈鳥少なき地もありといふ。

ガ 【雁】 ▲常に同類相集り、群をなして空を飛ぶ時は必ず行を爲す、所謂雁行是

れなり同類相依り相親む性あり、古より詩歌に珍重せられて、畫家に愛寫せられ俗語に嗚雁さる、維新の始めまでは、雁にて獵せしが、今は獵銃を用ふるに至れり、體肥大にして羽毛密生し、翼發達す、頸甚だ長けれど、尾は極めて短く、臀部に脂肪を有す、嘴は扁平にして、側縁に細微なる、齒齒狀の刻みを見て、軟かにして、神經に富あり、脚は短小にして四趾を具ふ、前方の三趾は廣き蹠にて綴られ、後方の一趾は獨り遊離して甚だ短く、小魚、蠅を食すとすれども、又穀類をも併せ食ふ、巢は水邊に營み、極めて粗なり。▲眞雁は鴻より小さく、頭、胸、及び背はみな淡紫褐色にして腹白く黒と褐との斑あり、翅尾共に黒く、嘴は脚と共に黄赤色なり、秋、分寒地より來り、春分寒地に歸る、所謂候鳥なり。又▲かりがね は形小さく體蒼黒く、頬白く、眼邊黄にして、腹に黒き斑あり。▲鶯鳥も雁の變種なりといふ、羽毛は柔軟なれば、蒲團或は枕の心を用ひて佳なり、肉甚だ美味なり、俗傳に、秋、雁の海上を渡來する時、翼の勢を休めんとすため、小さき木片を啣へ來り、これを波上に浮べて其

の上に休むといひ、且つ其の木片南部外ヶ灣邊に落し置き、春又其の木を啣へて歸ると稱す、固より信するに足らず、然るにこの地方にては雁の歸りに後尙残りたる木片あるは、其木の主なる雁が、人に捕へられ或は死せしためなりとてこれを拾ひ集め供養のため風呂を焚きて、諸人に浴せしむることあり、これを雁風呂といふとす。

カニホー 【感冒】 ▲皮膚の體温平均を失ひ、一部の血液不足して冷へて風を引くなり、之を妨ぐには平素身體を鍛へ、皮膚を強健にす可し。▲療法 血液の循環を計り、發汗を奨むるを最良法とす、薬用は醋、酸安母尼、亞液五分、單合四夕を一日、數回に用ふ、其他玉子酒、コーヒ、葛湯を用ひ、温潤に就くを良とす。

カニチヨー 【灌腸】 ▲便通を計らんが爲め、若くは營養物又は薬を體內に送入の目的にて、直腸に注射するより、これに要する器械には、イリガートル(灌腸器)、球注射器、又は護膜管に角製の管あるもの、唧筒形のものなどあり、其の肛門に挿入する部分を嘴管と云ひ、骨又は硬き護膜にて製す、

的とす、従つて薬液は長く腸中に滞留して直に排泄せられざる様にす可し、薬水灌腸にて腸内を清洗す可し、薬劑には、コロラール、ヂキタリス、阿片、ケレオソート、硝酸、寧など病症に慮じて差あり、▲滋養灌腸 口中より營養供給し難き場合に行ふものとす、例へば鶏卵、牛乳、肉エキス、ペプトン、葡萄酒、澱粉、食鹽、砂糖などにて、凡て大患者、食道病者、大手術後、に適應す。▲瓦斯灌腸 主として腸閉塞の場合に試みらる。

カンガル 【袋鼠】 ▲山野に群をなして棲み、草木を食とす、其影鼠に似て大さ大の如く、前肢短く、後肢は長くして大なり、後肢の趾は四個ありて、中趾長く伸び、趾端に鋭き爪を具ふ、後肢と尾とは力頗る強く、一打一蹴は以て敵を難易せしむ、且つ此の二者により直立して歩行し、又跳躍をも巧にす、その胃は重複にして、反芻す、牝鼠は腹部に一種の袋を有し、幼兒はこの中に懐く、故に有袋類の名あり、幼兒は始めて生れたる時は、甚だ弱くして哺乳の力なく、自然に分泌する乳汁を受けて生育するのみ、

袋の中にあること七八箇月にもなれば、時々出で自ら食を索むれども、物に驚く時は、直に袋中に入り一種の奇歌にして深洲に産す、其草は大に珍重せられ、靴及び手袋を製するに宜しく、其肉は滋養に富み、羊肉に似たりといふ、深洲土人の食用に供せらる、抑もこの歌のカンガルといふ名を得しは、昔和蘭人の某、始めて深洲に上陸し、各地を遊覽せし時、偶々この歌を發見し、和蘭語にて其の各を尋ねしに土人は「カンガル」と答へたり、やがて其描寫繪を添へて本國に報導せしかばやがて圖を添へて本邦に報導せしかば、それよりカンガルの名全世界に廣まれば、されど其實カンガルとは土地にて、「分かれぬ」といふ義なりとぞ。

カンガエモ 【考物】 ▲問をかけて人の思考力に訴へその意を解かしむる智的遊戯の一種にして、其範圍は極めて廣く吾人の經驗界に起るあらゆる現象とす。▲答を得るに意味にて解くもの、語呂を通はせて解くもの、文字にて解くもの、外に歌の上句より下句を解くなど種々あり。▲次に二つ三つの例を示す、朝早く夜遅く細道を走るものは

何—あま戸—割れば割るほど大きくなるものは—穴—これは意味より解きたるもの。一暗夜に提灯が消えて(官省二)四方大暗—司法大蔵—大嵐のあつた翌朝(昔の貞女二)—けさ、静—は語呂を通して解きたるもの、一週間と二日か、つて出来た字は—旭—門内に音ありて何も見えぬ—闇—は文字を組み合せて解きたるものなり。

カンレイシヤ 【寒紗】 ▲主に輸入品にして極めて薄地の綿布なり。経緯共三十番手乃至四十番手、燃綿絲を用ひ、經緯は豫め強き經綯を施し、幾一寸間四十八乃至五十六羽のものに、一羽一本通し、緯綯は打ち込む数を粗ならしむる爲、巻取を多かしむ。普通経緯は平織にして、織製したる、漂白、糊付等の仕上を行はすして賣品とす、通常幅四十一吋又四十二吋長さ十二碼を以つて一反とす。質弱ければ、價廉なるにより、織の代りとして、麻子に張り、蚊帳に造られ、夏季のノレンなどに用ひらる。京都にては、これを紅色に染織し、東京に輸送し、東京にては、これを紅麻布に代用す、その他種々の色に染めたるもの、更紗形を施したるもの

カンレキ 【選屠】

▲祝の條を見よ。
カンゾー 【甘草】 ▲本邦市場に見る甘草は支那産にして、通常長さ一米許、太さ三、四寸に至る、本邦産は、葉は奇數羽状複葉にして、小葉は卵形又は披針形をなして尖り、裏面は稍々粘着性を有す、夏、葉腋より花枝を抽き、淡紅色の小花を穂状花序に著く、其根及び走根を採集して上皮を削去り乾燥して、薬品とす、採集の初め、一種の臭氣を有すれど乾燥するに隨ひ臭氣を失ひ、且つ特有の甘味を増す、支那産のものは、多くは外面は赤褐色、破折面は黄色を呈す、丸劑甜劑、調味薬、若しくは賦形薬として主劑に用ひせらる。

カンラク 【乾酪】

▲硬性主劑、甘乳製軟性乾酪、酸乳製軟性乾酪、乳性乾酪等に分ち。▲硬性乾酪を更に瑞西産圓形乾酪、カンタル乾酪、英國製乾酪、スチルトン乾酪とし。▲甘乳性軟性乾酪にはアリー乾酪、ノニヤテレル乾酪、獨逸産乾酪あり。又▲酸乳製軟性乾酪には手摺乾酪、綠色乾酪。▲乳製乾酪にはチゲルあり。▲製法

カンラン 【甘藍】

▲嫩葉が相互卷縮し、扁圓形の葉穂を結成する二年草にして、原種は西南歐羅巴の海濱に自生し、葉は古くより食用に供せらる。用途頗る廣く、鹽漬や酢漬とし、生食する外、肉類と共に煮食

レンネット(積の脂肪を凝縮して乾かしたるもの)二合五勺程を湯にて洗ひ、汚物を除き、細刻みにし二合五勺の湯に浸すこと、一時間、その液二合五勺を取り、牛乳二斗五升位を八十四度の熱を與へたるに混じ、草實より製したり着色、製のアノットを投じ、よく攪拌し、一時間を経て乳汁の凝結するを待ち、縦横に攪り、他器に入れ、九十八度の熱度を加へ、二三時間して更に他器に移し、鹽を交ぜ、綿布裏に入れて押し回し、乾かし乳油を塗り、二十度乃至三十度にして出来上る、又綠色乾酪とは、酸化せざる牛乳を煮沸して、乳酪を加へて凝結せしめたる後、牛乳を交ぜて攪き廻はして壓搾し、チゲル、クレイトと云ふ茶の乾ける粉末を混じて製す。瑞西の特産物とす。▲効用 希臘のホーマー時代より存在し、種々の洋食に用ひらる。

カンラン 【甘藍】

し或はスープに和して美味なり。歐米にては本邦に於ける葱、蘿蔔と同じく、極めて、重要な蔬菜なり。その種類は球葉甘藍、花甘藍、球葉甘藍、葉片が抱合ひて球状を呈せるものにて、普通種菜と呼ぶ、色の淡綠色なるもの最も普通に栽培せらる。▲尖圓形小種」小形の早熟種にして適當の風土にては播種後九十日乃至百十日位して採收し得らる。葉は多く軟にて厚く、種は小さくして堅く品質優等なり。▲「尖圓形大種」前種に似て大なり、晩生種にして球葉甚だ堅實、頂端者るしく尖り、性強剛結、種多く品質優等にして貯藏に堪ゆ。▲「早生扁圓種」生育盛なる故、適當なる處にては百日より百十日位にて、食膳に供し得る。球形圓く稍々扁大種堅し。

▲「中生圓種」普通の栽培に尤も適當なる良種にして、形状扁平にて大きく、能く貯藏に堪え得る。百日乃至百八十日位にて成熟す。▲「晩生扁圓種」晩熟にして種は甚だ堅實なり、性至つて強健にして能く貯藏及運搬等に尤も適す。▲「縮葉種」葉は縮み、滑かならず、結球は小さけれども寒氣に堪え、